琉球大学学術リポジトリ

沖縄諸島先史時代石器文化の研究：石斧、石鏃、石皿・台石類

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学 公開日: 2018-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安里, 嗣淳 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/40992

沖縄諸島先史時代石器文化の研究

― 石斧、石鏃、石皿・台石類 ―

平成 29 年度

琉球大学大学院人文社会科学研究科
比較地域文化　専攻

安 里 嗣 淳

凡　　例

1　本論文は次の５つの章で構成されている。

第１章　石器の属性
第２章　石斧
第３章　石鏃
第４章　石皿・台石類
第５章　結論

2　文中の表および図の番号は各章ごとに始まり、終結する。

3　表の番号・題名は上部に、図の番号・題名は下部に示されている。

4　表や図の出典は当該表・図に記されていない限り、すべて筆者の作成である。

5　筆者作成の表や図の根拠となるデータの出典は、表や図に示された当該遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査報告書は末尾の引用・参考文献に各章ごとに該当する遺跡の書名、刊行年、刊行主体が掲げられている。

6　石器のデータの根拠となる遺跡は、沖縄諸島先史時代のすべてを扱っているわけではない。したがってデータに表れていない属性もある。例えば第１章における表６は 61 遺跡のなかの 20 個以上の石材を表示しているので、それより少ない石英斑岩や黒曜石などは表に示されていない。

沖縄諸島先史時代石器文化の研究

― 石斧、石鏃、石皿・台石類 ―

博士後期課程３年　　安 里 嗣 淳　148094Ｅ

目 次

序 …… 1
第１章　石器の属性 …… 2
　第１節　石器の分類 …… 2
　第２節　沖縄諸島先史時代の石器組成 …… 4
　第３節　石器の石材および産地 …… 8
第２章　石斧 …… 13
　第１節　序 …… 13
　第２節　先行研究 …… 13
　第３節　石斧のサイズ …… 21
　第４節　石斧の石材 …… 26
　第５節　集団と石斧の石材獲得ルート …… 29
　第６節　住居遺構のなかの石斧 …… 31
　第７節　打製石斧は土掘り具専用か？ …… 40
　第８節　沖縄貝塚時代後期における石斧の減少 …… 41
　第９節　搬入石斧 …… 44
　第10節　石斧の製作から廃棄まで …… 45
　第11節　沖縄諸島先史時代における石斧の地理的分布 …… 50
　第12節　「石斧」の結び …… 50
第３章　石鏃―沖縄諸島先史時代の弓射文化 …… 55
　第１節　序 …… 55
　第２節　先行研究 …… 56
　第３節　沖縄諸島発見の打製石鏃 …… 57
　第４節　石鏃の分類 …… 67
　第５節　沖縄諸島における打製石鏃の主要発見地点 …… 69
　第６節　沖縄諸島発見打製石鏃の属性データ …… 70
　第７節　沖縄諸島における打製石鏃の発見状況 …… 73
　第８節　沖縄諸島発見打製石鏃の石材の産地 …… 74
　第９節　打製石鏃の製作地と搬入品 …… 76
　第10節　打製石鏃のサイズ …… 77
　第11節　沖縄諸島発見打製石鏃の類型 …… 79
　第12節　隣接地域の打製石鏃文化 …… 79
　第13節　沖縄諸島発見打製石鏃文化の系譜 …… 90
　第14節　北琉球（沖縄諸島・奄美群島）発見の磨製石鏃 …… 91
　第15節　南九州の磨製石鏃 …… 92

第16節　貝鏃様製品 …… 97
第17節　局部磨製石鏃 …… 99
第18節　「石鏃」の結び …… 101
第４章　石皿・台石類―沖縄諸島先史時代の脱殻粉砕調理文化 …… 107
第１節　序 …… 107
第２節　先行研究 …… 108
第３節　日本縄文時代出土石皿・台石類、磨石・敲石類の分類 …… 110
第４節　沖縄諸島出土石皿・台石類の形状と特質 …… 112
第５節　沖縄諸島の石皿・台石類の時期と形状による出土状況 …… 113
第６節　石皿・台石類の石材（石質）と産地 …… 119
第７節　遺構と石皿・台石類―屋内で使用された石皿 …… 121
第８節　奄美群島の石皿・台石類 …… 122
第９節　南九州の石皿 …… 126
第10節　沖縄諸島における植物質食料利用の様相 …… 134
第11節　検討 …… 135
(1)　石皿・台石類の分類と型式 …… 135
(2)　定形石皿と石材選択段階の「定形」 …… 135
(3)　石皿への特別の観念 …… 136
(4)　沖縄諸島先史時代の石皿・台石類の系譜 …… 138
(5)　沖縄諸島先史時代における植物質食料の位置 …… 139
(6)　集落における石皿の配置 …… 139
(7)　定住と石皿・台石類、磨石・敲石類による堅果類処理 …… 139
第12節　「石皿・台石類」の結び …… 142
第５章　結論 …… 145
第１節　石斧・石鏃・石皿・台石類の出現 …… 145
第２節　石材（石質）をめぐって …… 145
第３節　石器石材の分布の特徴と沖縄諸島先史文化圏の形成 …… 146
第４節　定住社会と石器 …… 146
第５節　石斧の役割 …… 147
第６節　石斧の再生と転用 …… 148
第７節　石斧の減少―沖縄貝塚時代後期後半 …… 148
第８節　打製石鏃の下限と磨製石鏃 …… 149
第９節　局部磨製石鏃 …… 149
第10節　石器の象徴化―第二の道具への変化 …… 150
第11節　石皿の破却習俗 …… 150
第12節　石器の系譜と貫入現象 …… 151
第13節　沖縄貝塚時代後期まで継続した森林資源の高度利用 …… 151
第14節　北琉球先史時代石器文化の特質（独自性） …… 152
引用・参考文献 …… 154

沖縄諸島先史時代石器文化の研究―石斧、石鏃、石皿・台石類―

安　里　嗣　淳

序

「日本ノ西端。琉球ニ石器時代ノ遺跡アラントハ吾人ノ深ク信ズル所ナリ」1894 年、沖縄からもたらされた石斧を実見した鳥居龍藏は沖縄に関する初の論考でこのように述べ、沖縄にも原始時代の人間が居住し、その遺跡を残していたことを確信した（鳥居龍藏 1894）。鳥居が確信したように、石器こそは原始時代人類の存在と活動を示す物質文化の代表的遺物である。これはおそらく世界的にも言えることである。デンマークのトムセンが王立博物館の展示資料を、１番目に石器、その次に青銅器、そして鉄器の順に配置したことに始まり、後にこれが時期的な古さの順序でもあるとし、やがてヨーロッパ考古学の三時期区分法へと発展したのも、原始時代を代表する道具は石器であるという認識が存在していたからであろう。

事実、沖縄諸島先史時代においてもほとんどの遺跡から石器が出土する。石器は原始時代のほぼすべての時期をとおして製作使用された重要な道具であったといえる。沖縄諸島先史時代の人々は日本列島新石器時代（縄文時代）に人と文化の起源をもち、その伝統的な森林の高度利用の生活様式を継承する一方で、サンゴ礁（裾礁）というもう一つの生業の場を加えた環境で、生業や生活に適合した石器を使用してきた。それは、石器の作業対象の拡大であり、ときには伝統的に製作使用してきた特定の石器を、拡散地では再現しない（放棄する）こともあり得る。

沖縄諸島先史時代の研究はこれまで土器文化を中心に進められてきた。土器は可塑性に富み、比較的容易に多様な形や文様を生み出すことから、型式も多様であり、時期や地域性の把握にきわめて有効である。これに比べて時期や地域特有の形（型）はある程度みられるものの、石器は土器に比べて変異に乏しい。遺跡から遊離した石器は、時期や地域の判定が困難な場合が多いのである。

石器研究への関心が低調な時期に、岸本義彦は発掘調査報告書の石器の項で石材と石器器種との相関や石材産地との関連分析、使用痕観察の重要性を認識して、記述してきた（岸本義彦 1984・1986）。

この十余年、ようやく石器を題材にした研究が盛んになってきた。石器文化の時期的、地域的特性を捉えるのに、石材産地との関わり、製作技術と消費のあり方などを分析する研究が、旧石器研究の方法も駆使しておこなわれ、多くの成果を蓄積しつつある。

今後ともこの方法による研究が進展していくことを期待することとし、本論では時期や地域における石器使用のあり方、現れ方、すなわち器種の組成、出土量、石材産地との関係、集落の立地や遺構（住居跡など）との関係などの分析をおこなうとともに、日本列島新石器時代文化（縄文文化）との関わりについての比較検討も併せて、沖縄諸島先史時代における石器文化の一面を把握したい。

戦前わずかに４か所の遺跡しか知られていない段階で、沖縄諸島の石器文化について早くも次のような特質が指摘されていた（山崎五十磨 1924）。

◎　沖縄諸島の石器の器種組成が少ない。石斧・槌石・凹石・石鏃の４器種である。

◎　石器の材料は遺跡付近にはなく、他の地域から入手していた。

◎　火成岩のなかに沖縄に産しない石質のものがあり、これは（日本列島から）「舟に乗して此地に来るもの」と移住拡散について指摘している。

◎　黒曜石製鏃の発見は沖縄と日本との関係を考える重要な手がかりとなる。

◎　八重山諸島発見のわずか２個の石斧からその特質を見抜き、沖縄諸島と八重山諸島の石器文化は系統が異なる。

戦後になって調査が進むと、この見解の妥当性が再確認され、現在では北琉球文化圏と南琉球文化圏の系譜の違いは定説となっている。

本稿は第１章において石器全般に共通する属性を扱い、分類、組成、石材などの特徴を検討する。第２章は石斧について扱い、サイズ、石材の獲得と流通ルート、住居遺構との関係、製作から使用、廃棄までの観察、石斧使用量の消長、転用石斧の用途などの分析、検討をおこなう。第３章は石鏃について扱い、分類にもとづく類型の特徴と奄美群島、南九州地域との比較、石材産地との関係、九州産黒曜石の沖縄諸島における位置づけ、石鏃の象徴化など、弓射の技術と文化をめぐる考察をおこなう。第４章は石皿・台石類について扱い、日本列島縄文時代の大きな基盤である森林性植物質食料資源と石皿・台石類との関係を分析する。セット関係にある磨石、敲石、凹石類は情報源となる調査報告書の内容に粗密があることから扱わないこととする。

第１章　石器の属性

第１節　石器の分類

すでに先行研究によっていくつかの分類法が示されている。下にかかげる小田静夫の分類は器種にたどり着くまでの加工などの工程や素材の形状によって器種を括ったものである。大堀晧平の分類は製作技術の系列によって括り、器種の形状に至る分類である。いずれも石器の最終呼称は従来と概ね同様であり、本稿でも適宜使用する。

(1)　石器の「機能（用途）」による分類（一般的・伝統的分類）

石器の機能による分類は一般によく行われ、本稿でも適宜使用するが「名称」と「用途・機能」が必ずしも一致しているとは限らず、慣例的に使用されてきている面がある。また、確かな用途が不明の石器もあり、名称によって機能・用途をすべて表現することができない限界をもっている。

(2)　小田静夫の分類　（赤澤威・小田静夫・山中一郎 1980『日本の旧石器』P８-32）

2001 年『伊是名貝塚』の石器の項で実践　p206-234

表１

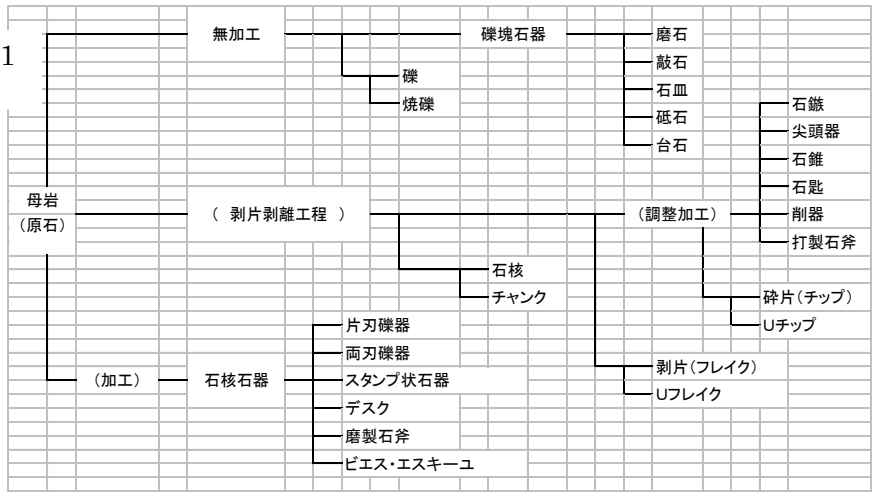


表２

磨 石	磨石
	打痕付
	凹 付
敲 石	敲 石
	縦 形
	横 形
石 皿	石 板
	石 皿
	凹 付
砥 石	砥 石
	溝 付
台 石	
凹 石	
礫	礫
	焼 礫
原 石	

(3)　大堀皓平の分類（大堀 2010）p25-32　『石材分析に基づく沖縄先史研究』

表３-①

※　大工原豊 2008『縄文石器研究序説』で示された石器製作技術を基準とした分類を応用

2009 年『アンチの上貝塚』の「石器」の項で実践　p93-142

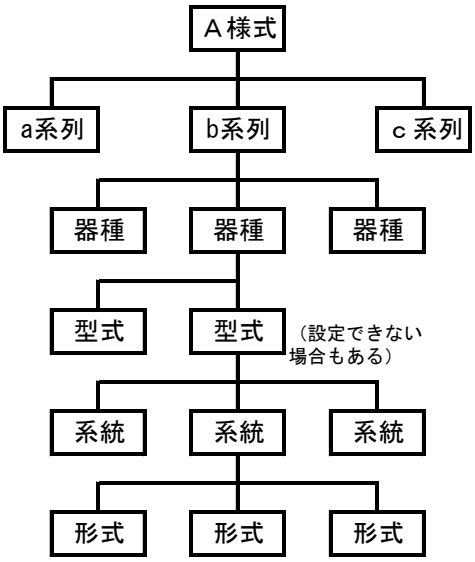


表 3-②

系列		器種	型　式	系　統	形　式
打製石器系列	複合型	打製石鏃		精製	無茎式
					凹茎式
				精製	無茎式
					凹茎式
		石匙		精製	横長形
		石錐Ａ式		粗製	短錐形
		スクレイパーＡ1式		粗製	Ｒ Ｆ
	単一型	スクレイパーＡ2式		粗製	Ｕ Ｆ
		スクレイパーＢ式		粗製	
		打製石斧		粗製	短冊形
					分銅形
磨製石器系列	複合型	局部磨製石斧		精製	凹茎形
		磨製石鏃		精製	凹茎形
		磨製石斧		精製	乳房形
					撥　形
					短冊形
					ノミ形
				粗製	乳房形
					撥　形
					短冊形
		局部磨製石斧	野国型	精製	短冊形
				粗製	短冊形
		石皿類Ａ式		粗製	
		砥石Ａ式		粗製	
	単一型	アッズブレイド		粗製	
		石包丁様石器		粗製	
		石錐Ｂ式		粗製	
礫石器系列		敲石類		―	楕円形
				―	乳房形
				―	球形
				―	クガニ形
		石皿類Ｂ式		―	
		砥石Ｂ式		―	
		石錐		―	

磨製石斧は石材として楕円礫・石皿片・石器破片・板状礫を用いている

↓

粗割→打剥→敲打調整→研磨調整→刃部研磨の工程を経て石斧が完成する

この中から精製、準精製、準粗製の石斧が生まれる

素材からいきなり、あるいは粗割だけを経て、刃部のみを研磨したものは準粗製、粗製石斧となる

大堀のその後の論考でも精製、準粗製の概念が適用され、分析が進められている。

(4)　石器の使用法（運動・動作・対象物への作用）による分類　（田中琢・佐原真 2011）

切る、削る、裂く、敲く、磨る、掘る、なめす、吊るすなど、石器の使用に伴う運動・動作、対象物への作用を基準にした道具の分類のなかに石器を仕分けすることが考古資料集（事典類）の編集方法として行われている。(1)と同じく用途は推定の場合もあり、すべてを含めることは困難である。

(5)　小林達雄による「第一の道具」「第二の道具」　1996『縄文人の世界』p167-199

第一の道具　労働生産用具　―　狩猟・漁労・採集用の道具とその加工具、調理具遺物から用途が推定しやすい。石斧、ヤジリ、磨石など。

第二の道具　その道具に与えられた象徴的意味づけによって目的をはたす儀礼、呪術などと関係する道具とみられ、形からは用途が推定困難なもの。

これまで用途の不明な遺物は「非実用品」として扱われてきたが、人工品はすべて目的をもって製作されたものであり、そのために使用される「実用品」としての道具であるとして「第二の道具」という概念が設定された。本稿においても小林の第二の道具の概念を適用することがある。

第２節 沖縄諸島先史時代の石器組成

石器組成についてはすでに先行研究で明らかではあるが、再確認をしておきたい。

先行研究において沖縄諸島先史時代の石器組成は、すでに戦前から器種が少なく　石斧・槌石・凹石・石鏃の４種のみであると指摘されていた（組成に関する先行研究については、第２章第１節(2)の石斧の先行研究の項に含めて扱う）。これまで発掘調査が実施された主な遺跡について石器の組成データを提示する。

調査報告書に記載されている石器の器種は、表４にみるとおり７～９器種で、戦前より３～５種増加したとはいえやはり少ない。しかも遺跡によっては石鏃や扁平石刃.石皿・台石類を欠いており、器種はやはり少ないといえる。石鏃についてもきわめて少なく、まったく確認できない遺跡も多いうえに、九州の１遺跡から出土する石鏃の量よりも沖縄諸島全体の発見量の方が少ないほどである。沖縄諸島に弓射による狩猟技術は定着していなかったといえる。

また剥片石器がわずか 20 遺跡にのみ確認されているが、これは調査報告者における出土遺物の扱い方の問題が含まれている可能性がある。剥片石器の主な材料であるチャートを産しない地域の遺跡からもチャート片が出土するので、当然使用するために意図的に持ち込まれたものである。これまで沖縄の発掘調査において、剥片石器への注意が十分ではなかったように思われる。先行研究の項で記すように、近年大堀晧平を中心に剥片石器の観察が進められているので、今後石器組成のなかに占める剥片石器の割合が従来よりも増加することが考えられる。

一方、沖縄諸島に無いものとして挙げられ、それが縄文文化との違いであると指摘されるのが石棒であるが、このような第二の道具とされる石器はあまりみられない。南九州で出土する軽石製品もほとんど出土しない。また、北谷町で石匙が１例、他の遺跡でその類似品が１例出土しているが、組成の割合が微小であるため表には掲げなかった。

石器組成を時期ごとにみていくと、いずれの時期も石斧と磨石・敲石類が多くを占めている。ほとんどの時期を通して森林性資源とくに植物質食料への依存度の高い生業システムを継続していたといえる。しかし石皿は縄文時代早期末遺跡には確認されていない。野国貝塚Ｂ地点の場合は縄文早期末、前期ともに石皿の出土はなく、またセットで使用される磨石も伴わない。敲石は比較的多いが、これらは植物質食料の加工具というよりも石斧製作の道具の可能性が強い。渡具

知東原遺跡の縄文前期層からは石皿、磨石・敲石類も出土している。石皿には定形も含まれ、起源地の石皿文化が継承されていることを示している。しかしきわめて少量であり、縄文前期までは安定した定住生活には至っていなかったことを反映している。このことは第４章の石皿・台石類のなかで論ずるが、定住・遊動の評価にかかわる重要な要素のひとつである。貝塚時代後期後半において石斧の減少と敲石への転用という現象がおこるが、第２章の石斧の項で検討する。

日本縄文時代の石器組成と比べると確かに器種が少ないことはいえるが、一方で生業・暮らしにかかわる基本的な石器の組成は共通している。石斧・石皿・台石類、磨石・敲石類、石鏃はほとんど日本列島新石器時代文化を起源とする系統関係をもち、また列島の動きを反映してきている。ただし、同じ器種でもサンゴ礁湖というもう一つの生業環境を基盤にすることになったことから、これまでの用途を拡大して環境に適応していった石器もあったのではないか。例えば敲石は堅果類の粉砕や石器製造だけでなく、礁湖における毒草漁（沖縄の伝統的なサンゴジュの葉を潰してクムイ＝小堀に注入する漁法）にも使用された可能性も考慮すべきであろう。同様に台石類も植物質食料の処理だけでなく、石器製作の下石、動物性食料の処理、繊維取り出しのための敲き台など、広い用途をもっていた可能性を考慮すべきであろう。

また石匙や抉り入り石斧などがごく稀に出土しているが、後述するように極東列島新石器時代文化（縄文時代文化）の枠組みのなかで北琉球先史時代の人と文化も展開していることから、このような「貫入」ともいうべき現象は当然起こることである。

表４　各時期の石器組成（表５-３の数値をもとに作成）

表５-1　沖縄諸島先史時代における主要遺跡・時期別石器組成

	時　期	石斧	石鏃	扁平石刃	剥片石器	敲石磨石凹石	石皿・台石	砥石	他
渡具知東原遺跡　下層	縄文時代早期末	3	0	0	1	2	0	0	0
野国貝塚Ｂ　Ⅳ・Ⅴ層(下)	〃	17	0	0	0	8	0	8	7
渡具知東原遺跡　上層	縄文時代前期	21	1	0	22	17	3	0	9
野国貝塚ＢⅢ・Ⅰｂ層（上）	〃	34	1	0	5	10	0	8	19
古我地原貝塚	縄文時代中後期	40	0	2	2	115	4	9	0
伊是名ウフジカ遺跡	縄文時代後期	3	3	0	0	4	0	0	1
伊江島浜崎貝塚	〃	41	0	0	0	10	4	0	1
宜野座前原遺跡	〃	21	0	0	3	21	14	4	4
津堅島キガ浜貝塚	〃	14	0	0	0	5	1	0	0
平敷屋ﾄｳﾊﾞﾙ遺跡・Ⅰ区Ⅳ層	〃	2	0	0	0	2	0	0	0
知花遺跡　（２次）	〃	69	0	4	0	15	0	0	0
仲宗根貝塚	〃	15	0	0	0	7	0	0	0
木綿原遺跡　Ⅳ層	〃	3	0	0	0	2	0	0	0
古座間味貝塚　Ⅰ・Ⅱ区	〃	13	0	0	2	10	1	2	2
伊平屋島久里原貝塚	縄文時代後晩期	12	0	0	0	12	0	1	14
伊是名貝塚	〃	25	1	0	28	13	0	0	1
茅打バンタ遺跡	〃	26	0	0	46	9	1	1	8
西長浜原遺跡	〃	156	0	0	0	74	14	1	7
屋比久原遺跡	〃	93	6	0	2	21	3	0	2
知花遺跡　（１次）	〃	10	1	3	0	3	1	0	0
室川貝塚	〃	95	2	8	0	52	0	2	0
馬上原遺跡	〃	59	0	5	0	18	8	4	4
北原貝塚　下層	〃	3	0	0	0	19	3	0	0
大原貝塚（Ａ地点）	〃	27	0	0	0	19	5	0	1
辺戸宇佐浜遺跡 1・２次	縄文時代晩期	19	0	0	0	20	5	0	0
古宇利原遺跡	〃	3	0	2	0	5	2	1	0
知場塚原遺跡	〃	18	0	0	0	34	5	9	0
熱田第二貝塚	〃	1	0	0	1	0	1	0	0
伊計島仲原遺跡	〃	38	0	2	0	70	0	0	0
宮城島シヌグ堂遺跡	〃	43	2	9	0	33	10	0	1
高嶺遺跡	〃	23	6	0	3	32	2	2	15
地荒原遺跡　（県道）	〃	36	12	2	0	18	0	0	4
地荒原貝塚　（住宅）	〃	45	0	1	15	20	1	1	1
苦増原遺跡	〃	22	0	2	1	16	4	1	2
吹出原遺跡	〃	30	0	0	12	92	22	20	10
ヌバタキ遺跡	〃	34	1	23	3	45	6	0	0
ガジャンビラ遺跡	〃	5	0	0	0	4	0	0	0
古座間味貝塚Ⅲ区	〃	8	0	0	1	6	0	0	0

表５-2　沖縄諸島先史時代における主要遺跡・時期別石器組成

遺　跡	時　期		石斧	石鏃	扁平石刃	剥片石器	敲石磨石凹石	石皿・台石	砥石	他
ナガラ原西貝塚	沖縄貝塚時代後期	後期前半主	21	0	0	0	10	2	0	0
阿良貝塚	〃		2	0	0	0	12	1	0	0
アンチの上貝塚	〃		14	2	0	7	40	10	2	6
トウバル遺跡　主体層	〃		21	2	0	0	266	41	7	12
嘉門貝塚Ａ	〃		22	0	0	0	35	8	1	3
嘉門貝塚Ｂ	〃		42	0	2	5	70	0	0	6
清水貝塚	〃		15	0	0	0	288	11	0	13
具志堅貝塚	〃		7	1	0	0	35	0	5	2
小堀原遺跡	沖縄貝塚時代後期	後期前半混在後半主	12	0	0	1	94	10	7	1
牧港貝塚Ⅰ地区	〃		7	1	0	0	5	3	3	1
具志原貝塚	〃		4	0	0	0	31	0	5	1
ナガラ原東貝塚	〃		7	7	0	0	79	8	0	0
喜如嘉貝塚	〃		0	0	0	0	5	0	0	0
備瀬貝塚	〃		0	0	0	0	7	0	0	0
部瀬名貝塚	〃		0	0	0	0	4	0	0	1
久志貝塚	〃		0	0	0	0	6	0	0	0
アカジャンガー貝塚2次	〃		0	0	0	0	0	1	0	0
久良波貝塚	〃		0	0	0	0	57	0	3	3
木綿原遺跡　Ⅲ層	〃		13	0	0	0	29	11	0	2
那崎原遺跡	〃		3	0	0	0	4	0	0	2
米須貝塚	〃		12	0	0	0	72	19	2	0
阿波連浦貝塚	〃		3	2	0	1	127	64	0	4
大原第二貝塚	〃		2	0	0	0	9	2	0	0
北原貝塚　上層	〃		11	0	0	0	42	3	0	0

表５-3　沖縄諸島先史時代における主要遺跡・時期別石器組成

時　期	遺跡数		石斧	石鏃	扁平石刃	剥片石器	敲石磨石凹石	石皿	砥石	他
縄文早期末	2		20	0	0	1	10	0	8	7
縄文前期	2		55	2	27	27	3	8	28	
縄文中後期	1		40	0	2	2	115	4	9	0
縄文後期	9		181	3	4	5	76	20	6	8
縄文後晩期	10		506	10	16	76	240	35	9	37
縄文晩期	14		325	21	41	36	395	58	34	33
沖縄貝塚時代後期	24		218	15	2	14	1327	194	35	57
（後期前半主）	(8)		(144)	(5)	(2)	(12)	(756)	(73)	(15)	(42)
（後期後半主）	(16)		(74)	(10)	(0)	(2)	(571)	(121)	(20)	(15)
全体	62	総量	1345	49	63	131	2038	307	84	135
		平均	21.6	0.7	1	2.1	32.8	4.9	1.3	2.1

第３節　石器の石材および産地

近年、石質と産地についての研究が活発化し、かなり精緻を極めた論考が蓄積されつつあるので、もはや参入の余地はないが、本稿の前提条件あるいは手順として再確認をしておきたい。

石器の組成や石材についてはすでに戦前から断片的に指摘され、産地との関わりへの関心も示されていた（石材と産地についての先行研究は第２章の石斧の項において扱う）。戦後は発掘調査報告書の石器の項などで同様のことが指摘されてきた。沖縄諸島においては沖縄島北部と隣接小島､慶良間諸島および渡名喜島､久米島が主要な石材産地であることはしばしば触れられている。また黒曜石は九州などの遠方からもたらされたものという認識もあり、その交易のあり方についても関心が寄せられてきた。

石材の産地については戦前にすでに重要な課題とする認識があったとはいえ、初めて強い関心をもって具体的に取り扱ったのは岸本義彦である。独立した題材での論考は少ないが、野国貝塚Ｂ地点の発掘調査報告書をはじめとして、具志堅貝塚、知場塚原遺跡、ナガラ原東貝塚など担当した遺跡の発掘調査報告書の石器の項で、特定の石器の器種と特定の石材との相関、産地の検討および使用痕の観察などを記述した（岸本義彦 1984、1986、2004、2013）。その影響もあって、現在では発掘調査報告書において１点ごとの「石器観察表」に属性を記述するのが一般的となり情報量が増大してきている。

さらに近年では大堀晧平が器種ごとの石材の獲得活動と消費活動についての緻密な分析をおこない、沖縄諸島における石材獲得戦略・消費戦略という表現でその特質の把握を進めている。大堀が導入した理論と分析方法は、沖縄諸島石器文化の体系的な叙述に貢献するものと期待されている。本稿はその成果にも依拠している（大堀 2006、2008、2010a、2010b、2012、2013、2014）

これまでの調査報告書からみると石材の種類は 40 余種（石斧は 20 余種）で、主な石材は 11 種（石斧は７種）である。石材の主な供給地（自然産地）は従来から指摘されているとおり、沖縄島北部と隣接小島・与論島・沖永良部島および慶良間諸島、渡名喜島、久米島などである（木崎甲子郎 1985）。一方、現在の行政区域に規制されて思考まで規制されがちだが、緑色岩系石材が採取できる与論島・沖永良部島・徳之島からの供給の可能性も考慮すべきであろう。また、北部地域や慶良間諸島においてもすべての石材が近隣に分布しているわけではない。北部東海岸および国頭村北部西海岸には嘉陽層に伴う砂岩が分布する。恩納、名護、大宜味、国頭地域の西海岸および本部半島の一部には緑色岩系・片岩系岩石が、本部半島や伊江島、伊是名島、伊平屋島にはチャートなどが分布し、地域的偏在がみられる。したがって、北部地域の先史ムラ集団であっても、他の地域から石材や製品を入手する必要があったし、実際に遺跡（居住地）には遠隔地からも石材や製品が持ち込まれていることが石材の種類から把握できる。

石材を採取する主な場所は、手頃な円礫が転石として存在する河口流域や海岸であることは日本列島新石器時代文化に共通のことである。このことは沖縄においては発掘調査報告書の石器の項で漠然と指摘されていた。近年、大堀晧平、岸本義彦・神谷厚昭らが具体的に露頭、転石を明らかにしている（神谷厚昭・岸本義彦 2013 大堀晧平 2016､）。また石材は重量物であるから、携行による陸上運搬にはなじまない。舟に積み込みやすい水場の地形環境であることも、採集場所として合理性をもったものであった。したがって、石材の自然分布においては、地質学上の表層地質だけでなく、転石の存在する場所の把握が重要である。その石材の地層（母岩）が内陸部にあっても、それから分離した転石が河川によって磨耗しながら流され、あるいは海岸の波浪に洗われて適当なサイズの円礫となって流域や海岸に分布しているのを先史人は採取したのである。

したがって、地質図では海浜砂丘となっていても円礫石材分布地域であることもある。

また、石材獲得だけを目的にして通交、交流したのではなく、あわせて既製の土器や土器製造のための粘土または混和材、およびイノシシ（肉）などの獲得行動を行う集団もあった。その需要に支えられて、沿岸・河川交通が活発に展開されていたことが推定される。沖縄島では近年まで陸路が未発達の場所があり、沿岸を小舟で経由する交通システムの伝統が続いていた（安里1992）。重量物の石材を運ぶ通交は特に舟の方がはるかに利便性が高い。

器種によって特定の石材（原石）を選択する傾向があることはすでに岸本義彦が調査報告書のなかで何度か指摘してきている。石斧は概ね２種の原石が多用される傾向がある。ひとつは①緑色片岩などタテ方向の「片理」と粘りをもつ性質の岩石で、もうひとつは②輝緑岩系の緻密で粘りのある岩石である。磨石･敲石類は均質な硬い砂岩円礫が自然形のまま多用される傾向がある。石皿や磨石・敲石類には沖縄島北部産の砂岩が多用されている。沖縄島中南部産の細粒砂岩（小禄砂岩・通称ニービの骨）は砥石や石皿に限定的に使われている。細粒砂岩はこのほかにはほとんど使われない石材である。北部の嘉陽層のなかにも細粒砂岩として分類される砂岩があるので、調査報告書には所属を明記すべきだが、その区別は不明なことが多い。石皿の材料にはほかに板状の砂岩（片状砂岩）がよく用いられている。扁平石器は平たい片理面をもつ片岩、千枚岩などの岩石が使用されている。

チャートが遺跡から出土することがあるが、その中に剥片石器と砕片が含まれている。また他の石材破片・細片が伴うこともある。これらの遺跡（集団）は、基本的には原石がムラまでもたらされ、居住地において石器製作をしていたことを示している。しかし一方では出土遺物総取り上げをおこなった伊是名島伊是名貝塚では石器製作段階の剥片、細片の伴出がないので、既成の石器を外部から入手した可能性がある。チャート以外は伊是名島に産しない石材であることから、

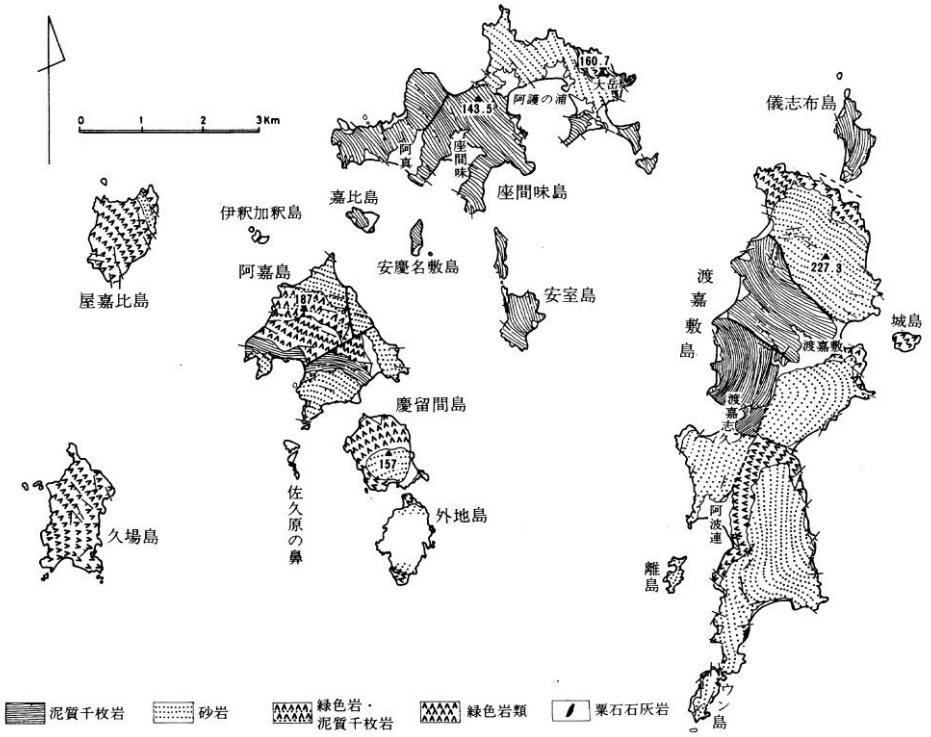


図１　慶良間諸島の地質分布図　木崎甲子郎　1985 より抜粋

島外との既成石斧の取引をおこなっていたことを証する発掘成果であった。(伊是名貝塚学術調査団 2001)

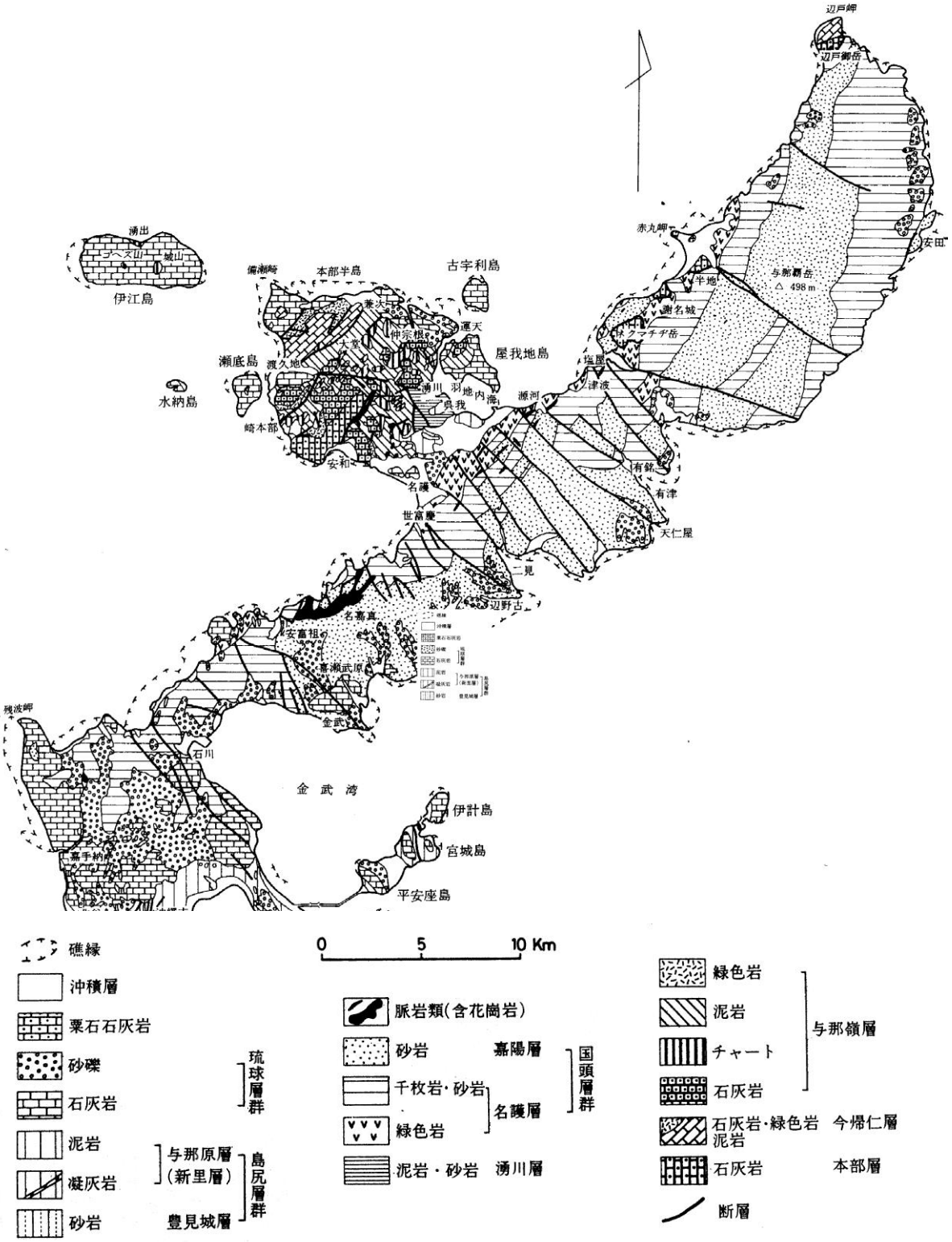


図２　沖縄島北部地質分布図　　木崎甲子郎 1985『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社より抜粋

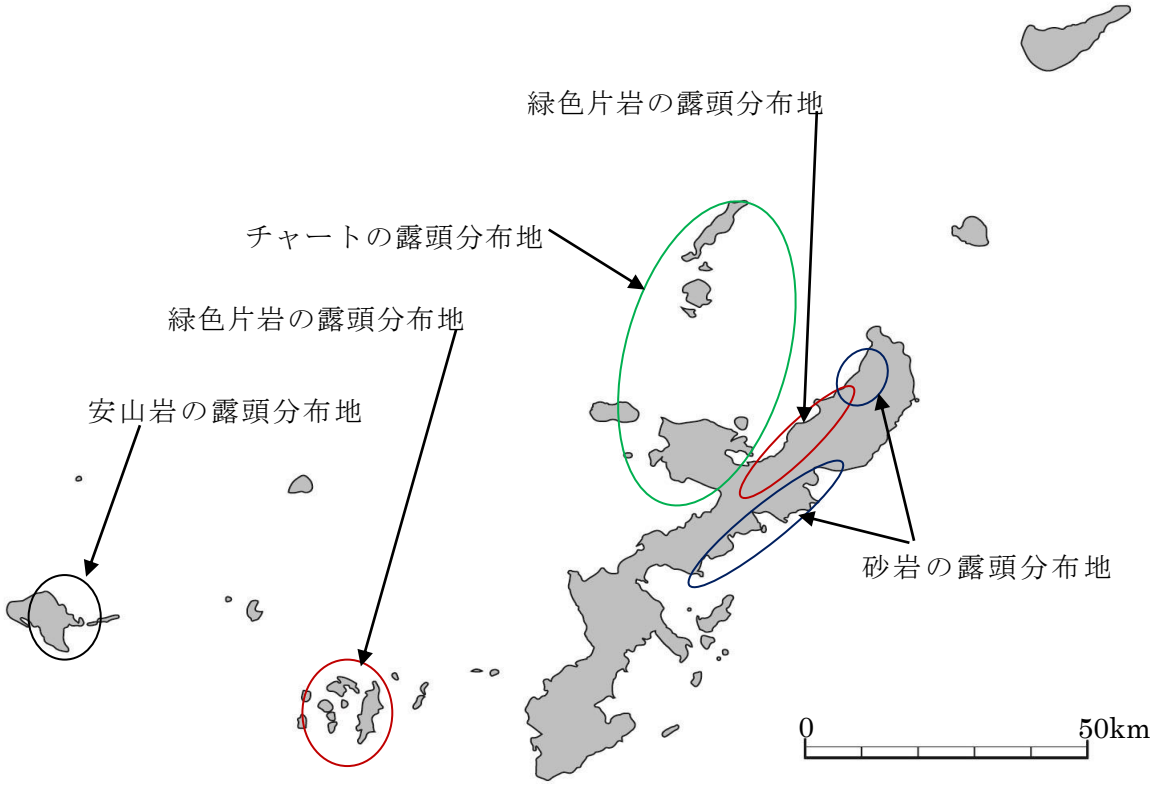


図３　石材の露頭分布地域　（筆者原図）

これまで漠然と石器の多くは自家（ムラ）製造を原則としていたものと考えられていた。しかし過去の多くの発掘方法は全点取り上げではなく、剥片・細片は記録されることがほとんどなかった。今となっては既製品の導入か自家製造なのかの判断情報がない。一方、九州北西部産の黒曜石製石鏃と剥片・細片が数は少ないが沖縄諸島の広い範囲で発見されている。基本的には石材が持ち込まれて、現地で主に石鏃を製造したものと理解されている。

沖縄諸島は主要な石材産地が限定されていて、消費地域との境界が明瞭である。どこでも遺跡の周辺に石器石材の自然分布が見られるのではなく、多くの集団が遠隔地からの石材入手を必要としている環境にあった。しかも上述したように主な産地である沖縄島北部においてさえも、石材の種類によって偏在しており、同様に他地域から石材を入手する必要があった。

先史社会においては相互に不足を補い合い融通を図る交易システムが存在していたと考えられる。石材についても自然産地近隣の集団が融通の便を図り、あるいはある集団が石器を余分に製造して、他の集団との物資の遣り取りを直接あるいはリレー型で需給関係を調整していたのであろう。

島嶼世界にあっては、自己完結的な生活体系を単独の島や地域で築くのは不可能に近く、このような材料依存の関係は、大堀晧平が指摘したように（大堀 2010・2017）、遠隔地も含めて他集団との良好な関係の維持が必要条件となっていたことであろう。仮に石材産地に直接乗り込んで、近隣集落・集団との関わりなく原石を採取すると、たとえ土地所有権システムのない先史社会にあっても、集団間の緊張関係をもたらすことが考えられる。相互に不足な物、必要な物を融通しあう交易であれば、なおさら良好な関係維持が求められる。そして沖縄諸島地域にみられる土器

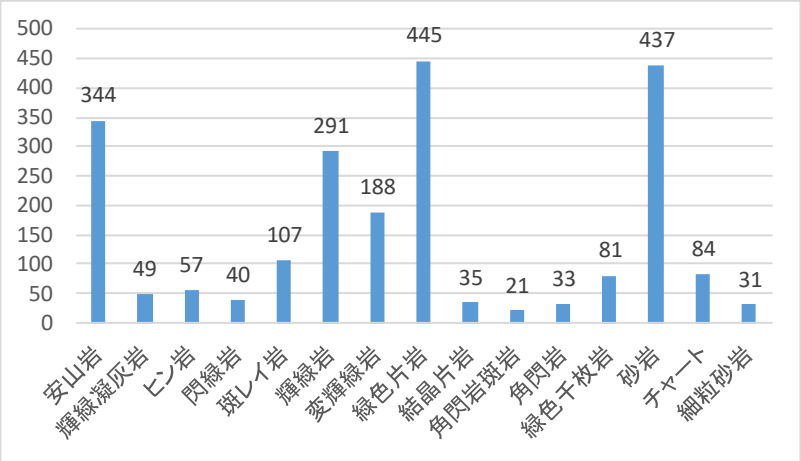
型式をはじめとする物質文化の共通性は、実際に恒常的で円滑な交流関係が展開されていたことを示している。

このような地域間の集団同士の関係は、石材の入手、取引のあり方にも反映している可能性がある。また、村落共同体のなかで複数の近隣集団が協同で石材を入手することもあり得る。そのような石材産地近隣や取引に関わる集団との関係を通して「石材・石器入手・供給ルート」やそれに伴う特定石材選択の「傾向」がそれぞれの集団に存在していたことも考えられる。

石材の自然産地と非産地が明瞭に異なり、なおかつ特定石材の産地でさえも他の石材には恵まれない沖縄諸島の石材分布は、そこに石材の獲得活動があり、それが動因のひとつとなって沖縄諸島の先史集団が比較的広範囲に遊動や往来行動を展開していたといえる。また自らは移動しない既製品取引関係であっても、導入に伴って広範囲の情報に接する機会をもっていたといえる。このような遠隔地からの石材・既製石器入手という生業・生活上の需要が媒介要因となって、沖縄諸島に準恒常的関係で結ばれた共通空間が形成され、土器、石器、貝器の物質文化が共通の枠組みに囲まれたひとつの文化圏として展開していったのである。

黒曜石の出土はすでに戦前那覇市の城嶽貝塚において知られ、当初から注目されていた（小牧實繁 1927）。近年、盛本勲・小畑弘己ほかによってわずかの鹿児島産例を除いてそのほとんどが九州西北部腰岳産であることが明らかにされた（盛本勲・小畑弘己 2005）。また、奄美群島では徳之島の１遺跡から多数の黒曜石片が出土し、九州と北琉球との「交易」中継点ではないかとする見解も現れている。黒曜石については奄美群島・沖縄諸島では主に石鏃の材料として使用されているので詳細は第３章の石鏃の項で扱うが、腰岳産が多いことについては沖縄諸島の選択的交易とする見解がある。しかし、後述するように南九州において黒曜石産地が在地にありながら腰岳産が縄文後晩期に増加してくるという現象があり、南九州縄文集団にすでに腰岳産黒曜石の方が良品であるとする価値観が形成されていた。　出土量が多いにもかかわらず、産地が不明な石材がある。輝緑岩である。緑色片岩と並んで石斧の２大石材の一つである。古い調査報告書には名護層由来、慶良間諸島由来などと記載されているが、近年は沖縄諸島内では産地不明とされている。徳之島の尾母層に含まれるとされるが（木崎甲子郎 1985、ｐ65）、遠距離からの搬入とするにはかなりの量の出土である。これだけの導入量だと恒常的な交流圏ともいえるので、土器文化などにも濃い共通性が見られる可能性がある。肥厚口縁土器様式の時期だとある程度は妥当性をもつが、ほぼ縄文後期以降をとおしての出土であるので、土器型式の異なる時期もある。

表６　沖縄諸島出土石器の主要石材
表５に示す 61 遺跡の石材（石質）の集計。
20 個以上の石材について表示した。



第２章　石斧

第１節　序

石斧は沖縄諸島先史時代においては、石器の中に占める位置や量に変化はあってもほぼすべての時期に製作使用されてきた主要な道具であった。石斧は割る、切る、削る、などの行為によって木材の伐採や木工具の加工をおこなう重要な役割を担っていたとされる。また、掘るという行為による土掘り具としての機能ももち、山野の根菜採取や住居の竪穴・柱穴掘削の用途にも使用されたと考えられている。あるいはイノシシなどの獣類の骨肉の解体に、剝片石器とともに使用された可能性もある。このように石斧は幅広い用途をもつことから、基本形は共通しつつも、それぞれの目的によって形状や重量の異なる多様性をもっている。例えば磨製・局部（刃部）磨製・打製石斧、両刃・片刃石斧、大型・中型・小型石斧、側面部の定角石斧、丸ノミ型石斧、双刃石斧、抉入石斧（伊江島型）など多彩な変異がみられる。

石斧をはじめとする石器は基本的には居住地（多くは集落）において製作使用されたとみられるが、前節で指摘したように発掘方法、調査報告書の不備等からあいまいなところもある。剥片、細片が確認できない遺跡もあるので、完成品（既製品）や半製品を他集団との交易によって入手することもあったようである。

石器のなかで暮らしの中心的道具である石斧は最も使用頻度が高く、損耗、破損が多い。そのような石斧がどのような一生を辿るのかを観察して、先史人の対処方法を検討したい。

一方、集落の立地環境や構成、規模、生業形態は当然石斧の需要や属性（出土量、石質、大小、重量、形）にも反映される。その逆も言える。また、集落の住居遺構における石斧の出土状況から、集落の構成、特定の遺構の機能を捉えることができる可能性もある。これは別項で扱う石皿・台石類の出土状況にも共通することである。

さらに土器文化を中心に日本列島新石器時代文化（縄文文化）と深いかかわりをもつとされる沖縄諸島先史時代の人と文化の関係が、石斧をとおしても把握できる可能性がある。

以上のような視点から沖縄諸島先史時代の石斧のもつ特質について検討を進めてみたい。

第２節　先行研究

石斧だけでなく、他の石器についても扱う。この数十年の間に行政機関を中心とした遺跡発掘の増加に比例して、石器の出土量も年々増加を続けている。これにより情報量はかなり増えているのであるが、戦前わずかに４か所の遺跡しか知られていない段階で、沖縄諸島の石器文化について早くも次のような特質が指摘されていた。

◎　沖縄諸島の石器の器種組成が少ない。石斧・槌石・凹石・石鏃の４器種である。

◎　石器の材料は遺跡付近にはなく、他の地域から入手していた。

◎　火成岩のなかに沖縄に産しない石質のものがあり、これは（日本列島から）「舟に乗して此地に来るもの」と移住拡散について指摘している。

◎　黒曜石製鏃の発見は沖縄と日本との関係を考える重要な手がかりとなる。

◎　八重山諸島発見のわずか２個の石斧からその特質を見抜き、沖縄諸島と八重山諸島の石器文化は系統が異なる。

戦後になって調査が進むと、この見解の妥当性が再確認され、現在では北琉球文化圏と南琉球文化圏の系譜の違いは定説となっている。研究史については、これまでの論考の多くは石器全般を扱うなかで石斧にも触れていることがあるので、とくに石斧に限定されないものも必要に応じ

て含めることとする。

戦前期の石器・石斧研究

① 神田孝平

奄美群島の考古学史の項で、未だに最初の考古学文献は若林勝邦の報文であるとする記述があるが、実は神田孝平が 1884 年に琉球列島初の考古学的論考となる石器の図入りの資料集を英文で出版し、そのなかで奄美大島発見の石斧 5 点を図示して紹介したのが最初である（神田孝平 1884）。さらに日本語版も 1886 年に出版した（神田 1886）。若林は 1892 年に神田の資料を別に実測図を作成し、報告しただけである。

神田は奄美発見石斧の特徴として「壷刃（丸ノミ）」と「頭部の膨らみ」を指摘した。後にこの特徴が南九州縄文時代草創期に属する独特のタイプであることが 100 年余を経て確認され、「栫ノ原型石斧」として型式設定された。このタイプの石斧が沖縄本島国頭村辺戸において戦後採集され、また鹿児島本土及び種子島の遺跡発掘で「薩摩火山灰層（約 11000 年前）」の下層から出土したことから、現在重要な文献として再検討されている。国頭村辺戸採集の栫ノ原型石斧は表面採集であることから、これが沖縄諸島新石器時代最古の石斧となるのかについては未解決の課題となっている。

② 若林勝邦

種子島で見た石斧 1 点、神田孝平所蔵の奄美大島発見の石斧 10 点を紹介。大島の石斧のうち 9 点は日本列島では前例のない形として認識している（若林勝邦 1892）。

「頭部ニ瘤形ヲ存スルト刃ノ中央ノ部分磨キテ凹ナルトハ大島石斧ノ特点ト云フベシ」。この特徴の把握は神田孝平と同じである。しばらくの間若林のこの論考が琉球諸島に関する最初の考古学的文献と誤認されてきたが、実は上記のようにその 8 年も前に、しかも同じ石斧を神田が紹介していたことが後に判明した。神田の論考は英語で出版されたこともあって、研究者の目に触れる機会が少なかったのであろう。

③ 鳥居龍蔵-1

沖縄に関する初の考古学論考において沖縄から上京した西國男が持参した石斧を紹介し、「琉球ニ石器時代ノ遺跡アラントハ吾人ノ深ク信ズル所ナリ」として沖縄にも先史時代遺跡が存在することを、採集された石器から確信した（鳥居龍蔵 1894）。石垣島、西表島、黒島、あらぐすく島、こはま島、波照間島、国頭くんちゃん奥村、中頭からの発見石斧を紹介し、沖縄にも石器時代の遺跡があること、すなわち先史時代人が居住していたことを確信する上記の見解を示した。これを機会に沖縄に人類学的関心をもった鳥居は 1904 年に来県し、後述の論考を著した。

④ 笹森儀助

沖縄への旅行記のなかで、首里役所長の西常央が八重山役所長の際に採集した石斧を実見し、さらに、八重山の旅の際の 1893 年 8 月 24 日、「黒島ノ一人民雷斧ヲ棒切ノ中間ニ鋏ミ之ヲ太キ薪ニ当テ石ヲ以テ打テ薪ヲ割ルアリ蓋シ石器時代ノ遺風ナルヘシ」との記述があり、石斧で薪割りをしている様子を記述している（笹森儀助 1895）。「石器時代ノ遺風ナルヘシ」との記述は間接的にこの地域に石器時代人が居住していたとの見解を示したことになる。本論の研究対象地域とは異なるが、石斧の装着法、使用法の参考例となる。

⑤ 加藤三吾

現在の宜野湾市一帯で直接採集または地元住民採集の石斧を観察し、その多くが沖縄に「決して存在しない火成岩」製であるから、「舟に乗して此地に渡り来たるもの」と考察した（加藤三吾

1901)。「火成岩」は種類によっては沖縄にも存在するので、具体的な石材が判明しない限り検証できない。石材を根拠にヒトの移動を論じた点に意義がある。

⑥　鳥居龍蔵-2

沖縄への調査旅行の成果を記し、那覇・中部のいくつかの遺跡の石器について「―其石の原料は、貝塚の付近に存在せず、こは今日の一大問題なるべし―」「石斧の形状は（中略）一種の地方的形式を示せり」と指摘して、石材産地との関連や沖縄諸島的特性について示唆している（鳥居龍蔵 1905a・b・c)。石材の自然産地の分析は今日においても重要な方法と視点である。

⑦　山崎五十磨

この時点で沖縄諸島において発見されている遺跡は４箇所であるが、遺物を種類ごとに分類した（山崎五十磨 1924)。石器は石斧、槌石、凹石、石鏃の４種のみで、内地と比べて少ないこと、石器各種の形態は内地或いは大陸地方と大差ないことを指摘した。この指摘は今日においても概ね有効である。

⑧　松村瞭

1920 年に北中城村荻堂貝塚の発掘調査をおこない、東京大学から調査報告書を刊行した（松村 1920)。「Ⅲ　遺物　１石器」の項で、他の遺跡、城嶽貝塚発見の石鏃を図入りで琉球初の発見として紹介するとともに、石材は燧石としている。(燧石はチャートであろうと、後に城嶽貝塚を発掘した小牧實繁は述べている。)

荻堂貝塚出土の石斧 13 個の石材を同定させ、その石材は北方数里の地に分布するので、石材獲得は困難ではなかったと捉えている。主な石器の石材の自然分布は沖縄島北部地域であり、今日においても有効な見解である。

⑨　小牧實繁

那覇市城嶽貝塚の発掘をおこない、５点の石鏃を発見した（小牧實繁 1927)。以前にこの遺跡から沖縄初となった石鏃の発見がすでに松村瞭によって紹介されているが、小牧の発掘でさらに黒曜石製石鏃が発見され、その第一号として報告された。その後の九州と奄美・沖縄諸島との取引・交流関係を考察する端緒を開いた意義があるが、その時点では「愉快に思った」だけであった。

⑩　島田貞彦

那覇市崎樋川貝塚の発掘をおこない、その報告書のなかで「石器の材料となっている原石はいづれも局地附近には産出しない。されば少くとも北方地方又は相当距離から獲得するものでなければならないが、此際、完形品として将来されたか否かを推すことは興味ある事柄である。」と述べて石材の産地および現地製造か既製石器の入手かという関係にふれた（島田貞彦 1932)。

「完形品として将来されたか否か」という視点は先史社会において石器を需要よりも余分に製作し、他の集団となんらかの経済行為＝取引が行われたかという研究課題を提示している。この視点は近年、今帰仁村西長浜原遺跡において大量の石斧が出土したことから、他集団への融通品であった可能性を主張する見解につながっている。

⑪　三宅宗悦-1

これまでに発見された奄美・沖縄諸島の遺跡・遺物を概観した。石器は石斧を中心に扱い「一般的に云へば南島独自の石斧型式と云ふべきものは認め難い」としながらも、いくつかの特徴を指摘している（三宅宗悦 1935①)。

⑫　三宅宗悦-2

三度の奄美・沖縄調査旅行をもとに、奄美・沖縄諸島発見の石器、とくに石斧を中心に実測図によって集成した（三宅宗悦 1935②）。八重山発見のわずか２個の石斧から、奄美・沖縄地域の石斧とは形態的に異なることを指摘していることは卓見である

⑬　三宅宗悦-3

奄美・沖縄諸島の考古学研究史と遺跡・遺物を概説。石器は石斧、凹み石、石鏃を紹介した。（三宅宗悦 1940）南島の石斧は磨製および半磨製であり、打製石斧はみられない。型式的には遠州式、短冊形、両者の中間系がある。奄美群島と沖縄諸島とでは殆ど差がない。実見したものとして大島笠利村崎原アヤマル崎出土の石斧は今日にいう「栫ノ原型石斧」が写真で示されているのは貴重な報告である。

戦後期の石器・石斧研究

①　八幡一郎

戦前までの成果を総括し、琉球列島の石器について初めて製作技術の点から詳細な分析、考察を加えた（八幡一郎 1950）以下はその要点である。

琉球の石器は質的にも量的にも内地とは到底比較にならぬ程貧弱である。理由は

ア　石材が豊富ではない

イ　石器製作の流行期とのずれがあったかもしれない

ウ　石以外の石器代用材が多い、などの可能性を挙げる。

石材は河谷、海岸に散在する礫を選択。石斧の製作法は三つに分けられる。

ア　諸所を打ち欠いて後に刃先をつけたもの

イ　自然礫のほとんどを打ち欠いて成形し、それに刃を砥ぎ出したもの。或はさらに敲打や砥磨で凹凸を少なくし、刃を磨いたもの。

ウ　全面をよく砥磨し、これに刃を付したもの。

打ち欠きの技術があるのであるから、打製石斧が存在してもいいのであるが、琉球には打製石斧は少ないとしている。さらに石斧の形態的特長を観察しつつ海外の石斧文化とも比較し、日本の石器文化との類似性を指摘している。

戦前に発見された 11 個の石鏃について、「基底部を少しく内曲或は内屈せしめてあるだけで、所謂無茎品のみ」であり、これは周辺海外の鏃よりも西日本の石鏃にのみ酷似していると捉えている。石鏃の発見が少数であることから、狩猟における弓射の技術の普及について疑問を投げかけるが、他の材料や器種の存在があったかいずれかを決する資料がないとしている。

②　多和田真淳-1

琉球列島の遺跡分布を概観し、初めて編年（時期区分）の体系を発表した（多和田眞淳 1956）。とくに石器についての論述はないが、各地遺跡発見の石器を紹介しているなかで定角式片刃石斧に注目している。宜野湾市大山掘割遺跡で石鏃を発見したことを記している。

③　多和田真淳-2

石器を中心にした論考ではないが、定角式片刃石斧はチョウナと同じ使用法で、農耕用の石ぐわであるとする見解を示した（多和田眞淳 1964）。

④　高宮廣衛

沖縄貝塚時代後期には石斧が減少し、磨石が増加する。グスク期には石斧は敲石の如く使用されていると初めて指摘した（高宮廣衛 1965）。この見解はその後大量の発掘調査が実施されてき

た今日においても有効である。

⑤　多和田真淳-3

定角式石斧、片刃石斧は農耕の存在を示すとする見解を再び示した（多和田眞淳 1967)。また国頭村宇佐浜遺跡附近から「男根茎丸のみ石斧」が出土とあるのは、カヤウチバンタで採集された栫ノ原型石斧のことと見られ、これを紹介した最初の文献といえる。

⑥　多和田真淳-4

「砂丘貝塚時代」(後期―引用者注）になると石器が急に減少することと、刃物としての石斧がたたき石に変っていくのも「鋭利な鉄器使用のためだと想定すべき」との見解を述べる（多和田眞淳 1971)。沖縄貝塚時代後期に石器とくに石斧が減少するとの指摘は高宮廣衛に次ぐもので、以後沖縄考古学研究に継承されていった。

⑦　嵩元政秀-1

沖縄貝塚時代後期に九州産の弥生式土器が出土するが稲作は受容しなかった。その根拠のひとつに「石包丁」が出土しないことを指摘した（嵩元政秀 1972)。稲作需要の問題を石器の視点から考察したことに意義がある。

⑧　国分直一

沖縄出土のいろいろな石器についての考察をおこない、次のような見解を示した（国分直一 1972)。

円筒形の重厚な石斧　―　木の伐採・加工用　　打製粗造の扁平石器　―　土かき用

石鏃―黒曜石の鏃は土器文化が九州とつながることから、これも九州につながる。剥離技法がみられないのは、対象となる石材がないから。石鏃は少数例しかない。弓射の技術は一般的ではなかった。対象は野猪が想定できるが、伝統的には沖縄の猪狩は弓射ではない。

皮革加工　―　加撃による使用痕をもたず、磨研によって刃の部分が丸みを帯びる

樹皮布（タパ）-非紡織布製造用石器があるか。紡錘車の未発見　→　非紡織布の時期の存在を示唆している。具志川市地荒原貝塚の石器はタパ・ビーター（布敲き具）か？

⑨　米田善治

渡喜仁浜原遺跡発掘調査報告書のなかで、石器の器種と石質の関係について先史人が石質を選択していたことを指摘した（米田善治 1977)。

⑩　宮城朝光

渡喜仁浜原遺跡発掘調査報告書のなかで出土石器の石質と産地との関係を考察し、採取活動や九州との交易の可能性にも言及した（宮城朝光 1977)。調査報告書の石器の項目としては比較的深い考察をした論考であったが、これが沖縄考古学界で石器を題材とする研究テーマとして扱われる機運には至らなかった。

⑪　沖縄考古学会編

沖縄考古学会が編集した『石器時代の沖縄』pp. 52-54（1978）ではとくに石器文化についての詳細な考察はないが、石斧の形態や用途を述べ、琉球諸島の石斧の形態をおおまかに解説している。両刃石斧と片刃石斧の装着法を説明しているが、一般への普及本の域にとどまっている。

⑬　白木原和美

琉球列島の石斧を体系的にまとめ、形態、製作法により 17 種に分類した（白木原和美 1980)。打製石斧はない。全面研磨の両刃石斧や粗い片刃石斧は沖縄貝塚時代前期（縄文時代後期）に属するとの見解を示した。

⑭　知念勇

沖縄先史時代の石斧について時期別の特徴を以下のように捉えた（知念勇 1983）。

前Ⅰ期　大型の打製または局部磨製の石斧　　前Ⅱ期　石器の量と種類が増加

前Ⅳ期　両刃石斧が多い　　前Ⅴ期　片刃石斧が多い

沖縄貝塚時代後期は石斧が激減する―鉄器の導入と関係の可能性を指摘した。

石鏃は前Ⅴ期（縄文時代晩期）に集中し、外来の黒曜石製鏃と分布が重なる。黒曜石は佐賀県腰岳産、チャート製鏃は沖縄本島本部半島産の石材であると指摘した。

⑮　岸本義彦-1

嘉手納町野国貝塚Ｂ地点の発掘調査報告書において石器の当該時期の組成、器種と石質の相関、石器とくに石斧の形態を中心とする分類を試み、さらに個別の製作過程、使用痕跡などを意識した観察表を作成した（岸本義彦 1984）。その後岸本はほかにも担当した発掘調査報告書の石器の項目で同様の視点をもって分析し、従来の調査報告書にはあまりみられなかった、遺物ごとの詳細な分析を試みた点に意義がある。

⑯　木下尚子

新石器時代の沖縄諸島をいくつかの地域に区分し、統計的手法による各地の時期別の食料構成を分析する方法のひとつとして、石器器種の構成を比較した（木下尚子 1986）。統計的手法を用いた点に新しい試みがある。後期に石斧が減少するのは、砂丘地への居住地の変化を受けたもので、開地作業で前の時期ほどには石斧を必要としなくなったからとの見解を示す。

⑯　岸本義彦-2

本部町『具志堅貝塚発掘調査報告』のなかで石器の器種ごとの用途や石質を検討し、石材産地の分析をおこなった。岸本の石材と産地への強い関心が継続している（岸本義彦 1986）。

⑰　盛本勲

『沖縄県久米島具志川村　清水貝塚発掘調査報告書』のなかで石器石材の産地について考察をおこなった。沖縄貝塚時代後期の石斧については「扁平化の傾向と粗造の感」と表現し、製作技術上の特性を指摘した（盛本勲 1989）。

⑱　安里嗣淳

先史沖縄諸島人は石器石材入手のために本島北部や慶良間諸島を往来した。これが動因のひとつとなって、均質の文化圏が形成された。石材は原石露頭ではなく、河原や海岸で手ごろな円礫を採取した。運搬は舟によっておこなわれたと考察した（安里嗣淳 1992）。

⑲　新田重清-1

時期別に沖縄諸島の主要な遺跡出土の石器を分析し、その組成、消長、相違、生業との関係、原初的農耕論の提起など、初めて石器の総合的検討をおこなった（新田重清 2000）

⑳　小田静夫

鹿児島県で初めて層位的に発掘され、縄文時代草創期に属することが明確となった丸ノミ型石斧を「栫ノ原型石斧」と命名し、それが南九州を中心とする特殊な石器文化であることを明らかにした（小田静夫 2000）。沖縄発見の同型石斧も含めて分析し、沖縄最古の新石器文化となる可能性を示した。また、従来扱われることのなかった縄文期の剥片石器をとりあげ、集成、分析をおこなった。

㉑）新田重清-2

『沖縄県史』において、弥生～平安時代に並行する沖縄後期の生活用具としての石器を概観し、

石斧が減少していることを指摘した（新田重清 2003）

㉒　嵩元政秀-2

『沖縄県史』において、生活のなかの石器を器種別に用途を説明し、さらに時期別に縄文時代に相当する石器文化の様相を体系的にまとめた（嵩元政秀 2003）

㉓　中山清美

奄美群島は石器の数は少ないが一般的な各種の石器が出土していること、後期（兼久式土器期）になると刃をもつ石斧が消滅し、敲き石的使用法に変わることなどを指摘した（中山清美 2004）。

㉔　岸本義彦-3

石器の種類によって適した特定の石質石材を選択していること、石斧は緑色片岩系が多いこと、石材は川原石や海岸の石から選択したことなどを示し、石材分析の重要性を指摘した（岸本義彦 2004）。

㉕　津村宏臣

発掘調査報告書『沖縄県茅打バンタ遺跡』において、当該遺跡出土石器のほか沖縄諸島出土の磨製石斧を集成して分析、考察した（津村宏臣 2004）。石材の近隣産地、遠隔地産地の存在を指摘した。

㉖　水之江和同

南島の爪形文土器期の石斧は曾畑器の石斧と類似している。爪形期は曾畑期に近いので縄文早期ではない。南島の石斧は日本縄文時代の石斧文化変化の枠組みにはいる（水之江和同 2005）。

㉗　仲宗根求

a 片側辺に抉りをもつ磨製石斧を「伊江島型石斧」として型式設定することを提唱した（仲宗根求 2008）。この抉り入り石斧はすでに戦前に紹介され、地荒原遺跡例、近年の北谷町発見例、奄美群-島の発見例、九州長崎の発見例を集成し、縄文文化の系譜に属する搬入石器であることを指摘した。

b 沖縄諸島出土の両端に刃を持つ薄手の双刃石器 17 点を分析し、ひとつの型式をもつものとして最初に発見された遺跡名を冠して「熱田原型石器」の設定を提唱した（仲宗根求 2009）。

c 沖縄諸島の片刃石斧を集成し、バチ形と短冊形の初現や、盛行期、継続期の様相について検討した。（仲宗根 2017）

㉘　小畑弘己・盛本勲・角縁進

奄美群島、沖縄諸島発見の現存する黒曜石を科学分析し、そのほとんどは九州佐賀県腰岳産であることを明らかにした（小畑弘己・盛本勲・角縁進 2004）。従来から肉眼観察による印象だけで言われていたことが具体的な個別の科学分析によって産地が確定した。これによって九州から奄美群島、沖縄諸島への黒曜石供給ルート解明への糸口が明らかにされた。その後の石鏃をめぐる研究に大きく寄与している。

㉙　大堀皓平

沖縄諸島の石斧や石鏃を分析し、製作技術にもとづく分類や特性の分析および石材とその産地との関係、さらには九州との関係性などを統計的手法も用いて考察した（大堀皓平 2008・2010・2012）。

これまでの沖縄考古学研究においてあまり重点的に研究されることのなかった石器文化について、新しい理論と分析方法を用いた数少ない論考といえる。主な論点は次のとおりである。

a　石器の分類の概念を「系列」でくくり、打製石器系列、磨製石器系列、礫石器系列に３大別

する。さらにそれぞれ礫石器を除いて製作技法の「複合型」と「単一型」に分け、各種の石器を配した。これらの器種には時期、地域特有の「型式」をもつものがわずかに存在する。さらに器種は形のちがいからいくつかの形式に細分される。

b　沖縄諸島の石器群は前琉球縄文式（Ⅰ期）、琉球縄文式（Ⅱ・Ⅲ期）、続琉球縄文式（Ⅳ期）、グスク式（Ⅴ期）の４つの様式に分類できる。

c　磨製石斧は縄文併行期には精製で、後期には粗製となるとともに、器種の組成は磨製石斧が前者の時期に多用され、後期には減少し、磨石類が増加するという現象がみられるが、これは社会の移行ではなく「変動」として理解される。

d　石材獲得消費戦略において、４つの様式期にはコストのかけ方に相違がある。後期はそれまでの日本の縄文社会との関係から離れ「南の文化（藤本強 1988）」の萌芽がみられる。

さらに大堀は石鏃の分析も進め、石斧とあわせて製作技法・石材産地と獲得・消費のあり方を体系的に位置づけた。

先行研究の概略

戦前期

当初は石器の発見そのものが、沖縄における先史（原始）時代の存在を示す証拠となった。やがて土器や貝器を伴う貝塚が発見され、北琉球が九州縄文時代の系譜に属することが把握されると、石器も器種が少ない点は異なるが日本縄文文化の系列にあるものとして理解された。

石材から産地との関係の重要性を指摘する論考はすでに 1905 年の鳥居龍蔵にみられる。また、琉球に産しない石材に着目し、ヒトの移動が九州方面からあった証拠とする見解もあった。しかし、これをさらに進めて詳細に論じられることはなかった。また三宅宗悦によって石器とくに石斧についての集成がなされ、石器の形態上の全体的様相が把握された。発見された遺跡数の圧倒的な少なさにもかかわらず、日本縄文文化との基本的な関係を捉えるなど、戦後に継承される視点がすでに示されていた。

なお、奄美大島発見として神田孝平によって報告され、近年になって小田静夫によって「栫ノ原型石斧」として縄文時代草創期に位置づけられた丸ノミ石斧は、沖縄本島北部でも類例が表面採集されていることから、その発生と展開をめぐって新たな研究課題として位置づけられている。

戦後期前半　1950～1970 年代まで

まず 1950 年に八幡一郎によって戦前の琉球列島考古学の成果が総括され、そこからスタートした（八幡一郎 1950）。

1954 年に県外からの研究者によって再開された沖縄の考古学研究は、1956 年に在地研究者である多和田真淳の「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」の発表によって拠るべき道標が示された。石器研究もこの土器編年に準じて論じられるようになる。

1970 年代前半までは特に石器を主題とした研究はなされなかった。発掘調査報告書の石器の項に付随的にその形態の特徴や用途の考察がなされる程度であった。そのなかでも沖縄貝塚時代後期には石斧が減少すること、それは日本弥生社会からの鉄器の導入と関係するのではないか、と考察された。しかし同時期に沖縄では稲刈り（穂刈り）具としての石包丁の出土がないことなどを証拠に、稲作は導入されていないことも指摘された。黒曜石の鏃は九州との交流のなかでもたらされたこと、時期が縄文晩期に限定されているらしいことなどもこの時期から指摘されてきた。

70 年代後半には地質学の専門研究者による石質同定を積極的に求め、調査報告書に石質を掲載

することが一般的となり、石材産地への関心は継続的に意識されてはいた。一部には石材採取行動の範囲や九州との交易について言及する論考が現れたが、そこまででとまってしまった。

戦後期後半　1980 年代～現在

発掘調査報告書において石器は個別の観察一覧を示すことが主流となり、統計的分析の土台が形成されてきた。これらのデータをもとに石器の特定の器種について（例えば磨製石斧や石鏃など）奄美群島・沖縄諸島全体の集成と分析をおこなう論考がなされるようになった。さらに知念勇、新田重清、嵩元政秀らは沖縄先史時代の時期ごとの石器文化の様相を、より詳細に把握した論考を提示した。時期によって石器の種類や量に変化があること、それは社会経済の変化を反映していることなども指摘されるようになった。

石材の種類についてはほとんどの調査報告書に記載されるようになった。沖縄本島北部と隣接小島、および慶良間諸島、久米島などが石材産地であること、そこから採取・交換でもたらされただろうという、以前からの認識を再確認することが発掘調査報告書の定番となったが、石器を主題材にした論考はまだ少数であった。

岸本義彦は野国貝塚Ｂ地点発掘調査報告書において石材と器種の関係、石材産地との関係、石斧の使用痕などについて記述し、特定の器種と石質が相関することを指摘した。その後もいくつかの調査報告書で同様の観察記録を記載した。伊江島ナガラ原東貝塚の調査報告書では石材の自然分布についての検討を地質学の神谷厚昭と協同でおこなった。同じく 2017 年にも石材についての論考を発表し、石材産地の分析を進めている。

2000 年代になると、大堀晧平が製作技術を基本とした新たな理論と綿密な分析手法を用いた研究が登場し、石器の様式・系列による分類、石材と産地との関係（石材獲得、消費のあり方）、時期による石材獲得・消費戦略の特色、九州との異同・交流関係などをさらに詳細に考察した。大堀は沖縄諸島の石器の変遷をⅠ～Ⅴ期の様式に区分して捉えることを提唱している。仲宗根求は双刃石斧、抉り入り石斧、片刃石斧などの型式分析や時期的位置づけと消長を論じている。

一方、戦前からこれまでにかけて概観的に把握されていた「石器の器種が少ないこと」、「主な石材産地は沖縄島北部と隣接小島、慶良間諸島および久米島地域であること」、九州など「遠隔地から搬入された石器・石材が存在すること」などの認識は、その後の発掘調査の増加によって膨大な情報が蓄積された今日においても、同様の結論であるという面もある。

石器を題材にして、ヒトの移動、居住活動、ムラの構成、文化の広がり、受容、変化、交換のあり方とその影響、生業活動、食生活、祭祀などを、さらに詳細に分析・考察していく研究は、ようやくこの 2000 年代に本格化してきた。さらに情報量も増加してきた現在、沖縄諸島先史時代の石器文化について、さまざまな視点から論ずることが可能な段階にきているともいえる。

第３節　石斧のサイズ

石斧は大きさや重さによって対象物や用途が異なる。一般に大型で重量のある石斧は樹木の伐採用、中・小型は加工用と理解されている。表 1 は沖縄諸島における完形石斧の長幅の関係をグラフ化したものである。代表的な遺跡の例のみを表示した。サイズは完形資料のみの数値である。

石斧のサイズには大型、中型、小型があるが、数値上の基準はあいまいである。表 2 では長さのみで区分し、７㎝未満を小型、７㎝～12 ㎝未満を中型、12 ㎝～15 ㎝未満を大型、15 ㎝以上を特大型とする。小数点以下は四捨五入して整数にした。この表における数値の多寡はあまり意味をもたない。完形の石斧のみの集計であるので、むしろよく使用されて破損した石斧の方が数値

にはいっていないので、「生活の様相」を知るには不十分である。

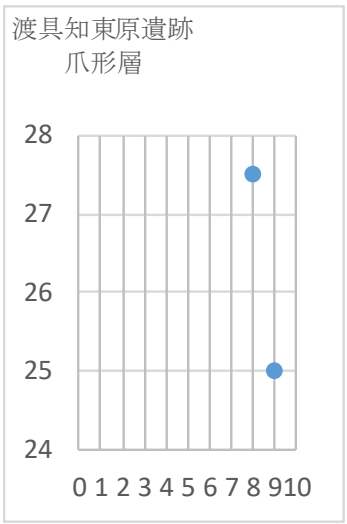
特大型でも長さが 20 cmを超える石斧はきわめて稀で、渡具知東原遺跡下層から２点、野国貝塚上層から２点、高嶺遺跡から１点の計５点である。このうち渡具知東原遺跡の 2 点は打製石斧とされているが、製作途中の可能性もある。縄文早期末および前期に位置づけられる渡具知東原遺跡、野国貝塚Ｂ地点の石斧は全体的にも大型である。縄文晩期に属する高嶺遺跡例は長さが約 27 cmの磨製石斧である。頭部が栫ノ原型石斧のようなふくらみをもつが、丸ノミ形ではない。

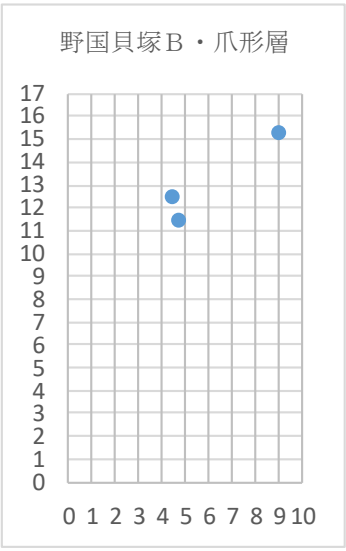
表 2 は完形だけなので石斧の総量を表してはいないが、ある程度の傾向は指摘できる。よく使用された石斧は中型の７～12 cm未満のサイズで圧倒的に多い。小型石斧はかなり少ない。また 15 cm以上の特大型石斧は縄文後期以降の時期はわずかに 10 個である。しかし、伐採作業に使用されたと想定されているので、破損リスクが高いのではないかと考え、大型の可能性のあるものを抜き出してみた。この場合、共伴完形石斧の縦横比を係数にして推測した。結果は大型６個、特大型２個が追加されただけである。したがって表 2 は沖縄諸島における石斧のサイズの傾向を表しているといえる。

15 cm以上の特大型は大木の伐採など、特別の場合のみの使用に限られることを示していて、その量は少ない。12～15 cm未満のサイズも同様に伐採用であったとみられ、出土量は少ない。最も多い７cm～12 cm未満の中型石斧は日常生活において加工用だけでなく万能利器的に多用されたのではないか。破損量も最も多い。石斧は男の専用といわれているが、この中型サイズだと携行するのに適している。現在東南アジア方面で斧に代わって山刀（ボロ）を携行している男を山間部で見かけることがあるが、先史時代も男性専用の利器であったと考えられる。

仲宗根求による集成にみられるように、片刃石斧や定角式石斧はサイズが 12 cm未満の中型石斧である。経験的にも言えることであるが、主に木工などの加工作業には片刃の刃物（ノミなど）が効率的である。片手で持って振ることが容易なサイズが加工作業に適しているといえる。片刃

表１-①　完形石斧の縦横比　単位はｃｍ





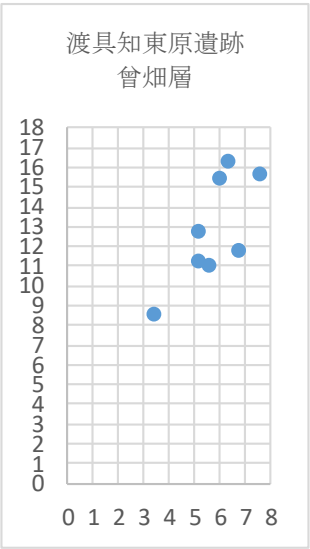
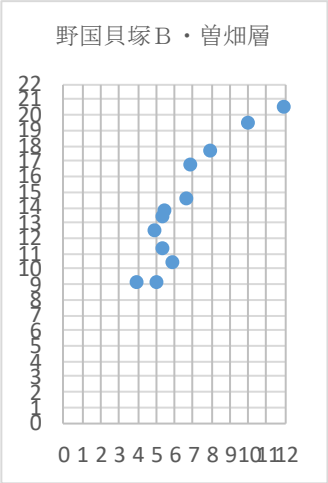
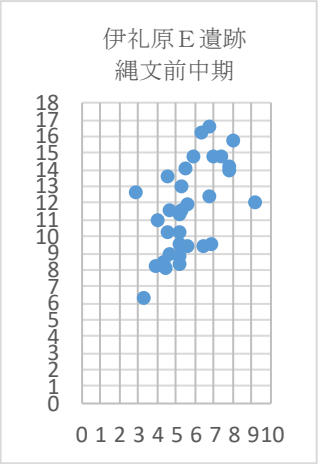
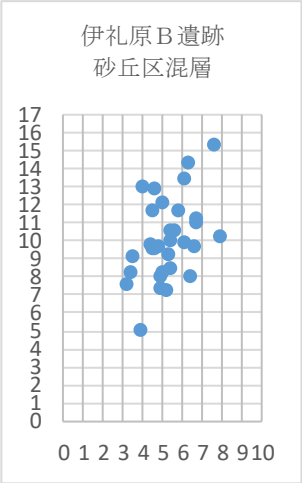
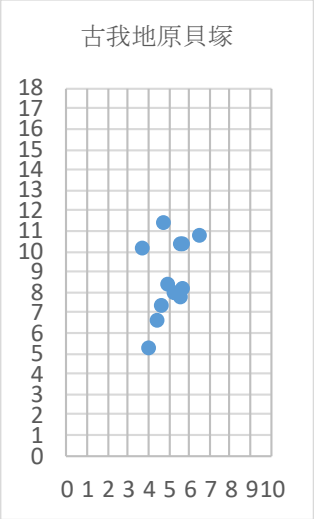


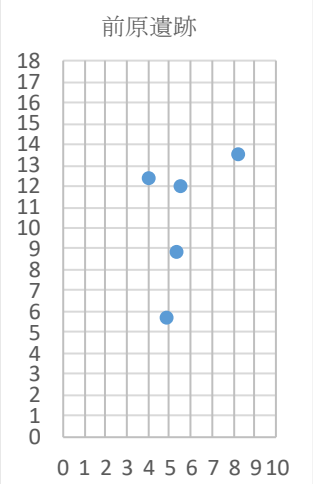
表１-②　完形石斧の縦横比　単位はｃｍ

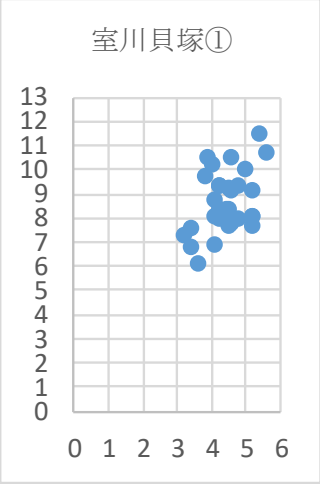


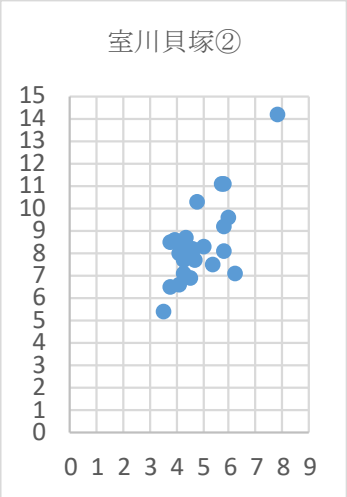


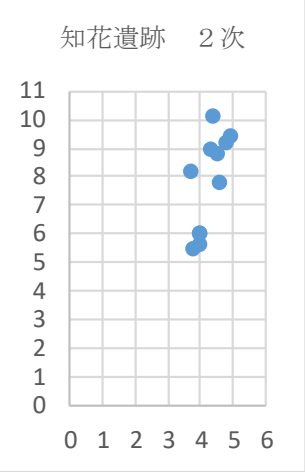












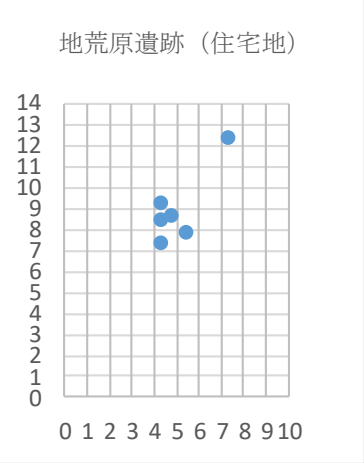
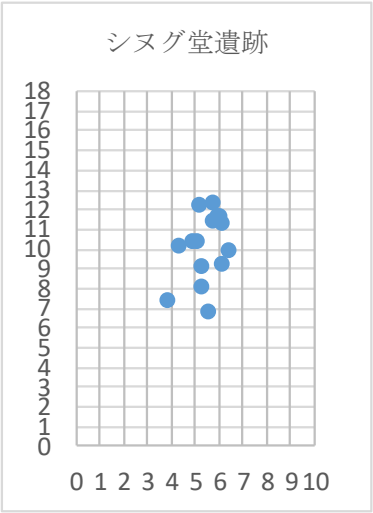
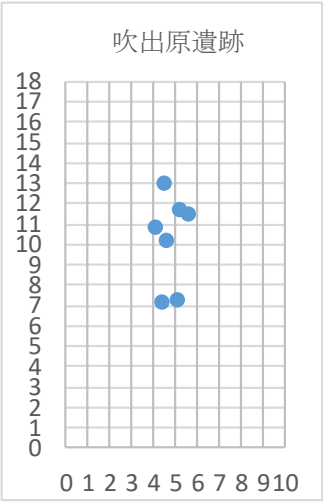
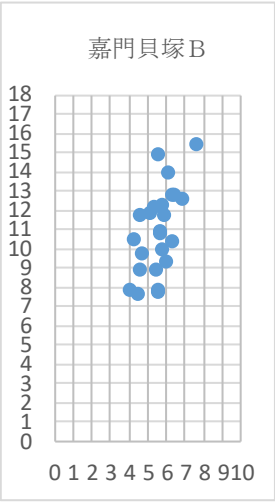
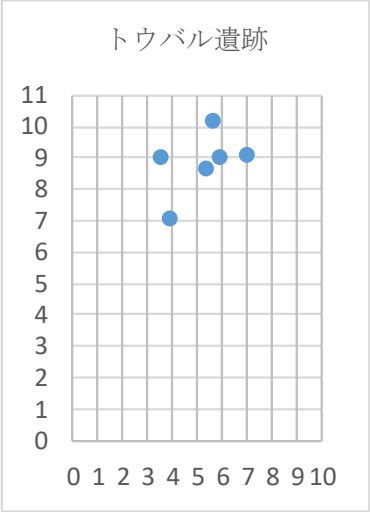


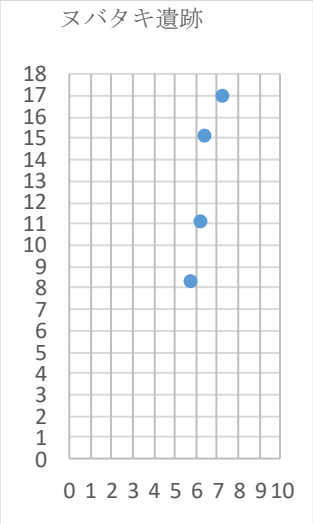
表１-③　完形石斧の縦横比　単位はｃｍ

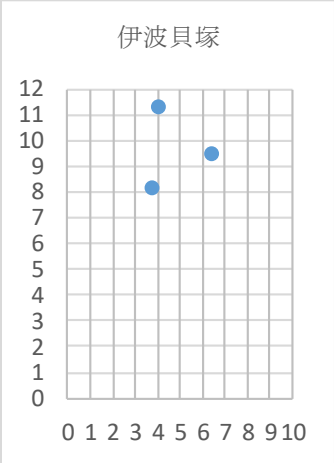












の多くが中型サイズに限られているのは主に加工用であることを示しているといえよう。一方、小さく軽い小型石斧は柄をつけるとほとんど刃部だけが緊縛されない部分で、振り下ろして打撃を与えるような一般的な石斧の使用法にはなじまないように思われる。小型石斧は押し削り作業に適している。しかし石斧の用途については厳密に限定するのではなく、万能の利器的な多様な使用法があったとみるべきであろう。木の伐採や木材の加工のほかに獣肉の解体、獣骨の裁断、食材の処理などの用途が想定できる。また、証明は困難だが対象物によっては柄をつけずに使用した可能性も考慮しておきたい。

なお、高嶺遺跡の約 27 ㎝の石斧は使用するには大きすぎて作業が困難と思われるので、象徴的に用いられる「第二の道具」の可能性がある。

表２　石斧のサイズ区分表

	時　　期	7cm 未満	7～ 12cm未満	12cm～ 15cm未満	15cm以上
渡具知東原遺跡下層	縄文早期末	0	0	0	2
野国貝塚Ｂ地点下層	縄文早期末	0	0	2	3
渡具知東原遺跡上層	縄文前期	0	3	2	3
野国貝塚Ｂ地点上層	縄文前期	0	4	3	5
伊礼原Ｅ遺跡	縄文前中期	1	14	11	6
古我地原貝塚	縄文中後期	1	11	0	0
ウフジカ遺跡	縄文後期	0	1	0	0
浜崎貝塚	縄文後期	0	13	0	0
前原遺跡	縄文後期	1	1	3	0
久里原貝塚	縄文後期	0	6	0	0
伊是名貝塚　２001	縄文後期	1	1	0	0
伊波貝塚	縄文後期	0	3	0	0
知花遺跡２次調査	縄文後期	4	7	0	0
室川貝塚全	縄文後期主	3	66	2	0
荻堂貝塚	縄文後期	0	3	0	0
伊礼原Ｂ砂丘区	縄文後晩期	1	23	7	1
西長浜原遺跡	縄文後晩期	3	17	3	1
屋比久原遺跡	縄文後晩期	1	40	3	1
知花遺跡１次調査	縄文後晩期	2	2	0	0
北原貝塚Ａ地点	縄文後晩期	0	4	1	0
宇佐浜遺跡	縄文晩期	0	5	0	1
渡喜仁浜原遺跡	縄文晩期	0	2	1	0
知場塚原遺跡	縄文晩期	0	6	0	0
吹出原遺跡	縄文晩期	0	4	3	0
苦増原遺跡	縄文晩期	0	1	1	0
知荒原遺跡・県道	縄文晩期	記載なし			
知荒原貝塚・住宅	縄文晩期	0	5	1	0
シヌグ堂遺跡	縄文晩期	0	15	0	0
高嶺遺跡	縄文晩期	1	18	4	1
仲原遺跡	縄文晩期	0	1	1	0
ヌバタキ遺跡	縄文晩期	0	2	0	2
ナガラ原東貝塚	貝塚後期	0	2	0	0
具志堅貝塚	貝塚後期	0	2	1	0
トウバル貝塚	貝塚後期	0	6	0	0
嘉門貝塚Ｂ	貝塚後期	0	14	8	3
嘉門貝塚Ａ	貝塚後期	0	2	1	0
清水貝塚	貝塚後期	0	3	1	0
		19	307	59	29

第４節　石斧の石材

沖縄諸島出土石器の石材組成は第１章で述べたように 20 余種で主な石材は８種である。そのうち輝緑岩と緑色片岩が２大石材である。ほかに変輝緑岩、班レイ岩、輝緑凝灰岩、結晶片岩、角閃石斑岩、角閃岩、緑色千枚岩がある。安山岩は産地である久米島の遺跡では多く出土するが、ほかでは稀である。しかし少量の出土でも遠隔地である久米島産とみられる安山岩が沖縄島とその周辺にもたらされていることは、先史人の活動範囲の広さ、交流圏の広さを示しているといえる。

これらの石材の自然露頭は輝緑岩を除いて沖縄諸島北部地域および慶良間諸島で、片岩・千枚岩系は主に沖縄島北部西海岸に露頭がある。手頃な大きさの円礫は河口域や海岸に多く、また重量物である石材の積み込み、運搬に適した場所でもある。

輝緑岩の自然露頭はまだ確認されていない。数十年前の発掘調査報告書では名護層や慶良間諸島を産地とする記載もあったが、現在では明記されなくなっている（1999 年刊、宜野座村『前原遺跡』の石斧は 21 点中 15 点が輝緑岩、うち 11 点は名護層由来と記述している）。地質分布地図を見ると徳之島の尾母層に輝緑岩が含まれているような記述があるが、あいまいである（木崎甲子郎 1985、p65）。しかも、徳之島の発掘調査報告書において輝緑岩製石器はほとんど確認できない。例えば徳之島町城畠遺跡は石器 251 点中粘板岩、石英斑岩がほとんどで、輝緑岩は１点もない。また同島天城町の塔原遺跡では石斧 26 個中砂岩、蛇紋岩、粘板岩が各８個、頁岩が２個で輝緑岩は１個もない。大島笠利地区の下山田Ⅱ遺跡から輝緑岩製石斧５点、敲石９点が出土しているが、きわめて例外的である。奄美群島において輝緑岩は多用されていない。このことからすると、沖縄諸島の出土の輝緑岩も供給地を奄美群島より北に求めるのは、飛躍した展開になる。北からであれば、奄美群島でもある程度の出土があるべきである。２大石材のひとつを占めるほどの大量出土は、遠隔地との取引関係ではなく沖縄島および近隣地域に産地があることが合理性をもつので、いずれ露頭が発見されることを予測したい。

一方、地質分布図に表示がなくても、地点的に露頭が存在する場合もある。例えば沖縄市八重島貝塚の東地点に嘉陽層の円礫砂岩を含む地層露頭がある。安山岩が名護層に貫入した露頭が恩納村安冨祖の「ホテルみゆき」海岸、伊武部ビーチ南海岸、瀬良垣海岸に存在する。考古学の立場からの「露頭集」とでもいうべき石材露頭分布情報の集成が求められる。

地域、時期による石器石材の獲得と消費の詳細な動向は、すでに大堀晧平の緻密な研究成果が蓄積されているので、本稿では別の面についてふれたい。さきに挙げた石斧の２大石材は、遺跡ごとの使用状況をみると両石材が同一集団（遺跡）に混在することは少なく、また混在していてもほとんどの遺跡において輝緑岩か緑色片岩のいずれかに偏っているのである。これらの遺跡の周辺には両石材の自然分布はないので、すべての遺跡（集団）は遠距離から獲得する必要がある。緑色片岩の場合、最も近い遺跡は西長浜原遺跡で約 15km 東に産地がある。これらすべてが直接間接に石材または既成の石斧を入手するルートをもっていたわけであるが、輝緑岩と緑色片岩はそれぞれ別のルートによって入手していたことが考えられる。しかも両石材のいずれかに偏って選択しているのである。これは集団によって石材の取引相手（集団）がある程度固定化されていて、それが比較的長期間継続していたのではないか。今後両石材が同一産地で発見されたとしても、消費側の選択的受容に変わりはない。

表３　輝緑岩と緑色片岩の使用傾向

	久里原貝塚	ナガラ原西貝塚	ナガラ原東貝塚	具志原貝塚	阿良貝塚	知場塚原遺跡	西長浜原遺跡	屋比久原遺跡	前原遺跡	シヌグ堂遺跡	高嶺遺跡	平敷屋トウバル	吹出原遺跡	知花遺跡２次	古我地原貝塚	地荒原遺跡（道）	地荒原遺跡（住）	仲宗根貝塚	馬上原遺跡	室川貝塚	木綿原遺跡	小堀原遺跡	嘉門貝塚Ｂ	牧港貝塚Ｉ地区	ヌバタキ遺跡	嘉門貝塚Ａ	ガジャンビラ	真栄里遺跡
輝　緑　岩	1	4	0	0	0	0	1	5	15	20	20	10	17	36	0	0	0	0	3	24	19	5	30	6	31	48	0	13
緑色片岩	7	0	4	6	2	13	76	71	0	0	2	0	6	0	34	42	32	15	41	2	6	0	0	0	0	5	6	0

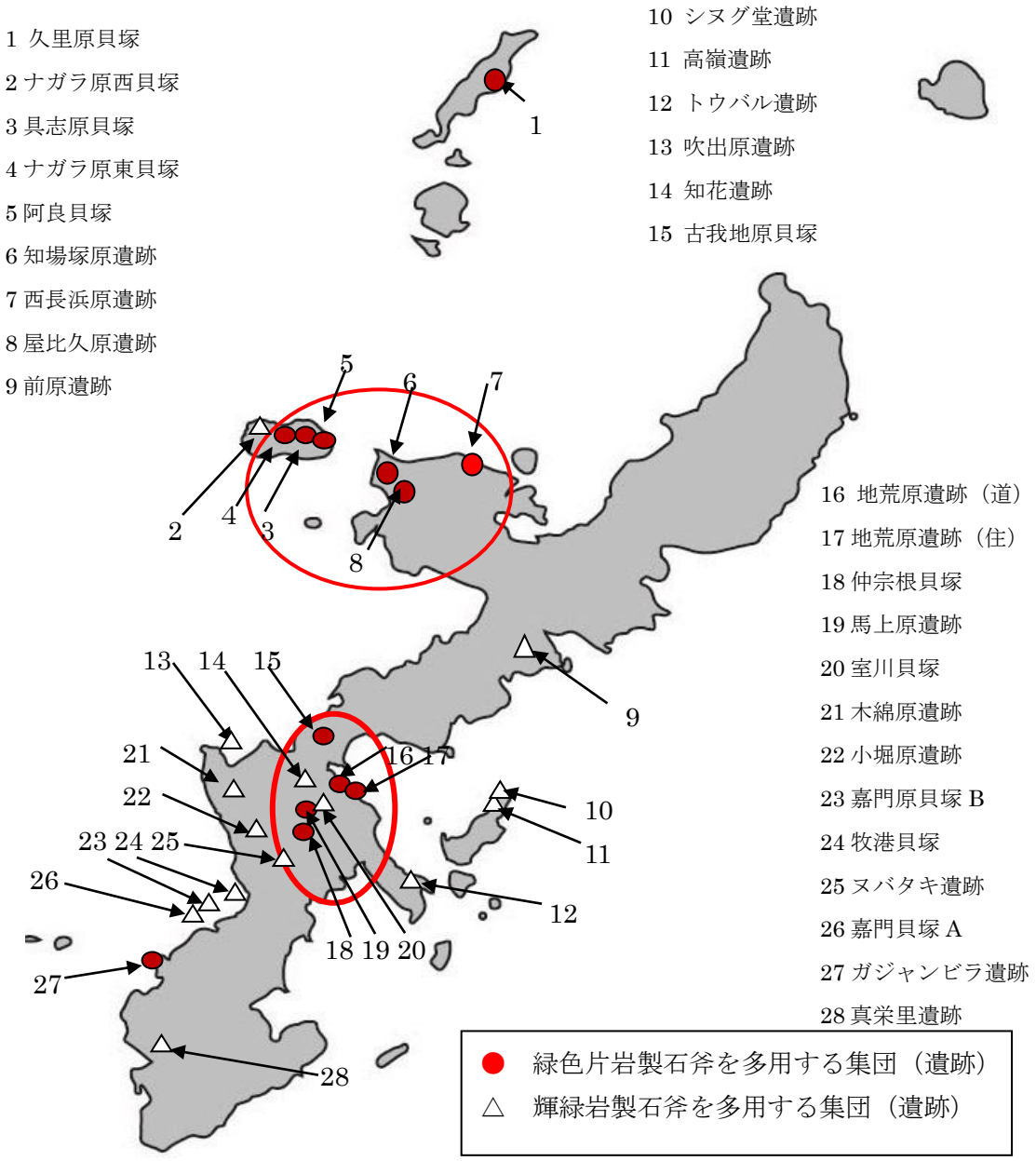


図１　緑色片岩製石斧多用遺跡と輝緑岩製石斧多用遺跡

図１および表３に輝緑岩と緑色片岩をそれぞれ多用する遺跡を示したが、本部半島および伊江島・伊平屋地域と中部内陸部に緑色片岩石斧多用圏が存在していたようにみえる。また、与勝半島と隣接小島地域や中部西海岸地域には輝緑岩石斧多用圏が存在していたようにみえる。しかし、これはすべての遺跡を同時に比較したものである。ある時期には緑色片岩が多用され、別の時期には輝緑岩が流通した結果によるもので、単に石材選択傾向の時期的相違を表していることもあり得る。これを検証するために表４を検討したい。

表４　輝緑岩製石斧多用遺跡と緑色片岩製石斧多用遺跡の時期幅

	遺　跡	縄文前期		縄文中期		縄文後期				縄文晩期		貝塚時代後期			
輝緑岩製石斧多用遺跡	ナガラ原西貝塚											■	■		
	前原遺跡					■	■	■	■	■	■				
	シヌグ堂遺跡									■	■				
	高嶺遺跡								■	■	■				
	平敷屋トウバル遺跡											■	■	■	■
	吹出原遺跡									■					
	知花遺跡（２次）									■	■				
	室川貝塚		■		■	■	■	■	■	■					
	木綿原遺跡					■	■	■	■	■	■	■			
	小堀原遺跡											■	■		
	嘉門貝塚B					■	■	■	■			■	■	■	
	牧港貝塚Ⅰ地区											■	■	■	■
	ヌバタキ遺跡										■				
	嘉門貝塚A					■	■	■	■			■	■	■	
緑色片岩製石斧多用遺跡	久里原貝塚					■	■	■	■	■					
	ナガラ原東貝塚													■	■
	具志原貝塚											■	■	■	
	阿良貝塚											■	■		
	知場塚原遺跡								■	■					
	西長浜原遺跡					■	■	■	■	■					
	屋比久原遺跡					■	■	■	■	■					
	古我地原貝塚				■	■	■	■	■						
	地荒原遺跡（県道）									■	■				
	地荒原貝塚（住）									■	■				
	仲宗根貝塚					■	■	■							
	馬上原遺跡					■	■	■		■	■				
	ガジャンビラ丘陵								■	■	■				

この表でみると、輝緑岩と緑色片岩は縄文時代後期～晩期にかけてはいずれも並行して使用されていることがわかる。したがって、この時期に資源の枯渇あるいは供給ルートの消滅等でいずれかの石材利用に傾斜していくという現象がおこっているわけではない。両石材のいずれかを供給する別々の集団が同時期に存在していたといえる。またかれらと融通をし合う集団がある程度固定化された関係が存在していたのではないか。輝緑岩と緑色片岩を主とする石材および既製石斧の２つの供給ルートが、需要集団と親縁性をもった恒常的通交関係を結んでいたと考えられる。

ところが貝塚時代後期については、緑色片岩製石斧を多用する遺跡は伊江島においてのみ確認できる。沖縄島中部地域では緑色片岩はあまり利用されなくなっている。貝塚時代後期特に後半は石斧の利用が減少していくが、そのことも関連して緑色片岩供給ルートが消滅したのであろうか。いずれにしても石材資源は枯渇したのではなく、その集団の嗜好性や伝統によって選択されていたといえる。

第５節　集団と石斧の石材獲得ルート

ここで興味深いのが沖縄市の室川貝塚、馬上原遺跡、仲宗根貝塚の関係である。表３および図１にみるように、室川貝塚は輝緑岩が、馬上原遺跡と仲宗根貝塚は緑色片岩が卓越している。しかも馬上原遺跡は発掘調査報告書の副題に「室川貝塚崖上地区」と添えていて、室川貝塚と一体であるとする解釈に立っている。しかし緑色片岩使用という集団の「方針」からすると仲宗根貝塚の方に親縁性がある。緑色片岩の入手ルートを共有する集団なのである。室川貝塚と馬上原遺跡は別々の集団であったとするのが妥当であろう。

仲宗根貝塚人が移動して、または拡張して馬上原遺跡を残したのか、出自を同じくする２つの集団が広場を挟んで同時に並行して存在していたか、のどちらかではないか。仲宗根貝塚の下層から伊波式土器が単独で出土するので、この丘に居住活動を開始したのは馬上原遺跡より仲宗根貝塚人が古い。仲宗根貝塚も室川貝塚も縄文後期を主体としており、ある時期並存していた可能性もある。やや強引に考察すると、室川集団と仲宗根・馬上原集団は血縁関係の深くない集団で、それが地域としての村落共同体を構成していたことも考えられる。(ただし室川貝塚は縄文前期にも存在していた)。

また、同じ石灰岩台地縁辺の北方に存在する知花遺跡は圧倒的に輝緑岩で占められていて、室川貝塚との共通性が強い。さらにうるま市の離島宮城島ではシヌグ堂遺跡、高嶺遺跡双方とも輝緑岩が圧倒的に卓越する。またうるま市本島地域の古我地原貝塚と地荒原遺跡では反対に緑色片岩が占め、輝緑岩はゼロである。本部半島の西長浜原遺跡、知場塚原遺跡、屋比久原遺跡および隣接小島の伊江島阿良貝塚、具志原貝塚、ナガラ原東貝塚にも緑色片岩への偏在がみられる。この地域にも緑色片岩石材の流通ルートが存在していたことを示している。それは石材・石器だけでなく、生活物資の融通や通婚関係などの日常生活圏を反映している可能性もある。

これらの偏向した石材選択は親縁関係にある複数の集団（ムラ）が共通のルートから石材や石斧を調達する慣行・システムが存在し、特定の石材・石斧だけを融通する集団のリレー型ネットワークが形成されていたことを示しているのではないか。いずれかの石材の選択は慣れからくる製作上、使用上の馴染みやすさも動機となり、やがて当該集団の文化的選択にまで発展していったのであろう。そしてそれは当該集団の特性を示すアイデンティティーともいえる強い所属意識の発露として、同一石材の文化的選択が継続されていったものと考える。

石材需要を中心とする沖縄諸島先史時代の通交活動が円滑に展開されるためには、沖縄諸島地域にそれを保証するシステムが存在していなければならない。石斧に適した石材は沖縄島北部と隣接小島および慶良間諸島などである。伊江島浜崎貝塚の安山岩製石斧群、本部町瀬底島のアンチの上遺跡出土の安山岩製品は久米島産とみられているが、それは久米島先史人が携行してきたものと考えられる。航海者の携行であれ需要による取引であれ、久米島の安山岩が沖縄島にもたらされるような広範囲の通交関係が存在していたということである。

ところで、自然石材が近隣地域に存在しない集団、例えば沖縄島中南部のすべての先史集団が、

沖縄島北部や慶良間諸島の石材産地まで赴いて石材を採取していたとするのは非現実的である。自然石材産地の近隣集落などが介在して、石材や既成石斧を融通する交易システムが存在していたとするのが合理的である。一方、食料獲得を中心とする生業から離れて「専業的」に各地に石材や既製石斧を運んで交易をする集団が、先史社会に存在していたとは考え難い。社会経済段階として、食料獲得の生業から自立した社会的分業によって生産した石器を取引する技能集団は、まだこの時代には形成されていないとみるべきである。

例えば西長浜原遺跡は緑色片岩製石斧の出土量が最も多く、石材産地に最も近いことから、この集団が緑色片岩の石材あるいは石斧を他の集団に融通（交易）する役割を担っていた可能性もある。ある種の「分業」ともいえるが、仮にそうだとしても発掘調査の成果は他の遺跡と同様の食料獲得の生業を営んでいたことを示している。石材産地に近いという自然的条件にもとづく一時的、偶発的分業であって、生業から自立して「交易品」を生産する分業ではない。ある集団が生業活動の一環・延長として余分に石材を採取し、あるいは余分に石斧を造り、それを他の集団に融通して何らかの見返りを受け取るという相互の不足を交換によって補完しあう関係が、この時代の交易の基本的な構造であったと考える。

このような取引関係においては、大堀晧平が指摘するように（大濠晧平 2014、p275)相手方との平和的で良好な関係の長期的維持が不可欠である。それは沖縄島中南部の先史人が直接北部に石材採取に赴いたとした場合も不可欠である。このような物資の融通をめぐる通交・交流は沖縄諸

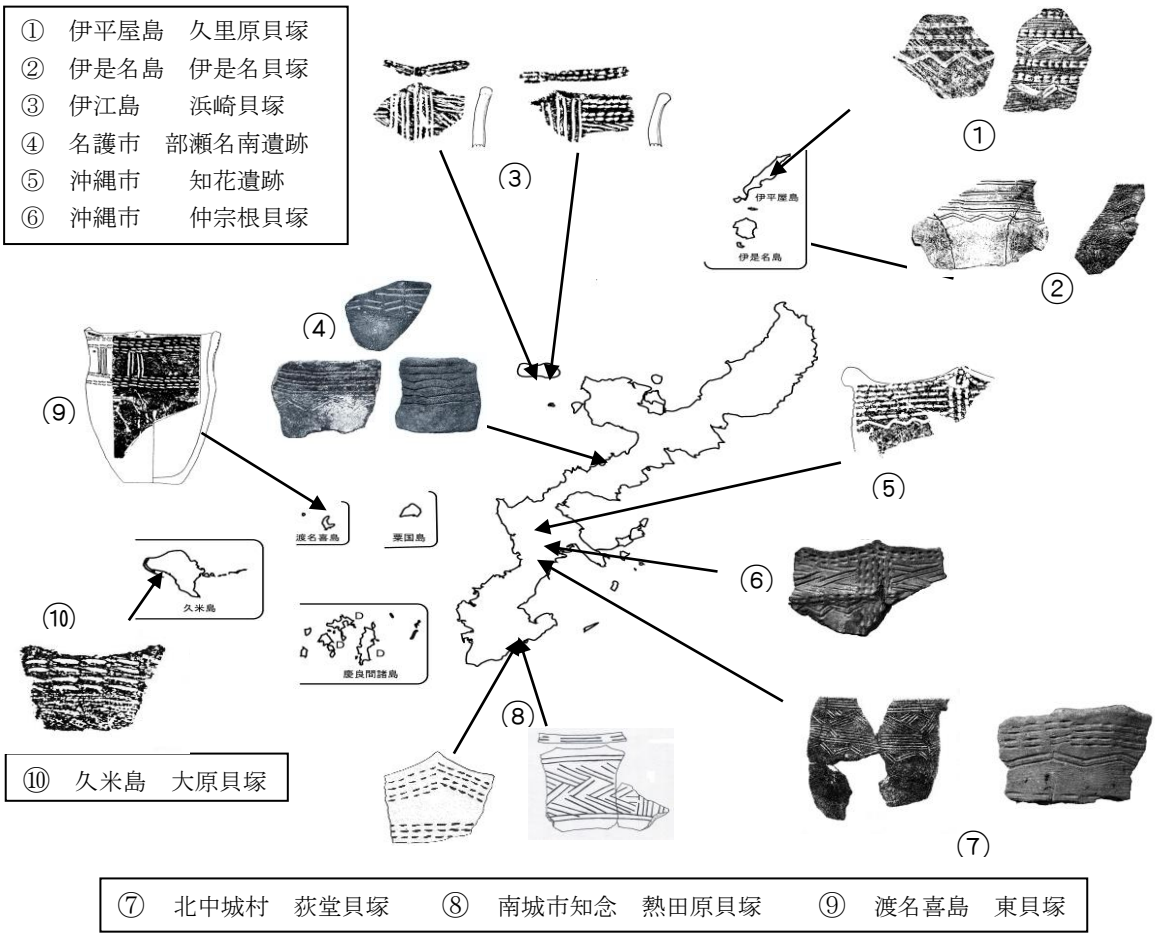


図２　縄文時代後期の伊波・荻堂式土器分布

島で活発に展開されていて、そのネットワークに乗って情報が拡散し、沖縄諸島に広範囲の共通性をもつ先史時代文化が形成されていったのであろう。石材・石器の取引・流通はその媒介としての役割も担っていたといえる。

例えば伊波・荻堂式土器や肥厚口縁土器、あるいはくびれ平底土器の形状と意匠文が沖縄諸島のほぼ全域で、地域ごとの見分けがつかないほど（胎土分析ではなく、見かけ上）酷似しているのは、良好な関係のもとに恒常的通交圏として共通情報・共通の物質文化が広く浸透していたことを示す証左であろう（図５参照）。

第６節　住居遺構のなかの石斧

住居遺構のなかから石斧が出土している例がある。床着の場合はその遺構の活動期または廃棄直後とみなし、その石斧はその遺跡の活動期に属するものとして扱うことができる。竪穴遺構の場合廃棄後には埋もれていくが、埋土のなかの遺物は遺構外からの混入の可能性もあるので、厳密には遺構出土と断定できないこともある。しかし、概ねその遺構に属する蓋然性は高いだろう。遺構内から石斧が出土した遺跡の例をいくつか検討してみる。

①知場塚原遺跡（沖縄島北部本部半島）

検出された５基の住居遺構（竪穴式）のすべてから石斧が出土した。遺構以外では表面採集が１個である。この一帯は畑耕作によって上層が攪乱を受けているので、表面採集の石斧も元は遺

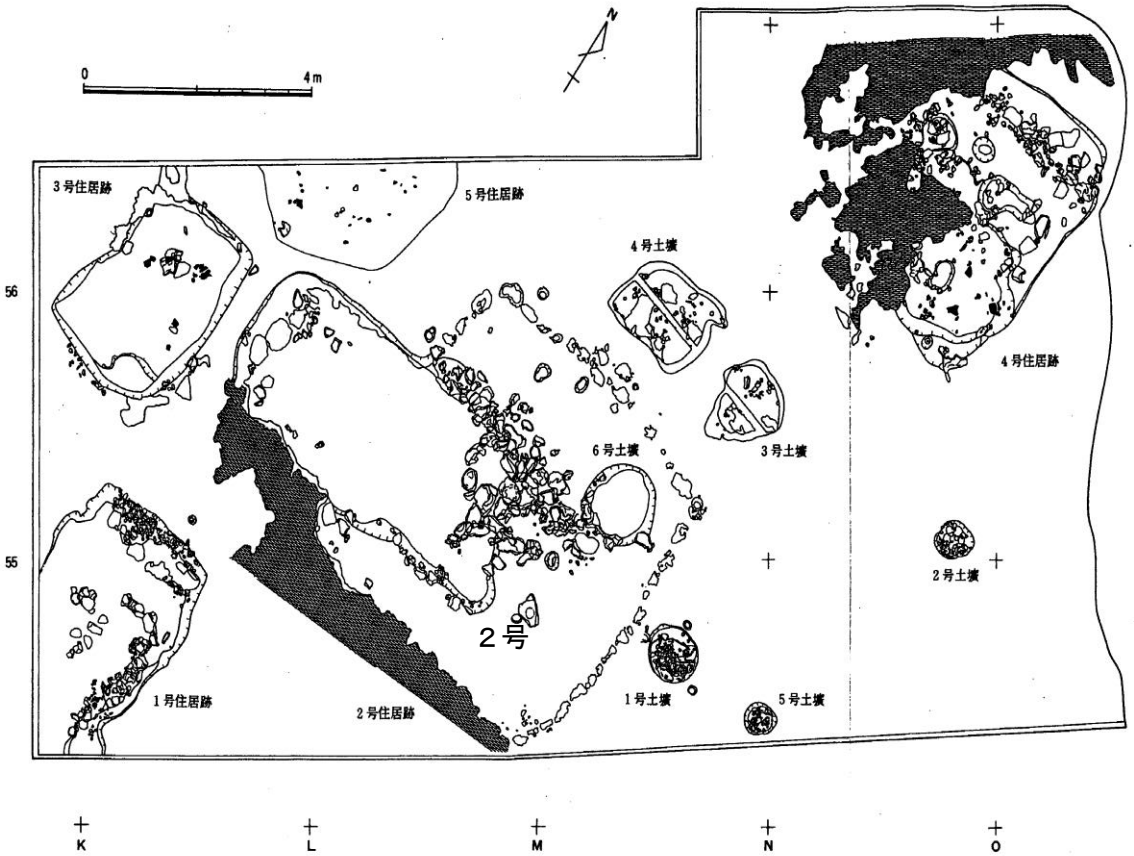


図３　知場塚原遺跡

構内にあったものと考えられる。表５にみるように、石斧の出土量は１つの遺構が１個、２つの遺構が２個、１つの遺構が３個、そして最も規模の大きい２号住居遺構から９個である。明らかに石斧は２号遺構に偏在している。磨石・敲石類、砥石も他の遺構より多い。

２号住居遺構は他の４遺構と同様に隅丸方形のプランであるが、西側にさらに方形の張り出し部をもっていて、この遺構群のなかでも特別の形態をもっている。但し、張り出しではなく別の住居遺構の可能性もある。また、その東側には包含層はなく、西側に包含層がのびている。これからすると２号遺構とその南北に隣接する２つの遺構を結ぶラインの東側は広場になっていた可能性がある。２号遺構は広場に面した特別に大きな遺構であり、集落の中で要に位置しているものとみられる。最も多い９個の石斧が得られていることも、この２号竪穴住居遺構が一般的な単婚家族用住居ではなく、公共的空間であった可能性が高い。

表５　知場塚原遺跡住居跡出土の石器組成

知場塚原遺跡	石斧	石斧破片	石鏃	扁平石刃	剝片石器	敲石磨石凹石	石皿台石	砥石	その他石器	土器破片	骨器	貝器
第１号竪穴住居跡	2					2	2		2			
第２号竪穴住居跡	9					16	1	5			1	
第３号竪穴住居跡	2					6	1	2	1		4	
第４号竪穴住居跡	3					5	1	1			1	
第５号竪穴住居跡	1					1		1				
３号土壙												1
遺構外	1					4			1			1

②ヌバタキ遺跡（沖縄島中部内陸部）

石斧が大型家屋遺構に偏在している点が知場塚原遺跡に類似している。住居遺構 24 基のうち 12 基から石斧が出土している（表 6 はそのうち 20 基の住居遺構を扱う）。そのうち石斧 1 個が 6 基、２個が２基、３個が２基である。あとの２基は遺構の規模が他の住居遺構の４～５倍ほどの大型住居で、13 号遺構から６個、14 号遺構から 12 個の石斧が出土している。あとひとつ 20 号遺構も大型住居であるが、石斧は１個だけの出土である。13 号遺構は約半分が損壊しているので、14 号遺構の例を統計的に推定すれば 12 個前後は出土していた可能性はある。

20 号遺構に石斧が１個しか残されていないのは、住居を廃棄して 13 号または 14 号を新築したからではないか。石斧は貴重な道具なので、当然携帯しているから意識的に廃棄した場合の遺構にはほとんど残らないのではないか。14 号遺構には石斧のほかに石皿が２個、敲石・磨石・凹石類が 13 個、扁平石刃が 12 個と、他の遺構よりかなり多い。集落全員が関与する行事などに伴う共同作業が行われた空間だったのではないか。扁平石刃は用具の加工に、石皿・磨石敲石類は食材の加工作業に、ムラ全体の暮らしに関わる機能を有していたものと考えられる。

また、14 号竪穴住居跡の土壙から推測値長さ約 90 ㎝の石棒状の製品が出土しているが、大きさや形状から第二の道具すなわち事物を象徴化したものと考えられる。このような石製品が 14 号竪穴住居跡に据えられているのは、この遺構が一般的な住居とは異なる機能を有していたことを示しているのではないか。石斧の多量出土とあわせてその可能性は高い。この「石棒形製品」

について伊藤慎二は縄文の石棒との直接的な関連は見いだせないとしている（伊藤慎二 2012）。

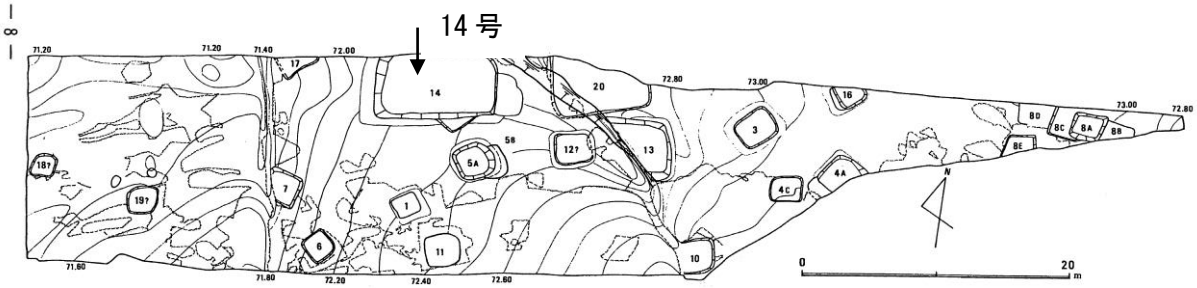


図５．遺構配置図：数字は竪穴住居址の指示番号

図４　ヌバタキ遺跡

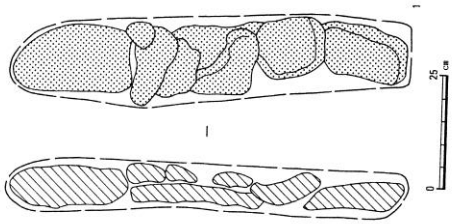


図５　石棒状の石製品

表６　ヌバタキ遺跡住居跡出土の石器組成

ヌバタキ遺跡	石斧	石斧破片	石鏃	扁平石刃	剥片石器	敲石磨石凹石	石皿台石	砥石	その他石器	骨器	貝器
１号竪穴住居跡	2			2		6			1	0	0
３号竪穴住居跡	1									0	0
４A号竪穴住居跡	3					1				0	0
４C号竪穴住居跡	1					2				0	0
５A号竪穴住居跡	1					2				0	0
５B号竪穴住居跡						2				0	0
６号竪穴住居跡						1				0	0
７号竪穴住居跡				1		1			1	0	0
８A号竪穴住居跡				1	1	3	2			0	0
８B号竪穴住居跡										0	0
８C号竪穴住居跡						1			1	0	0
８D号竪穴住居跡										0	0
８E号竪穴住居跡										0	0
１０号竪穴住居跡						3				0	0
１１号竪穴住居跡	3					1	1			0	0
１２号竪穴住居跡										0	0
１３号竪穴住居跡	6			2		4				0	0
１４号竪穴住居跡	12		1	12	2	13	2		6	0	0
１４B号竪穴住居跡				1						0	0
16号竪穴住居跡	1			1		1	1			0	0
17号竪穴住居跡						1				0	0
18号竪穴住居跡										0	0
19号竪穴住居跡										0	0
20号竪穴住居跡	1			1		1	1			0	0
表土	2									0	0

③屋比久原遺跡（沖縄島北部本部半島）

表７にみるように、石斧が 13 基の竪穴住居遺構のうち８基から出土し、そのうち３基から各１点の石斧、２期から２点、１基から４点の出土がある。そして大型住居遺構である２号住居遺構から９点、10 号から 7 点が得られている。但し、図８をみると２号遺構は確かに大型住居であるが、報告書の本文の各遺構の説明では場所が異なっていて、しかも特に大型でもない。図８の通りだとすれば大型住居遺構に石斧が集中していることが確認される。そして２号住居遺構と 10 号住居遺構とは離れていて、それぞれ普通規模の住居遺構が取り巻いている。

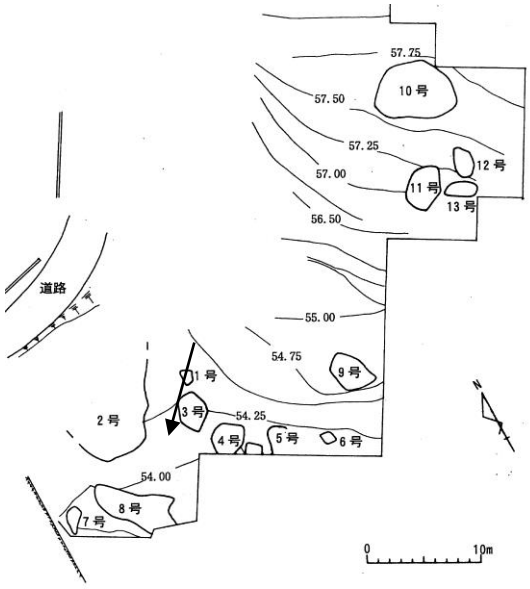


図６　屋比久原遺跡

発掘範囲は広くないので集落の全体的形態は把握できないが、同一空間に２つのグループが共同で集落を形成していた可能性もある。石斧出土量が多く、規模も大きな２号と７号の大型住居遺構は、それぞれのグループの拠点家屋として機能していたのではないか。

表７　屋比久原遺跡住居跡出土の石器組成

屋比久原遺跡	石斧	石斧破片	石鏃	扁平石刃	剝片石器	敲石磨石凹石	石皿台石	砥石	その他石器	骨器	貝器
第１号礫敷遺構											
第２号礫敷遺構	8						1				
第３号礫敷遺構											
第４号礫敷遺構											
第５号礫敷遺構											
第６号礫敷遺構											
第７号礫敷遺構											
第８号礫敷遺構											
第９号礫敷遺構						1					
第１０号礫敷遺構	7					5					
第１１号礫敷遺構	3										
第１２号礫敷遺構											
第１３号礫敷遺構											
第１号竪穴住居跡	1										
第２号竪穴住居跡	10					3	1				
第３号竪穴住居跡	2					4			2		
第４号竪穴住居跡	1										
第５号竪穴住居跡	1										
第６号竪穴住居跡											
第７号竪穴住居跡											
第８号竪穴住居跡	5										
第９号竪穴住居跡											
第１０号竪穴住居跡	4					1					
第１１号竪穴住居跡						1					
第１２号竪穴住居跡	2										
第１３号竪穴住居跡											

なお、2号礫敷遺構から石斧が８点、しかも 13 個所の礫敷遺構のなかで唯一の石器出土を示し、なおかつ規模が最も大きい。これが住居遺構かどうかの判断は難しいが、これを住居跡とした場合、平地型で、礫敷は床面の整備層と見做すことができる。そして２号礫敷遺構にのみ石斧が集中しているのは、ここが集落の要となる公共的な施設であった可能性がある。また、２号礫敷遺構は図８の２号竪穴住居跡の上層一帯に位置するので、時期を超えて同一場所の施設が集落の要としての機能をもっていたと捉えることもできる。

④高嶺遺跡（宮城島）

表 8 にみるように、20 基の竪穴住居遺構のうち７基から計 19 個の石斧が出土した。ほかに包含層や攪乱層から４個で合計 23 個と少ない出土数である。７基のうち１基から１個の石斧、４基から各２個、１基から３個、さらに包含層から６個が出土している。そして 10 号住居遺構から８個の石斧が集中して得られている。

しかし 10 号住居遺構は他と比べて大型ではなく、むしろ 15・16 号住居遺構が１辺４ｍを超える大型住居遺構である。しかしいずれの遺構からも石斧の出土はない。この遺跡の竪穴住居遺構群は南北に帯状に展開し、さらに南側で東西に展開する。そして西側に幅６～８ｍの幅をもった広場を確保し、その西側に南北に展開する土留め石積み遺構が築造されている。

この遺跡は住居遺構の切り合い関係からみると６つの重複すなわち建て替えがあったことが判明しているが、一貫して西側広場には築造しないというムラのルールが貫徹されている。石斧の多寡だけで住居遺構を公共的な集会場とするわけにはいかないが、10 号住居遺構はなんらかの公共的な機能をもつ家屋であると考える。

表８　高嶺遺跡住居跡出土の石器組成

高嶺遺跡	石斧	石斧破片	石鏃	扁平石刃	剝片石器	敲石磨石凹石	石皿台石	砥石	その他石器	土器破片	骨器	貝器
第１号礫床		2				2					1	
第１号竪穴住居跡		4				1					1	
第２号竪穴住居跡		2										
第３号竪穴住居跡											1	
第４号竪穴住居跡		1	1			3					1	
第５号竪穴住居跡	2	1	1			1					3	1
第６号竪穴住居跡		2				1					1	3
第７号竪穴住居跡		2				3					1	
第８号竪穴住居跡	4	6				4					2	2
第９号竪穴住居跡	2	2		1		1					2	4
第１０号竪穴住居跡	8	4									9	28
第１１号竪穴住居跡	1		2		3	1						1
第１２号竪穴住居跡	2	1				4					2	6
第１３号竪穴住居跡								1			1	2
第１４号竪穴住居跡		2									3	2
第１５号竪穴住居跡		3										2
第１６号竪穴住居跡		1									1	
第１７号竪穴住居跡	3	3	1			1						
遺構外	4	36	1			12	2	1				

⑤宮城島シヌグ堂遺跡（宮城島）

表 9 に 61 の竪穴住居および礫床住居遺構のうち 42 基の石器組成を示す。石斧を伴う遺構は 32 基である。このうち 30 基の竪穴住居跡と 13 基の礫床遺構を表 14 に示す。遺構からの石斧の出土

量はそれぞれ１～２個で、まれに３個である。

そのなかで 18 号遺構は全掘していないものの１辺５×６ｍの遺跡最大規模の竪穴住居遺構であり、６個の石斧が出土している。また土器片の量も圧倒的にこの遺構が多い。面積に比例して破片が多くなるのは当然ともいえるが、屋内で比較的多数の土器が存在していたことは確かである。

広範囲の発掘ではないので確定的なことは言えないが、５段のテラスのうちほとんどは下位の第４テラスに住居が南北方向の帯状に集落が形成され、少し離れて２基の住居が第１・２テラスにあるだけで東側は広場となっている。その帯状住居跡群の南端に 18 号が広場に面して位置している。18 号住居跡は最大規模であること、石斧の出土量が最大であることを踏まえると、集落のなかで要となるような機能をもっていた可能性がある。

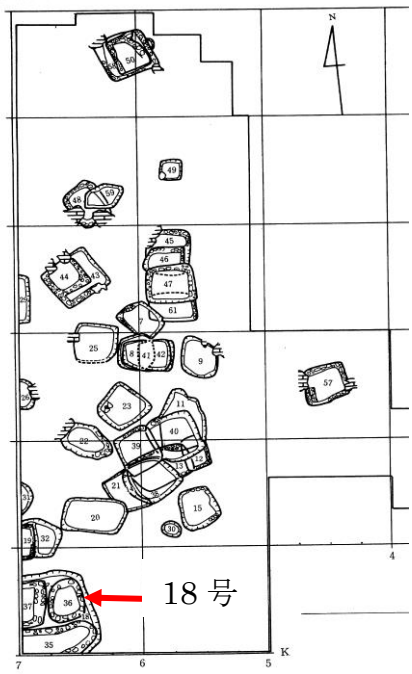


図７　シヌグ堂遺跡

表９-①　シヌグ堂遺跡住居跡出土の石器組成

シヌグ堂遺跡	石斧	石斧破片	石鏃	扁平石刃	剝片石器	敲石磨石凹石	石皿台石	砥石	その他石器	土器破片	骨器	貝器
１号礫床		2				1				34		
３号礫床	3						1			33	1	2
６号礫床						1				83		3
７号竪穴	1									74		
８号竪穴	2					2	1			79		1
９号竪穴	2	1								13	2	5
10号礫床	2									40	2	
11号竪穴		2								142		
12号竪穴	2					1				262	1	
14号竪穴						1				75	1	
15号竪穴		1								37	1	
同竪穴　床面										5		
17号礫床	1									4		
18号竪穴	6	3				3				1385	2	
20号竪穴		1								113		
21号竪穴						2				156	1	
22号竪穴	2									171	2	1
23号竪穴	2									464		2
同竪穴　床面	1									29		
24号礫床	4					1				103		
27号礫床	2									122	2	
28号礫床	1									40	1	4
32号竪穴	2	1								9	1	1
34号礫床	2	2				1				201	3	6
35号竪穴	3									249		

表９-②　シヌグ堂遺跡住居跡出土の石器組成

シヌグ堂遺跡	石斧	石斧破片	石鏃	扁平石刃	剝片石器	敲石磨石凹石	石皿台石	砥石	その他石器	土器破片	骨器	貝器
38号竪穴		1								33		
40号竪穴	1	1								301	1	5
同竪穴床面	2									23		
41号竪穴									1	4		
42号竪穴	1									28	1	
43号竪穴	1									13		1
44号竪穴	1									71		1
45号竪穴	2									42		
47号竪穴	1									128	4	1
48号竪穴						2				31		1
49号竪穴	1					1				11	1	
50号竪穴						2				115	3	6
51号礫床	3	1								43	2	2
52号礫床	1					1				35	2	4
55号礫床	1					1				170	7	3
56号礫床	3	2								351		3
57号竪穴	1	1				1				36	2	3
58号竪穴										17		1
59号竪穴										12		
60号竪穴						2				142	8	14
Ｐ４グリッド	1					1				49		1
P10グリッド	1	2				1				1294		
表土	6		1			6	7				2	

石器出土なしの住居跡												
	２号	４号	５号	13号	10号	19号	25号	26号	29号	30号	31号	33号
	36号	37号	39号	46号	53号	54号	58号	59号	61号			

⑥吹出原遺跡（沖縄島中部西側）

表 10 に示すように、石斧は 30 個出土しているが、10 基の竪穴住居遺構のうち石斧を出土した

表 10　吹出原遺跡住居跡出土の石器組成

吹出原遺跡	石斧	石斧破片	石鏃	扁平石刃	剝片石器	敲石磨石凹石	石皿台石	砥石	その他石器	土器破片	骨器	貝器
第１号竪穴住居跡												
第６号竪穴住居跡						3	2	2				
第７号A集石遺構						2		1				
第７号B竪穴遺構												
第８号竪穴住居跡						6	2	1				
第10号竪穴住居跡								1				
第11号竪穴住居跡						1						
第13号A竪穴住居跡	4					3	2	1				
第13号B竪穴住居跡												
第１４号竪穴住居跡												
第１５号竪穴住居跡												
第１６号竪穴住居跡												
第１７号竪穴住居跡												
第１８号竪穴住居跡												
第２号集石遺構							2					

のは第 13 号 A 竪穴住居跡からの４個のみである。しかし 13 号 A 遺構は平均的な規模の住居跡である。一方で 4.6m×３mのこの遺跡最大規模の８号住居遺構には石斧は伴っていない。上記で述べた大規模住居遺構には最多の石斧を伴うという原理は、この遺跡では該当しない。しかし 13 号 A 住居跡出土の石斧も４個と少ない。おそらく、この集団は移転にあたってほとんどの石斧を帯同したのではないか。最大規模の８号住居跡は一方では磨石・敲石類が最も多く、他の住居跡とは異なる機能をもっていた可能性を示唆している。

以上、例外はあるが集落遺跡には他の普通サイズよりも大規模な住居遺構が１基または２基存在し、そこから最も多い石斧を伴うという現象がみられ、公共的な集会場の如き機能をもつ家屋であった可能性がある。

これらの大型住居跡から出土した石斧の性格はどのようなものであろうか。例えば象徴的な石斧で、ほとんど伐採、加工作業には使用しなかったものなのか、それとも日常的に使用している石斧なのかを次に検討してみたい。

表 11　住居跡出土石斧の観察

	石斧総数	完形					折損						転用	情報記載なし
		刃部無傷	刃こぼれ	刃部線状痕	刃部再研磨	偏刃（斜刃）	刃部無傷	刃こぼれ	刃部線状痕	刃部再研磨	偏刃（斜刃）	刃部欠損	敲石へ	
知場塚原遺跡２号竪穴住居跡	9	0	2	1	1	2	0	0	0	0	0	1	2	0
ヌバタキ遺跡14号竪穴住居跡	12	0	1	0	0	1	0	3	0	0	0	6	0	1
屋比久原遺跡２号竪穴住居跡	10	1	4	0	0	1	0	4	0	0	0	0	0	0
高嶺遺跡10号竪穴住居跡	8	0	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0
シヌグ堂遺跡18号竪穴住居跡	6	0	2	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1
吹出原遺跡13号Ａ竪穴住居跡	4	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1

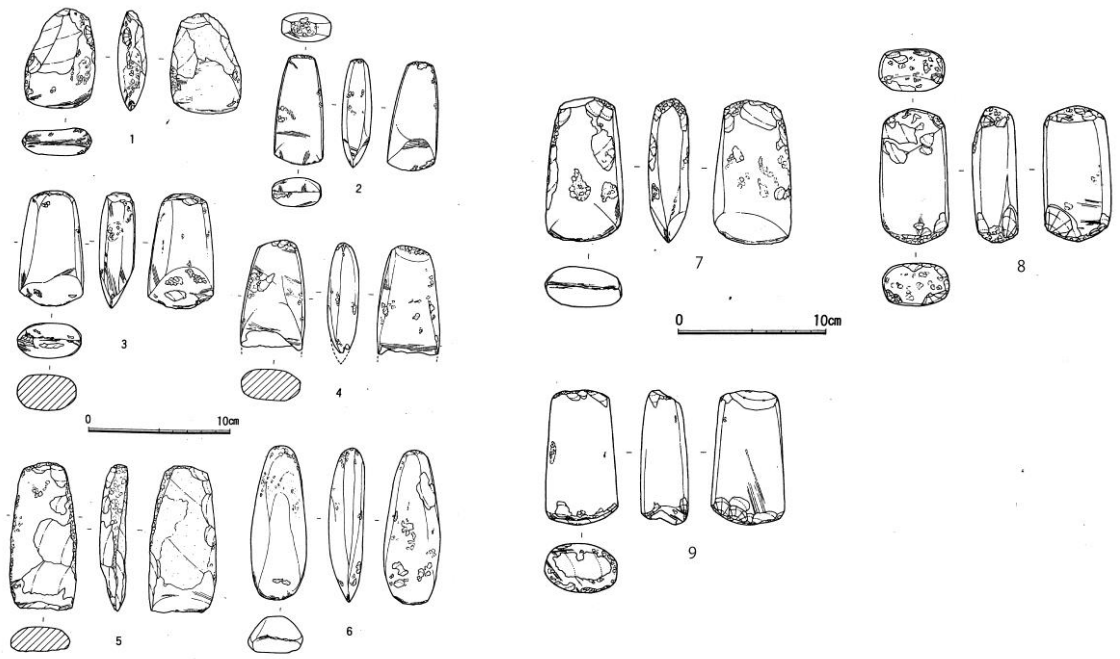


図８　知場塚原遺跡２号竪穴住居跡の石斧

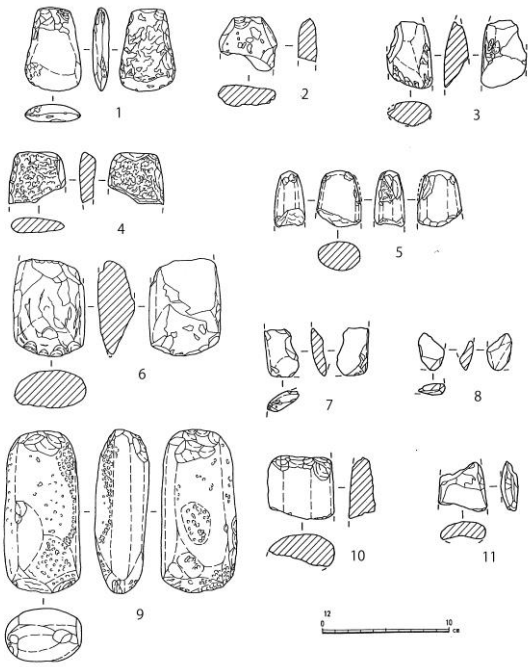


図 9　ヌバタキ遺跡 14 号竪穴住居跡の石斧

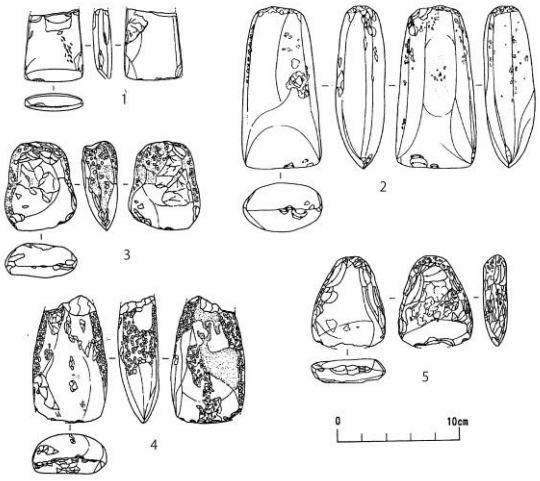


図 10　屋比久原遺跡 2 号竪穴住居跡の石斧

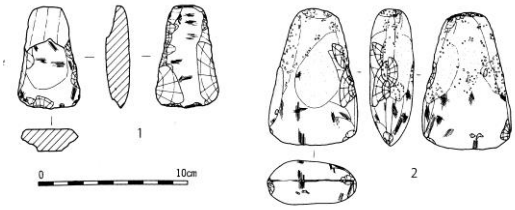


図 11　シヌグ堂遺跡 18 号竪穴住居跡の石斧

図 12　高嶺遺跡 10 号竪穴住居跡の石斧

表 11 にみるように、住居跡出土の石斧は屋比久原遺跡の完形で使用痕が確認できない 1 点を除いて、すべて使用された石斧である。完形で刃こぼれ、線条痕、研ぎ直し、斜刃など、いずれも使用によってできる痕跡である。折損した石斧はそれ自体がすでに使用によることを示すが、刃部にはすべて刃こぼれがみられ、同様に使用されたことを示す。

また、屋比久原遺跡の使用痕が確認できない 1 点の完形石斧は全面がよく研磨されており、使用のたびに研ぎ直しの手入れをしていた可能性がある。すべての石斧に使用痕が観察できなければ石斧全体の性格も祭祀用など別の機能を考慮すべきだが、上述のようにすべて使用されている。

したがって、これらの大型建物に出入りした人物は日常的に使用している石斧を帯同していたことになる。少なくとも石斧に関しては家屋との機能的な関係は存在しない。他集団との取引用の石斧製作場とか、石斧を祭る場などの機能は考えられない。石斧はその大型家屋に集まった人物の帯同具で、比較的頻繁に出入りし、比較的長時間滞在する性格の家屋であったことの結果として、石斧が他の住居跡よりも多く出土しているのではないか。

第７節　打製石斧は土掘り具専用か？

打製石斧は土掘り具であるというのは縄文石器の一般的認識であり、多くの考古学著作にもそのように記されている。石器の組成の項で触れたように、沖縄諸島先史時代遺跡において打製石器が出土したという報告はあまりない。名護市屋我地島大堂原遺跡では磨製・半磨製石斧 28 個に対し、打製石斧が 19 個と高い比率での組成を示しているが例外的である（名護市教育委員会 2005）。

竪穴住居遺構が検出された遺跡について打製石斧の出土状況をみてみる。

① 竪穴住居跡検出遺跡に打製石斧出土あり

２点出土　宜野湾市ヌバタキ遺跡　　１点出土　苦増原遺跡　　西長浜原遺跡

② 竪穴住居跡検出遺跡に打製石斧出土なし

辺戸宇佐浜遺跡　　本部町知場塚原遺跡　　本部町屋比久原遺跡

宮城島シヌグ堂遺跡　　宮城島高嶺遺跡　　読谷村吹出原遺跡

③ 住居跡未確認遺跡に打製石斧あり

１点・・馬上原遺跡・木綿原遺跡・西長浜原遺跡・城間遺跡・知花遺跡・大原貝塚

２点・米須貝塚・　　３点・渡具知東原遺跡　　13 点・・室川貝塚

19 点・・大堂原貝塚

④ 住居跡未確認遺跡に打製石斧出土なし　17 遺跡

沖縄諸島では全体的に打製石斧が報告されている例は少ない。打製石斧はあまり使用されていないといえる。沖縄諸島縄文後晩期に展開する竪穴住居跡は間違いなく赤土台地を掘り下げて築造されたものである。しかし、その遺跡に打製石斧が伴っている例は少ない。打製石斧ではなく、ある程度重量のある硬い木で掘り棒をつくって竪穴を掘る道具にしていたのかも知れない。あるいはかつて多和田眞淳が唱えたように（多和田眞淳 1964・1967）片刃石斧や定角式石斧が石グワ・土掘り具（多和田は「農耕用の」としたが）であったとすると、それが土掘り具としての機能をもっていたのであろうか。それとも磨製石斧は土掘り具も兼ねていたのであろうか。いずれにしても打製石斧は土掘り具専用であるとする説明には疑問がある。

沖縄諸島先史人は山野の根菜採取や家屋の竪穴住居掘り作業には、あまり打製石斧を用いなかったといえる。また、仮に打製石斧が土掘り具であったとしても、平たい形状でなければ非能率的である。これは経験的にもいえることで、土を掘る道具は断面が厚いと深く刺さらないし、柱穴などの成形も困難な作業となる。打製石斧のすべてを土掘り具と理解するのではなく、「断面が平たい形状の打製石斧」という条件を付けるべきだろう。堂込秀人が奄美群島出土の扁平短冊形石器を土掘り具としたのは妥当と考える（堂込秀人 2000、p221-237）。

一方、「石斧未成品」とされた非研磨の石斧状打剥礫塊が調査報告書に記載されていることがある。調査者によってはこれが打製石斧とされ、あるいは石斧未成品とされているのではないか。実測図をみると「完成された」打製石斧にみえないものもある。沖縄諸島には打製石斧はかなり

少ないのではないか。いずれにしても竪穴の掘削や根菜の掘り出し用として、打製石斧が専用的に使用されたのではないといえる。

第８節　沖縄貝塚時代後期における石斧の減少

沖縄貝塚時代後期になると石斧の製作・使用が減少することは発掘調査報告書の石器の項などでその都度指摘され、共通認識となっている。貝塚時代後期における石斧の減少は日本弥生社会からの鉄器（斧・刃物）の導入・普及の影響によるものと多くの研究者が指摘しており、大方はそのように理解されている。

奄美群島では兼久式土器文化の時代には磨製石斧はほぼ消滅するとされる。これは九州により近い奄美群島がいち早く鉄器の導入・普及を進めたことによるものと理解されている（中山清美2004)。

鉄器の普及が大きな要因ではあるが、一方で言われているように、これに加えて山林から砂丘地へという活動環境の変化による開地作業の軽減効果もいくらか影響しているだろう。縄文後期のある時期から丘の平坦地に集落を形成するようになると、まず山林の開地作業、住居の建築（竪穴掘りと木材組み立て)、さらには居住地域の維持（年々成長する草木の伐採管理）に多くの石斧を要する。

貝塚時代後期は海浜砂丘が居住地であり、山林と比べると開地、維持管理作業は比較的軽微である。開地作業のための大型石斧はあまり必要とされない。したがって石斧の需要が少ないことを反映して、遺跡からの石斧の出土も少ないということになる。このことを証明するには、鉄器が導入される前の縄文時代砂丘遺跡における石斧の数量を確認する方法があるが、縄文後期に属する伊武部貝塚（砂丘遺跡）からの石斧は２点だけで、丘の上に展開する同時期遺跡と比べると確かに少ないようにみえる。しかし１遺跡だけの例では断定できない。また開地作業だけが石斧の役割ではないので、石斧盛衰の根拠としてあまり比重をおくべきではないと考える。貝塚時代後期前半に属するいくつかの砂丘遺跡における石斧の出土状況を挙げて、開地作業の軽減が石斧の減少に直結したかを検討してみる。

ナガラ原西貝塚 21 点　アンチの上貝塚 13 点　嘉門貝塚Ａ 22 点　嘉門貝塚Ｂ 42 点

この数字は縄文期遺跡出土数と比べても大きな差はない。ゴホウラ貝・いもがい取引などを介して入手した鉄器がまだ十分には分配・普及していない段階にあり、刃物としては従来の石斧がまだ必要とされていたとみられる。その後貝塚時代後半の遺跡では石斧が減少していくが、鉄器の普及を反映した現象であろう。したがって、砂丘における開地作業の軽減は石斧の需要にとってそれほど大きな比重を占めていたのではないといえる。なお、奄美群島は縄文時代から砂丘に立地する遺跡が多いが、石斧が消滅するのは兼久式土器文化の時期であることから、石斧を駆逐したのは砂丘環境ではなく鉄器の刃物の普及であったことを示している。

なお、伊江島、伊是名、伊平屋の縄文後期遺跡も一見砂丘地にあるが、文化層は砂丘地の付根から後背地丘陵の赤土が主であり、完全な砂丘遺跡ではない。その後に砂丘に覆われた可能性がある。そのことを示すように石斧の出土量は他の縄文後期遺跡と変わらない。

ところで海浜への居住地移動に伴う石斧の減少が、森林と不可分の関係にある植物質食料の高度利用という生業システムまで衰退したことを意味しているものではない。貝塚後期においても石皿・台石類、磨石・敲石類皿は出土しており、また森林における活動の成果としてイノシシ骨も貝塚時代後期の貝塚からよく出土する。貝塚時代後期の先史人は九州弥生社会から米食や稲作

の情報を受け取りながらも、単一作物栽培依存のリスクを回避し、従来からの山林の多様な食材と新たに拡大したサンゴ礁資源も加えて、むしろ採取狩猟経済としては最も発達した段階にあったといえるのではないか。日本が古代国家形成へと進んでいくなかで、沖縄諸島は森林資源とサンゴ礁湖利用の採取・狩猟・漁労という縄文時代並行期からの伝統的生業の枠内に留まる道を選択したといえる。

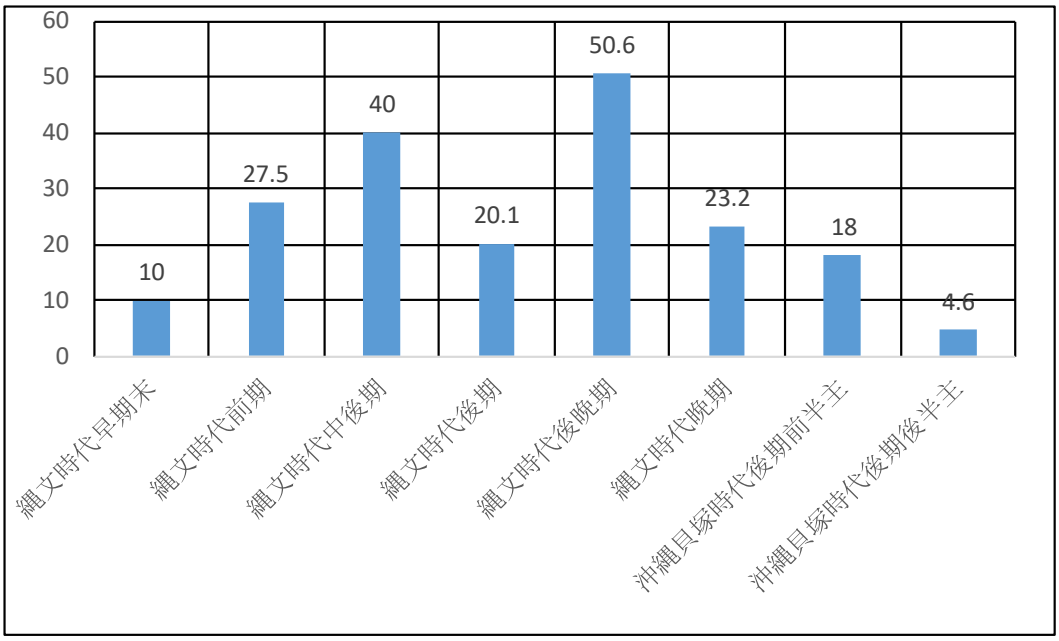
表 12-①　沖縄諸島先史時代の石斧の出土量推移

時　期	遺跡名	数量	総量	平均	時　期
縄文早期末	渡具知東原遺跡・下層	3	20	10	縄文早期末
縄文早期末	野国貝塚Ｂ・Ⅳ・Ⅴ層	17			
縄文前期	渡具知東原遺跡・上層	21	55	27.5	縄文前期
縄文前期・攪乱層	野国貝塚Ｂ・Ⅲ・Ⅰｂ層	34			
縄文中後期	古我地原貝塚	40	40	40	縄文中後期
縄文後期	伊是名ウフジカ遺跡	3	181	20.1	縄文時代後期
〃	伊江島・浜崎貝塚	41			
〃	宜野座・前原遺跡	21			
〃	津堅島キガ浜貝塚	14			
〃	トウバル遺跡・Ⅰ区Ⅳ層	2			
〃	知花遺跡（２次調査）	69			
〃	仲宗根貝塚	15			
〃	木綿原遺跡　Ⅳ層	3			
〃	古座間味貝塚（Ⅰ・Ⅱ区）	13			
縄文後晩期	伊平屋島久里原貝塚	12	506	50.6	縄文時代後晩期
〃	伊是名貝塚	25			
〃	茅打バンタ遺跡	26			
〃	西長浜原遺跡	156			
〃	屋比久原遺跡	93			
〃	知花遺跡（１次調査）	10			
〃	室川貝塚　全層	95			
〃	馬上原遺跡	59			
〃	北原貝塚　下層	3			
〃	大原貝塚　（Ａ地点）	27			
縄文晩期	辺戸宇佐浜遺跡（1・2次）	19	325	23.2	縄文時代晩期
〃	古宇利原遺跡	3			
〃	知場塚原遺跡	18			
〃	熱田第二貝塚	1			
〃	伊計仲原遺跡	38			
〃	宮城島・シヌグ堂遺跡	43			
〃	高嶺遺跡	23			
〃	地荒原遺跡（県道）	36			
〃	地荒原貝塚（住）	45			
〃	苦増原遺跡	22			
〃	吹出原遺跡	30			
〃	ヌバタキ遺跡	34			
〃	ガジャンビラ遺跡	5			
〃	古座間味貝塚（Ⅲ区）	8			

表 12-②　沖縄諸島先史時代の石斧の出土量推移

時　期	遺跡名	数量	総量	平均	後期全量	後期平均	時　期
沖縄貝塚時代後期	ナガラ原西貝塚	21	144	18	218	9	沖縄貝塚時代後期前半期
〃	阿良貝塚	2					
〃	アンチの上貝塚	14					
〃	平敷屋トウバル遺跡　主体層	21					
〃	嘉門貝塚Ａ	22					
〃	嘉門貝塚Ｂ	42					
〃	清水貝塚	15					
〃	具志堅貝塚	7					
〃	小堀原遺跡　Ⅳ層	12	74	4.6			沖縄貝塚時代後期前半・後半混在および後半期
〃	牧港貝塚Ⅰ地区	7					
〃	具志原貝塚	4					
〃	ナガラ原東貝塚	7					
〃	喜如嘉貝塚	0					
〃	備瀬貝塚	0					
〃	部瀬名貝塚	0					
〃	久志貝塚	0					
〃	アカジャンガー貝塚	0					
〃	久良波貝塚	0					
〃	木綿原遺跡　Ⅲ層	13					
〃	那崎原遺跡	3					
〃	米須貝塚	12					
〃	阿波連浦貝塚	3					
〃	大原第二貝塚	2					
〃	北原貝塚　上層	11					

表 12-③　沖縄諸島先史時代の石斧の平均出土量推移

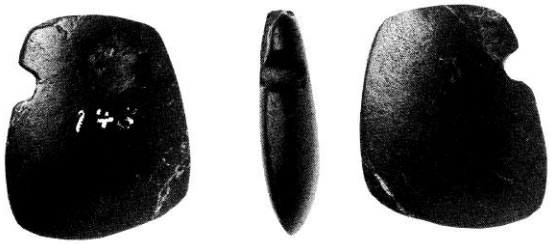


第９節　搬入石斧

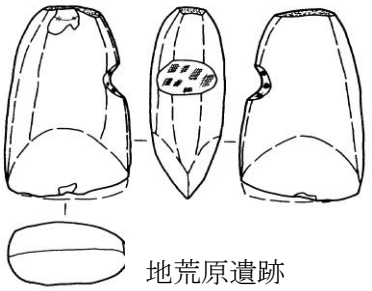
仲宗根求が「伊江島型」の名称を提起した抉りのある石斧が沖縄諸島、奄美群島、九州の鹿児島・福岡などで出土している（仲宗根求 2008）。この形式の石斧は沖縄諸島にはないもので、明らかに日本列島新石器時代文化の担い手集団が奄美群島・沖縄諸島に拡散するときに携行したものであろう。この石斧の搬入現象にみられるように、奄美群島・沖縄諸島は日本列島新石器時代文化（縄文文化）の情報圏、通交圏のなかにあった。かれらは渡来期を経て適応を果たし、沖縄島とその周辺島嶼へと拡散活動を展開していった。そして日本縄文社会の森林性資源高度利用の知識と技術を携行して、島の植物性食糧の採取活動に成功するとともに、島を取り巻くサンゴ礁湖（ラグーン）も生業活動の場として取り込み、しだいに地域色の強い文化を形成していった。しかし日本列島とのかかわりは粗密の違いはあっても途切れることなく続き、日本列島の動きがほとんどの時期、画期に伝わってくる関係にあった。

それは九州島から種子島・屋久島、トカラ列島、奄美群島、、沖縄諸島と次の島を視認（望見）しながら渡航・往来できる地理的環境にあったことが、相互の文物交流・情報交換を可能にしたのである。

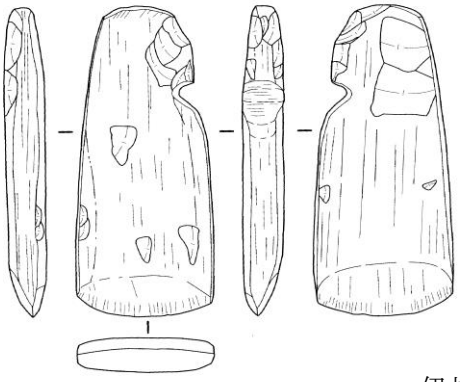
したがって、奄美群島・沖縄諸島には時には日本列島人が土器や石器を携行搬入し、あるいはリレーによって搬入することもあり得た。あたかも地層における貫入のごとく、日本列島から沖縄諸島で通常接する機会のない物質文化が極地的、単発的に入り込んでくるのは当然の現象といえる。それは泡沫的にそれだけで終わることもあれば、影響を与えて類似の新たな物質文化を生み出すこともあるだろう。影響の有無にかかわらず、日本列島とくに九州島は情報圏、通交圏であることを示す石器としての意義をもっている。

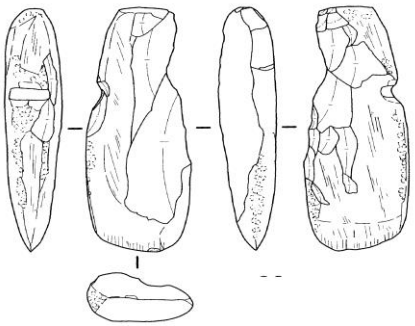


伊江島（安里嗣淳ほか 1996）



地荒原遺跡





伊礼原Ｅ遺跡

図 13　抉入石斧（伊江島型石斧）　縮尺不同

第 10 節　石斧の製作から廃棄まで

現代に残された遺跡は移動などによって廃棄された、その集団の当該遺跡における最終段階の状態であるといえる。しかし、その遺跡から出土する遺構や遺物もすべてが使用の最終段階を示しているわけではない。石材（原石）や製作途中の未成品、再生石斧なども含まれている。遺跡出土資料から石斧の一生を追ってみたい。

①石材

遺跡には加工されていない円礫が伴うことがある。そのなかには磨石・敲石類用として加工せずにそのまま使用するものもあるが、長楕円形の円礫は石斧の形状に近いことから石斧製作用として利用される。さきに述べたように石材の産地は沖縄島北部と慶良間諸島である。石材の採集地は河口や海岸で、そこには水磨によって手頃な大きさになった転石がみられる。

沖縄島北部名護以北西海岸は特に石斧石材が多く分布する。国頭村謝敷海岸、佐手海岸にはわずかの土器が得られる遺物散布地がある。短期間のキャンプ地的な遺跡で、おそらくこのような石材採集を目的としたグループが短期間滞在した痕跡であろう。重量と交通路の関係から石材の運搬は舟を利用したことは容易に推測できる。

舟で運ばれた石材は交換や贈与など交易によって他の集団へ分配される。石材の流通には種類によっていくつかのルートがあり、入手する側もある程度固定化された供給側との流通関係を築いていた。

②粗割

入手した石材はまず粗割によって大まかな石斧の形状を確保した。しかし石斧の場合は長楕円形の円礫石材を利用することが多く、ほとんどは次の段階から工程が開始されたものと考えられる。それは完形石斧の表面に自然円礫の一面が残されている場合があることからも言える。

③打剥

打ち欠きによって次第に石斧の形状に近づけていく。この段階の石斧はいくつかの遺跡で出土しているが、そのなかには打製石斧として扱われているものもある。沖縄諸島先史時代の場合明らかに打製石斧と認められるものは少ない。打剥整形段階の未成品を打製石斧として扱っているのではないか。

剥離面が少し凹面をなしている場合、次の段階の敲打や研磨が十分に及ばず、完成後も一部に剥離面を残すことがある。

④敲打

打剥によって大まかな石斧の形状になると、敲打を繰り返して凸部を潰し表面を滑らかに整形する。未成品にもかかわらず折損した例があるのは、この段階における連続敲打の衝撃が原因になったものとみられる。

⑤研磨

イメージした形状になると、研磨を施す。表裏面、側面を研磨して整え、さらに刃部を研ぎ出して仕上げる。全面研磨の例は少なく、多くの場合は剥離面、敲打面が少し残されていることが多い。刃部は打剥や敲打作業で形成するのは困難なので、ある程度の厚さの段階から研磨作業によって整形しているとみられ、剥離面や敲打面が刃部に残されることはあまりない。頭部はよく研磨された例は少なく、多くの場合敲打による潰れがみられる。

⑥再研磨（研ぎ直し）

使用によって刃先は刃こぼれや磨耗によって鋭利さを失うので、再研磨が施される。タテ斧の

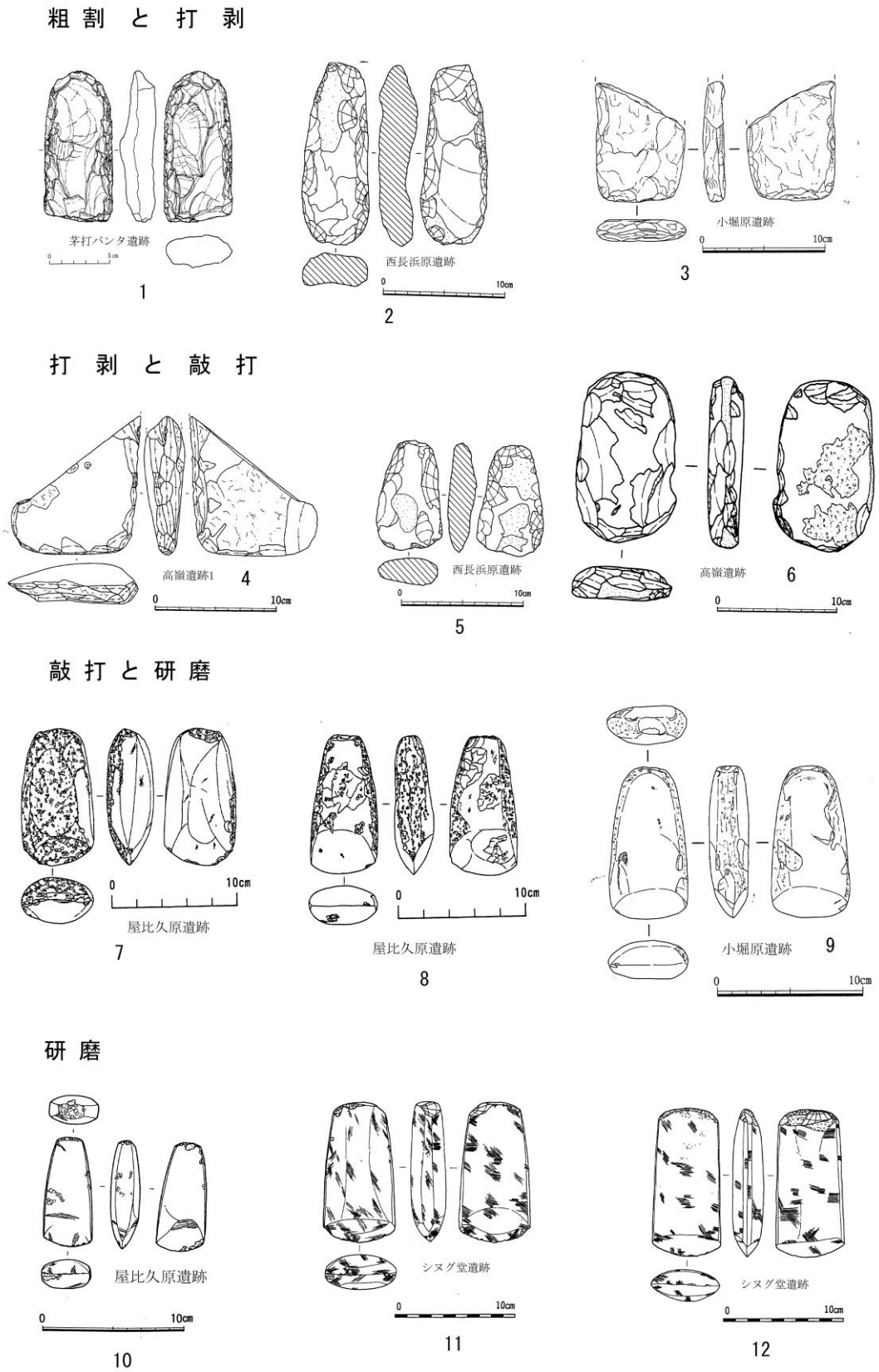
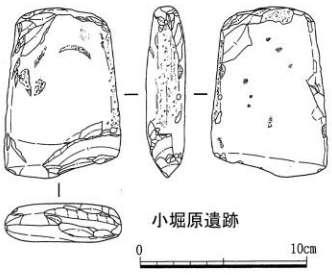

粗割と打剥
茅打バンタ遺跡
1
西長浜原遺跡
2
小堀原遺跡
3
打剥と敲打
高嶺遺跡1
4
西長浜原遺跡
5
高嶺遺跡
6
敲打と研磨
屋比久原遺跡
7
屋比久原遺跡
8
小堀原遺跡
9
研磨
屋比久原遺跡
10
シヌグ堂遺跡
11
シヌグ堂遺跡
12

図 14-①　石斧の一生①

使用による刃こぼれ

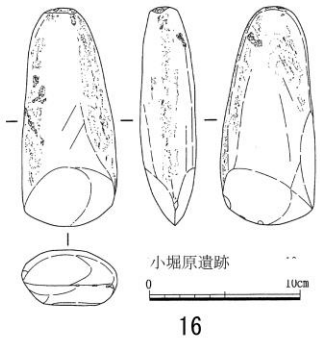
13

14

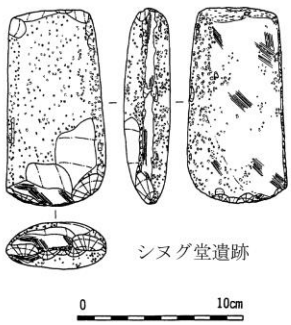


15

刃面・刃先の再研磨（研ぎ直し）

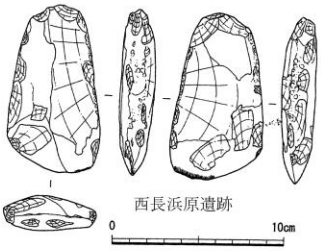


16

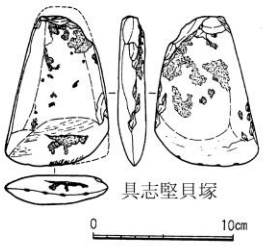


17

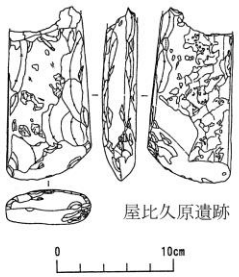
18



19

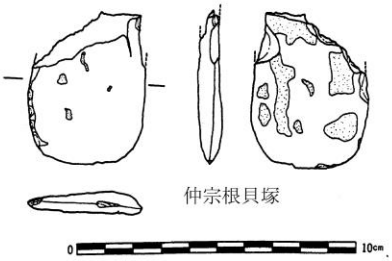


20



21

再生（扁平石刃・小型石斧へ）



22

23

24

図 14-②　石斧の一生②

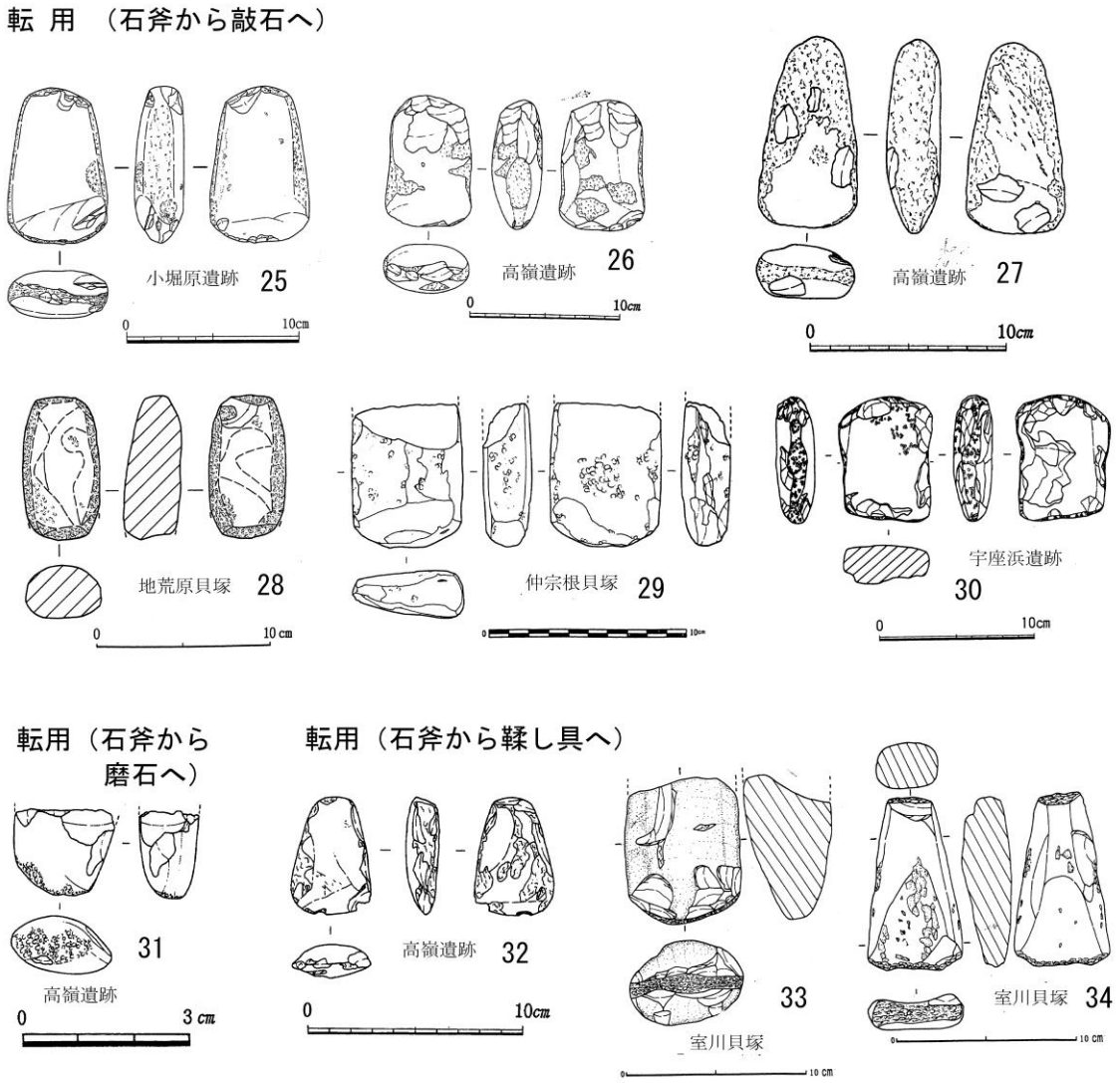


図 14-③　石斧の一生③

表 13　石斧から転用された石器の種類

遺　　跡	主な時期	扁平石刃	敲石	磨石	なめし
浜崎貝塚	縄文後期		5		
仲宗根貝塚	縄文後期	1	2		
室川貝塚	縄文後期		3		2
西長浜原遺跡	縄文後晩期		5		
知場塚原遺跡	縄文晩期		4		
シヌグ堂遺跡	縄文晩期	1	1		
高嶺遺跡	縄文晩期		2	6	1
古宇利原遺跡	縄文晩期		1		
地荒原遺跡	縄文晩期	1	5		
地荒原貝塚	縄文晩期	1	1		
吹出原遺跡	縄文晩期		2		
東原遺跡	貝塚時代後期		1		
城間遺跡	貝塚時代後期		2		
小堀原遺跡	貝塚時代後期		2		
		4	36	6	3

場合刃部の一方の隅（使用者側）に強い衝撃が加わることで損耗するので、この部分だけ再研磨が繰り返されることが多い。これにより刃縁は片側に偏った形状（斜刃）になる。この形状から逆にタテ斧であることが推測できる。

刃こぼれのほかに、使用によって対象物との強い接触によって形成される線条痕（使用痕）が残されていることもある。刃縁に対して垂直方向の線条痕はヨコ斧、斜め方向の線条痕はタテ斧によるものと多くの場合推測される。しかし、使用者は研ぎ直しによる手入れを行うことが多いものとみられ、使用痕を観察できる例は意外と少ない。

⑦　再生

使用によってタテ方向に折損した場合、破面を研磨して扁平石刃（小型石斧）として再生利用することもある（図 14-②-22）

⑧　転用

もともと石斧であったとみられるものが､別の機能をもった道具として転用されることがある。多くの場合敲石に転用されるが、丸みを帯びた刃縁が円滑な磨面を形成しているものもある。一般的な磨石よりも光沢をもっているので、報告書によってはこれを皮なめしとする見解もある。ただ、沖縄諸島先史時代に皮革製品が存在した可能性については材料となる対象動物の問題があり、すぐに結びつけることは難しい。それよりも編み籠・編み袋や縄などに用いる植物質繊維のなめし用とするのが蓋然性は高い。例えば月桃（サンニン）からの繊維造りにおけるなめし作業である。土器の模様や前原遺跡の笊の出土から編み技術が存在していたことは確かである。

表 13 は 69 個所の遺跡のうち、石斧が転用された例のある 14 遺跡の転用先の石器の種類である。扁平石刃はタテ方向に剥離して損傷した石斧の剥離面（刃部の反対側）を刃部として研ぎ直し、扁平石刃あるいは小型石斧としたものである。敲石は石斧の刃部が完全に潰れて、敲打痕が面を形成しているもので、刃物としての機能を喪失しているものである。表の数字からだと貝塚時代後期の敲石への転用石斧はそれほど多くはないようにみえる。しかし、この表に反映されない刃縁がかなり鈍くなった石斧は多いので、従来言われているように貝塚時代後期には石斧の敲石的使用は顕著である。帯同することの多い石斧は、貝塚時代後期にはサンゴ礁湖が新たな生業環境として大きな比重を占めるようになったことから、干潮時のササ（毒草）漁のための樹液抽出用の敲石として利用したことが想定できる。

図 15　サンゴジュの葉と実　（撮影：筆者）

石斧から磨石への転用は高嶺遺跡だけで例外的である。なめし具とされるのは刃部が損耗しているだけでなく光沢をもつほど摩耗痕がみられるもので、一般的な磨石とは異なる。調査報告書では「皮なめし」とされているが、本稿では植物質繊維（例＝月桃・サンニン）を取り出すためのなめし具として捉えたい。

石斧の転用は縄文後期から始まっている。それ以前には転用がみられないのは遊動と定住生活の相違によるものと考えられる。主に森林性植物質食料を処理する磨石・敲石類は定住社会になじむ食料加工道具である。損傷した石斧まで転用する節約型消費（使用）は、定住生活特有の生活スタイルであろう。

⑨　損傷→廃棄

遺跡から出土する石斧は、完形よりも剥離や折損しているものが多い。日常的によく使用された道具であることを示している。再生や転用がされない損傷石斧は廃棄される。損傷石斧が集落のなかで特別の扱い＝埋納などを受けている例はなく、廃棄にあたっての観念的な配慮はみられない。わずかにみられる石斧の一括埋納例は損傷していないものが多く、廃棄ではない。

第 11 節　沖縄諸島先史時代における石斧の地理的分布

石器は原産地から人手を伝ってリレー型で次第に遠方へ流通していくのであれば、供給地から遠ざかるにつれて分布量が逓減していくことが想定される。しかし、個々の遺跡の石器出土量は発掘面積が異なるので単純な多寡の比較はできないが、石材産地周辺の遺跡と、遠く離れた沖縄島中南部および隣接小島との間に、石斧分布量の大きな差はみられない。原産地から遠隔地であっても、沖縄諸島のほぼ全域の先史集団は必要な量の石材や石器を獲得できていたといえる。これは、石材や石斧の交易が円滑におこなわれ、安定した広域の石材流通ネットワークが存在し、かつ長期にわたって展開していたことを示している。遠隔地であっても、必要な石材は比較的容易に入手できる社会システムであったとみられる。このような状況は沖縄諸島先史社会が広範囲の交易圏、交流圏を形成し、友好的、平和的な関係を維持していたことを反映したものであるといえる。

一方、久米島では石斧にも磨石・敲石にも利用できる安山岩が豊富に分布しているため、在地産安山岩の利用度は高い。それでも慶良間諸島などから石材を入手していることから、石材流通ネットワークは広範囲に形成されていたことが伺える。

第 12 節「石斧」の結び

沖縄諸島に渡来して来た集団は起源地の石器文化を携行してきた。渡具知東原遺跡下層、野国貝塚Ｂ地点下層の物質文化を残した人々は、全面を研磨しない半磨製・局部（刃部）磨製石斧を主な特徴とする形状の石斧を製作使用していた。それは起源地の文化としての石斧の技術や形状をほぼそのまま再現したものであったとみられる。爪形土器文化人集団はおそらく沖縄島西海岸を点々と遊動し、やがて東側の藪地島まで動いた。屋我地島、渡具知東原遺跡、野国貝塚Ｂ地点はすべて西海岸にあり、ほかにも北谷町、宜野湾市、浦添市などの西海岸に遺跡を残している。野国貝塚人は石斧の材料を慶良間諸島あるいは北部名護以北の西海岸で得られる緑色片岩などを石斧の材料として多用した。

沖縄諸島先史時代の石器組成はほとんどの時期を通して石斧が多くを占める。渡具知東原遺跡爪形期層だけがそれほど多くないようにみえるのは、チャートの砕片が剝片石器として算定され

ているからであり、石斧の数量そのものは 18 個と発掘面積の割にはむしろ多い方である。組成比率のほかに石斧の出土数を比べると縄文後期に石斧が多用され始め、晩期に盛行期を迎えている。そして周知のように沖縄貝塚時代後期には減少している。ここから２つの現象が見えてくる。定住生活の安定に成功した縄文後期集団がさらに晩期になって集落を拡充するほどの定住社会を築き上げたことである。それを支えた背景は森林資源の高度利用が進み、人口増を生み出したことであろう。そこで盛行したのが森林資源の生業と生活に使用される石斧であり、別項で扱う石皿・台石類、磨石・敲石類であった。

森林環境において生活活動を展開するには、石器組成のなかでも多数を占める石斧が多用されたことは十分に推測できる。石斧のサイズをみると 7～12 ㎝の中型石斧が最も多く、12～15 ㎝は少ない。15 ㎝以上の特大型はかなり少ない。これは集落地造成などの開地作業は稀な作業で、通常は加工を主とする中型石斧を多用していたことを示している。そして帯同（おそらく男性が）して、多目的に使用していた石斧はこの中型石斧であったものとみられる。

沖縄貝塚時代後期に石斧が減少するのは、九州弥生社会との交流・交易によってもたらされる鉄器や鉄材がしだいに普及していったことが最も大きな要因であろう。貝塚時代後期の前半までは未だ鉄器が普及していなかったので、石斧への依存度は縄文期同様に高かった。後半になると減少するのは、ようやく鉄器が刃物の主役を担うようになったからであろう。砂丘が集落の立地環境となったことで、開地作業に伴う樹木伐採作業量が軽減され、その反映として石斧の需要が低下したことも減少の一要因であろうがその比重は大きくはなかった。一方で、石斧の減少の一因を森林資源獲得活動からの離脱とみるのは当たらないことが、別項の石皿・台石類の部において確認できる。石皿・台石類、磨石・敲石類は減少してはいない。これは貝塚後期に砂丘地に集落の拠点を移しても、森林資源利用の生活は維持していたことをイノシシ骨の出土とあわせて示している。これにサンゴ礁湖における生業が従来よりも強化されたために、森林からの離脱に見えるだけである。

一方、この時期には石斧の減少とあわせて出土する石斧も刃縁が潰れているものが比較的多く、なかには完全に敲石に転用されている例もある。しかし、石斧の場合従来の伝統的な堅果類処理の道具を補完するものとしての転用ではなく、サンゴ礁湖という新たな生業環境に適応するための工夫であったのではないか。考古学的証明は困難であるが、近年まで行われていた干潮時の礁原に残された池（クムイ＝小堀）に特定の植物の枝葉を浮かべて小魚を獲るササ漁（毒草漁）習俗が、先史時代以来の伝統であった可能性がある。それはサンゴジュの枝葉であるが、砕いて樹液を抽出するのに転用石斧も敲石とあわせて用いたのではないか。敲打による樹液の抽出は池の傍らでなければならず、もともと携帯になじんでいた石斧を転用したことが合理性をもつ。

集落のなかで特に大型住居遺構に限って石斧の出土量が多いのは、単に面積がより広いから出土量も比例して増えるということではなく、この家屋自体が他の一般的家屋と異なり、ムラの運営について協議をする場、あるいは共同で何らかの作業をおこなう場としての機能をもつ集会場であったとみられる。大型住居が２基ある例もみられるが、そのうち１基には石斧がみられない。計画的移転による廃棄住居の場合には必要な道具類は放置されないので、これはその例に含まれる可能性があると考えたい。逆に考えると、多数の石斧が出土するのは不時廃棄の住居であるともいえる。

大型住居跡から出土する石器の組成は一般的な遺跡の石器組成と大きな相違はない。大型住居は作業の場としても機能していたことを示しており、特別の祭祀的な設備をもった空間ではない。

石斧も特別に配慮された出土状況を示してはいない。これらの大型住居は共同体の集会や作業をおこなった場所としての機能に留まるものとみられる。ただし、ヌバタキ遺跡第 14 号大型住居跡に伴う石棒状製品は祭祀具とは断定できないが、何かを象徴する巨石とみられる。それが大型住居の機能に関係するかどうかは類例がなく今後の課題である。

石器石材の原産地である沖縄島北部および慶良間諸島から、沖縄諸島のほぼ全域に石材が流通している。これらの石材および石斧は隣へ隣へと伝わるリレーだけでなく、融通を図る集団によって石材が採取され供給される交易ネットワークが存在し、かつ安定的、平和的に長期にわたって機能していたものと考えられる。石斧の分布が石材原産地からの傾斜分布ではなく、均等分布を示していることもそのことを示している。

石斧石材の石材は約 20 種あるが、輝緑岩と緑色片岩が二大石材で最も数量が多い。いずれも沖縄島北部西海岸および慶良間諸島に露頭があるとされるが、輝緑岩は具体的な産地は不明である。二大石材のひとつを占めるほどの出土数であり、もっと近隣地域に存在するのが自然である。南九州縄文時代草創期に属する栫ノ原型石斧が沖縄島でも採集されていて、その石材も輝緑岩であることから産地が何処かによって在地製か搬入石斧かの判断にも関係してくる。

この二大石材はひとつの遺跡（集落）で混在することは少なく、混在してもいずれかに偏っている。すなわち集団によって輝緑岩系と緑色片岩系とが存在する。これは当該集団の選択だけでなく、入手経路の相違、石材の融通を取引するグループの違いを示していると考えられる。沖縄諸島の土器文化をみると同一型式はきわめてよく似ていて、ほぼ均等に分布している。これは地域間の通交関係が円滑に機能していて、活発な交流が安定的に保たれていたことの証左ともいえる。そのなかにあって、集団（集落）によって石材を融通する特定のグループとの取引関係が継続的に存在していたのではないか。また、本部半島一円の緑色片岩石斧流通圏の場合は、石材の協同入手システムをもつ拠点集落と枝集落の関係が存在していた可能性もある。いずれにしても、沖縄島北部産石斧石材の供給ルートが少なくとも２つは存在していた。

石材を入手すると先史集団は敲石などでまず粗割をおこない、次に石や堅い木などで剥離作業を繰り返して石斧の大まかな形を造りだした。さらに凸面を軽く無数に反復して敲き、表面を調整して石斧の形に仕上げる。そして全面あるいは部分的に研磨をおこない、さらに刃の部分を研ぎ出す。使用していると刃こぼれがおこるので、研ぎ直しをする。また刃部がかなり摩耗した場合、あるいは折損した場合は再生や転用をすることもある。すぐ廃棄するのではなく、別の利用法を工夫して石材を節約して消費していたことが伺える。

土掘りには打製石斧が使用されたとする従来の解釈は、出土数がかなり少ないことから疑問が生じる。確実に土掘りの土木作業が行われた竪穴住居遺構をもつ遺跡においてさえ、打製石斧を出土しない方が圧倒的に多いのである。多和田眞淳が片刃石斧や定角式石斧は農耕用だとしたのを、土掘り具として考えると成り立つ可能性がある。

きわめて稀であるが沖縄諸島から一般的ではない石器が発見される。伊江島型と名付けられた抉り入り石斧が伊江島と北谷町伊礼原 E 遺跡、地荒原遺跡で発見されている。かなり丁寧な造りで、在来石斧のなかでは異質感がある。搬入石斧であることは明らかで、事実奄美から鹿児島、福岡に同型式石斧が発見されている。この現象は石斧に限らず土器などにもあり、広く日本列島新石器時代文化（縄文文化）と情報圏を共有する位置にあり、そのなかの九州とは奄美群島、沖縄諸島まで視認（望見）できる距離関係にあることによる同じ通交圏に含まれていた。特に人口圧などの外へ押し出す社会的必然性がなくても、そこに島が見えたら往来するのは人間集団の当

然の行動である。そのような集団のなかには比較的短期間に直接沖縄諸島にまで移動してくる集団も存在するであろう。石斧の場合はリレー型で伝わってくることもあり得るが、市来式や船元系などの日本産土器そのものが沖縄で出土すると、脆弱な器物であることから短期間に同一集団によって直接搬入された可能性もある。一方で「外来」のスタイルを模倣する行動も否定できない。きわめて稀に起こるそのような「貫入」現象は、共通の情報圏、通交圏がもたらす当然の現象といえる。搬入石斧はそのひとつである。

貝塚時代後期には石斧の刃部が潰れてあたかも敲石のごとき使用法に変化しているものがよくみられる。これは従来の伝統的な森林性食糧資源の処理具を補完するものではなく、あらたな生業環境として重要な位置を占めてきたサンゴ礁湖における漁労活動に対応するための転用であろう。近年までみられた干潮時の池における毒草漁（ササ漁）の起源は先史時代に遡るものと考えると、石斧の転用はサンゴジュの枝葉を潰して樹液を抽出するための敲石としての機能が合理性をもつ。

糸満市名城海岸において干潮時の礁原から敲石類が多数採集されている（知名定順 1979)。石材は敲打器 25 個、石材 16 個で、沖縄島北部や慶良間諸島および久米島から産する片状砂岩が 48%、角閃岩 20%、輝緑岩 16%、斑レイ岩４%、安山岩系４%の組成である。これらは糸満市や中南部ではまったく産しない遠隔地の石材である。先史時代に属するかどうかの検証は不可能であるが、遠隔地産の石材であることから、その可能性は高いといえる。

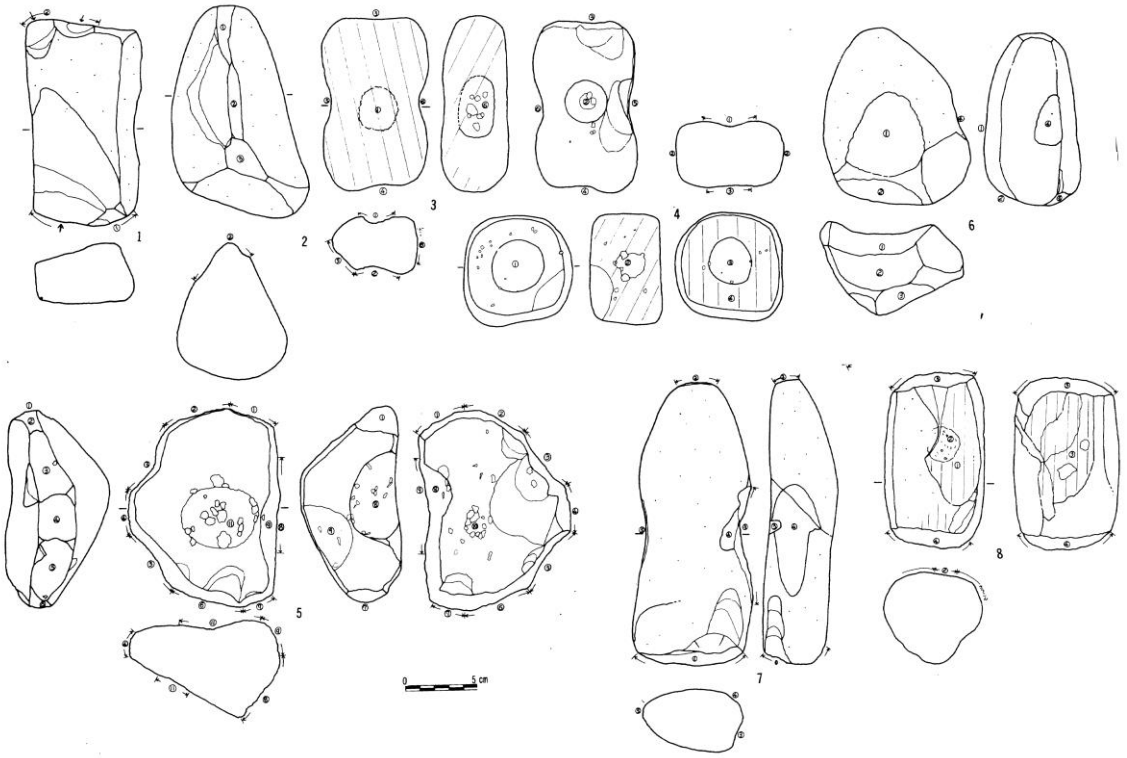


図 16－①　糸満市名城海岸礁原採集の敲打器①　知名定順 1979

また、月桃（サンニン）の茎などから繊維を取り出すための潰し具としての機能も想定できる。石斧の転用としては敲石のほかに潰れた刃が丸味を帯び、かつ円滑になっているものがある。皮なめしとする報告が散見されるが、沖縄諸島先史時代における皮革製品の存在には疑問があり、

むしろ植物質繊維取り出しにあたって上記の敲石転用とあわせてなめし具として使用したものと考えるのが合理性をもつ。土器の文様のなかには網目構造があり、また宜野座村前原遺跡ではザルが出土していることから、平たく、細く加工した植物による編み物、曲げ物があったことは確実である。その材料の加工に鞣（なめ）し具として転用石斧も使用された可能性がある。

図 16－②　糸満市名城海岸礁原採集の敲打器②　知名定順 1979

第３章　石鏃　―　沖縄諸島先史時代の弓射文化

第１節　序

沖縄諸島先史時代（新石器時代）のいくつかの遺跡から、弓射の技術＝弓矢が存在したことを示す石鏃が出土している。

弓矢は日本では縄文時代を代表する狩猟具であり、弓と矢柄、弦は植物製であることから遺跡に残る例はきわめて少ないが、矢柄の先端に装着されていた石のヤジリ＝石鏃は全国的に多数出土している。矢柄の先端に石鏃が装着された状態の出土例もある。

「弓矢は弓の反発力と弦の張力とを組み合わせて利用し、矢を遠くに飛ばす道具」で、「飛力、貫徹力、命中度」に優れ、「対象に近づくことなく距離をおいて狩猟ができ」、「迅速な連続発射」が可能となって狩猟効率を高めたといわれる（勅使河原彰 1998）。

このような優れた狩猟道具であることから、沖縄先史時代（新石器時代）にも石鏃が多用されたことが想定されてもよいが、実際には石鏃を出土する遺跡の時期がほぼ限られ、数量もけっして多くはない。それにもかかわらず、主な狩猟対象動物であったとみられるイノシシの骨はほとんどの時期と多くの地域の遺跡から出土する。狩猟実績との整合性をそれほどもっているとはいえない石鏃の出土状況をふまえると、弓射は沖縄諸島先史時代の狩猟活動のなかで主流ではなかった可能性がある。一方で奄美群島・沖縄諸島には九州佐賀県の腰岳産黒曜石製の鏃や剥片がもたらされているが、このような状況を勘案すると搬入品である黒曜石は、はたして狩猟効率をさらに高めることを動機とする、沖縄諸島先史社会の側の需要に応えた交易（取引）活動であったのかという疑問も生じてくる。さらに、宮古・八重山諸島の南琉球先史時代においてもイノシシ骨が遺跡から出土しているにもかかわらず、明確な石鏃は出土していない。このことも、琉球列島先史社会において、弓射は狩猟活動の中心的道具ではなかった可能性をさらに増幅させるのである。

弓射の技術はどのような経緯で沖縄諸島に登場し、どのように展開したのであろうか。これまで土器文化を中心に沖縄諸島先史文化の系譜が研究され、九州縄文時代の人と文化を源流とすることが明らかとなっていることから、当然弓射の技術＝石鏃の系譜についても九州縄文時代文化との深い関わりが想定される。むしろそれは自明のこととして、石鏃については黒曜石製石鏃の流布（交易・取引）をめぐる関心のほかにはあまり検討されてこなかったといえる。

沖縄諸島先史社会における物質文化は、その地域で自己完結的に形成、展開してきたものではないことはすでに明らかである。弓射の技術についても、たとえ石鏃の発見数が比較的少量であっても、そこには主に九州縄文社会の動きが反映されている可能性があり、その比較検討を進めることが、日本縄文文化と沖縄諸島先史文化との基本的なかかわり方の特質を把握する方法のひとつになり得るのではないかと考える。石鏃文化がどのように類似し、どのように変異があり、どのように少ないのかについての具体的な検証は未だおこなわれていない。

以上のような認識をふまえて、沖縄諸島先史時代における弓射の技術＝石鏃はどのように位置づけられるのかを検討したい。また、すでに西北九州産であることが明らかになっている黒曜石製ヤジリの流通を通した九州・奄美と沖縄諸島先史時代の人と技術の関わり方の特質について検討、考察を進める。さらに石斧文化の様相とも関連させて、沖縄諸島先史社会とそれに並行する日本縄文・弥生および以降の時代との関係史の基本的な仕組みの把握を試みる。

第２節　先行研究

(1)　石鏃の発見史（出土・表面採集）

①　1920 年　黒田源太郎　城嶽貝塚より石鏃１個採集

松村瞭 1920『琉球荻堂貝塚』のなかに図入りで紹介。松村は石質を燧石とし、「之ガ原料タル石片」を伴うことにもふれている。沖縄における石鏃の最初の報告例である

②　1926 年　小牧實繁　城嶽貝塚の発掘において石鏃５点出土。１点は黒曜石、４点はチャート。ほかにチャートの石鏃類似片５個、比較的整形の黒曜石破片４個、チャート破片 11 個、石屑が黒曜石屑 31 個、チャート屑 131 個出土。

③　1929 年　金関丈夫　城嶽貝塚の発掘においてチャート製石鏃１個出土。同年の発掘報告書中に、川平朝令と真境名安興が石鏃各１個を採集していることが記載されている。後に三宅宗悦が 1940 年の論考で、この２個も城嶽発見と記す。

④　1935 年　三宅宗悦　南島の石器を聚成した図のなかに、昭和会館所蔵の糸満採集と伝わる黒曜石製石鏃２個の図を掲載。これで沖縄発見の石鏃は計 11 個と記す。

⑤　戦後の発見　1954 年に多和田眞淳が大山堀割貝塚で石鏃を１個、1958 年に高宮廣衛らが知花遺跡において１個を発見した。

⑥　その後 1970 年代後半からいくつかの遺跡において石鏃の採集、出土が続き、現在のところ 52 遺跡から計 192 点が確認されている。（調査報告書にはあいまいな記述もあり、実数は流動的である）。調査報告書等の文献で確認された遺跡別の数量は表①のとおりである。なお、剥片、石屑の数量を記した調査報告書もあるが、それは例外的であり全体的集計はできなかった。

(2)　石鏃の研究史

①　戦前の研究

とくに石鏃を主題にした研究はないが、遺跡ごとに発見された遺物を逐一紹介しつつ、石鏃の項で次のことが指摘された。

松村瞭は紹介した石鏃の材質を燧石（フリント）であろうとし、石斧とともに石材は島の北部で得られるものと考察した。

小牧實繁はチャートと黒曜石が石材であり、いずれも破片が存在することを数量的に示した。これにより石鏃は原石が遺跡地にもちこまれて製作されたものであることを、研究の出発時点から明らかにした点が評価される。なお、松村が燧石としたものもチャートであろうとした。

②戦後の研究

1950 年、八幡一郎は戦前までの琉球考古学研究を総括回顧し、そのなかで石鏃については「基底部を少しく内曲或は内屈せしめてあるだけで、所謂無茎品のみ」であり、これは周辺海外の鏃よりも西日本の石鏃にのみ酷似していると捉えている（八幡一郎 1950）。石鏃の発見が少数であることから、狩猟における弓射の技術の普及について疑問を投げかけるが、他の材料や器種の存在があったかいずれかを決する資料がないとしている。無茎の凹基の石鏃であることは西日本の石鏃に共通する、沖縄は数が少ないという２点の観察は今日につながる重要な指摘である。発見数が少ないこともあって、その後長い間石鏃が考察の対象となることはなかった。

1972 年、国分直一は琉球列島には弓射の技術は乏しく、イノシシ猟は弓射によるものではないとした。わずかに発見された石鏃は縄文文化につながるとみた。一方で有孔・無孔の三角形貝製品を貝鏃として扱い、台湾例との比較を通して南方に関連する技術文化としてとらえた（国分直一 1972）。国分の考察以後約 10 年間、石鏃をテーマとする研究は再び空白期となった。

1983 年、知念勇が石鏃の発見状況を示して所属時期が沖縄中期（高宮廣衛暫定前Ⅴ期）に限定されること、および石質が北部産のチャートで、黒曜石が九州佐賀県の腰岳産であることを概説した（知念勇 1983）。

1998 年、上村俊雄はこれまでに発見された石鏃の集成をおこない、従来から指摘されてきたチャート製は沖縄島産、黒曜石製は腰岳産であること、無茎凹基、少量を特徴とすることを再指摘するとともに、技術的系譜の追及が今後の課題であると指摘した。この論考は石鏃研究の画期となった。（上村 1998）

2002 年、小田静夫は伊是名貝塚発掘調査報告書を通して、石器石材の理化学的分析の重要性を指摘した（小田 2002）。

2004 年、小畑弘己・盛本勲・角縁進は琉球列島出土の黒曜石を科学分析し、そのほとんどが腰岳産であることを理化学的に明らかにした（小畑ほか 2004）。これにより、「印象」ではなく、科学的な根拠をもって黒曜石産地とその関係を考察することができるようになった。

2012 年大堀皓平は「沖縄諸島出土打製石鏃の基礎的研究」において、上村俊雄の集成の成果を発展させて石鏃の石材と産地、型式、製作技術、系譜などについて分析・考察をおこなった。そのなかで、特に石鏃文化の動向については生業だけでなく、日本縄文文化との関係性のなかで捉えるべきことを強調した。沖縄諸島の石鏃文化についての初めての体系的な論考といえる（大堀 2012）。さらに大堀は石材の獲得と消費行動などの分析を進めて、沖縄諸島における石鏃文化の特性を指摘している（大堀晧平 2013、2014）

第３節　沖縄諸島発見の打製石鏃

(1)　地域（市町村）別打製石鏃発見数

表１に見るように、これまでに沖縄諸島で発見された打製石鏃は未成品も合わせて 192 点である。ただし、文献に記載されているだけで再確認ができないもの、未報告だが話題としては存在するものなどもあって、実測図や写真がないもの、観察が不可能なものも含まれる。

これらのなかには未成品とみられるもの、完成品が欠失したものなどもあり、それぞれの属性の総数は一致しない。石材の種類（石質）については破片でも同定できるので総数としては最も多い。最も総量が少ないのは完形品で、長さや幅が把握できるものは少ない。また打製石鏃の特徴を最もよく表すのは基部であるが、破損により凹基か平基かの判断が難しいものもある。

そのような条件下にあっても、沖縄諸島全体としてみるとその特徴の把握はできる。地域（市町村）別に見るとうるま市が最も多く 39 点、次いで名護市 38 点、宜野湾市 35 点、そして那覇市 17 点、糸満市 16 点と続く。他は 8、7、6、5、3、2、1 点となるが、まったく発見されていない地域が 16 市町村である。また発見数の多いところは１個所の遺跡に集中しているのが特徴である。名護市の屋部前田原貝塚、うるま市の地荒原遺跡、宜野湾市の真志喜大川原遺跡、那覇市の城嶽貝塚、糸満市の兼城上原遺跡から集中出土している。

表３に見るように、発見された打製石鏃 192 点のうち、チャートが 156 個（約 81%）を占めている。その主な産地は図５に示す沖縄島北部の本部半島であるが、本部町では総数８点のみで、しかもそのうち６点はメノウ製である。さらに今帰仁村においてはまったく発見されていない。石材産地一帯から遠隔地になるほど逓減するという傾斜分布を示していないばかりか、産地ではない沖縄島中南部における発見数の方が多い。沖縄諸島発見打製石鏃の分布は地域や遺跡により偏在すること、空間的には広大であるが空白地域もあることが特徴である。

表１　地域（市町村）別打製石鏃発見数

地　区	先史時代遺物出土遺跡総数	打製石鏃発見遺跡数	打製石鏃数			地　区	先史時代遺物出土遺跡総数	打製石鏃発見遺跡数	打製石鏃数		
			完成品	未成品	計				完成品	未成品	計
伊平屋村	16	1	0	1	1	北中城村	3	0	0	0	0
伊是名村	19	2	1	2	3	中城村	2	0	0	0	0
伊江村	26	1	7	0	7	西原町	1	0	0	0	0
国頭村	20	0	0	0	0	浦添市	12	1	1	0	1
東　　村	1	0	0	0	0	那覇市	25	5	16	1	17
大宜味村	11	0	0	0	0	豊見城市	3	1	2	0	2
今帰仁村	36	0	0	0	0	南風原町	1	0	0	0	0
本部町	22	2	6	2	8	与那原町	0	0	0	0	0
名護市	26	2	29	9	38	南城市	26	1	1	0	1
宜野座村	21	1	0	1	1	八重瀬町	8	0	0	0	0
恩納村	9	0	0	0	0	糸満市	30	5	15	1	16
金武町	9	1	1	0	1	渡嘉敷村	6	1	1	1	2
読谷村	25	5	9	0	9	座間味村	11	0	0	0	0
うるま市	73	7	23	16	39	渡名喜村	5	0	0	0	0
沖縄市	6	3	4	2	6	粟国村	4	0	0	0	0
北谷町	15	2	4	1	5	久米島町	19	0	0	0	0
嘉手納町	6	0	0	0	0	小　計	156	14	36	3	39
宜野湾市	56	14	34	1	35	左表小計	(397)	(41)	(118)	(35)	(153)
小　計	397	41	118	35	153		553	55	154	38	192

(2)　時期別打製石鏃の図

沖縄諸島発見の打製石鏃の図を時期別に示す。

図１　沖縄諸島発見の打製石鏃　①～⑧（1～118）

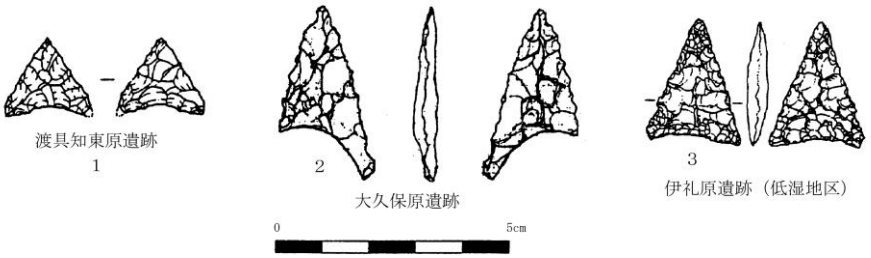
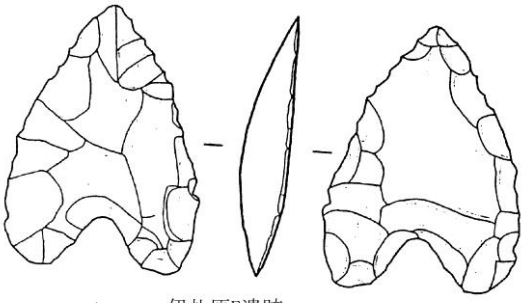
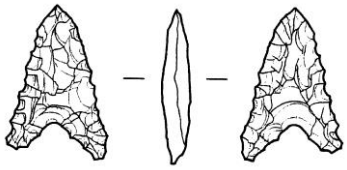


図１－①　1～3　縄文時代前期



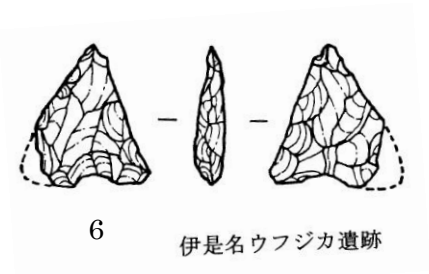
4　伊礼原E遺跡

図１-②)縄文時代中期(沖縄早期後葉)



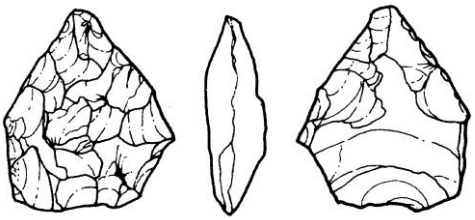
5　伊礼原E遺跡

図１-③)縄文時代中期または後期初（伊波式土器以前）の石鏃



6　伊是名ウフジカ遺跡

図１-④縄文時代後期末（沖縄前期末）



7　伊是名貝塚

図１-⑤　7　縄文時代後期～晩期（沖縄前期～中期）

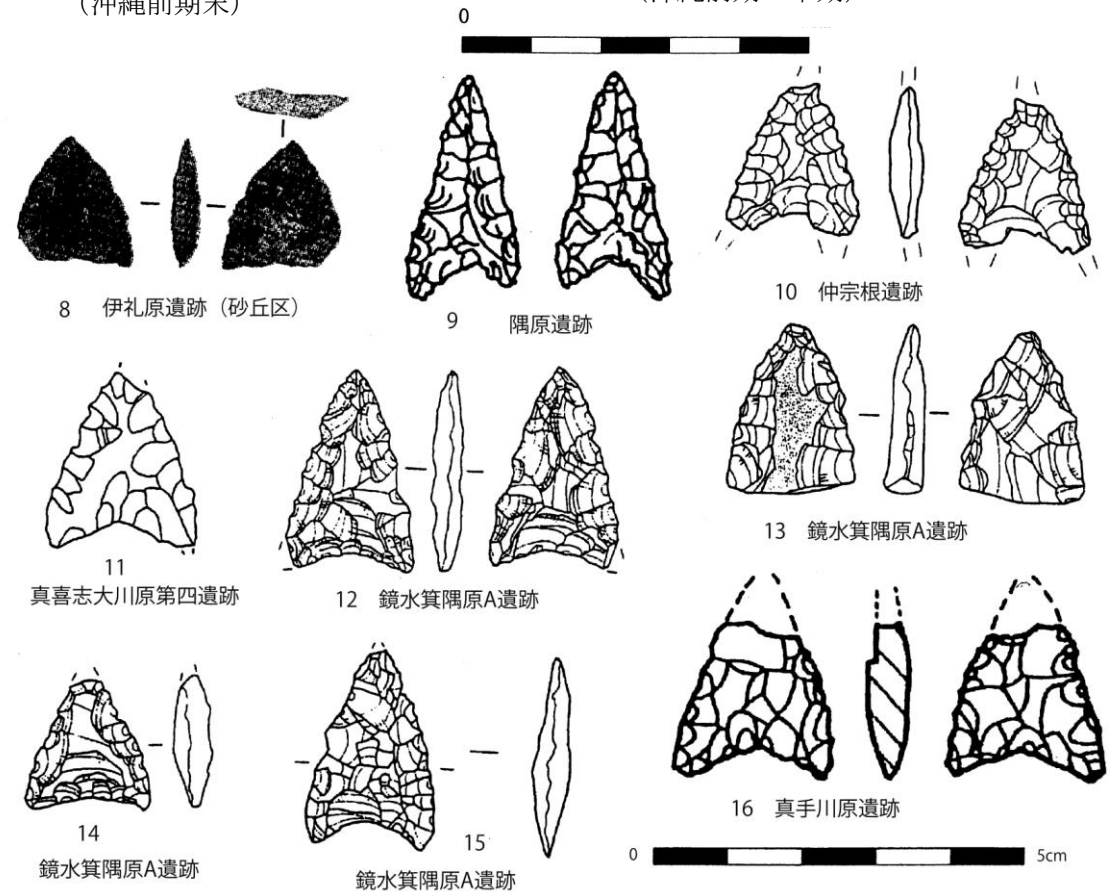


図１-⑤8～16　縄文時代後期～晩期（沖縄前期～中期）

註　「真志喜大川原第四遺跡」資料は宜野湾市教育委員会蔵・比嘉清和原図による

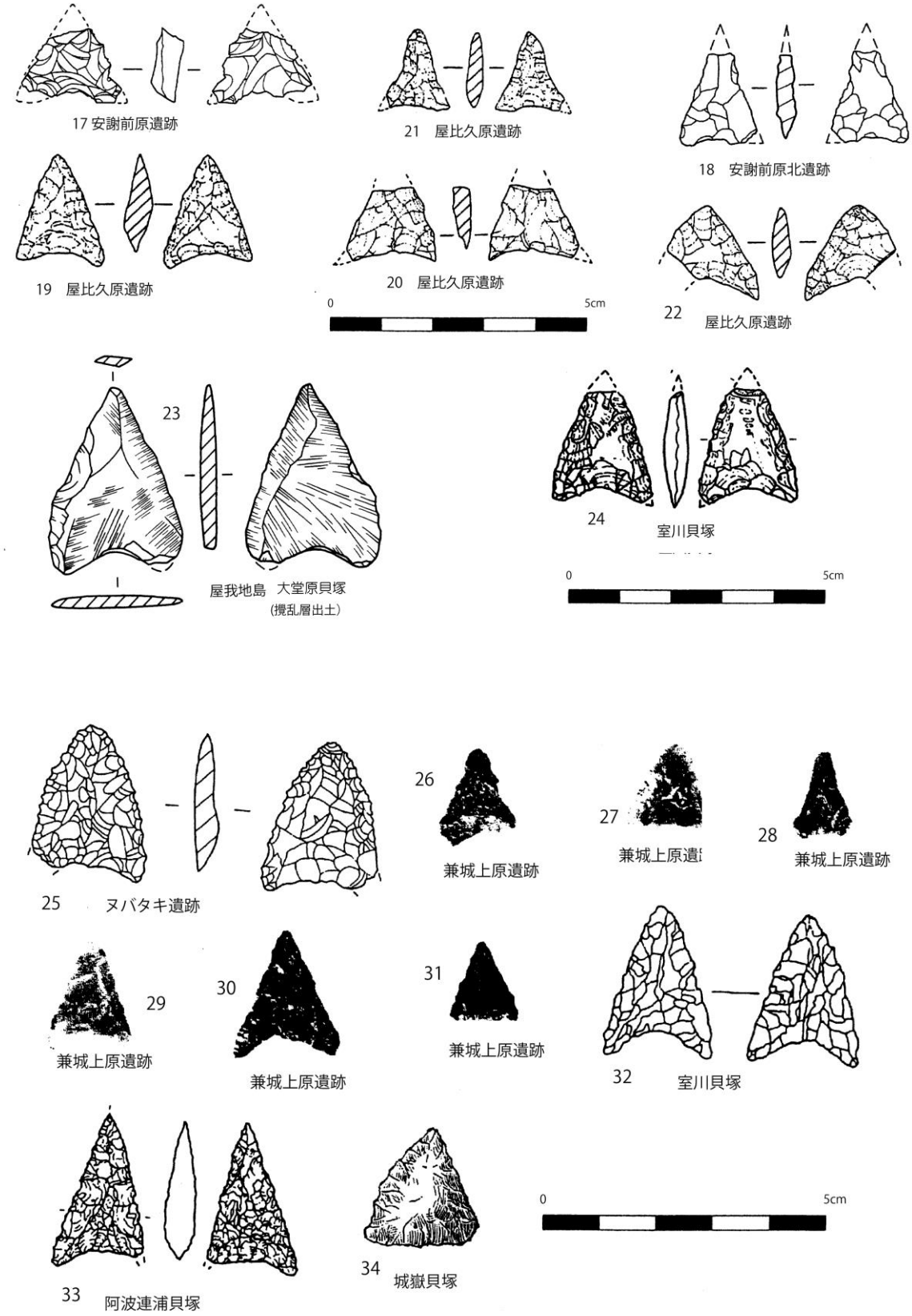


図 1－⑥ 17～34　縄文時代晩期

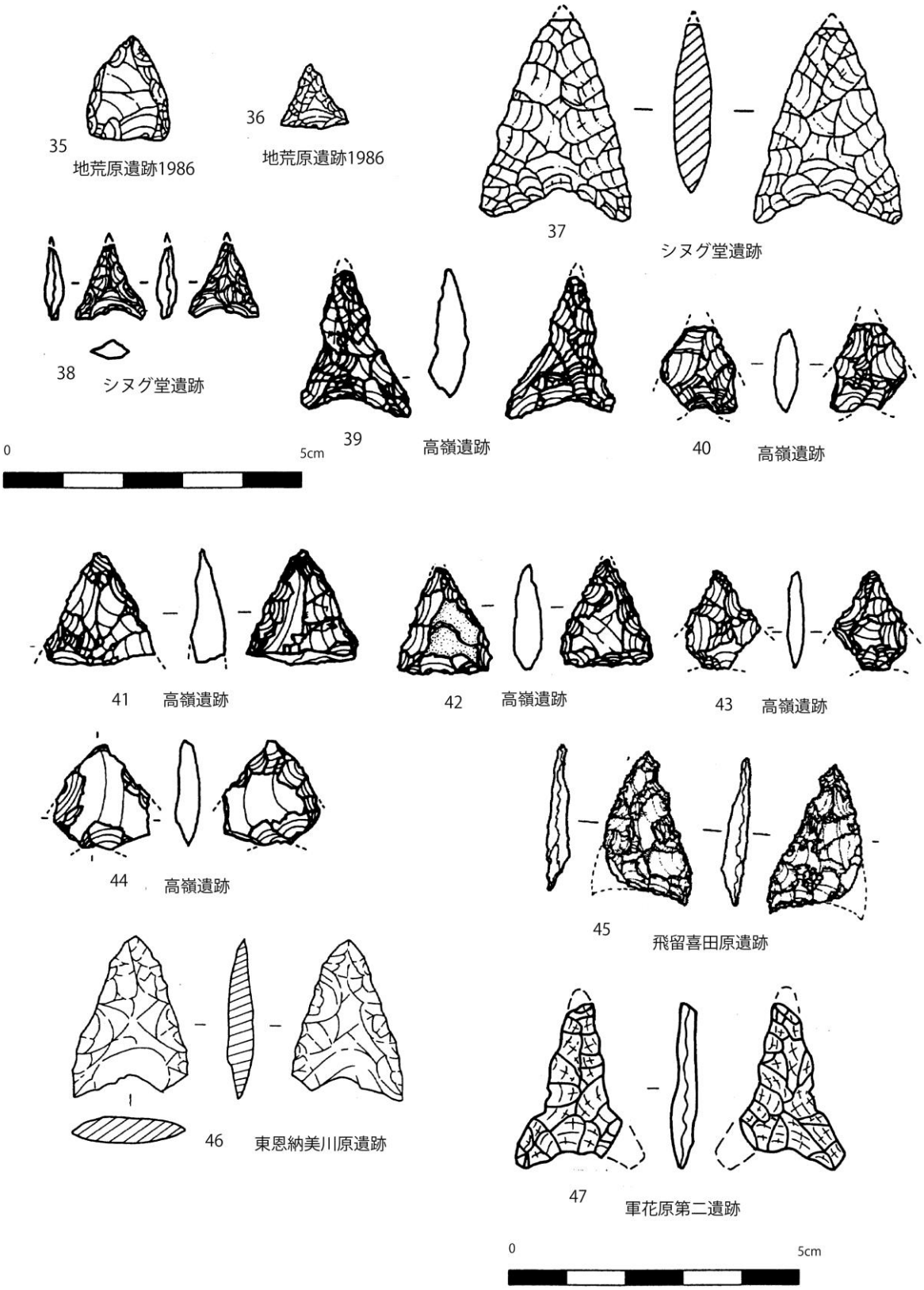


図１－⑥35～47　縄文時代晩期

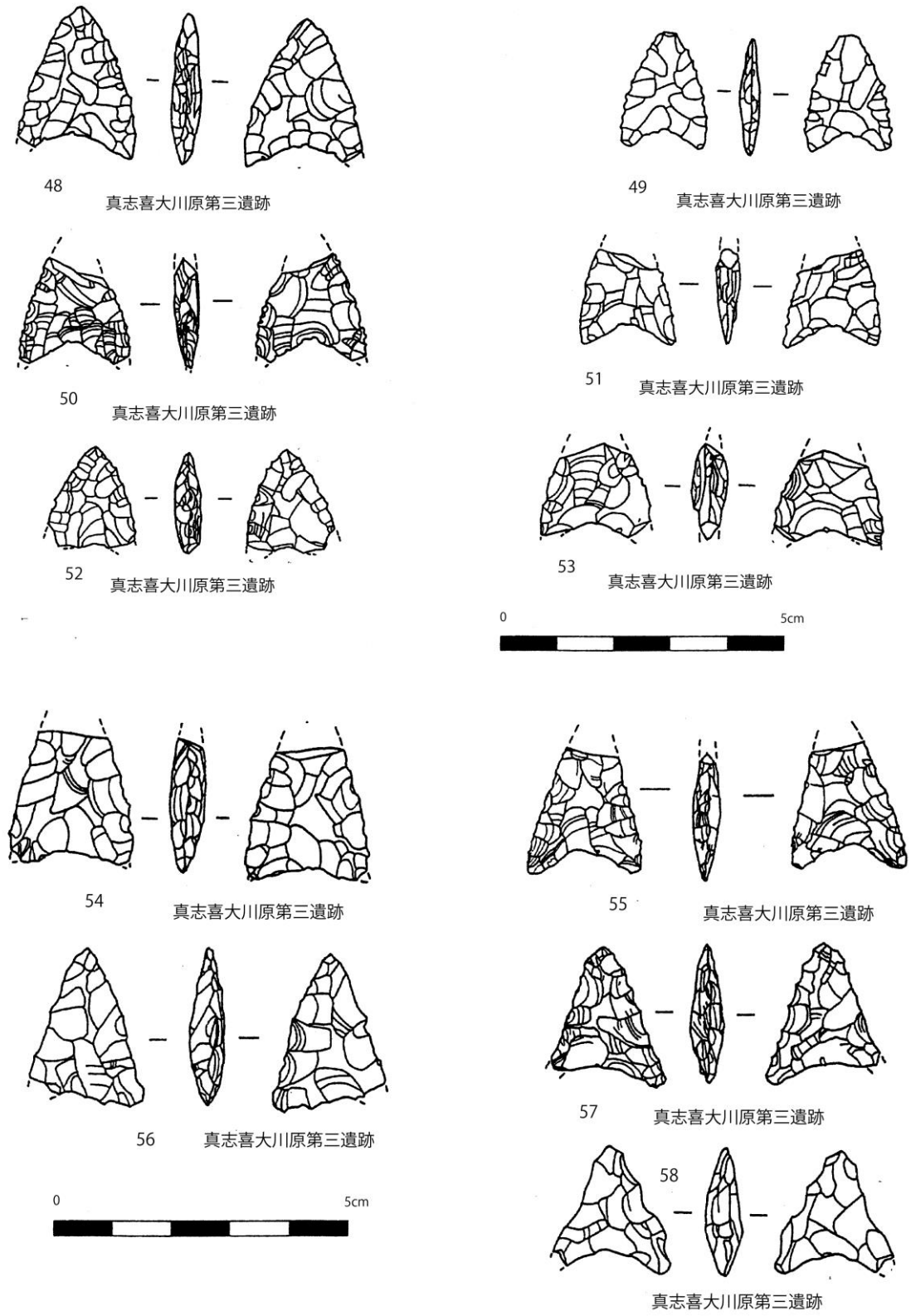


図１－⑥48～58　縄文時代晩期？　石鏃製作地跡？

註　「真志喜大川原第三遺跡」資料は宜野湾市教育委員会蔵・比嘉清和原図による

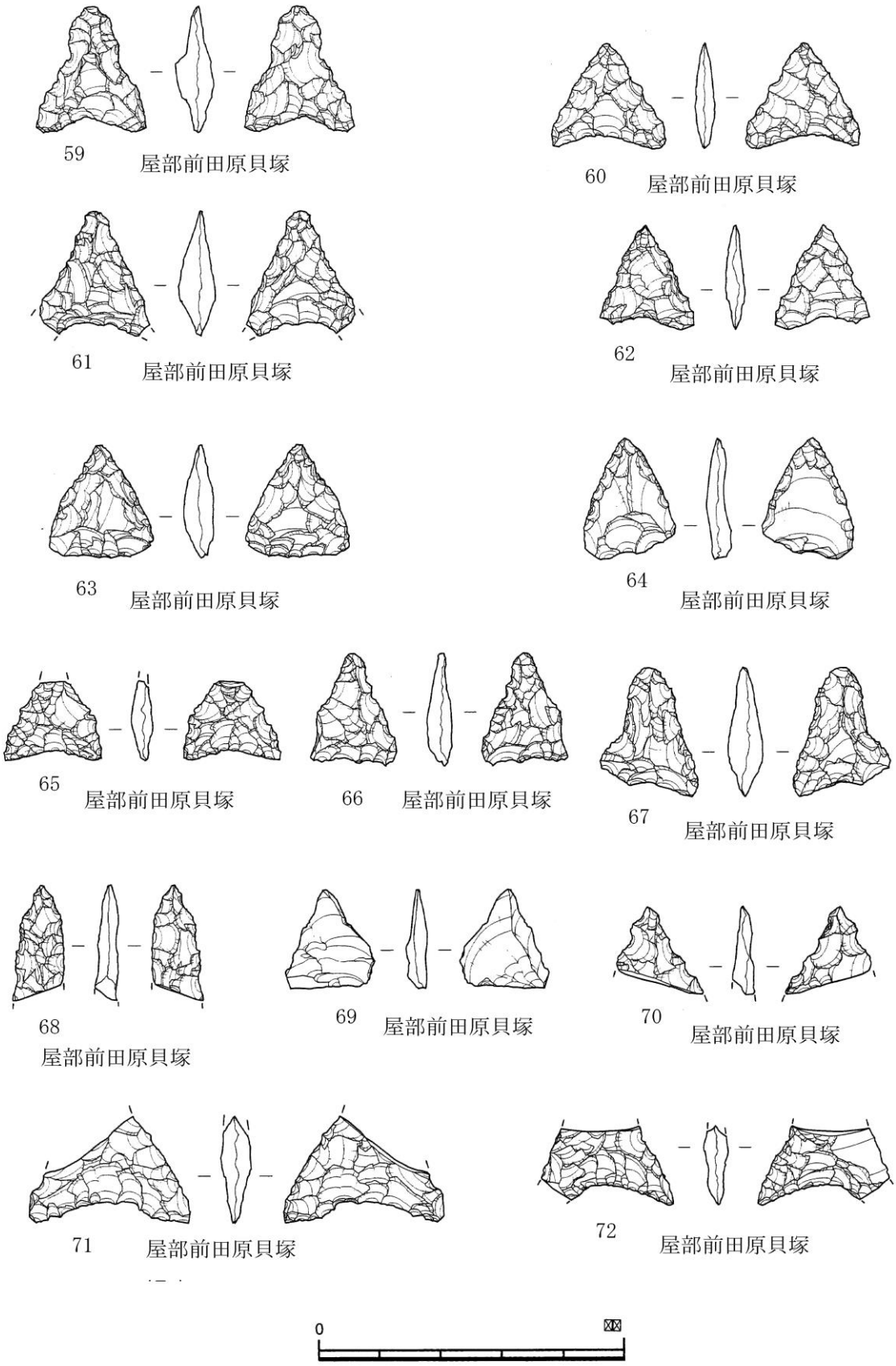
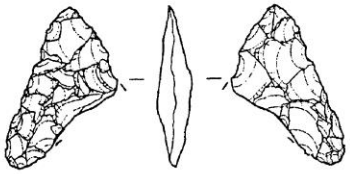
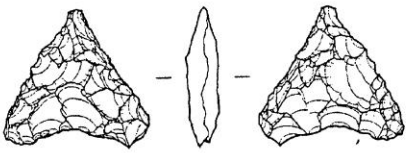


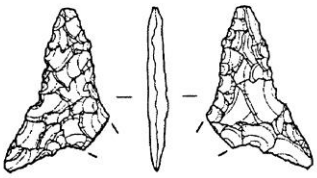
図１－⑥59～72　縄文時代晩期



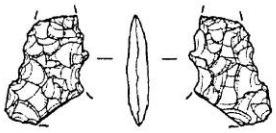
73　屋部前田原貝塚



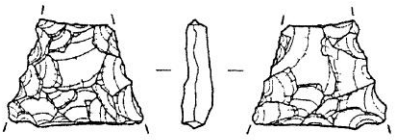
74　屋部前田原貝塚



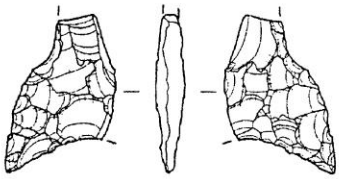
75　屋部前田原貝塚



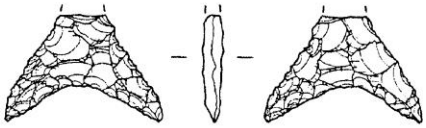
76　屋部前田原貝塚



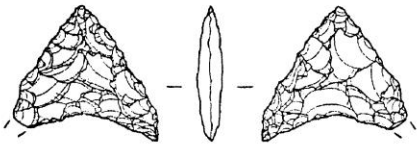
77　屋部前田原貝塚



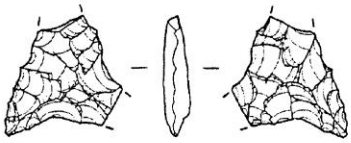
78　屋部前田原貝塚



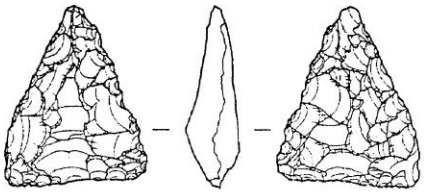
79　屋部前田原貝塚



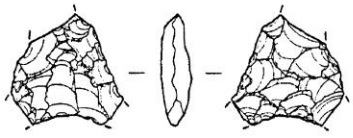
80　屋部前田原貝塚



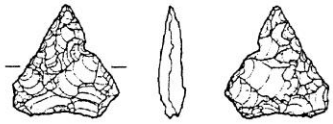
81　屋部前田原貝塚



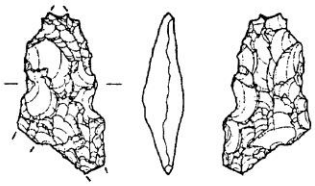
82　屋部前田原貝塚



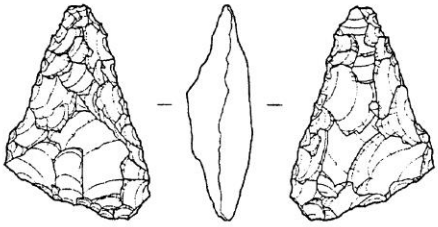
83　屋部前田原貝塚



84　屋部前田原貝塚



85　屋部前田原貝塚



86　屋部前田原貝塚

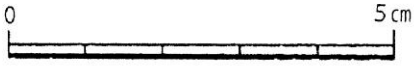


図１－⑥73～86　縄文時代晩期

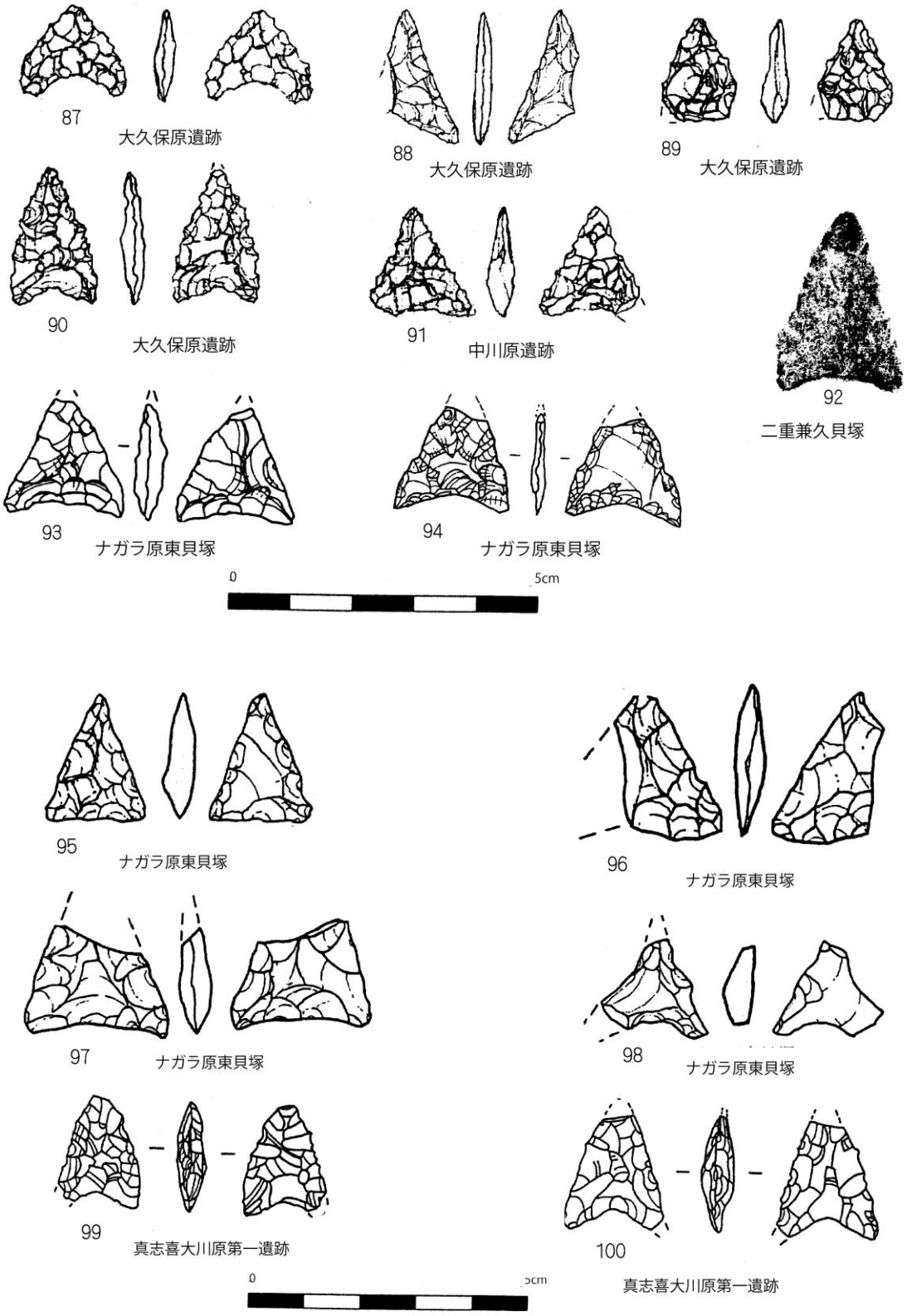


図１― ⑦ 87～100　沖縄貝塚時代後期

註　「真志喜大川原第一遺跡」資料は宜野湾市教育委員会蔵・比嘉清和原図による

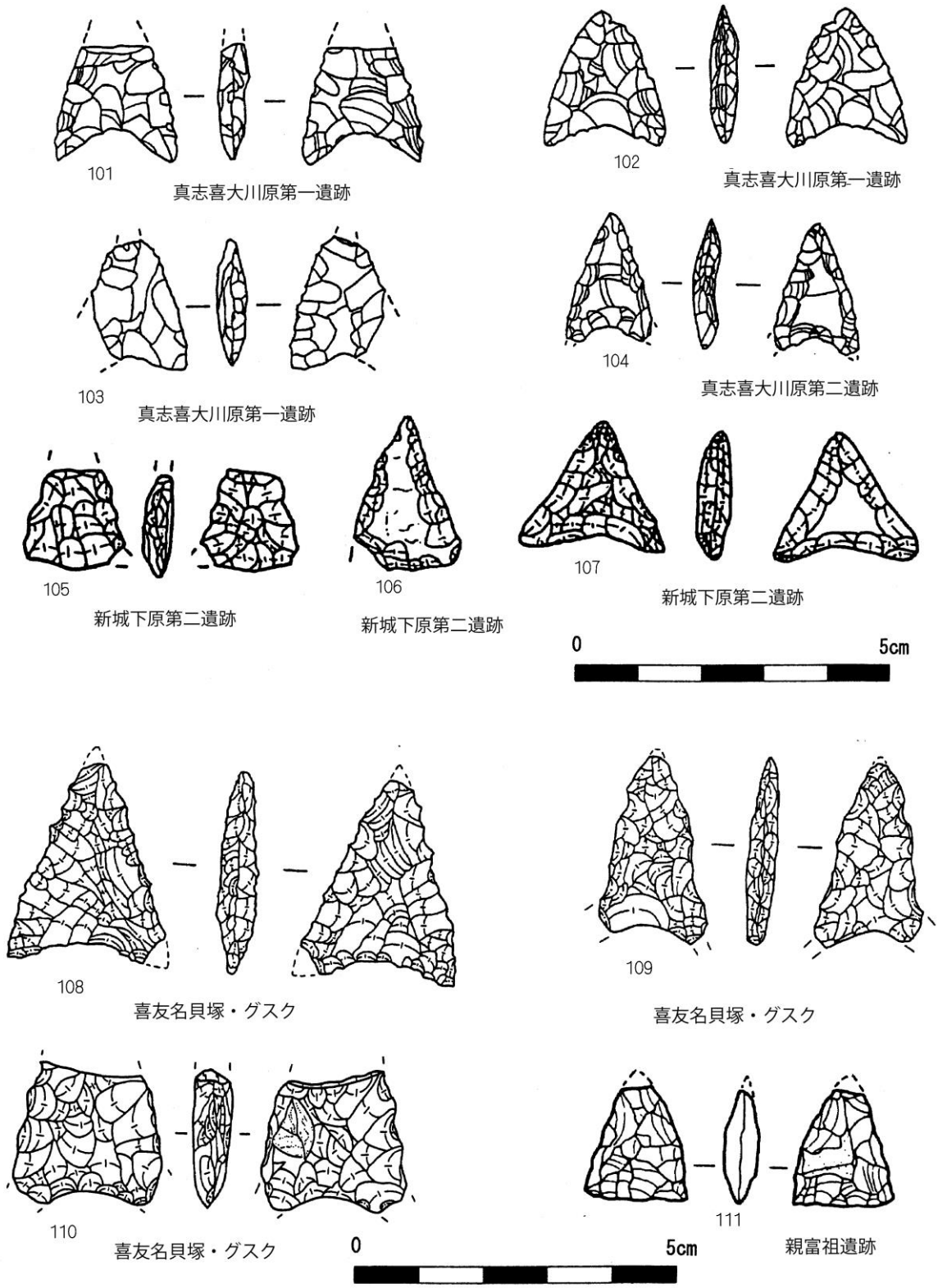


図１－ ⑦ 101~111　沖縄貝塚時代後期

註　「真志喜大川原第一遺跡」資料は宜野湾市教育委員会蔵・比嘉清和原図による

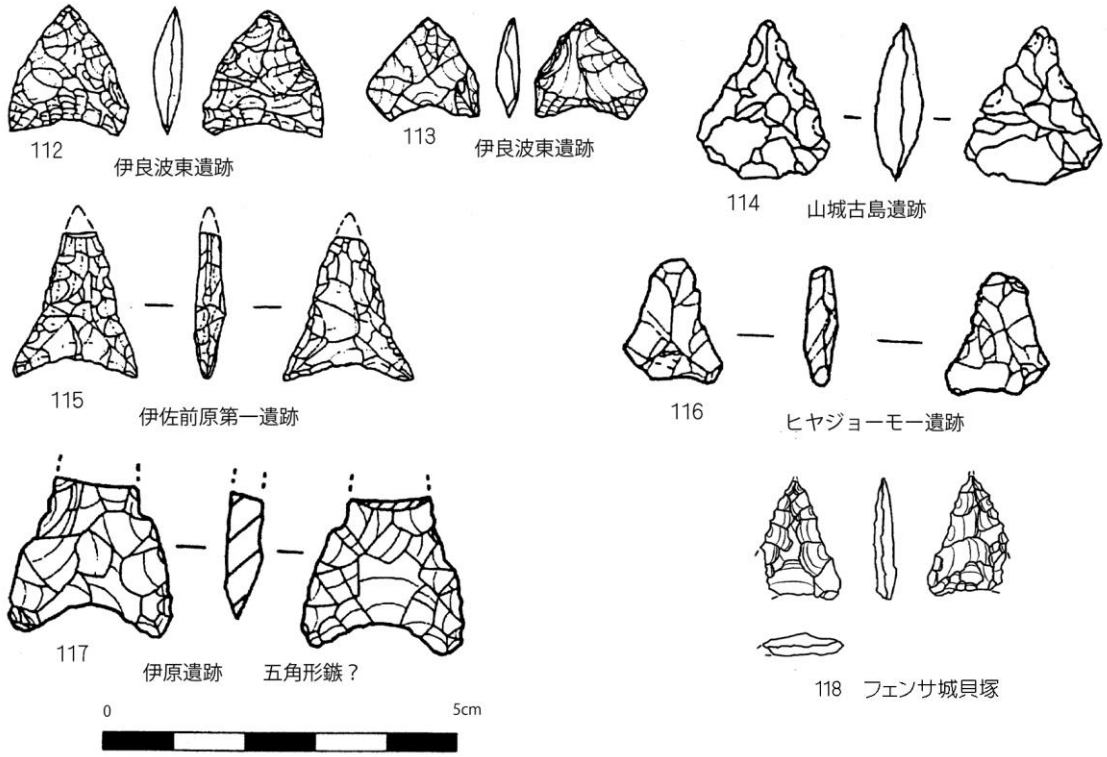


図１― ⑧112～118　グスク時代遺跡発見

第４節　石鏃の分類

石鏃は対象（動物）への貫徹効果や矢柄への装着を考慮したいくつかの形やサイズが存在するが、まず次のように分類されるのが一般的である。

(1)　打製石器か、磨製石器か、局部磨製石器か　　(2)　有茎か、無茎か

(3)　基部は抉り（凹部）があるか、平らか、膨らむか（尖・円状）

打製石鏃の場合、これらを組み合わせて次のように称される。

①　無茎鏃　凹基無茎鏃・・・・・・基部に抉入があり、茎がない

平基無茎鏃・・・・・・基部が直線的で、茎がない

尖・円基鏃・・・・・・基部が尖るもの・丸みをもつもの

②　有茎鏃　凹基有茎鏃・・・・・・基部に抉入があり、茎がある

平基有茎鏃・・・・・・基部が直線的で茎がある

凸基有茎鏃・・・・・・基部が突出し、茎がある

西日本地域は無茎石鏃が多く、特に九州・沖縄地域はほとんど無茎石鏃である。したがって、本稿ではすべて無茎を前提として有茎か無茎かの分類項目は設定しない。

上記の茎の分類基準に加えてさらに側辺の形状により、外側に膨らみをもつもの（外湾型）、直線状のもの（直辺型）、内側に湾入するもの（内湾型）の３型におおまかに分類される。側辺はさらに鋸歯状、波状の特徴でも細分される。さらに図２のような観察点により、身の長さ、脚の形状、基部の凹部の深浅などにより長脚・円脚・ハート形・鍬形・などに細分される。本稿における類型の分類は「基部の凹・平・凸」と「側辺部の外湾・直・内湾辺」を組み合わせた６類型の大分類段階にとどめて比較検討する。

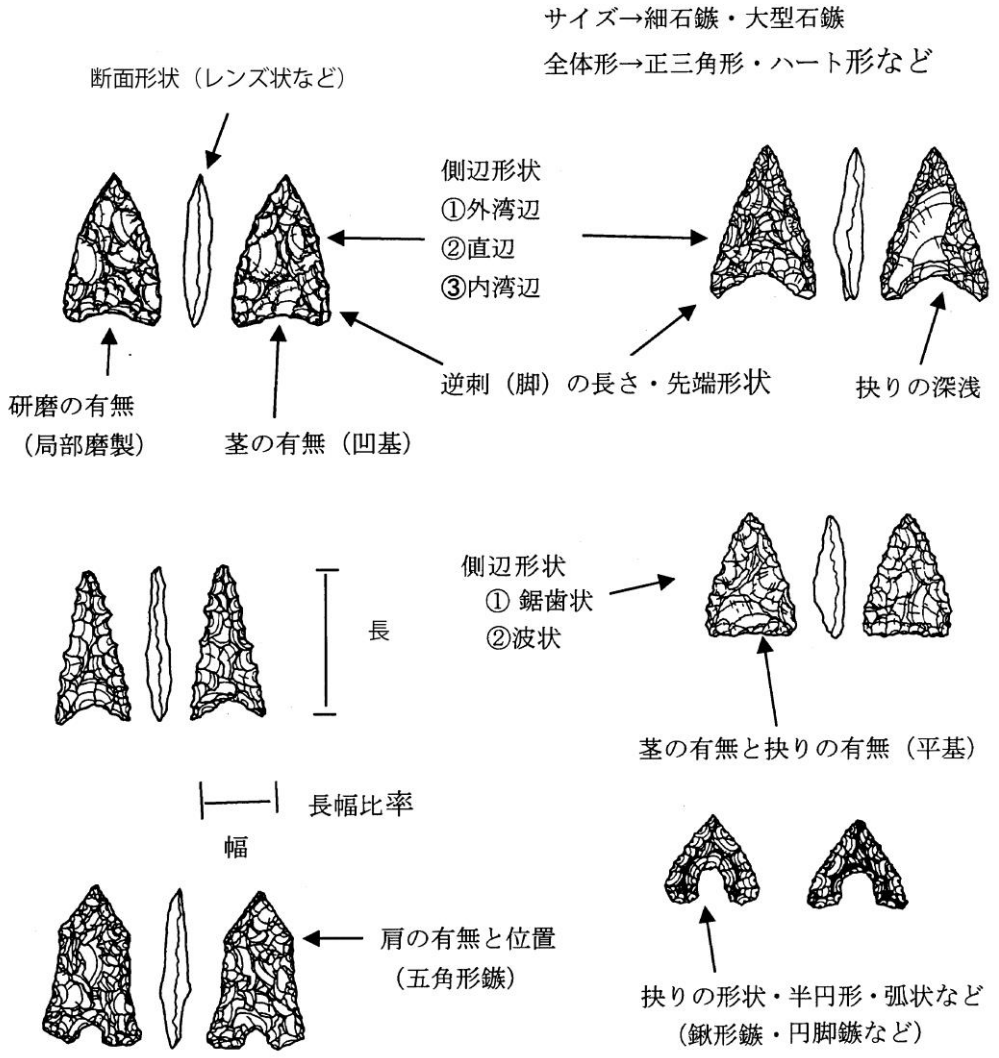


図２　縄文時代打製石鏃の種類・分類の観察点の例

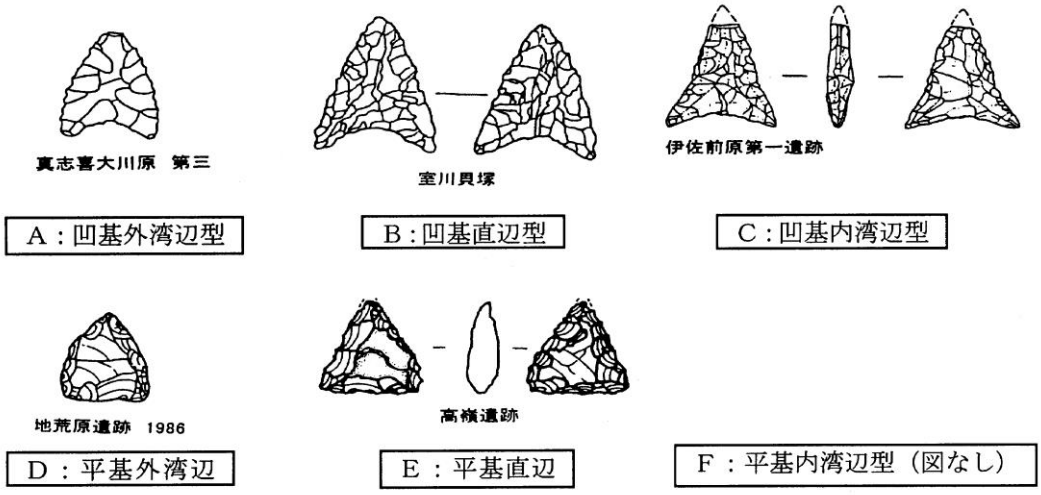


図３　打製石鏃類型

第５節　沖縄諸島における打製石鏃の主要発見地点

打製石鏃は伊平屋島、伊是名島、沖縄島本部半島、中部中央～東部、中南部西側一帯に分布している。慶良間諸島では渡嘉敷島で１個所のみに分布している。久米島では未発見である。

図４　打製石鏃主要発見地点（第６節表２をもとに作成）

※　渡名喜島・粟国島は図面縮尺の都合上除外した。久米島・慶良間諸島は沖縄島の西方に位置するが図面縮尺の都合上枠線で囲み、余白部に配置した。

●印は石鏃発見地のすべてを記しているわけではない。

第６節　沖縄諸島発見打製石鏃の属性データ

表２　沖縄諸島発見打製石鏃の時期・石材・計測値・類型

時　期	遺　跡　名	図番号	石 材	平　面　形　㎜			基部形状			側辺形状			類型
				長	幅	比	凹	平	円	外湾	直辺	内湾	
縄文早期末	渡具知東原遺跡　爪形層	出土なし											
縄文前期	渡具知東原遺跡　曽畑層	1	チャート	18	19	0.9	○				○		B
	大久保原遺跡①下層	2	チャート	32	—	—	○				○		B
	伊礼原遺跡　低湿区14層	3	チャート	26	20	1.3	○				○		B
縄文中期	伊礼原Ｅ遺跡①	4	輝緑岩	42	32	1.3	○			○			A
縄文中後	伊礼原Ｅ遺跡②	5	チャート	22	14	1.6	○				○		B
縄文後期末	伊是名ウフジカ遺跡	6	チャート	(20)	19	1	○				○		B
縄文後期または晩期	伊是名貝塚	7	チャート	29	24	1.2	○				○		B
	伊礼原遺跡砂丘区	8	チャート	17	15	1.1		○		○			D
	隅原遺跡	9	チャート	31	15	2.1	○				○		B
	仲宗根遺跡	10	チャート	(22)	18	1.2	○				○		B
	真志喜大川原第四遺跡	11	チャート	(24)	20	1.2	○			○			A
	鏡水箕之隅原Ａ遺跡	12	チャート	26	(17)	1.5	○				○		B
	〃	13	〃	23	17	1.3		○		○			D
	〃	14	〃	18	17	1	○			○			A
	〃	15	〃	26	17	1.5	○				○		B
	真手川原遺跡	16	チャート	(25)	21	1.2	○				○		B
	安謝前原遺跡	17	黒曜石	20	(21)	0.9	○				○		B
	安謝前原北遺跡	18	チャート	(19)	25	1.7		○			○		E
	屋比久原遺跡	19	メノウ	22	18	1.2	○				○		B
	〃	20	〃	(20)	(18)	1.1	○				○		B
	〃	21	〃	16	14	1.1	○					○	C
	〃	22	〃	19	—	—	○			○			A
	〃	×	〃	20	19	1		○		○			D
	大堂原貝塚（屋我地島）	23	細粒砂岩	37	26	1.4	○			○			A
	室川貝塚　　1993	24	チャート	(26)	17	1.5	○			○			A
縄文晩期	喜友名ヌバタキ遺跡	25	チャート	28	20	1.4	○			○			A
	兼城上原第二遺跡	26	チャート	17	13	1.3	○				○		B
	〃	27	〃	15	16	0.9	○				○		B
	〃	28	〃	16	10	1.6	○					○	C
	〃	29	〃	17	15	1.1		○			○		E
	〃	30	〃	22	19	1.1	○				○		B
	〃	31	〃	14	12	1.1		○			○		E
	室川貝塚　（T区３層）	32	チャート	27	20	1.3	○				○		B
	阿波連浦貝塚	33	チャート	27	(17)	1.6	○				○		B
	〃	×	黒曜石	17	17	1		○			○		E
	城嶽貝塚	34	チャート	21	20	1	○				○		B
	〃	×	チャート	13	12	1.1	○				○		B
	〃	×	チャート	13	13	1	○					○	C

時　期	遺　跡　名	図番号	石 材	平　面　形 mm			基部形状			側辺形状			類型
				長	幅	比	凹	平	円	外湾	直辺	内湾	
縄文晩期	城嶽貝塚	×	黒曜石	19	(12)	1.6	○			○			A
	〃	×	チャート	21	20	1	○				○		B
	〃	×	チャート	19	(18)	1		○			○		E
	地荒原遺跡　①　1986年	×	チャート	22	(20)	1.1	○				○		B
	〃	×	〃	21	(23)	0.9	○				○		B
	〃	×	〃	21	(17)	1.2		○		○			D
	〃	×	〃	20	(18)	1.1		○			○		E
	〃	35	〃	17	14	1.2		○		○			D
	〃	36	黒曜石	11	11	1		○			○		E
	地荒原遺跡　②　未刊	×	黒曜石	15	14	1.1	○				○		B
	〃	×	〃	19	(20)	0.9	○				○		B
	〃	×	チャート	—	16	—	○				○		B
	〃	×	黒曜石	18	19	0.9	○				○		B
	〃	×	チャート	21	17	1.2		○			○		E
	〃	×	〃	29	(22)	1.3		○		—	—	—	—
	〃	×	〃	19	(16)	1.2		○			○		E
	〃	×	〃	(20)	20	1		○		○			D
	〃	×	〃	16	14	1.1	○					○	C
	シヌグ堂遺跡	37	チャート	(37)	25	1.5	○				○		B
	〃	38	〃	13	12	1.1	○				○		B
	高嶺遺跡	39	黒曜石	26	18		○					○	C
	〃	40	チャート	—	—	—	○						
	〃	41	〃	—	—	—	○					○	C
	〃	42	〃	19	16			○			○		E
	〃	43	黒曜石	—	—	—	○						
	〃	44	石英	—	—	—	○						
	飛留喜田原Ｂ遺跡	45	黒曜石	24	(17)	1.4	○				○		B
	東恩納美川原遺跡	46	チャート	27	20	1.3	○			○			A
	軍花原第二遺跡	47	チャート	(30)	(23)	1.3	○					○	C
	真志喜大川原第三遺跡	48	チャート	27	(21)	1.3	○			○			A
	〃	49	—	21	15	1.4	○			○			A
	〃	50	—	—	20	—	○			○			A
	〃	51	—	—	17	—	○			○			A
	〃	52	チャート	(19)	—		○			○			A
	〃	53	石英	—	(20)	—	○				○		B
	〃	54	チャート	—	(21)	—	○				○		B
	〃	55	—	—	20	—	○			○			A
	〃	56	—	25	(20)	1.2	○				○		B
	〃	57	—	22	(20)	1.1	○				○		B
	〃	58	チャート	23	(20)	1.1	○				○		B

時　期	遺　跡　名	図番号	石 材	平　面　形 mm			基部形状			側辺形状			類型
				長	幅	比	凹	平	円	外湾	直辺	内湾	
縄文晩期	屋部前田原貝塚	59	チャート	20	18	1.1	○					○	C
	〃	60	チャート	17	19	0.9	○				○		B
	〃	61	チャート	20	—	—	○				○		B
	〃	62	チャート	16	15	1.7	○				○		B
	〃	63	チャート	18	16	1.1		○		○			D
	〃	64	チャート	18	15	1.2	○			○			A
	〃	65	チャート	×	16	0.8	○			○			A
	〃	66	チャート	18	14	1.3		○			○		E
	〃	67	チャート	19	—	—	○				○		B
	〃	68	チャート	—	8	—							—
	〃	69	チャート	16	—	—		○			○		E
	〃	70	チャート	—	—	—					○		—
	〃	71	チャート	—	26	—	○						—
	〃	72	チャート	—	×	—	○						—
	〃	73	チャート	19	×	—	○				○		B
	〃	74	チャート	17	19	0.9	○				○		B
	〃	75	チャート	21	—	—	○					○	C
	〃	76	チャート	—	—	—	○					○	C
	〃	77	チャート	—	—	—		○			○		E
	〃	78	チャート	—	—	—							—
	〃	79	チャート	—	20	—	○				○		B
	〃	80	チャート	16	19	0.8	○			○			A
	〃	81	チャート	—	—	—	○				○		B
	〃	82	チャート	23	18	1.2		○			○		E
	〃	83	チャート	—	—	—	○						—
	〃	84	黒曜石	20	12	1.2	○				○		B
	〃	85	黒曜石	—	—	—					○		—
	〃	86	チャート	23	—	—	○				○		B
沖縄 貝塚時代 後期	大久保原遺跡②　上層	87	チャート	15	18	0.8	○			○			A
	〃	88	〃	28	—	—	○				○		B
	〃	89	〃	17	13	1.3		○		○			D
		90	〃	22	14	1.6							?
	中川原貝塚	91	—	17	18	0.9	○				○		B
	二重兼久原貝塚	92	—	30	21	1.4	○				○		B
	ナガラ原東貝塚　1次	93	チャート	19	19	1	○				○		B
	〃　2次	94	チャート	(17)	19	0.9	○			○			A
	〃　6次	95	チャート	(16)	(9)	1.8	—	—	—		○		—
	〃　7次	96	チャート	26	(17)	1.5	○				○		B
	〃　8次	97	チャート	22	17	1.3		○			○		E
	〃　8次	98	チャート	(19)	25	0.9	○				○		B

時　期	遺　跡　名	図番号	石 材	平　面　形 mm			基部形状			側辺形状			類型
				長	幅	比	凹	平	円	外湾	直辺	内湾	
沖縄 貝塚時代 後期	真志喜大川原第一遺跡	99	石英	20	(15)	1.3	○			○			A
	〃	100	—	(24)	(19)	1.2	○				○		B
	〃	101	チャート	—	19	—	○				○		B
	〃	102	石英	21	19	1.1	○			○			A
	〃	103	チャート	—	—	—	○			○			A
	真志喜大川原第二遺跡	104	—	21	14	1.5	○				○		B
	新城下原第Ⅱ遺跡	105	チャート	20	23	0.8	○				○		B
	〃	106	黒曜石	—	16	—		○			○		E
	〃	107	チャート	25	(16)	1.5		○			○		E
沖縄 グスク 時代	喜友名貝塚・グスク	108	チャート	32	(25)	1.3	○				○		B
	〃	109	石英	29	(18)	1.6	○				○		B
	〃	110	チャート	—	23	—	○				○		B
	親富祖遺跡	111	チャート	(21)	16	1.3		○		○			D
	伊良波東遺跡	112	黒曜石	19	17	1.1	○			○			A
	〃	113	黒曜石	15	17	0.9	○				○		B
	山城古島遺跡	114	チャート	23	19	1.3	○				○		B
	伊佐前原第一遺跡	115	チャート	(23)	17	1.3	○					○	C
	ヒャージョー毛遺跡	116	チャート	18	(14)	1.3	○					○	C
	伊原遺跡	117	チャート	—	23	—	○			○			A
	フェンサ城貝塚	118	チャート	18	—	—	○				○		B
			平均	21.5	18	1.2							

※（　）は推測値

計測値は凹基の場合調査報告書によって計測基準が異なるので、凹基端をつなぐ線までとし、図上計測による概数値に置き換えた。また、残存部の数値のみを示した報告書もあるが、これを使用すると混乱するので、同様に図上計測値による概数値に置き換えた。

※　名護市屋部前田原貝塚出土の打製石鏃28個は上記の表に含まれていない。

※　類型　　A：凹基外湾型　　B：凹基直辺型　　C：凹基内湾型
D：平基外湾型　　E：平基直辺型　　F：平基内湾型

第７節　沖縄諸島における打製石鏃の発見状況

九州などの日本縄文時代の打製石鏃出土例と比べると、沖縄諸島先史時代における打製石鏃の発見例は既述のように完成品（破損も含む）154 個、未成品とみられるもの 38 個を合わせても総数 192 個ときわめて少ない。別項における比較でも明らかなように、南九州では一遺跡だけで沖縄諸島の総数をかなり上回る例も少なくない。沖縄諸島では弓射による狩猟や漁労はあまり発達しなかった。イノシシ以外には中型動物は棲息していなかったとみられ、弓射の必要性は低かったと考えられる。

しかし図４にみるように空間的には久米島・渡名喜島・粟国島などの遠隔地離島を除いて多くの島々に打製石鏃が分布していることから、どのような使われ方をしたのかは別にして、弓矢を作ることが広い地域でおこなわれたことは確かである。表２にみるように、沖縄諸島先史時代における打製石鏃の最古の例は縄文時代前期に属する読谷村渡具知東原遺跡曽畑式土器層、同村大

久保原遺跡下層（室川下層式土器・条痕文土器層）および北谷町伊礼原Ｅ遺跡曽畑層から各１点出土の計３点である。

次いで縄文時代中期に属する伊礼原Ｅ遺跡低湿区で、西日本に分布する船元系土器を伴う層出土の１点がある。日本縄文文化の土器型式または縄文土器との関連の濃い土器型式の層であり、特に船元系土器は搬入された縄文土器そのものである。

伊礼原Ｅ遺跡のもう１点は面縄東洞式・仲泊式土器を伴い、伊波・荻堂式土器は伴わないことから、縄文時代中期末または後期初頭（沖縄貝塚時代前期初頭）に位置するとみられる。

ここで注目すべき点は、縄文後期（沖縄前期）の中心的土器型式である伊波・荻堂式土器の時期に限定して所属させられる石鏃は今のところ確認できないことである。伊是名島ウフジカ遺跡の場合は第Ⅲ層の大山式土器出現期に伴うので、縄文後期後半に属する。一方、縄文晩期（沖縄中期）に限定して所属すると判定できる例は 15 遺跡である。このことから、縄文後期または晩期と幅をもたしてある遺跡については、晩期（沖縄中期）に属する可能性が強いことを示している。

これまで沖縄諸島における石鏃の最古の時期は伊是名ウフジカ遺跡の縄文後期（沖縄前期）の後半（大山式土器期）とされてきたが、上述のように縄文時代前期・中期の石鏃も発見されて、時期を大きく遡ることとなった。これによって、沖縄諸島に石鏃が流布する動きは二つの波（時期）が存在することが明らかとなった。縄文時代前・中期を中心とする時期と、一時中断して縄文時代後期後半から晩期（沖縄前期後半～中期）の時期である。沖縄諸島における石鏃出現には２つの時期があったのである。

以上は縄文時代に属する打製石鏃の発見状況であるが、沖縄貝塚時代後期半ばおよびグスク時代の遺跡から発見されている例も少なからず存在する。特に伊江島ナガラ原東貝塚において、７点の打製石鏃が文化層から出土している事実をどう解釈するかが問題である。私は後期後半遺跡発見石鏃も、グスク時代遺跡発見石鏃も縄文晩期に属し、後世に混入したものと考えている。奄美群島、沖縄諸島先史時代文化は、土器文化を中心に縄文時代文化とのかかわりのなかで形成されてきた。島嶼性とサンゴ礁という環境のなかで独自の地域的特質を形成しながらも、一方では大局的には九州の先史時代の動きに連動しており、打製石鏃文化もまた同様の展開をしていたことが推測される。それからすると、沖縄貝塚時代後期およびグスク期発見の打製石鏃には文化的な整合性を欠いた違和感がある。

第８節　沖縄諸島発見打製石鏃の石材の産地

打製石鏃は獲物に対する貫徹力を高めるために、より硬質の石材を必要とする。硬質であるほど鋭利な先端あるいは刃部（側辺）を成形することができる。また、それは加工技術の対象としても硬質であることが望ましい。打製の名が示すように、打ち欠きや押し剥ぎによって目的の形状に向けて剥離しながら成形するので、硬質な石材ほど鋭利な縁辺を形成する。

そのような硬質の石材は沖縄諸島ではチャートや石英である。発見された打製石鏃の多くはチャート製であるが、その自然産地（露頭分布地）は沖縄島本部半島、伊江島、伊是名島、伊平屋島に限られている。伊江島のチャートは脈が多く細かく破砕しやすいので、石鏃の加工にはあまり適しない。伊平屋島のチャートは緻密で石鏃に適しているが、沖縄島の側からすると本部半島にも同質のチャートがあり、伊平屋島は対象地ではなかった可能性がある。

本部半島のチャートも伊平屋島産に近い良質の石材である。沖縄諸島発見のチャート製石鏃、剥片石器のほとんどは本部半島産とみてよいだろう。石英は沖縄島北部地域の別の岩石の中の細

い脈や地層の中の塊として存在するが、細かく破砕しやすいのでチャート製に比べて石鏃材料としての利用は少ない。一方、これらの剥片にはスクレイパー（掻器・削器）として加工されたものも含まれており、必ずしも石鏃製作のみを目的としていたのではない。石鏃が発見されない遺跡においてもチャート片を伴う例はある。

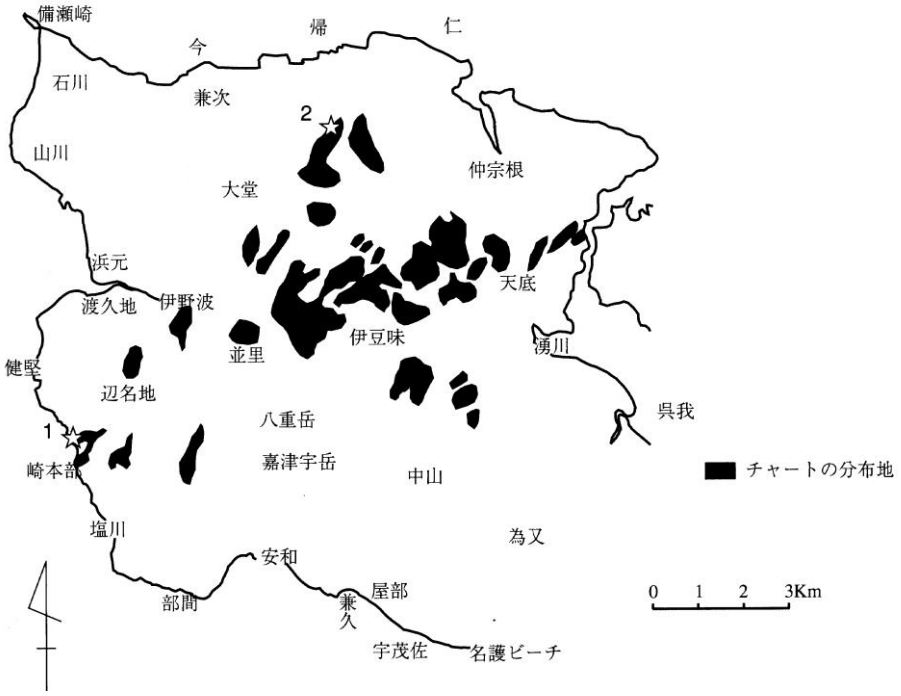
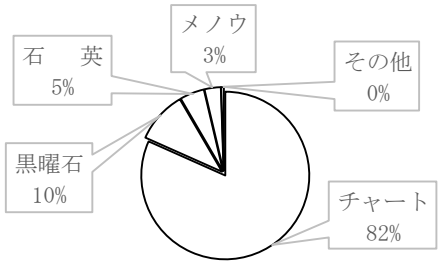


図５　石鏃の主要石材「チャート」の分布　（伊江島・伊平屋列島は省略）
出典『伊是名貝塚―沖縄県伊是名貝塚の調査と研究』　P. 320
伊是名貝塚学術調査団編　　勉誠出版　2001 年

沖縄諸島発見打製石鏃の石材組成は、発見されている 192 個のうち、最も多い石材はチャート 156 個（約 81%）と圧倒的多数を占めている。九州縄文文化との関わりによってもたらされた弓射の技術文化が、自ら地元のチャート石材を用いて石鏃を製作する段階にまで、ある程度の広がりをもっていたのである。黒曜石の 19 個（約 10%）がこれに次ぐ。黒曜石のほとんどは九州佐賀県腰岳産であることが、熊本大学の小畑弘己らの分析によりすでに判明している（小畑ほか 2004）。腰岳産黒曜石の流布は、沖縄諸島における弓射の技術文化がまさに九州を起源地とすることを示している。より良質な石材である黒曜石は受け入れ側の需要によるのか、九州縄文人

表３　沖縄諸島発見打製石鏃の石材組成



石　材	数量	
チャート	156	
黒曜石	19	
石　英	9	
メノウ	6	
その他	1	輝緑岩
	1	細粒砂岩

の拡散活動に伴う携行品なのかによって評価が異なってくるが、発見数量は少ない。しかし沖縄諸島の広い範囲に分布している。

第９節　打製石鏃の製作地と搬入品

沖縄諸島発見打製石鏃はどこで製作されたのか。現在のところ打製石鏃製作地とされる遺跡は宜野湾市真志喜の大川原第三遺跡１個所が確認されている。石鏃の得られた地点は土器など他の遺物はあまり伴わず、南北約 10m、東西約６ｍのわずかな範囲から 11 個の打製石鏃が検出された。１点のみ石英で、ほかはチャートである。いかにも工房の状況を示すように、チャートを材料とする 90 余片の未成品、剥片、石屑が伴出している。前項で述べたように、石材チャートの自然露頭産地は沖縄島北部の本部半島一帯である。この工房を残した集団は、遠隔地の本部半島産チャートを入手して石鏃を製作していたことは確実であろう。

工房跡といえるのはこの一個所だけであるが、いくつかの遺跡から多数のチャート片が伴出していることは前項で述べたとおりである。これらのチャートは明らかに石器として利用するために、本部半島地域からもたらされたものである。すでにいくつかの発掘調査報告書において指摘されているように、これらの剥片、石屑の存在は石鏃が主にそれぞれの居住地（集落）において製作されていたことを示している。石鏃がある特定の土地や集団によって製作され、取引によって沖縄諸島に流通したような痕跡は見当たらない。

居住地における製作を示すもう一つの証左は、石鏃の未成品が出土していることである。表１に示すように、全192個中未成品が38個確認されている。このうち４個について図６に例示する。これらはそれぞれの遺跡から出土したもので、当該集団の居住地（集落）において製作されたものとみられる。このように石鏃は基本的には各集団が自ら製作使用することが一般的なシステムだったといえる。石斧と異なって、既製石鏃を融通しあうほどの需給関係は存在しなかったのではないか。

実は情報収集の障害となる問題がある。発掘調査報告書に石器製作に伴って派生したであろう剥片・石屑など石器石材についての記載が省略されていることが比較的多いのである。石器がそれぞれの集落において製作されたのか、石材産地で加工してから完成品を持ち帰ったのか、一定の圏域で既成石器を融通（取引）し合っていたのかなどを考察するデータが不十分なため、取り扱いに苦慮することが少なくない。石材剥片や石屑について数量まで記載されている発掘調査報告書には数十片、数百片の例があることから、多くの遺跡はそれが一般的であった可能性が高い。

一方、別項で扱うように沖縄諸島発見の打製石鏃文化は九州縄文文化を起源地としていることから、当然これらのなかに搬入品が含まれている可能性がある。同じく別項で扱うが、沖縄諸島において製作したとみられる石鏃は簡略化されており、緻密な押圧剝離作業によって仕上げる技術段階に達していない。そのなかで、北谷町伊礼原Ｅ遺跡出土の２例の石鏃（図１の４・５）はかなりていねいな仕上げで、均整のとれた対称形をなしている。

図 1-③５の石鏃は長身鏃で凹基の抉りも比較的深い。そのために脚は相対的に長い。このようなタイプは在地の石鏃には見られない。また、図 1-②4 の石鏃はサイズが長 42ｍｍ、幅 32ｍｍとかなり大型である。全国的に縄文時代の打製石鏃の長さは 30ｍｍ以内が一般的で、それを超えるものはそれほど多くないとされている。この石鏃は縄文時代石鏃文化のなかでも特異なサイズであるといえる。さらに側辺と脚部が丸味を帯びて全体形がいわゆるハート形をしている。側辺部はていねいな押圧剝離によって仕上げられている。長さ、形状、調整ともに在地打製石鏃にはな

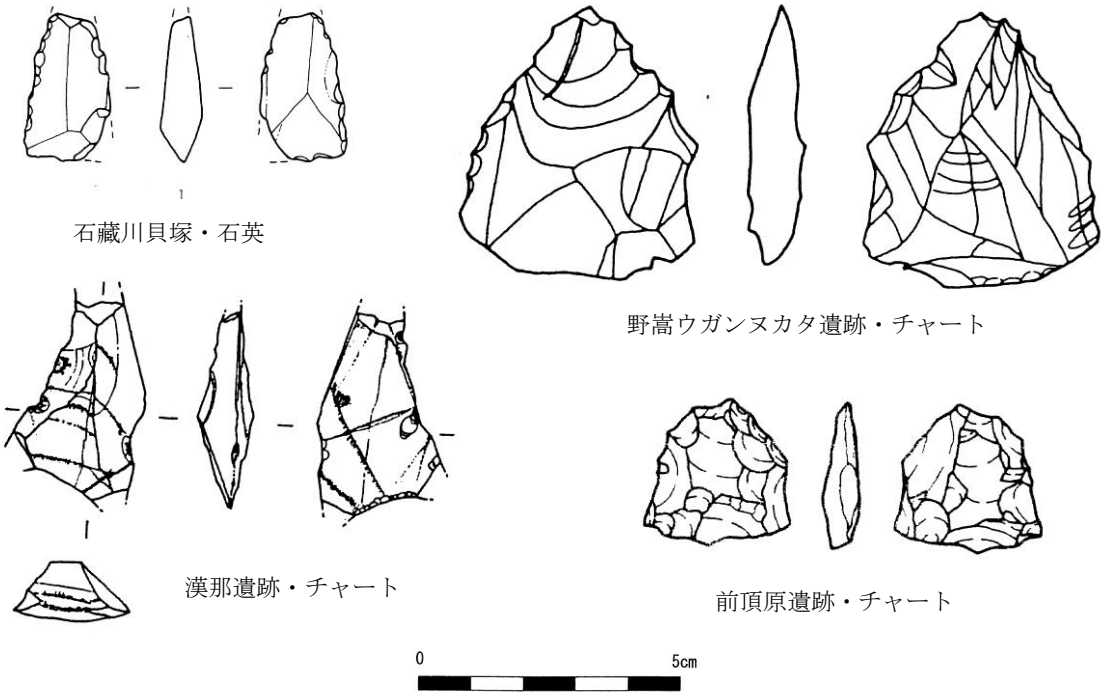


図６　打製石鏃未成品

い特徴を有していることから、図 1-③5 も含めて九州地域からもたらされた搬入品であろう。石材の種類が沖縄諸島発見の石鏃としては唯一の輝緑岩製であることも、搬入品であることを示している。

図１-①の２の大久保原遺跡下層出土の石鏃も基部の抉りが深く､脚が長くていねいに仕上げられていて独特の形状を有しており、搬入品の可能性もある。沖縄諸島発見の打製石鏃は全体的にはあまり緻密な造りとはいえない。剝片石器も少ないことから、押圧剝離技術に習熟していなかったのであろうか。しかし石斧の場合も全面を研磨するていねいな造りに乏しく、剝離面の浅い凹みや敲打痕を残すものがよくみられる。道具の機能のみを重視して、相称形、均整についての関心が希薄であるといえる。

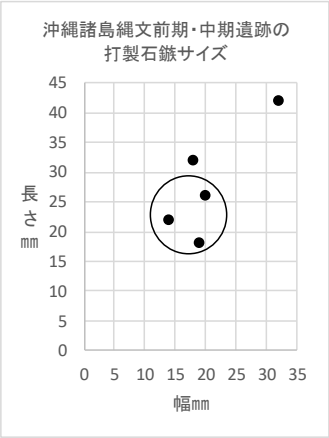
第 10 節　打製石鏃のサイズ

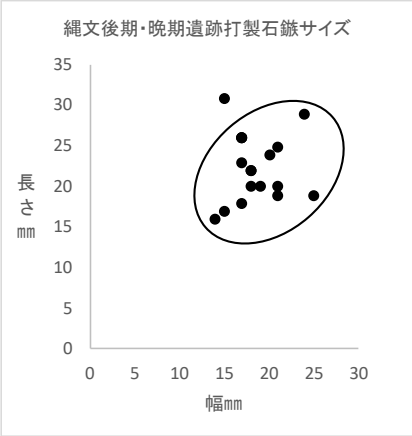
表２、表４、表５に沖縄諸島発見打製石鏃のサイズを示した。上述したように長さ 30㎜ 以下、幅 25 ㎜以下におさまるものがほとんどを占める。これは縄文時代の一般的な傾向と同じであり、幅との比も 1～1.5 が多く、三角形状を呈する。長さが幅の２倍以上（長幅比 2.0 以上）になる長身鏃は隅原遺跡採集の図１-9 だけである。また長さが 30㎜ 以上のものは縄文前期１、中期１、後期または晩期１、晩期２、後期遺跡１、グスク遺跡１の合計７個とかなり例外的である。30㎜ 以上の打製石鏃は存在するがかなり少量である、という点も縄文文化に共通している。

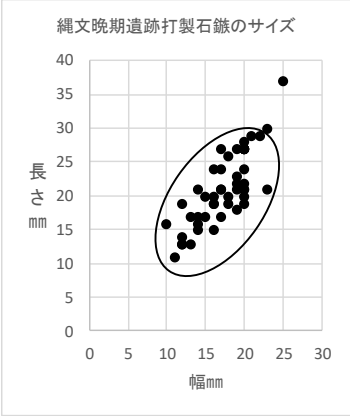
192 点中長さが計測できたのが 112 点、幅が 91 点であり、破損品や未成品が多いことを示している。時期別にみても長さ 30㎜ 以下、幅 25 ㎜以下がほとんどで、全時期を通してサイズはおおむね変化なく推移していると言える。これは縄文時代の打製石鏃に共通する平均的サイズである。さらに長さを細分してみると、15㎜～24 ㎜のサイズが最も多く過半数を占める。15㎜ 以下はきわめて少ない。一方、縄文前期・中期の場合わずか５例中２例が長さ 30㎜ 以上でしかも１例は 42

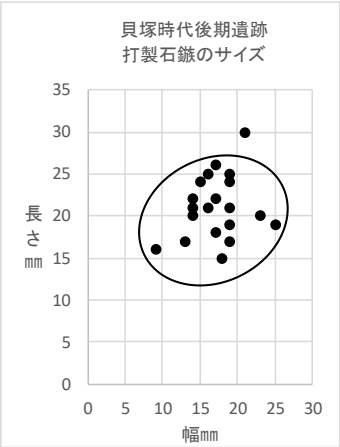
㎜と全時期のなかでも最大であるのは異質である。この１例は船元系土器と共伴しており、日本縄文文化地域からもたらされた搬入品の可能性がかなり高い。

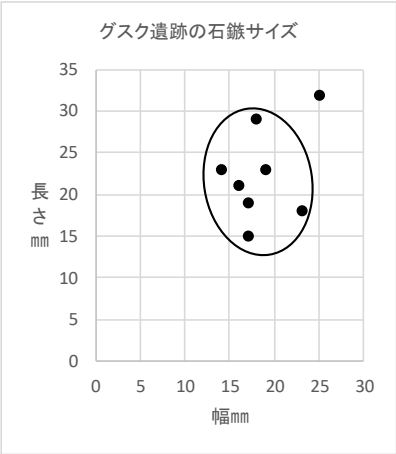
表４　各時期遺跡発見石鏃のサイズ











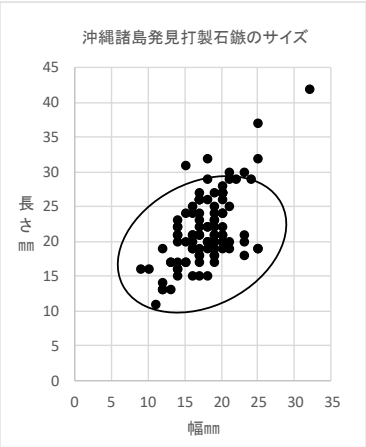


表５　時期別　沖縄諸島発見打製石鏃のサイズ

	長さ（㎜）					幅（㎜）			長幅比
	30㎜以上	29～25㎜	24～15㎜	15㎜以下	計	20㎜以上	20㎜未満	計	
縄文時代前期	1	1	1	0	3	1	1	2	1.1
縄文時代中期	1	0	1	0	2	1	0	1	1.3
縄文時代中後期	0	0	1	0	1	0	1	1	1.6
縄文時代後期末	0	0	1	0	1	0	1	1	1
縄文時代後期・晩期	2	5	12	0	19	5	10	15	1.2
縄文時代晩期	2	9	43	5	59	11	40	51	1.1
沖縄貝塚時代後期	1	3	14	0	18	2	10	12	1.2
沖縄グスク時代	1	1	7	0	9	2	6	8	1.2
計（個数）	8	19	80	5	112	22	69	91	

第 11 節　沖縄諸島発見打製石鏃の類型

第４節の図３において打製石鏃を６つの類型に分けることとし、表２に個別の類型を示した。この類型は基部と側辺の形状の組み合わせに拠るので、観察可能な資料に限定される。時期ごとの類型を表６に示す。

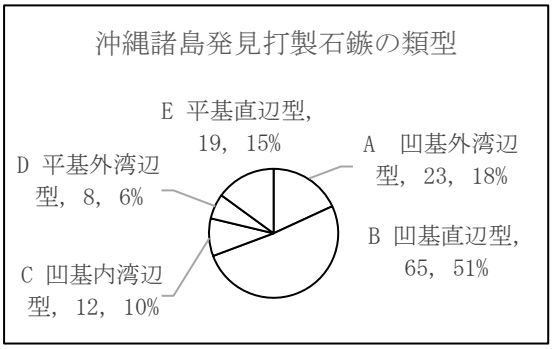
表６沖縄諸島発見打製石鏃の類型（数量）

	A	B	C	D	E	F	計
縄文時代前期	0	3	0	0	0	0	3
縄文時代中期	1	0	0	0	0	0	1
縄文時代後期後半	0	1	0	0	0	0	1
縄文時代後期・晩期	3	12	1	3	1	0	20
縄文時代晩期	13	34	9	3	12	0	71
沖縄貝塚時代後期	4	9	0	1	4	0	18
沖縄グスク時代	2	6	2	1	2	0	13
計	23	65	12	8	19	0	127

類型の再確認

A 類型　基部凹基・側辺外湾形
B 類型　基部凹基・側辺直辺形
C 類型　基部凹基・側辺外湾形
D 類型　基部平基・側辺外湾形
E 類型　基部平基・側辺直辺形
F 類型　基部平基・側辺内湾形

表７　沖縄諸島発見打製石鏃の類型（比率）



基部は凹基が 103 個中 78 個で約 75%を占め、圧倒的に多い。平基が 25 点である。すべて無茎であり、やや凸状にみえるものもあるが、基部をまだ仕上げていない未成品とみられる。

側辺は直辺形が 68 個、66%で過半数を占め、外湾形は 27 個で少ないが特徴のひとつを示している。

一方、南九州で縄文後・晩期によくみられる五角形鏃として確実に断定できるものはないが、やや類似したもの２個を外湾形に含めてある。それは図 1-⑦の 109、喜友名貝塚・グスク発見と、図 1-⑧の 117、伊原遺跡発見の２個である。いずれも明瞭な五角形鏃とはいえない。また外見上五角形を呈するものに伊是名貝塚採集例の図 1-7 があるが、これは五角形鏃ではなく製作途中の形状とみるべきだろう。

第 12 節　隣接地域の打製石鏃文化

奄美群島の先史時代文化は、沖縄諸島と同様に土器文化を中心に縄文時代文化との継続的なかかわりのなかで形成されてきたことは周知の事実である。そうすると、土器文化に限らず石器文化においても同様の関わりが当然推定されるわけである。これまで、九州縄文時代石器文化との関連性は自明のこととして認識され、その検証について具体的な手続きを進めた例は多くはない。ここで南九州縄文時代の石鏃文化のなかのいくつかの遺跡例とも比較して、その系譜について検討したい。また、近隣地域として南琉球や台湾の石鏃文化についても関連性の有無を確認しておきたい。

(1)　奄美諸島の打製石鏃文化

南九州との間に位置し、琉球列島に含まれる奄美群島の打製石鏃文化をみてみよう。奄美群島

も沖縄諸島と同じく石鏃の発見例は少ない。以下に奄美群島発見打製石鏃を時期別に示す。

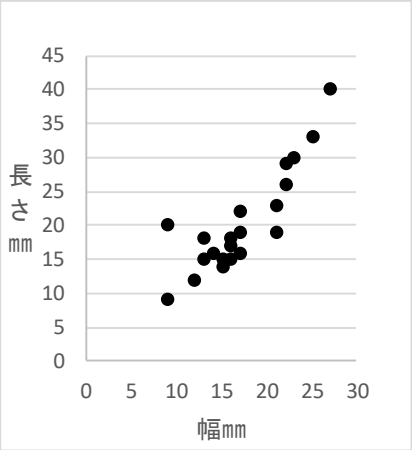
表８　奄美諸島発見打製石鏃と属性

時　期	遺　跡　名	図番号	石 質	平　面　形　mm			基部形状			側辺形状			類型
				長	幅	比	凹	平	円	外湾	直辺	内湾	
縄文前期？	土浜ヤーヤ遺跡	1	チャート	(40)	27	1.5	○			○			A
縄文後期後半以降	半川遺跡	2	玉髄	20	—	—	○				○		B
	〃	3	珪質頁岩	25	—	—	—	—	—		○		
	〃	4	玉髄	16	17	0.9		○			○		E
縄文晩期？	山田遺跡	5	チャート	29	—	—		○		○			D
	小手野遺跡	6	玉髄	12	12	1	○					○	C
縄文晩期	宇宿貝塚	7	チャート	26	22	1.2	○				○		B
	宇宿小学校遺跡	8	チャート	29	22	1.3		○				○	F
	ウフタ遺跡	9	チャート	22	17	1.3	○				○		B
	宇宿小学校遺跡	10	チャート	19	21	0.9	○			○			A
	ウフタ遺跡	11	チャート	23	21	1.1	未	製	品				
	ウフタⅢ遺跡	12	チャート	12	—	—	○				○		B
	〃	13	〃	28	—	—	—	—	—			○	
	〃	14	〃	15	13	1.1		○				○	F
	手広遺跡	15	黒曜石	(20)	(9)	2.2		○			○		E
	〃	16	〃	16	14	1.1	○				○		B
	〃	17	石英	15	15	1	○				○		B
	〃	18	黒曜石	14	15	0.9	○				○		B
	ケジⅠ遺跡	19	チャート	(18)	16	1.1	○				○		B
	塔原遺跡	20	黒曜石	19	(17)	1.1	○				○		B
	〃	21	〃	9	(9)	1	○				○		B
	〃	22	〃	(15)	16	0.9	○				○		B
	〃	23	チャート	(18)	13	1.4		○			○		E
	中里遺跡	24	黒曜石	17	16	1.1		○			○		E
	〃	25	黒曜石	(19)	—	—	○			○			A
縄文後～弥生	住吉貝塚	26	チャート	(33)	25	1.3	○			○			A
古代・中世	前畑遺跡	27		30	23	1.3	○			○			A
			平均	21.7	17	1.27	17	7	0	6	16	4	

表９　奄美群島発見打製石鏃の長さ・幅

時期	長　さ（mm）					幅（mm）	
	30以上	29～25	24～15	15以下	計	20以上	20未満
縄文前期	1	0	0	0	1	1	0
縄文中期	0	0	0	0	0	0	0
縄文後期後半	0	1	2	0	3	0	1
縄文晩期	0	3	13	5	21	1	11
弥生時代	1	0	0	0	1	1	0
古代・中世	1	0	0	0	1	1	0
計	3	4	15	5	27	4	12
平均長・幅mm	21.7mm					17mm	

表 10　奄美群島発見打製石鏃のサイズ



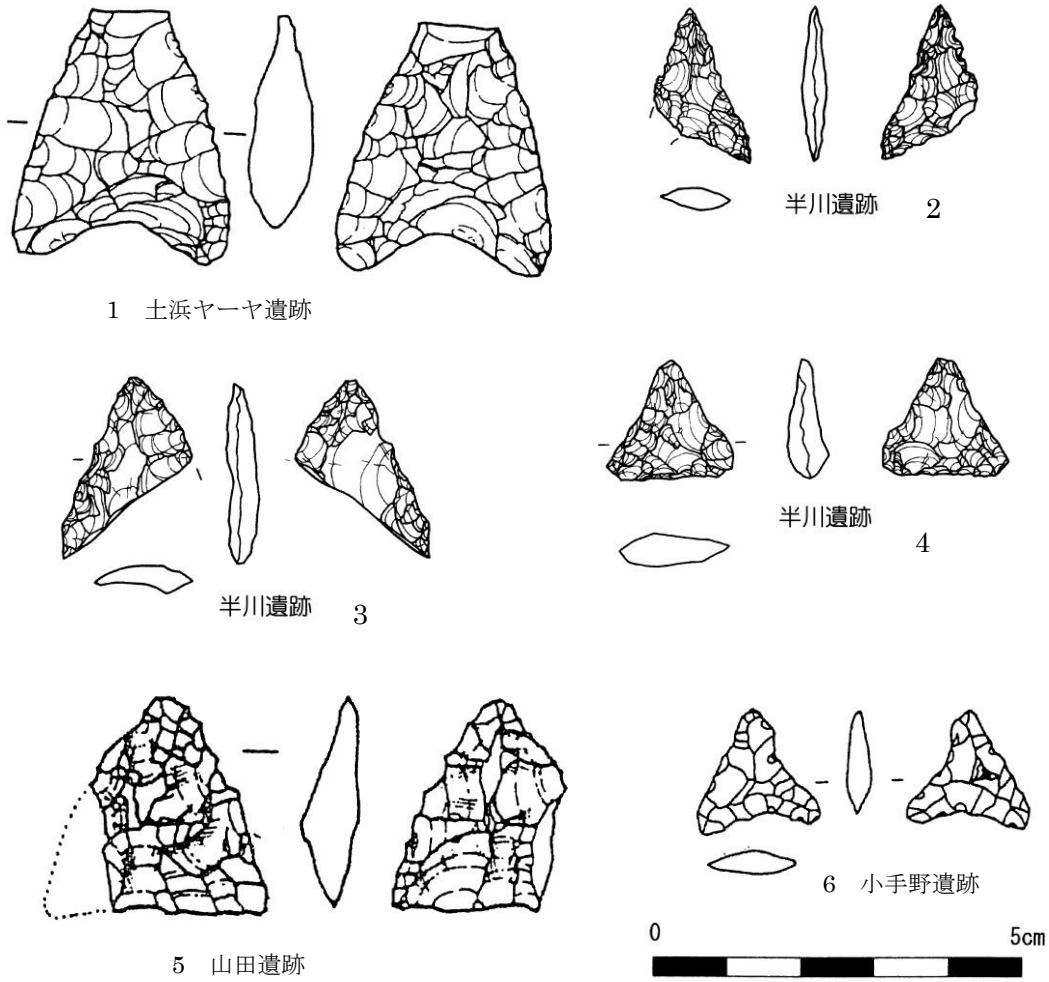


図７-①　奄美群島発見の打製石鏃

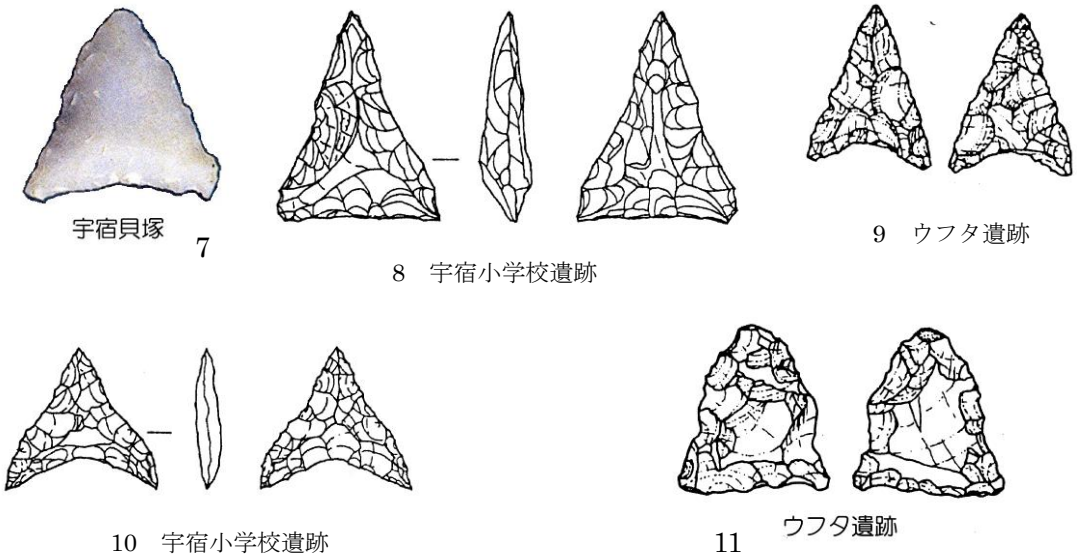


図 7-②　奄美群島発見の打製石鏃

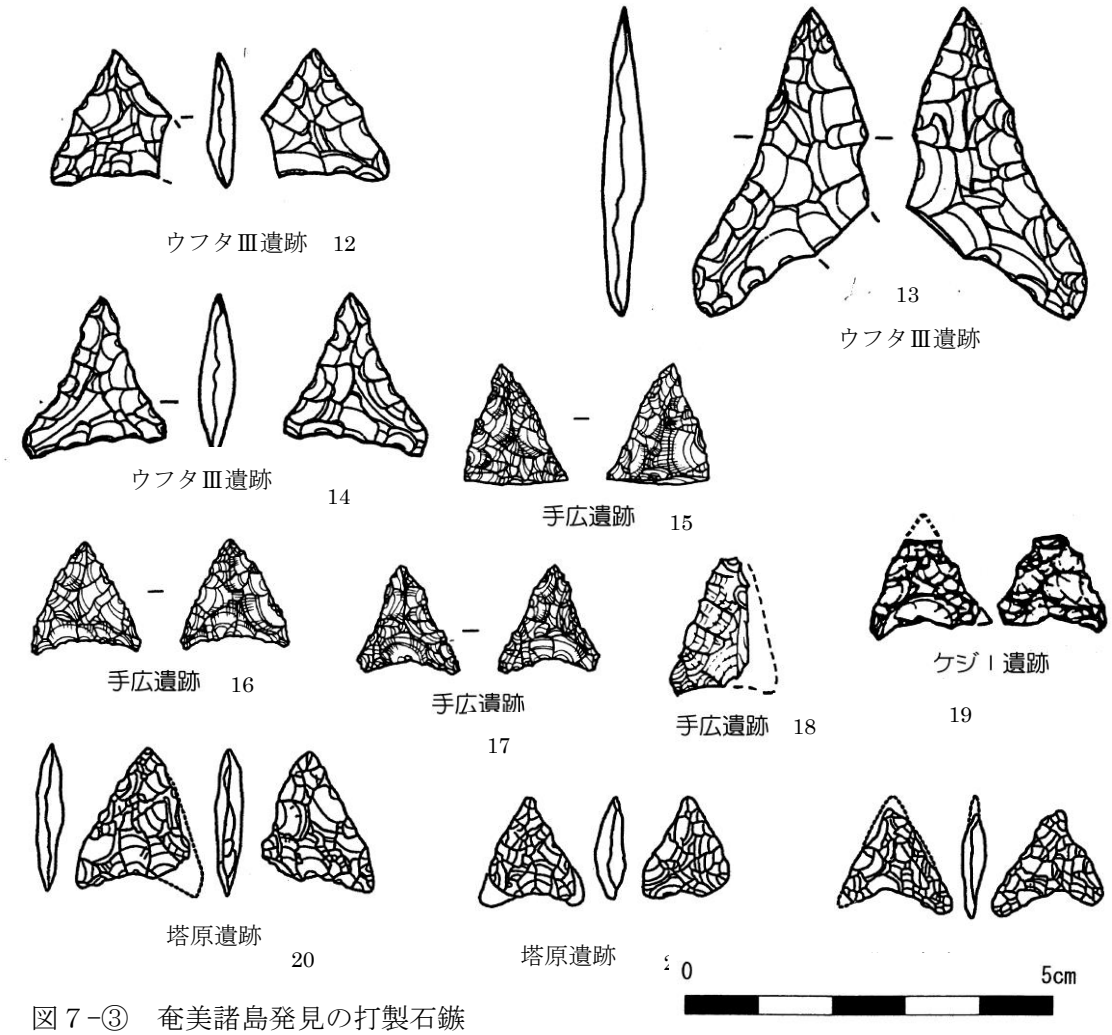


図７-③　奄美諸島発見の打製石鏃

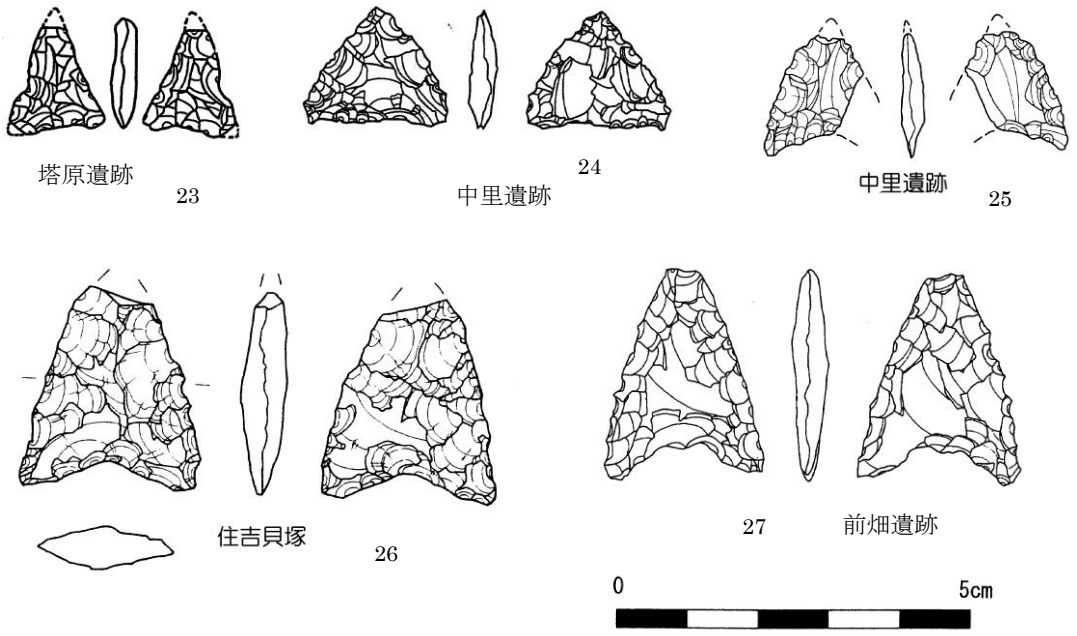


図 7-④　奄美群島発見の打製石鏃

奄美群島発見打製石鏃の所属時期は 27 点中 21 点が縄文時代晩期である。弥生時代並行期遺跡と中世遺跡から各 1 点発見されているが、いずれも当該遺跡に所属していたものではなく、自然あるいは人為的な浮き上がり等によって後世の遺跡に紛れ込んだ可能性がある。

サイズについては長さが 30 ㎜を超えるものは全 27 個中 3 個で、ほとんどが 30 ㎜以下に収まっていること、15 ㎜～24 ㎜が最も多く、幅は 25 ㎜以下で長幅比も 1.27 とほぼ三角形状を呈していることなど、沖縄諸島の状況と概ね共通している。このなかで 30 ㎜を超える縄文前期の土浜ヤーヤ遺跡および中世遺跡の前畑遺跡出土の 2 点はていねいな造りで、他の石鏃群とは異質である。他の多くの石鏃は凹基が浅く、側辺の仕上げもあまり緻密ではない。したがって均整のとれた対称形を呈していない。しかしこの 2 点は側辺を細かく加工して、左右均整のとれた形に仕上げてある。この 2 点は九州からの搬入品の可能性が高いのではないか。また土浜ヤーヤ遺跡出土石鏃は長さが 40 ㎜とかなり大きく、凹基の抉りも比較的深い。さらに両脚の先端が丸く仕上げられている。このような形状は装飾性が強く、本来の弓射活動よりもその威力を象徴する用具ではないかと考えられる。

さらに形状では B 類型の凹基直辺形が 11 点で最も多く、A 類型の凹基外湾形が 5 点でこれに次ぐ。一方で E 類型の平基直辺形も 4 点あって組成の一角を占めている。そして C 類型の凹基内湾形 1、D 類型の平基外湾形 1、F 類型の平基内湾形 2 とわずかながらもすべての類型が揃っていることも共通する。また凹基の抉りが比較的浅く、長脚鏃や鍬形鏃がなく、南九州縄文後・晩期に盛行する五角形鏃も出土していない点なども共通している。押圧剝離技術による精緻な調整加工はあまり発達しなかったといえる。

石材はチャートが多くを占めるが、これは沖縄諸島の例と同じように地元に自然分布の石材があり、これを利用している。チャートを産しない島は近隣島から調達している。黒曜石製鏃も少量もたらされているが、すべて佐賀県腰岳産とみられているのは沖縄諸島と同様である。一遺跡から多数の黒曜石片が得られた例もあり、北琉球の島々へ黒曜石がリレー型でもたらされたこと、黒曜石製鏃も既製品ではなく石材を導入して製作していたことを示している。

(2)　南九州の打製石鏃文化

南九州においてはすでに草創期・早期から弓射による狩猟が活発に展開されていたことは、多量の打製石鏃の出土が示している。ここでは縄文晩期に限定して南九州の 10 遺跡の例を示す。

①南九州縄文時代晩期の打製石鏃

沖縄諸島・奄美群島の打製石鏃は数例の縄文前期・中期の例を除いて、ほとんどが縄文晩期に属すると考えられる。そこで、南九州縄文時代晩期 10 遺跡の例を検討する。九州においても縄文時代後晩期には打製石鏃が増加するという傾向がある。

なお、南九州では縄文時代草創期から全国に先駆けて打製石鏃は圧倒的な量が出土する。特に種子島の草創期遺跡において顕著であるが草創期～早期が主であり、沖縄諸島・奄美群島の石鏃との比較になじまないことから種子島例は省略する。

南九州縄文時代晩期の打製石鏃をまずサイズでみると、例示 10 遺跡全体としても 30 ㎜を超えるのは 17 個で、計測可能な石鏃全 652 個のなかではきわめて少量であり、例外的である。25～29 ㎜のサイズでも 40 個と少ない。最も多いのは 15～24 ㎜サイズの 521 個で全体の約 80%を占める。草創期の鬼ケ野遺跡とほぼ同じ傾向であり、ほとんどが長さ 30 ㎜以内におさまる点は日本縄文時代の全体的傾向と共通する。少量存在する 30 ㎜を超える石鏃は長身鏃がほとんどで、沖縄諸島例では図 1-32 の阿波連浦貝塚の石鏃に形状が酷似する。しかし長さは 27 ㎜で長身鏃と

表 11　南九州縄文時代晩期遺跡出土打製石鏃

所在地	遺跡名	個数	基部・側辺形状類型						不明	平面形平均		
			A	B	C	D	E	F		長	幅	比
薩摩川内市	霜月田遺跡	24	3	5	1	2	3	0	10	18	16	1.1
出水市	大坪遺跡	432	63	125	7	22	15	0	200	18	14	1.3
曽於市	桐木耳取遺跡Ⅲ	91	22	38	0	1	0	0	30	17	13	1.3
鹿児島市	仁田尾遺跡	65	10	24	2	4	1	1	23	20	15	1.3
南薩摩市	諏訪牟田遺跡	70	22	33	1	1	2	0	11	21	15	1.4
加世田市	上加世田遺跡	28	14	6	0	0	0	0	8	17	14	1.2
国分市	上野原遺跡2-7	76	19	19	0	10	9	0	19	19	14	1.3
霧島市	中柚木遺跡	30	12	10	0	3	1	0	4	18	15	1.2
大崎市	天神段遺跡	356	62	134	12	45	20	0	83	18	12	1.5
鹿屋市	飯盛ケ岡遺跡	32	10	11	2	2	2	0	5	18	13	1.4
	計	1204	237	405	25	90	53	1	393	18	14	1.3

表 12　南九州縄文時代晩期 10 遺跡の打製石鏃

長さｍｍ	30以上	25-29	15-24	15以下	長平均	幅平均	**長幅比**
霜月田遺跡	0	0	6	2	18	16	1.1
大坪遺跡	4	11	204	31	18	14	1.3
桐木耳取遺跡Ⅲ	0	3	41	19	17	13	1.3
仁田尾遺跡	2	6	31	8	20	15	1.3
諏訪牟田遺跡	5	8	39	3	21	15	1.4

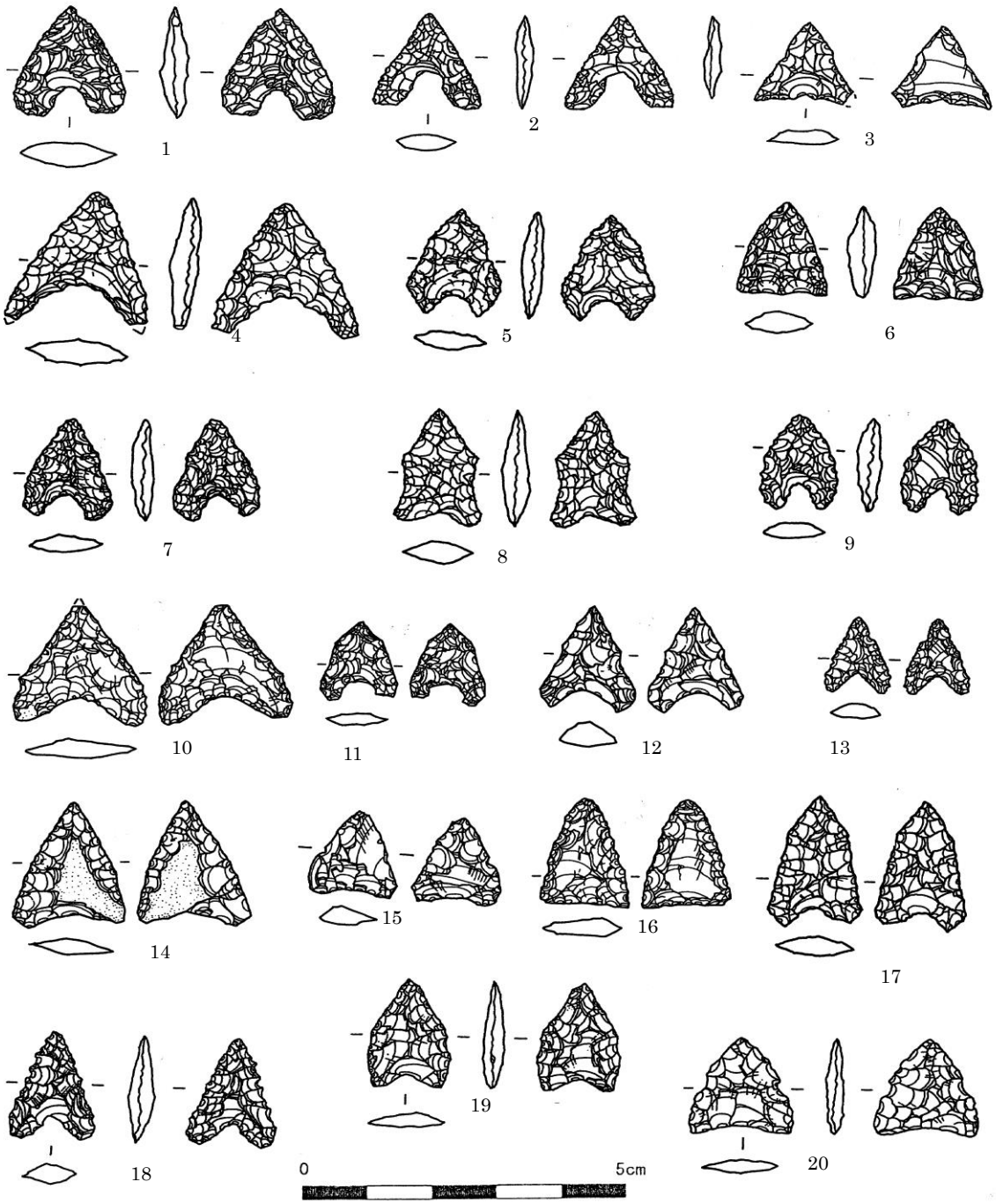
長さｍｍ	30以上	25-29	15-24	15以下	長平均	幅平均	**長幅比**
上加世田遺跡	0	0	16	4	17	14	1.2
上野原遺跡2-7	1	3	28	6	19	14	1.3
中柚木遺跡	0	2	17	12	18	15	1.2
天神段遺跡	4	4	127	49	16	12	1.5
飯盛ケ岡遺跡	1	3	12	3	18	13	1.4
計	17	40	521	74	18	14	1.3

はいえない。

次に類型でみると判別可能数 804 個中凹基が 661 個 82%で多数を占める。平基は 143 個、約 18%でもうひとつの特徴を示している。側辺形状との組み合わせによる類型では B 類型・凹基直辺形が半数を占め、A 類型・凹基外湾形がさらにその半数を占める。この傾向は沖縄諸島とほぼ同じである。

沖縄諸島と南九州とでは、無茎、基部の抉りの有無と側辺の直・湾形状による基本的な類型は共通性が強いが、細分すると沖縄諸島には見られないタイプがいくつか存在する。それは、逆刺（脚）の形状が強調される場合、それと関連して基部の抉り（凹部）がかなり深いタイプ、その極端形に円脚鏃などがある。この場合凹部は半円状に抉られるが、三角状の抉りをもち長幅比が 1.5 を超える長身鏃もある。また、側辺をていねいに押圧剥離し、規則的に配列された鋸歯状辺を作り出すものもある。

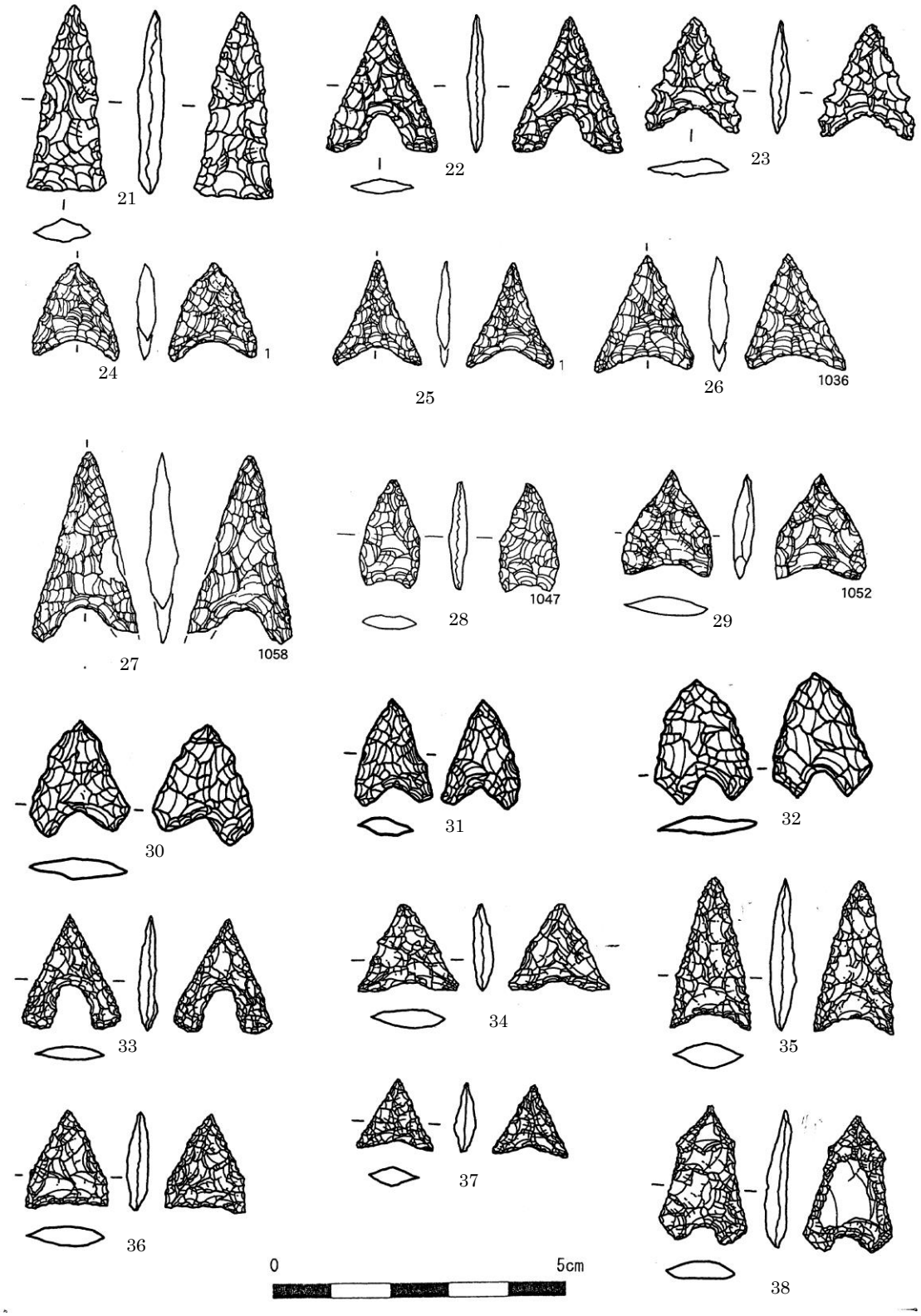
沖縄諸島出土の打製石鏃は概して緻密さに欠け、基部の抉り（凹基）が比較的浅い。基部の両端の脚が細長く、すなわち湾入が深いものに乏しい。これは押圧剝離技術が未熟であることを示しているとみられる。石鏃が狩猟具として多用されない条件下で、技術が洗練される機会が少なかったのではないか。ここにも沖縄諸島における石鏃の位置があらわれている。



1～3　霜月田遺跡（薩摩川内市）　　4～9　大坪遺跡（出水市）

10～17　桐木耳取遺跡Ⅲ（曽於市）　　18～20　仁田尾遺跡（鹿児島市）

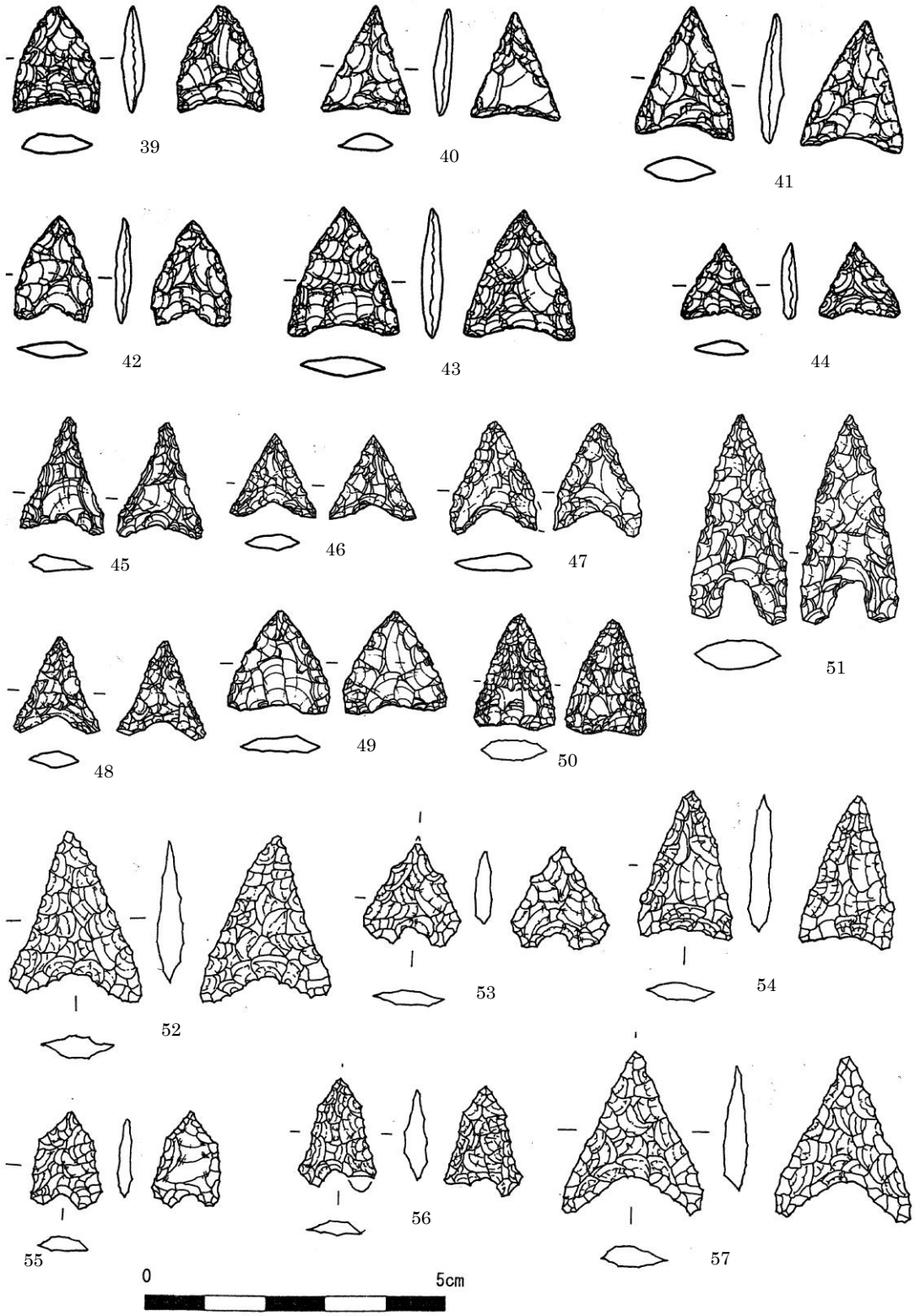
図 8-1　南九州縄文時代晩期 10 遺跡出土打製石鏃の図



21～23　仁田尾遺跡（鹿児島市）　　24～29　諏訪牟田遺跡（南薩摩市）

30～32　上加世田遺跡（加世田市）　33～38　上野原遺跡 2～7（国分市）

図 8-2　南九州縄文晩期の打製石鏃の例



39～44　中柚木遺跡（霧島市）　　45～51　天神段遺跡２（大崎町）

52～57　飯盛ケ岡遺跡（鹿屋市）

図 8-3　南九州縄文晩期の打製石鏃の例

一方、五角形鏃と呼ばれる独特の形態をした石鏃が縄文後期から晩期にかけて盛行する。角のある肩部と脚部をもち、肩の位置が高いのが比較的古式で、次第に腰部に下がってくるとされる。いずれの型式も奄美群島・沖縄諸島では確認されていない。1例のみ図1-⑧の117、糸満市伊原遺跡発見の石鏃が五角形を呈しているが、対称形としてのバランスがとれてないうえに脚が丸味を帯びていて五角形鏃のイメージとは異なる。現段階では明確な本格的五角形鏃は奄美群島・沖縄諸島では確認されていない。

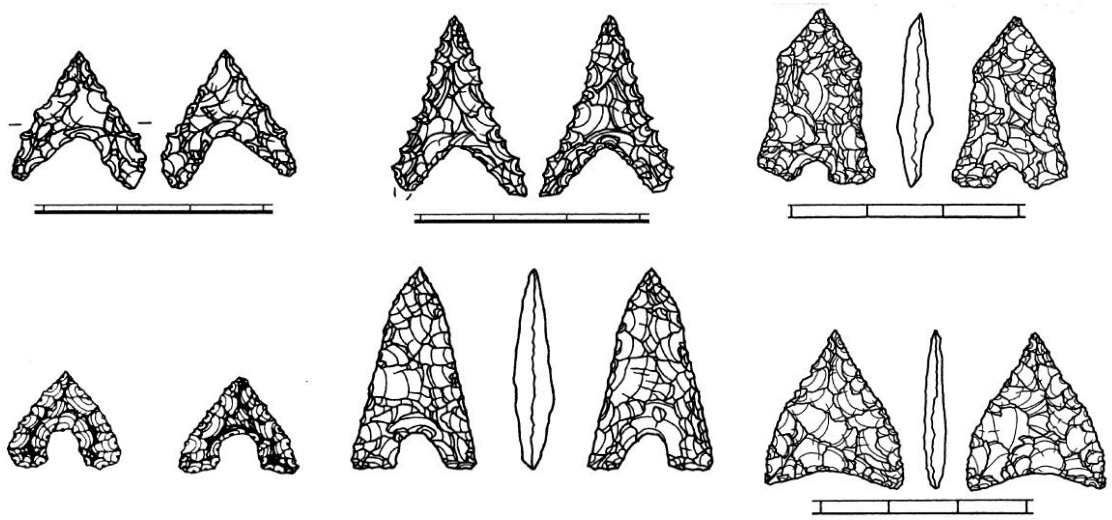


図9　沖縄諸島で未発見の南九州の打製石鏃の形状

石材をみると晩期には黒曜石が多用されるようになり、南九州在地産だけでなく大分県姫島産、佐賀県腰岳産も導入されている。遺跡によっては腰岳産が多くを占めている例もあり、良質の腰岳産黒曜石への評価・価値観と需要が高かったことを示している。さきに例示した10遺跡の打製石鏃のなかでの黒曜石の占める数量を示す。黒曜石以外の石材については、チャート、安山岩、珪質頁岩など現地産がほとんどである。なお、さきの形状計測値や類型表の総数と数値が異なるのは、石材の場合半壊品や未成品であっても数量に算定できることによる。

北琉球における打製石鏃の流通は、縄文時代晩期南九州の打製石鏃利用が盛んに展開された状況が波及したものであり、黒曜石製鏃や黒曜石片（塊）は腰岳産石材だけがもたらされたのは、すでに南九州において腰岳産黒曜石が良質な石材として形成されていた価値観に基づいて、意識的に選択された結果であることを示している。

表13　南九州縄文時代10遺跡
黒曜石製打製石鏃の割合

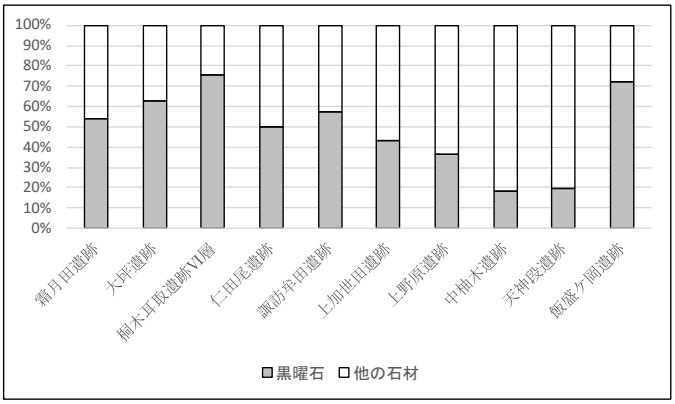


表 14　南九州縄文時代晩期 10 遺跡出土打製石鏃に占める黒曜石の数量

遺　　跡	全石材総量	黒　　曜　　石										他の石材
		腰岳	針尾	三船	上牛鼻	桑木水流	霧島系	日東	姫島	記載なし	黒曜石計	
霜月田遺跡	24	3	2	2	6	0	0	0	0	0	13	11
大坪遺跡	487	285	1	0	0	4	0	12	1	1	304	183
桐木耳取遺跡Ⅵ層	1408	—	—	—	—	—	—	—	—	0	1063	345
仁田尾遺跡	40	8	10	0	1	0	0	0	1	0	20	20
諏訪牟田遺跡	70	—	—	—	—	—	—	—	—	40	40	30
上加世田遺跡	28	—	—	—	—	—	—	—	—	12	12	16
上野原遺跡	60	—	—	—	—	—	—	—	—	22	22	
中柚木遺跡	33	—	—	—	—	—	—	—	—	6	6	27
天神段遺跡	298	37	7	8	1	3	1	1	0	0	58	240
飯盛ケ岡遺跡	32	—	—	—	—	—	—	—	—	23	23	9
計	2480	333	20	10	8	7	1	13	2	104	1561	881

(3)　南琉球（宮古・八重山諸島）先史時代の石器文化

沖縄諸島の石鏃文化の系譜を検討するには、隣接する地域として南琉球（宮古・八重山諸島）についても手続き上分析対象として扱うべきであろう。南琉球において、石鏃は打製・磨製いずれも出土例はない。イノシシは食糧のほか骨牙器にも使用されているので、狩猟の対象となっていたことは確実であるが、その方法は弓射による捕獲ではなかった。また、魚の捕獲にも弓矢は使用されなかった。

南琉球の先史時代文化については石斧、土器、貝製品等全般において沖縄諸島とは大きな違いがあり、沖縄諸島の先史文化とは系譜が異なる別の文化圏である。南琉球に石鏃文化が存在しないことは、沖縄諸島の石鏃文化の状況とはまったく無関係であるが、この点をみても北琉球と南琉球とは先史時代においてほぼ没交渉であったことを示しているといえる。

先史時代において北琉球諸島と南琉球諸島の間は相互の島が視認できない距離にあり、島々をつなぐ海の道は沖縄島と宮古島の間に横たわる海洋によって遮断されていたのである。

表 15　南琉球先史時代遺跡における石器とイノシシ骨の出土状況

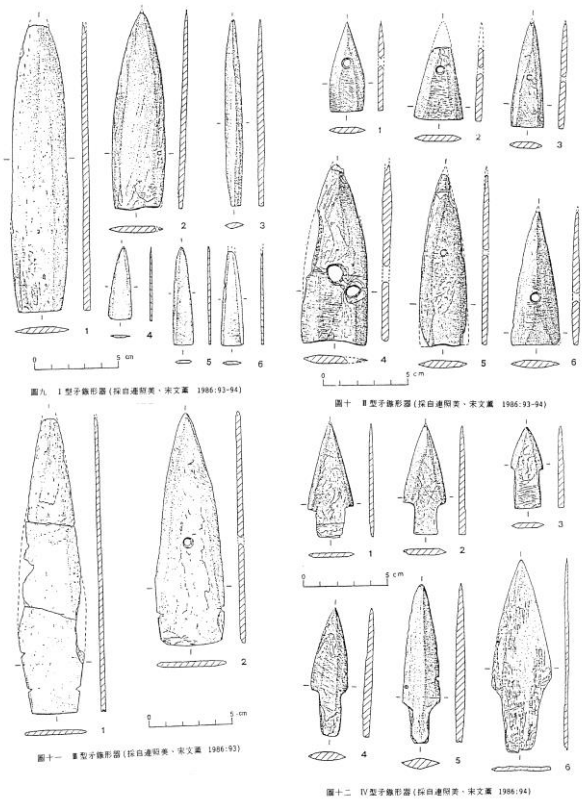
番	地域	遺　跡　名	石斧	石錐	石ノミ	有孔石塊	磨石・敲石	砥石	石皿	石鏃	猪骨
1	八重山	下田原貝塚	○	○	○	×	○	○	○	×	○
2		大田原遺跡	○	×	×	×	○	×	○	×	○
3		平地原遺跡	○	×	×	×	×	×	×	×	×
4		フーネ遺跡	○	×	×	×	○	×	○	×	×
5		ピュッタ遺跡	○	×	×	×	×	○	○	×	×
6		仲間第二遺跡	○	×	×	×	○	×	×	×	×
7	宮古	多良間添道遺跡	○	×	×	×	○	×	×	×	○
8	八重山	名蔵貝塚群	○	×	×	○	○	×	×	×	×
9		神田貝塚	○	×	×	○	○	×	×	×	×
10		フーネ第二貝塚	○	×	×	×	×	×	×	×	×
11		崎枝赤崎貝塚	○	○	×	○	○	○	×	×	○
12		船越遺跡	○	×	×	×	×	×	×	×	×
13		嘉良嶽貝塚	○	×	×	×	○	×	○	×	○
14		カイジ浜貝塚	○	×	×	×	○	×	×	×	○
15		大泊浜貝塚	○	×	×	×	○	×	×	×	○
16		仲間第一貝塚	○	×	×	×	○	○	×	×	○
17		船浦貝塚	○	×	×	×	○	×	×	×	○
18		トゥグル浜遺跡	○	○	×	×	○	○	○	×	○
19	宮古	多良間西高嶺遺跡	×	×	×	×	×	×	×	×	×
20		長間底遺跡	○	×	×	×	○	×	×	×	○
21		浦底遺跡	○	×	×	○	×	×	×	×	○
22		アラフ遺跡	×	×	×	×	○	×	×	×	○
23		長墓遺跡	×	×	×	×	×	×	×	×	○

※　×印は「無し」ではなく、「未発見」の意

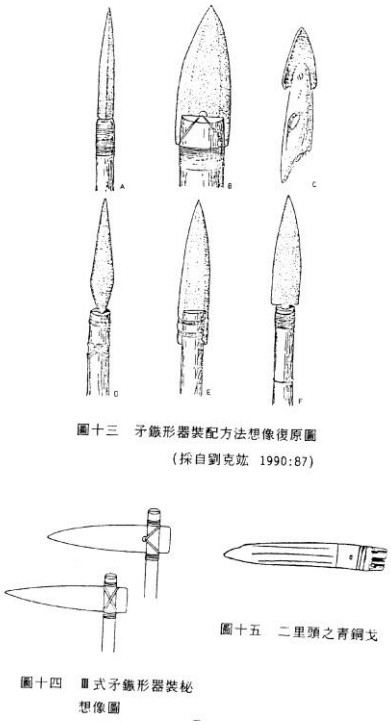
(4)　台湾先史時代の石鏃

台湾の文献に「矛鏃」の用語で報告されている石器は、磨製でサイズは日本の打製石鏃と同等のものもあるが、多くは長身で大きい。有孔もある。また、「箭頭」（鏃）の用例も見られる。

このなかには必ずしも弓射の矢柄に装着する鏃に限定されていないようで、槍先に装着する使用法も想定されている。この卑南遺跡例は台湾の一般的な矛鏃の型式といえるが、いずれにしても南琉球を超えた別の文化圏であり、沖縄との系譜的関連はほとんどないといえる。



黄信凱　1993「由大陸上的『戈』来看卑南遺址的一些『矛鏃形器』，『田野考古』第四巻第一期 p 47-69　但し、図は連照美・宋文薫1986原図 p 93-94を引用
1986『卑南遺址発掘資料整理報告第三巻 遺址堆積層次及文化層出土遺物之分析研究』



着想図　劉克　1990「卑南文化矛鏃計器之研究」
国立臺灣大學人類學研究所
碩士論文

図 10　台湾　卑南遺跡の矛鏃形器の類型（型式）

第 13 節　沖縄諸島発見打製石鏃文化の系譜

以上、奄美群島、種子島、南九州における打製石鏃文化について概観した。沖縄諸島の打製石鏃の系譜を検討する上で、南琉球および台湾地域はその対象に含める必要がないことは前項で確認したとおりである。北琉球諸島（奄美・沖縄諸島）の先史文化は、土器文化を中心に縄文時代文化とのかかわりのなかで形成されてきた。島嶼性とサンゴ礁という環境のなかで独自の地域的特質を形成しながらも、一方では大局的には九州の先史時代の動きに連動していることはこれま

での研究史において明らかにされている。打製石鏃文化もまた、同様の展開をしていたことが推測されるのである。

北琉球の打製石鏃と南九州のそれとを比較してみると、西日本で一般的な無茎であること、長さが 30 ㎜以下の石鏃がほとんどであることが、第一の大きな共通点として挙げられる。沖縄諸島ではチャートを主な石材として用いるが、南九州では黒曜石が多数を占めること、南九州ではほかに玉髄・安山岩・頁岩が比較的よく利用されている点は異なる。しかしこれも在地の石材を利用するという点において共通しているともいえる。

形状は三角鏃を基本とし、その基部が直のもの、凹基となるものの２大形状があり、茎部はない。基部の平基・凹基と側辺の直辺・外湾・内湾との組み合わせによる類型も共通する。長幅比は 1.5 以内がほとんどであるが、南九州には長幅比が２を超える長身鏃もよくみられる。沖縄諸島にも１例だけある。また、打製石鏃の一部が研磨された局部磨製石鏃が１点だけ室川貝塚で出土しているが、南九州では少数ながら縄文時代早期から全時期を通して同じように出土する。この点においても両者の系譜関係を示しているといえる。

以上のように打製石鏃の形状は九州縄文時代文化の打製石鏃との共通性が強い。したがって、その起源を九州にもち、縄文時代打製石鏃の系譜に属することは明らかである。

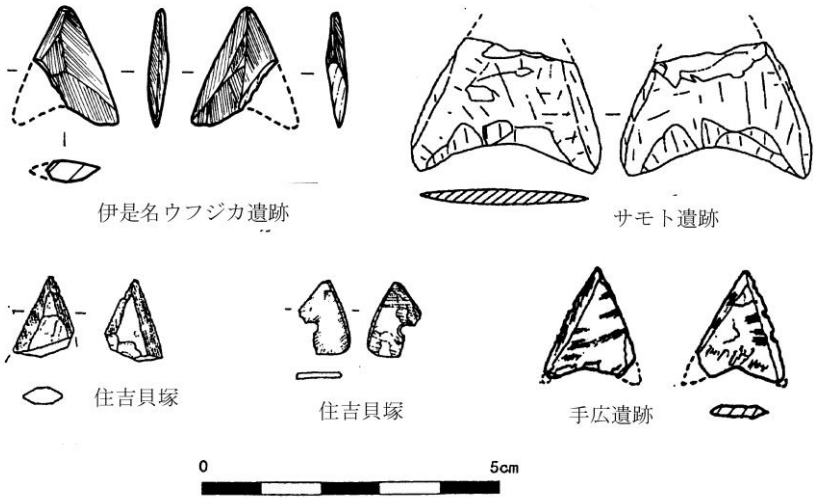
第 14 節　北琉球（沖縄諸島・奄美群島）発見の磨製石鏃

沖縄諸島と奄美群島からわずかながら磨製石鏃が発見されている。両地域は北琉球として包括できるので、まとめて扱うこととする。

（1）縄文時代の磨製石鏃

縄文時代後期後半に属する磨製石鏃が沖縄諸島伊是名島ウフジカ遺跡から１点、沖永良部島住吉貝塚から２点出土している。縄文時代晩期に属する磨製石鏃が奄美大島サモト遺跡から１点、同島手広遺跡から１点得られている（手広遺跡資料は弥生時代の可能性もある）。住吉貝塚の１点は穿孔を有するが、縄文時代早期の種子島三角山Ⅰ遺跡において２点の穿孔磨製石鏃が出土している例がある（鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『三角山遺跡（P 地点）』。両者の時期幅はかなり大きいが、影響関係は別にしても穿孔磨製石鏃が縄文時代に存在し得る傍証になる。４遺跡とも縄文時代打製石鏃の基本形である三角形鏃の伝統を継承している。

図 11　⇒
沖縄諸島・奄美群島出土の縄文時代磨製石鏃



（2）弥生時代並行期以降の磨製石鏃

沖縄貝塚時代後期または弥生時代並行期以降の沖縄諸島・奄美群島において、磨製石鏃が少量発見されている。いずれも板状に薄く剥離する性質をもつ石材を利用している。これをさらに研磨して鏃に仕上げてある。縄文時代打製石鏃の一般的な形状に類似する三角鏃もある。牧港貝塚では長身鏃、野国貝塚 B 地点で有茎鏃が登場している。なお、野国貝塚 B 地点は縄文早期末の遺跡であるが貝塚時代後期の野国貝塚と隣接していること、上層の攪乱層からの出土でもあること、さらに有茎鏃であることなどから、貝塚後期遺跡に属する可能性が高い。ただし後述するように南九州においては縄文時代早期を中心に磨製石鏃が出土し、ごく少数ながら縄文時代後晩期に及ぶので、野国貝塚 B 地点の磨製石鏃は爪形文土器期に並行していても整合性をもつ。

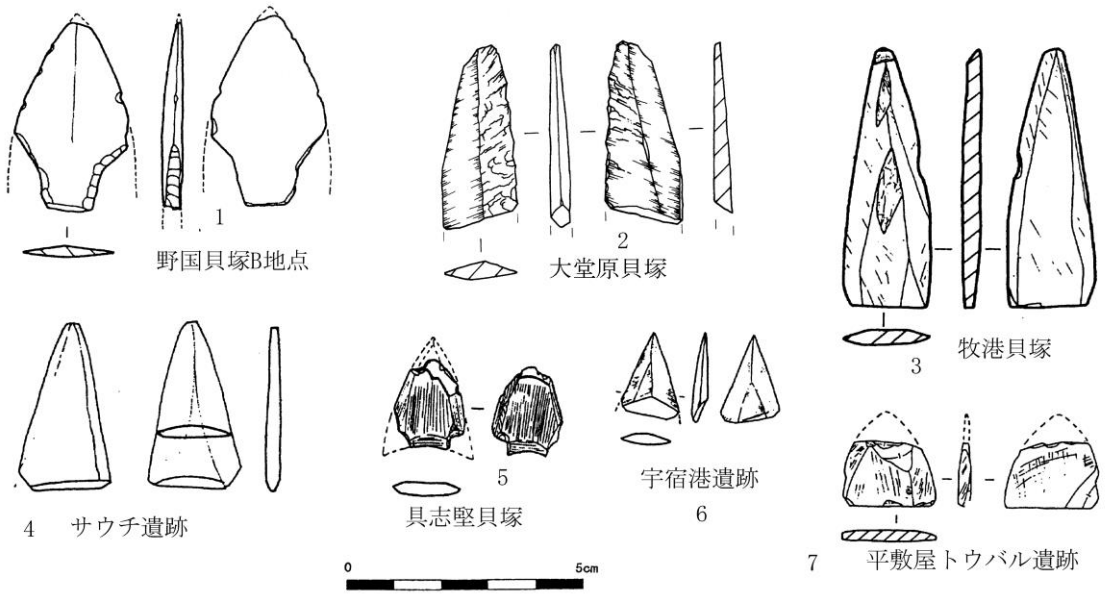


図 12　沖縄諸島・奄美群島出土の弥生時代並行期以降の磨製石鏃

第 15 節　南九州の磨製石鏃

南九州の磨製石鏃の出現期には縄文時代と弥生時代の２つの時期がある。

（1）縄文時代の磨製石鏃

南九州の磨製石鏃は早期を中心に確認されている（宮田栄二 2003、ｐ29-36）。石材の多くはスレートである。わずかながら後晩期遺跡からも出土している。縄文時代全時期としてはかなり少量で稀な出土である。沖縄伊是名島ウフジカ遺跡の磨製石鏃は沖縄諸島で１点だけであり、南九州縄文文化の傾向とよく似た傾向を表している。

種子島三角山Ⅰ遺跡からは穿孔磨製石鏃が２点出土している。類例は南九州本土にはみられない。宮田栄二は南九州縄文時代磨製石鏃を図 14 のように５類型に分類している。長身細型と短身広型が多く、長身広型と鋸歯縁型はかなり少ない。穿孔型は先述のように種子島の２点だけである。宮田は縄文時代において磨製石鏃が出現するのは、石材産地との距離関係にあるとしている（宮田栄二 2003）。すなわち磨製石鏃は頁岩、粘板岩などの薄い石材であるが、本来ならチャートや黒曜石が石鏃としては適材である。しかし、磨製石鏃を出土している遺跡（集団）は適材

産地から遠距離にあり、代わりに容易に入手可能な居住地周辺の頁岩や粘板岩を利用した。これらの石材加工には研磨技術が適していたため磨製石鏃が出現したと想定している。そして、この

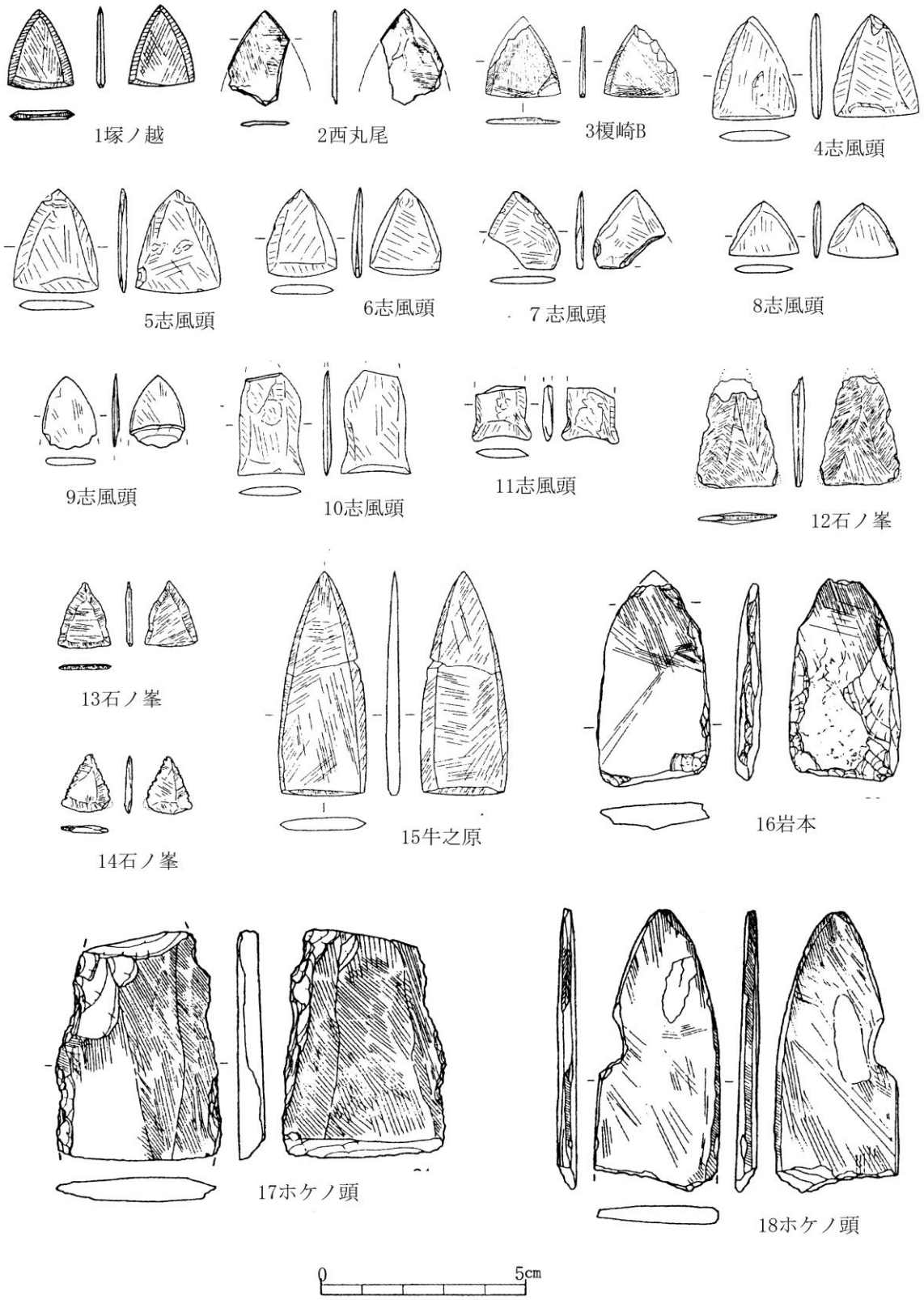


図 13　南九州縄文時代の磨製石鏃①

図 14　南九州縄文時代早期磨製石鏃の類型（宮田栄二 2003、ｐ32）

研磨加工は骨角器製作によく用いられることから、その応用として磨製石鏃の加工に用いたとしている。

さらに種子島三角山Ⅰ遺跡における穿孔磨製石鏃は銛先に着けるための孔であると想定している。穿孔磨製石鏃は他の材料の有孔鏃と同様に銛先に装着した漁労具であったと推定している。宮田は特にふれてないが、大型の資料は鏃ではなく別の道具の可能性もあるのではないか。

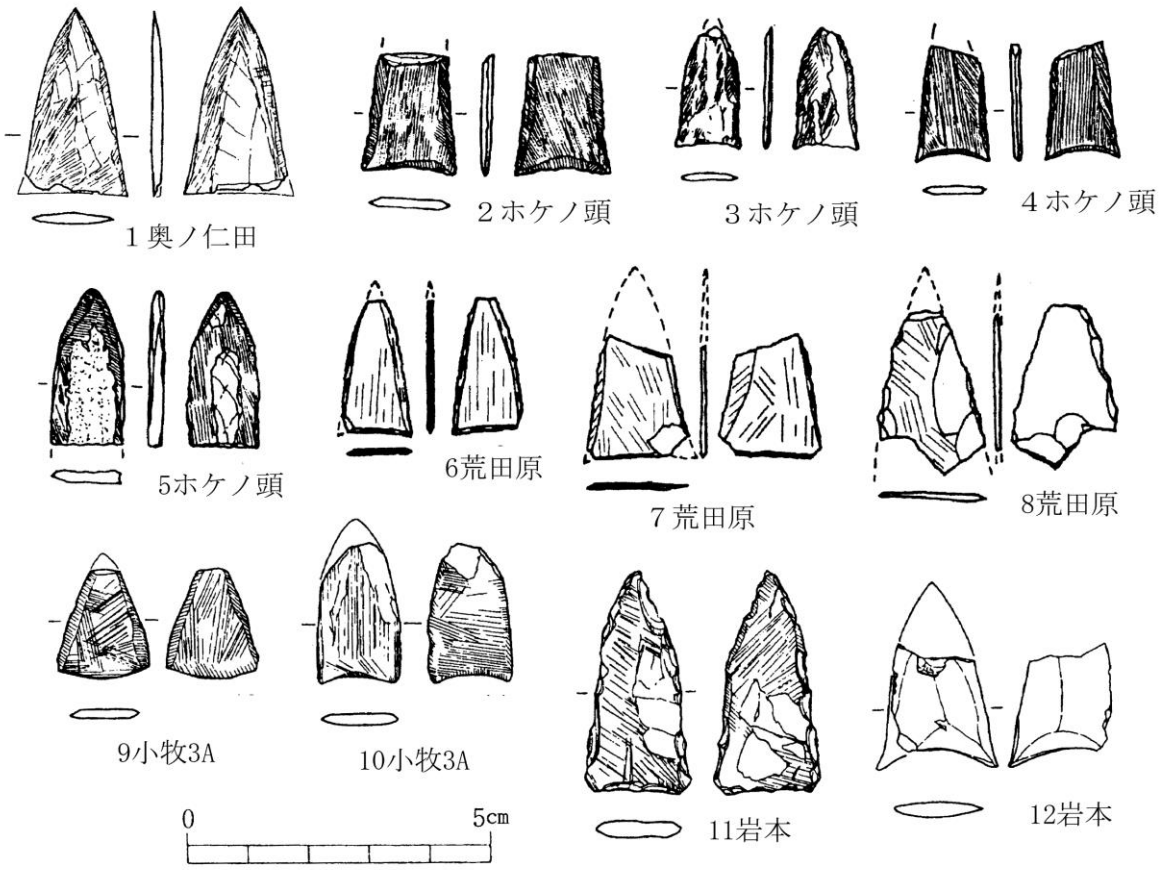


図 15　南九州縄文時代の磨製石鏃②

（2）弥生時代の磨製石鏃

図 16 の①・②に示した南九州弥生時代の５遺跡の磨製石鏃は平たい石材を用いて研磨されている。基部は凹基がほとんどである。大型化していて、幅よりもタテが長い長身鏃が目立つ。

図 13 に示した沖縄諸島・奄美群島出土の弥生時代並行期以降の磨製石鏃は形状の変異幅が大きいものの、南九州弥生時代の磨製石鏃の形状にほぼ類似する。特に長身鏃は縄文時代の磨製石鏃と異なり、この時期の特徴を表している。

弥生時代の後半からは石鏃そのものが減少していくが、鉄鏃に代ったことによるものと考えられている。磨製石鏃は鉄鏃を模倣したものと解釈されている。縄文時代早期を中心に南九州ではすでに縄文時代にも磨製石鏃は存在するが、前節にみるようにそれはきわめて稀な例である。南九州弥生時代には次第に磨製石鏃が一般的となり、さらに鉄鏃へと材料も変わって沖縄諸島・奄美群島に九州から打製石鏃がもたらされる条件は消滅している。したがって、沖縄貝塚時代後期遺跡発見の打製石鏃は同じ時期に外部からの影響下で出現したものではない。

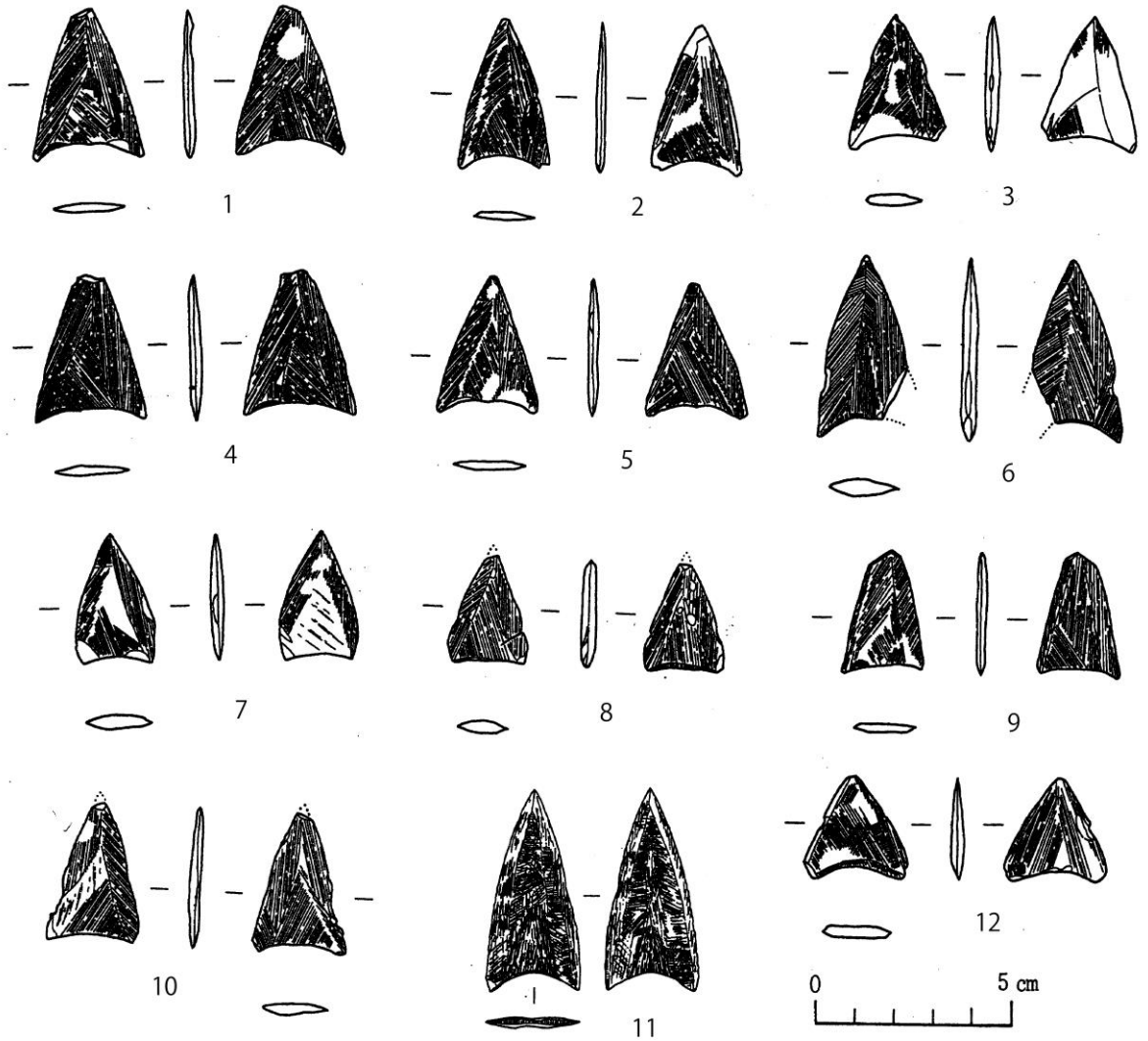


図 16-1　南九州弥生時代の磨製石鏃①

谷添遺跡（根占町）1-10・12　　下伊倉遺跡（東串良町）11

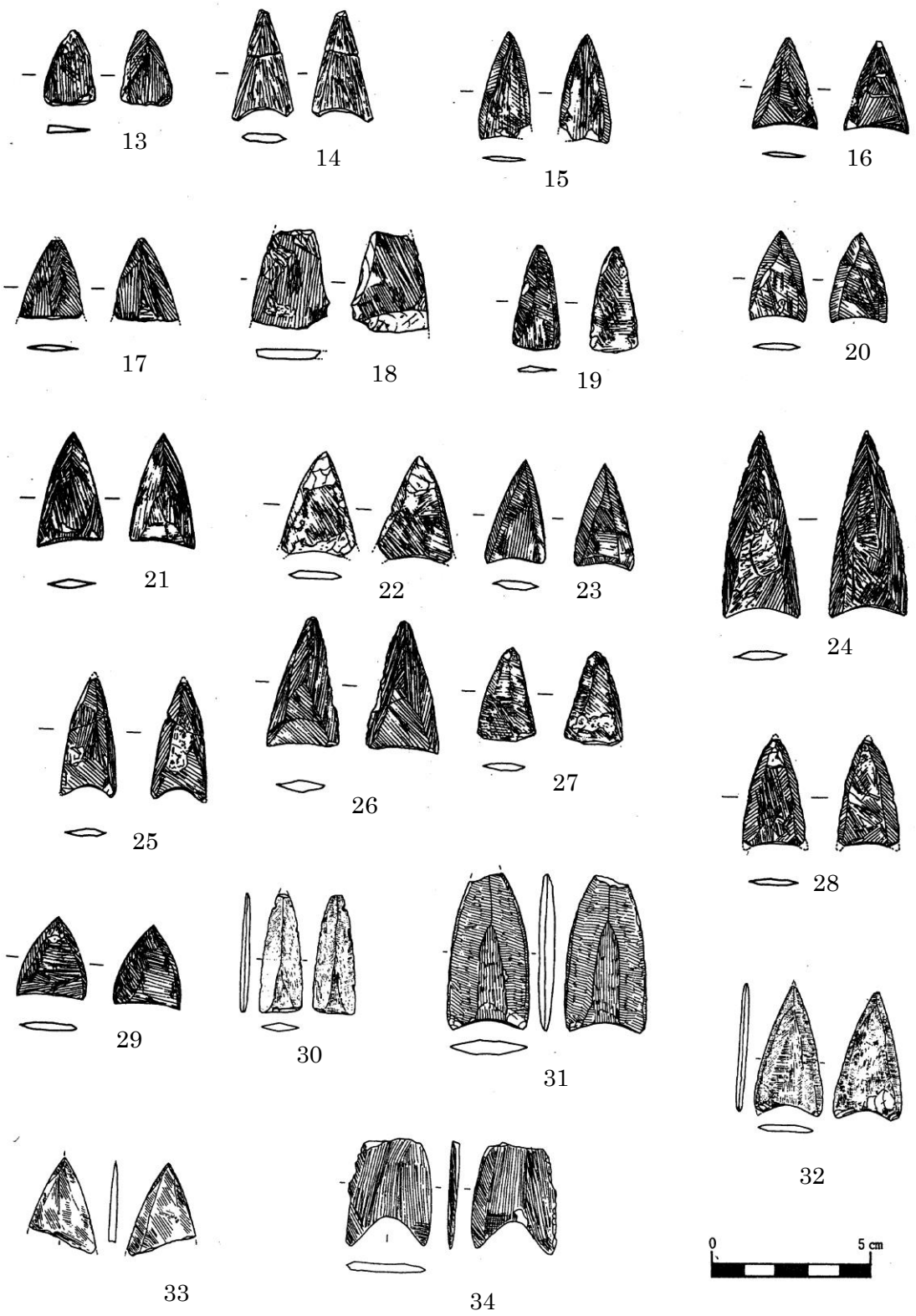


図 16-2　南九州弥生時代の磨製石鏃②

王子遺跡（鹿屋市）13-29　稲荷迫遺跡（志布志市）30-32

吹上小中原遺跡（吹上町）33・34

第 16 節　貝鏃様製品

奄美群島、沖縄諸島において貝で製作された形状が鏃形の製品が出土している（盛本勲 1998、ｐ745-764）。古くは爪形文土器期のヤブチ洞穴遺跡（国分直一ほか 1965）や縄文後期の熱田原貝塚（高宮廣衛 1958）などで知られる。国分直一はこれを貝鏃とみなし、漁労用の弓射の技術であり、その系譜は台湾に求められるとの見解を示した。しかし、南琉球には分布しないので、現在のところ北琉球独自の文化の可能性があるとする見解もある（盛本勲 1998）。

はたして貝鏃様製品は弓射用の鏃であろうか。貫徹力の観点からすると陸獣のイノシシに通用するかは疑問である。木下尚子は宜野湾市安座間原第一遺跡出土資料に限って、これを三角形有孔製品と称し、国分直一の潜水鏃説に異を唱えている。貝鏃とみなすことにも否定的なように理解される（木下尚子 1996）。

形状がほぼ類似するものにサメ歯製品・その模造品があり、三角形をしている点が類似する。基部が凹部を形成するものもあり、石鏃の特徴とよく似ている。孔を穿つものがある点は石鏃とは異なるが、穿孔技術の存在については種子島で 3 点だけ縄文時代磨製石鏃の有孔鏃があるので技術的な整合性はある（宮田栄二 2003）。また、種子島では一陣長崎鼻（南種子町）遺跡から多量の貝鏃とされる資料が出土している（南種子町教育委員会 2011）。

一方、サメ歯に穿孔した製品やそれを模造した貝・石製品には、鏃とは見做せない大型の有孔貝製品がある。サメの威力への特別の観念から製作されたとみられ、これを貝鏃と見做すことはできない。サメ歯製品・その模造品の用途については未だ定まった解釈は成立していない（新里貴之・上村俊雄 1998）。

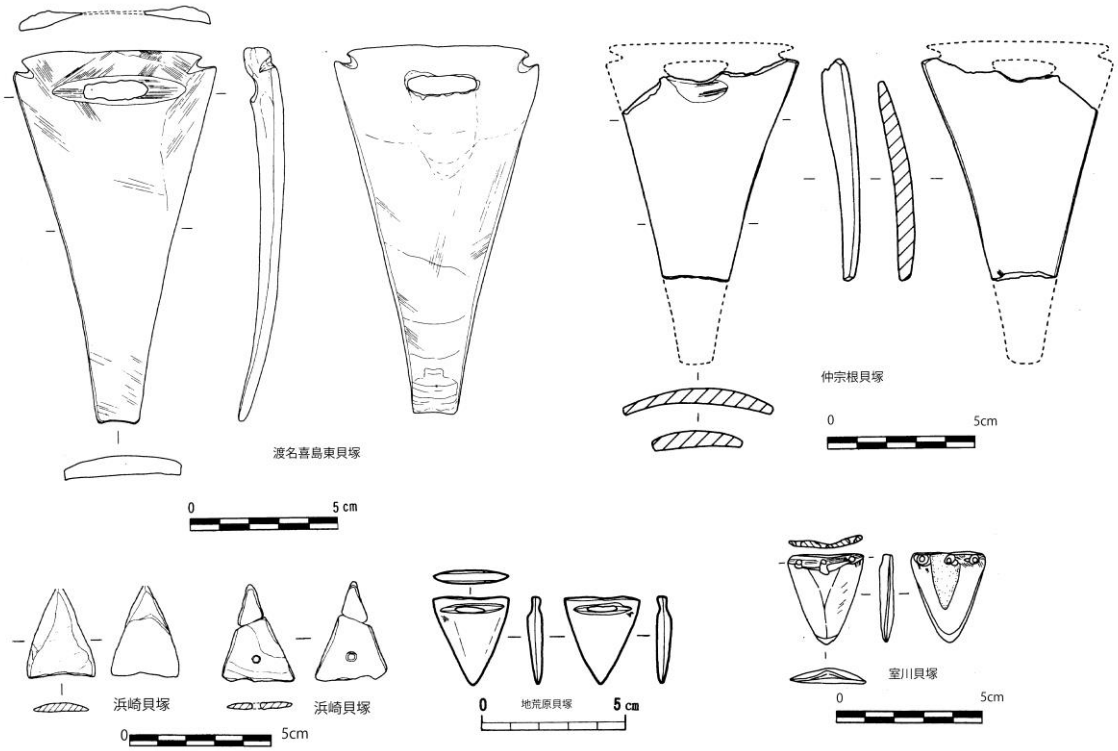


図 17　サメ歯穿孔製品とその模造品

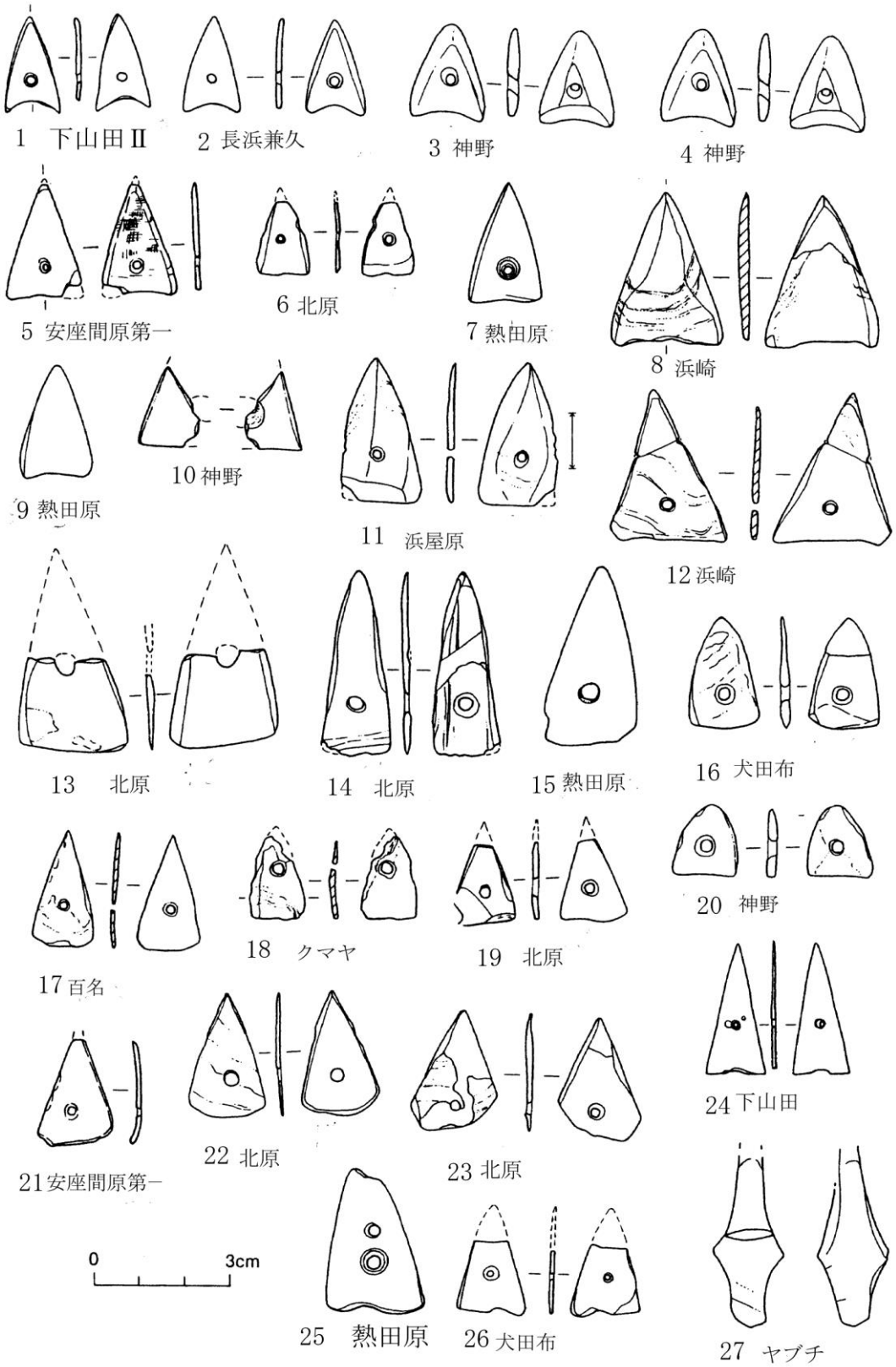


図 18　沖縄諸島・奄美群島出土の貝鏃様製品（盛本勲 1998 より抜粋調製）

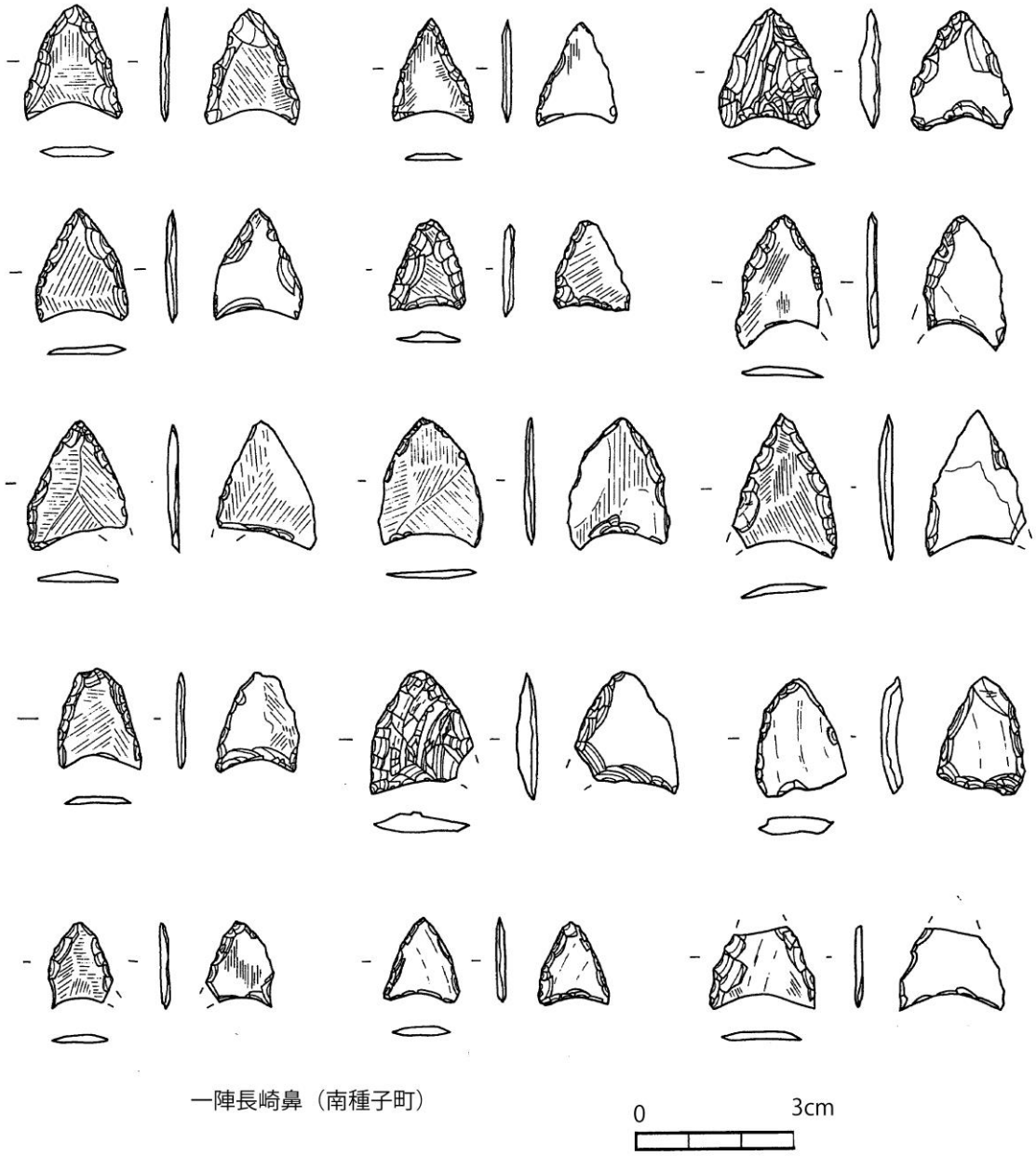
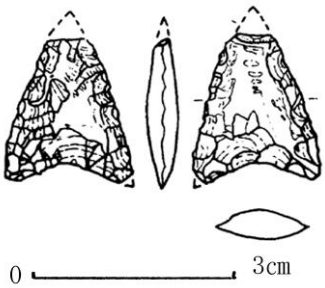


図 19　一陣長崎鼻遺跡（南種子町）出土の貝鏃（南種子町教育委員会 2011）縄文晩期

第 17 節　局部磨製石鏃

沖縄市室川貝塚でチャート製の局部磨製石鏃が 1 点出土している（沖縄市教育委員会 1993）。一般的な打製石鏃の両平面に研磨を加えたものである。九州縄文時代における局部磨製石鏃については少量だが断続的、断片的に早期から晩期にかけて出土がみられる。技術的には打製石鏃の両平面に研磨を加えたもので、大きな差異はない。石材も共通している。したがって系譜としては打製石鏃の系統に含まれる。室川貝塚において出土しているのは、九州縄文時代の石器文化とのつながりを示すものとみなすことができる。

局部磨製石鏃は従来の打製石鏃の両面に研磨を施したものであることから、用途は一般的な打製石鏃と同様で実際に狩猟に用いられた、祭祀に用いられる特別の鏃、装着法の工夫によるものなどの想定がある。



室川貝塚

図 20　室川貝塚の局部磨製石鏃

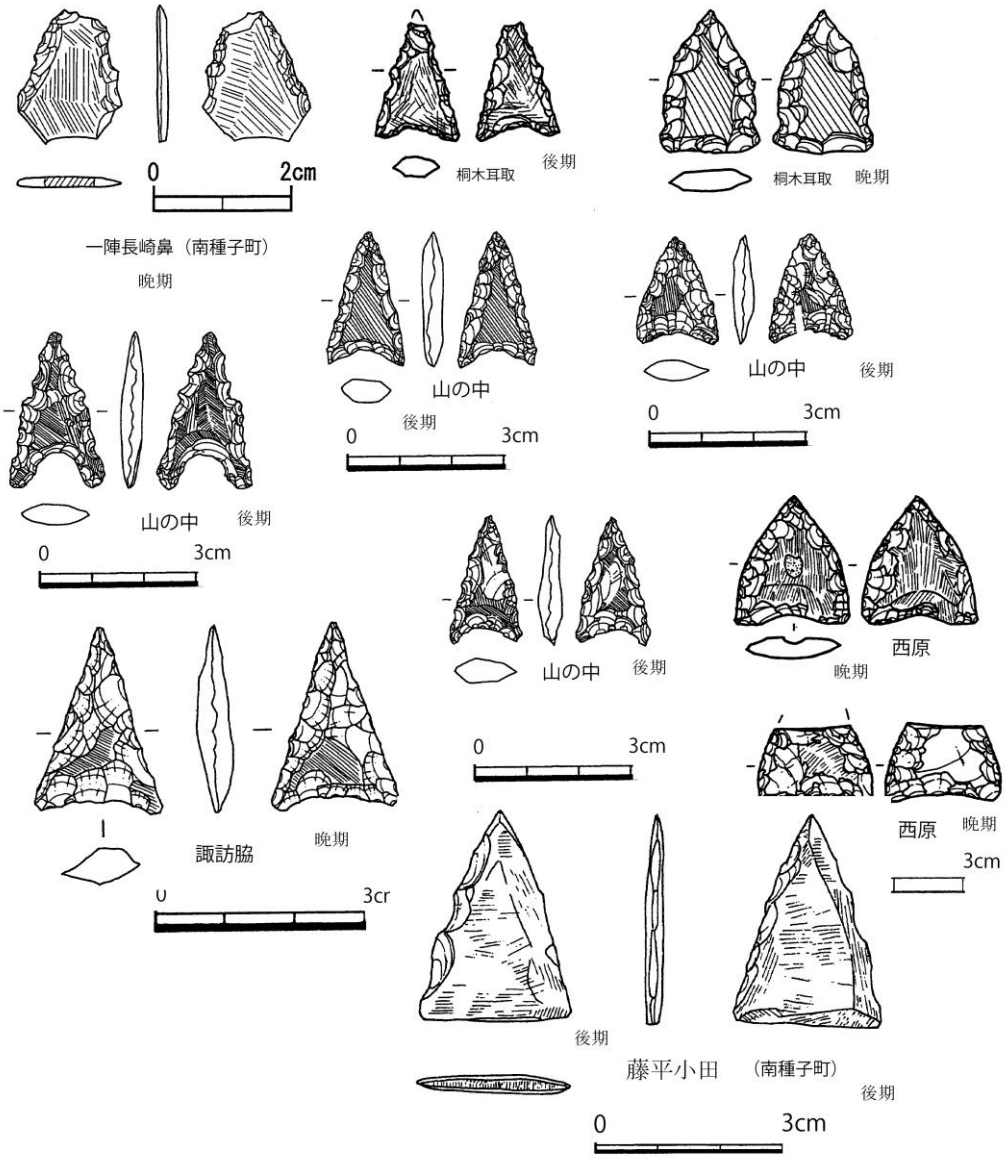


図 21　南九州縄文時代の局部磨製石鏃

第 18 節　「石鏃」の結び

（1）石鏃出現・拡散の時期と特徴

北琉球諸島先史時代における打製石鏃の出現と拡散は主に縄文時代の九州を起源地としていることは繰り返し述べてきたところである。しかし縄文時代のすべての時期に並行する打製石鏃が北琉球の遺跡から発見されているわけではない。最も古い時期は縄文時代前期、曽畑式土器の文化層から出土した読谷村渡具知東原遺跡１点、同村大久保原遺跡の下層・室川下層式土器や条痕文土器の層出土の１点と北谷町伊礼原遺跡低湿地区の曽畑式土器と共伴の１点、計３点である。次の縄文時代中期に属するとみられる北谷町伊礼原 E 遺跡出土の１点を加えても４点と、かなり少ない。さらに奄美群島では大島旧笠利町土浜ヤーヤ遺跡の縄文時代前期層出土の１点がある。

これらの石鏃は縄文時代晩期に増加する動きとは異なる要因によるものとみられる。この時期は曾畑式土器や条痕文土器にみられるように、九州の土器文化の型式があまり大きく変わることなく沖縄諸島まで伝わっている。これは九州の縄文人が北琉球諸島への渡来を試みていた時期であったことを示しており、島々を経由しながらも比較的短期間に南へ南へと渡航・移住したものと考えられる。したがって、石鏃は当時の渡来集団が、起源地の道具（弓矢）を携行してきたものである可能性が高い。わずか４点の例にもかかわらず、これらは沖縄諸島の縄文時代晩期並行期の打製石鏃群と比べて、左右対称の形状が緻密に仕上げられ、均整がとれている点が特徴的である。緻密な押圧剝離技術は起源地と同じであり、沖縄諸島への渡来集団による「携行型」の打製石鏃である可能性が高いと考える。

このような縄文前期～中期の打製石鏃は第一期の出現期ともいうべきもので、縄文晩期の打製石鏃群とはその経緯が異なる。彼らは打製石鏃を持ち込んだが、それを沖縄諸島において再製造することはほとんどしなかった。当該期の層から多数のチャート片が出土しているが、石鏃を製造したことを示す半製品などは確認されていない。別の剥片石器用であろう。

その他の打製石鏃は縄文後･晩期､沖縄貝塚時代後期およびグスク遺跡から発見されているが、そのほとんどは縄文時代晩期（沖縄貝塚時代中期）に属する可能性が高い。南九州縄文時代晩期において、打製石鏃が増加していることは 10 遺跡の例示で確認したとおりである。北琉球諸島に打製石鏃が縄文時代晩期並行期にほぼ限定して出土するのは、当時の南九州において弓射の技術・文化が盛行していた情勢を反映したものと考えられる。北琉球諸島に導入された打製石鏃は発見数量こそ少ないが、島々や地域に受容され、その影響下でチャートを主とした沖縄産石材を利用した在地製石鏃を製作する段階にまで達していたのである。これは北琉球の島々を経由しながら弓射の技術文化が「リレー型」で広がっていったものと考えられる。

一方、縄文後期の頃の奄美群島と沖縄諸島は、大きな枠では共通の文化圏を形成しながらも小さな枠ではそれぞれ異なる性格を帯びていた。要するに交渉圏、交流圏としてはそれほど緊密なつながりではなかった。縄文晩期になると肥厚口縁系土器文化が広く北琉球全域に展開するようになった。打製石鏃はこの土器文化の担い手となった集団の拡散活動の波に乗って、奄美群島・沖縄諸島へリレーされて広がったのである。南九州における打製石鏃の盛行の波と、奄美群島で起こった肥厚口縁系土器文化の沖縄諸島への広がりの波とが相俟って、数量的には少ないが空間的にはかなり広い地域に打製石鏃が出現するようになったといえる。

（2）打製石鏃の象徴化―数量の少なさから想定される役割の変化

南九州では縄文時代草創期から打製石鏃はかなり多用されている。例えば種子島鬼ケ野遺跡で

は完成品 309 個、未成品 56 個、計 365 個もの打製石鏃が一遺跡から出土している。さらに縄文時代晩期の鹿児島県本土の出水市大坪遺跡では 487 個、桐木耳取遺跡で 1408 個と増加している。これらと比べると沖縄諸島発見の打製石鏃の量は全遺跡総量でも 192 個と微々たるものである。この少なさは、北琉球諸島先史時代においては弓射による狩猟あるいは漁労はほとんど行われなかったことを示している。縄文時代前期・中期における少なさは「携行品」であるとすれば当然のこととして理解できる。しかし、縄文時代晩期においては在地でも地元産のチャートを使用して打製石鏃を製作しているのである。しかも、地元産といってもチャートの自然産地はかなり限られており、多くの遺跡（集団）からすれば沖縄諸島域内であっても遠隔地である。チャート石材供給のシステムが形成されていなければ、円滑な入手は困難であり、それなりのコストがかかることであった。そのシステムが機能した結果として、多くの遺跡からチャート片が伴出している。このような条件下で製作された打製石鏃は、少量にせよ空間的にはかなり広範囲に分布しており、打製石鏃文化がある程度定着していたといえる。

多用されていないにもかかわらず空間的広がりをもつ打製石鏃は、本来の機能とは別の役割を付与されるようになっていたのではないか。それぞれの集団において少量でも役割を担い得るもの、それは弓矢の威力を象徴化する行為である。対象に対して射撃による強い衝撃と破滅を与える弓矢は、精神的、物理的災厄をもたらすものを排除する、あるいは予防する効果を期待する行為＝儀礼の場における模擬射撃用としての役割を担っていたのではないか。

また、弓射の威力＝力強さを付与または獲得する儀礼、例えば近年まで沖縄に伝承されていた新生児の健康を願う「ナージキ」と称される習俗の如き場における用具として機能していた可能性がある。ナージキ習俗は庭に獲物に見立てた笊（ザル）に向けて弓矢で射る模擬行為である。ここでは弓矢が力強さの付与や、破邪の役割をもつ象徴として扱われているのであろう。

ほかに沖縄島北部ではウンジャミと呼ばれる行事があるが、その一部に笊をイノシシに見立てて弓射の模擬行為をする場面がある。ここでも弓矢が祭祀用の第二の道具として扱われていることを示している。直接的関連はないが、弓矢が儀礼具となり得ることを証するものである。

沖縄諸島における遺跡ごとの打製石鏃発見量の少なさは、本来の機能を発揮させる狩猟用・漁労用ではなく、損失のリスクのない「第二の道具」として象徴化されていたために、多量の製作を必要としなかったのではないか。

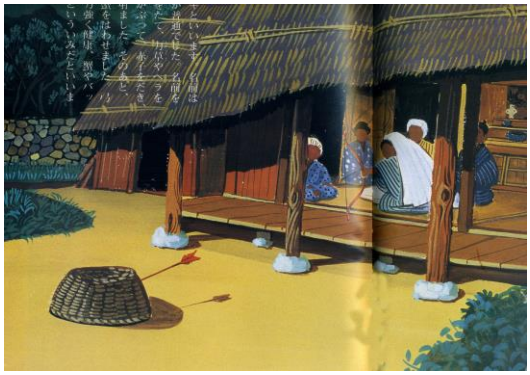


図 22　弓射の習俗「ナージキ（名付け）」
『郷土のくらしと文化』上巻　p 98 より
新星図書出版

図 23　弓射の儀礼
『郷土のくらしと文化』上巻　p 15　より
新星図書出版

（3）待機型・採集型漁業 ― 打製石鏃が多用されなかった背景①

沖縄諸島では打製石鏃は漁労には使用されなかった。しかし一方で「釣り漁」もなかったことは、釣り針がほとんど出土しない（わずかに 2 個のみ）ことから明らかである。貝塚からは魚骨もよく出土するので、弓射や釣り以外の別の漁法によって捕獲していたことが考えられる。魚の種類をみるとブダイ系など浅海、海岸性の魚が多く、サンゴ礁内を主な漁労活動の場としていたことがわかる。

貝塚からはサルボウなどの二枚貝に孔を穿ったものがよく出土し、漁網に懸垂するオモリとして理解されている。これは民俗例にも見られることから推定されている。また、渡名喜島の西底原遺跡 D 地点出土の第 6 号人骨には 19 個の有孔二枚貝がちりばめられていて、死者の上に生前使用していた漁網を被せたものが貝錘だけ残ったものと見られている。この漁網は投網ではなく、定置網であろう。投網は岩礁性の海底が横たわるサンゴ礁湖にはなじまない。簾立漁のような、潮位の干満を利用した漁法に用いられた網であろう。これは一種の「罠漁」で、サンゴ礁の浅い海に適した漁法である。

沖縄諸島先史時代の漁法は定置網（および魚垣の可能性も）の如き施設に潮の干満差によって獲物の終結を待つ漁法が主であった。貝や海草の採取活動を含めて、「待機型・採集型漁業」であったといえる。したがって、遊泳している魚を「狩る」弓射の技術は必要とされなかった。

（4）待機型狩猟（罠猟）―打製石鏃が多用されなかった背景②

遺跡からイノシシ骨が出土することから、なんらかの方法でイノシシ狩をしていたことは明らかである。打製石鏃は出土した絶対量が少なすぎるので、弓射は主たる狩猟技術ではなかったといえる。縄文時代は弓射のほかに罠猟（主に陥穴）が行われていたことは周知のとおりである。沖縄諸島では未発見だが、種子島までは縄文時代の陥穴遺構が発見されている。

沖縄諸島において近年まで存在したイノシシ猟は陥穴もあるが、通り道などに設置した樹木の反動（跳ね木）を利用した罠猟が主であった。これらの方法が沖縄先史時代に存在したかどうかについては実証が困難であるが、弓射以外の方法が想定できるのは陥穴や跳ね木のような罠猟である。動的な狩よりも待機型の猟が主な狩猟法だったのではないか。このような方法は漁労における定置網漁と同じく「待機型」の生業である。先史沖縄諸島の生業は、対象に対して攻撃によって捕獲する戦術ではなく、採集や仕掛けで捕獲する待機型の戦術を選択したのであろう。

縄文時代は森林性新石器文化と称する視点もあるように、植物資源をよく利用し、一部には管理までおこなっていたことが判明しつつある。近年では栽培に近いような種を蒔く植物資源利用があったとする主張もある。森林資源の高度な利用技術が、人口と定住生活を支えていたとされる。このような森林性資源に強く依存した生業システムを構築していた縄文人集団が、北琉球に拡散するにあたってもそのスタイルを継続していたものとみられる。まだ発見例は少ないが、シイの実やカシの実が沖縄諸島でも出土しており、このような植物資源をよく利用していたものとみられる。

沖縄諸島の縄文時代晩期並行期における台地縁辺部への集落形成は、森林への適応が最も成功した時期だったのではないか。植物性食糧を比較的安定して確保できたことを示すように、この時期には別項で扱う石皿・台石類、磨石・敲石類などの植物性食糧を対象とする石器が多く出土している。このような社会は、狩猟への依存度はそれほど高くなかったものと考えられる。エネルギー消費が激しく、成功率も罠猟より確実に高いとはいえない弓射の技術は、動物性食糧の獲

得方法としてはあまり普及しなかったのである。

一方、日本列島で広く棲息するシカは沖縄諸島では更新世までは棲息していたが、完新世には絶滅している。このことも、弓射の需要が低かったことの背景の一つであろう。他方、サンゴ礁（裾礁）の海洋性食糧資源が、陸地のあまり深くはない森林の不足を補完して、定住生活を支える二大環境を形成していたのである。待機型、採集型の生業システムがよく機能していた社会では、攻撃型の狩猟システムはあまり必要とされず、結果として発達しなかった。

（5）黒曜石の位置

沖縄諸島から北琉球諸島では産しない黒曜石の打製石鏃や剥片・屑が出土している。黒曜石製石鏃は 19 点であるが、剥片石器として用いられたものや砕片などもある。発見量は少ないが、剥片・屑を含めると伊是名島、伊江島、沖縄島および周辺小離島など広い範囲におよんでおり、他の石材の打製石鏃の分布とほぼ重なっている。久米島からは未発見であることも共通している。

時期についてはほとんどが縄文時代晩期に属するものとみられる。グスク遺跡からの発見もあるが、打製石鏃全般でみてきたように、北琉球における打製石鏃の出現は二つの時期があり、縄文時代前期・中期に属する数例を除いてはほとんど縄文時代晩期とみなすのが妥当である。北琉球発見の黒曜石は縄文時代晩期に属する。

この時期は南九州において打製石鏃が再び多用されるようになり、そのなかで黒曜石がかなりの割合を占めるようになる。しかも、南九州では地元産黒曜石が存在するにもかかわらず西北九州佐賀県腰岳産黒曜石が積極的に導入されるようになる。腰岳産は九州産黒曜石のなかでも良質であるが、当時の縄文人もそのような評価をしていたために、南九州においても需要が高かったのである。腰岳産黒曜石製打製石鏃が、石核や剥片とともに北琉球へもたらされたのは、起源地の価値観のもとに選択的に良質の石材を携行し、あるいは交流によって伝えたということであろう。北琉球諸島の在地人たちが打製石鏃の製作使用に習熟し、より良質の石材を求めたことへの供給の結果ではないと考える。それは北琉球発見の黒曜石製石鏃が特に高い技術によって製作されているわけでもなく、在地石材のチャートと特にかわらないような製作技術、形状であることによる。希少石材としては扱われていないのである。腰岳産黒曜石を良質として重宝したのは、南九州をはじめとする九州縄文人の価値観である。

沖縄諸島における実際の狩猟が打製石鏃の多用によって活発に展開されていたのであれば、製作技術上からも射撃効率（貫徹力）からも良質黒曜石を沖縄諸島側から求めたことであろう。しかし、さきに述べたように、沖縄諸島において打製石鏃は実際の狩猟よりも、その威力を象徴化した役割を付与されていた可能性があり、その場合は模擬的形状だけが求められ、実際の射撃力、貫徹力は必要とされないのである。良質な黒曜石がもたらされたにもかかわらず、沖縄諸島側の反応はとくに目立つような動き＝交易にまでは至らなかったことの結果として、その分布量は少ないのである。

（6）磨製石鏃

北琉球発見の磨製石鏃は縄文時代と弥生時代並行期の２つの時期に出現する。縄文時代に属するものは沖縄諸島で１点、奄美群島で４点だけできわめて少ない。縄文時代の磨製石鏃は南九州でも少量であり、出土状況は共通している。沖縄貝塚時代後期および奄美群島の同時期の磨製石鏃は九州弥生時代のものに類似し、長身鏃もみられるが同様に量はかなり少ない。九州弥生文化の動きに連動して伝えられたものとみられるが、その量はわずかでその形状も不揃いで簡略な造形である。当時の沖縄諸島には打製石鏃と同様に磨製石鏃の製作使用も定着しなかったといえる。

この時期における磨製石鏃の出土は、九州地域とは濃淡の差はあれ継続した関係を縄文時代以来維持していたことを証明する側面もある。

縄文時代における磨製石鏃出現の背景のひとつに、石鏃適材（チャートなど）産地から遠隔地であることによる代替材使用を挙げている（宮田栄二 2003）。沖縄諸島の石鏃の場合適材はチャートであるが自然露頭は主に沖縄島北部本部半島であり、距離関係としてはほぼ同一条件下にある。したがって、石材産地との遠近の関係で磨製石鏃が存在するのではなく、南九州方面からの文化的接触による導入として捉えるべきである。

（7）北琉球と九州

これまでみてきたように、北琉球諸島においては打製石鏃、磨製石鏃いずれも発見量はかなり少ないことから、本来の機能である獲物を捕獲する弓射の道具としては発達しなかったといえる。それにもかかわらず沖縄諸島の広い範囲に石鏃が分布している。さきに縄文時代前期・中期にわずかに打製石鏃がもたらされたのは、渡来集団による携行品（搬入品）の可能性が高いこと、晩期に集中するもう一つの打製石鏃群は南九州における縄文時代晩期の打製石鏃の盛行の波及と、北琉球諸島における肥厚口縁土器文化集団の拡散に伴うものと考察した。

北琉球の肥厚口縁土器は九州本土ではほとんど出土しない。このことからすると、北琉球先史人が九州本土まで渡航して打製石鏃文化と接触した結果、奄美・沖縄諸島に打製石鏃が伝えられたのではないようだ。九州本土とくに南九州の縄文人集団が北琉球諸島への渡航に伴って打製石鏃を携行し、これがリレー式で受け入れられて、地元でも製作されるようになったものと理解すべきであろう。

九州本土から沖縄諸島までの列島は、相互の島が視認（望見）できる距離の関係にあり、島伝いに航行できる。次の島が望見できるという環境にあると、とくに他の要因、例えば人口圧などの動機が存在しなくても、人の集団は渡航を試みたであろう。人間のもつ未知の世界への好奇心、探求心も移動活動の大きな動機になり得る。一方で、拡散し定住した島々の住人となった北琉球諸島先史人は、起源地（九州）へのルーツ意識も継承されていったことだろう。拡散地と起源地が島伝いに連絡できる距離関係においては、相互の接触がしばしばおこなわれ、九州本土の動き・情報が北琉球の文化にも反映されていくという文化的影響関係でもあったといえる。それを示すように、土器文化を中心に列島の先史文化の要素が北琉球諸島に含まれているのである。「海の回廊」によって結ばれた関係であった。

一方では北琉球諸島の先史人はサンゴ礁を島々の裾に控えた独特の環境を有しており、縄文文化の森林性生業の伝統に加えてサンゴ礁をもう一つの採集地とする独自の生業文化を形成していった。そのような環境のもとで、北琉球諸島は九州の文化との影響関係をもちながらも、物質文化においてある程度の独自性を形成していったのである。

しかし、北琉球諸島先史文化の影響が九州に及ぶことはほとんどないことから、北琉球諸島と九州本土との関係は「片方向通行」の関係が主流であったものとみられる。そのような通行関係から北琉球諸島の「採集型生業」は「攻撃型」の弓射による生業を受け入れず、弓矢はその破壊力・威力を示す象徴行為の道具として機能を転化し、邪気を払うための第二の道具へと変容させていったのであろう。

（8）沖縄貝塚時代後期およびグスク期遺跡発見打製石鏃の所属時期

沖縄諸島発見の打製石鏃は貝塚時代後期およびグスク期遺跡発見資料も含めて、縄文時代打製

石鏃文化の系統に属するものであることが把握できた。長さが 30mm 以下の石鏃がほとんどを占める点は日本列島全体に、茎がない点は西日本でも少ない点に共通する傾向である。狭い範囲の比較ではあるが、基部が凹基、平基の二大形状を占めている点も南九州に共通している。側辺は押圧剝離技術の熟練の差はあるものの、外側にふくらむ外湾型と直線的に先端に至る直辺型とが、凹基・平基と同様に二大形状を占めている。

沖縄諸島において打製石鏃が最も多く発見されている縄文時代晩期は宇宿上層式・宇佐浜式を中心とする肥厚口縁土器が広く展開し、北琉球に共通性の高い物質文化が形成された時期である。さきにみたように、縄文時代後期に限定できる打製石鏃はなく、多くが晩期に所属する可能性がある。晩期における打製石鏃の流布は肥厚口縁土器文化集団の拡散・交流活動の活発化がもたらした現象のひとつなのであろう。縄文後期の伊波・荻堂式土器文化圏の境界が取り払われて、肥厚口縁土器文化圏に広く覆われた北琉球世界で、以前よりも多くの物質文化が共通性をもつようになることは当然のなりゆきであろう。打製石鏃はその現象のひとつである。

一方、九州では弥生時代になると磨製石鏃が目立つようになる。磨製石鏃はスレート製で平たく、従来の三角形のほかに長身の形状も多い。九州弥生社会とは貝殻交易をとおした活発な交流が展開されたが、奄美群島・沖縄諸島出土の磨製石鏃の一部はこの時期にもたらされたものであろう。北琉球は大局的には九州の先史時代の動きに連動しており、まさに弥生時代に至って再び連動して磨製石鏃が導入されたのである。すると、沖縄貝塚時代後期後半遺跡およびグスク期遺跡発見の打製石鏃は、磨製石鏃流布の時期よりも後の時代になってしまう。九州においては石鏃に代わって鉄鏃が普及している時代である。

九州において既に消滅した打製石鏃文化がその後沖縄諸島で再登場したとすると、それは縄文時代から細々と継続していたか、それともあらたに沖縄諸島において独自に発生したのかということになるが、いずれも成立しないことはこれまでみてきた状況から明らかである。

このことから、沖縄貝塚時代後期およびグスク期遺跡発見の打製石鏃の所属時期を当該遺跡と同時期だとすると、周辺地域との整合性に欠けるのである。縄文晩期の層の遺物がその後回帰した集団の活動、あるいは自然作用による「浮きあがり」によって貝塚時代後期およびグスク期遺跡の層に混入した結果、当該層にもたらされたのであろう。北琉球（奄美群島・沖縄諸島）先史時代の打製石鏃、局部磨製石鏃は九州縄文時代に起源をもつことはこれまで検証したとおりである。磨製石鏃については縄文時代に属するものは伊是名島ウフジカ遺跡出土磨製石鏃の 1 点だけである。沖縄貝塚時代後期遺跡出土の磨製石鏃は九州弥生文化に関連するものである。この時期の遺跡発見の打製石鏃は縄文時代の遺跡に属していたものが混入したものと解すべきである。グスク期に至っては沖縄諸島においても鉄鏃が登場しており、石鏃は存在しない時代である。

そもそも北琉球先史時代の人と文化の起源地は、主として縄文時代の九州の地である。地理的にも島から次の島へ視認しつつ往来できる条件下にあり、海洋によって隔離された島嶼環境のもとで独自の地域的特性を形成しながらも、一方では海洋によって結ばれた環境のもとで九州との交渉は継続され、基本的な文化の基盤は常に共有されていた。稲作をすぐには導入せず、採集・狩猟・漁労生活を継続していた沖縄貝塚時代後期は、一見日本列島から離れていたようにみえる。しかし、共通の情報圏、交渉圏としては縄文時代以来の関係が継続していた。そういう条件下にあったからこそ、九州で磨製石鏃が一般化すると北琉球にも磨製石鏃が流布する動きをみせるのである。北琉球先史社会は自己完結的な世界ではなく、周辺地域の物質文化を選択的に受容し、その影響も受けながら必要に応じて変化してきたといえる。

第４章　石皿・台石類―沖縄諸島先史時代の脱殻粉砕調理文化

第１節　序

石皿・台石類と磨石・敲石類は日本縄文時代および北琉球諸島先史時代の多くの時期と地域に存在し、石器組成のなかでも大きな割合を占めている。これらの石器の多くは加工・調理用具として理解され、主に植物質食料とくに堅果類の脱殻・粉砕の機能をもつものとされている（上篠信彦 2015）。このような調理用具の発達は、土器の使用とあわせて先史社会集団の可食食料の対象を大きく拡げ、定住社会のさらなる充実を促したものとして位置づけられており、縄文時代における食材獲得の工夫･対策を具体的に進める実行手段としての道具の登場と技術革新であった。

自然物採取経済段階の先史社会集団においては、食料となるべき野生の動植物を獲得するための技術として、より効率的な道具や技術が工夫され、継承されてきた。狩猟・漁撈活動においては弓射の石鏃、網漁の貝錘・石錘のほかに罠猟（跳ね木）や陥穴猟などが想定できるが、遺跡から得られる情報のほとんどは石器、貝器の類である。それでも獲物の獲得活動を示す用具、仕掛けの設備などはある程度把握できる。一方、植物質食材の採取活動に伴う専用の用具とみられる遺物は確認が困難である。打製石斧は土掘り具としての機能から地下茎・根の採掘に、剥片石器や貝刃は刃物としての機能から木の実や若葉、新芽の採取に使用された可能性があるが、用途はそれに限定されるものではない。竹は半裁すると刃物となり、採取用具になり得るが遺跡には残りにくいことから発見例はない。

植物質食材については、採取活動よりも加工処理段階における用具の方が出土遺物としては把握しやすい。食材の加工＝脱殻・粉砕技術としての石皿・台石類、磨石・敲石類がそれである。これらの道具が木の実などを脱殻・粉砕して食材の加工・処理を円滑にし、より豊かで、安定的で、多彩な食生活を生み出し、支えてきたといえる。遺跡における食料残滓としての出土遺物は獣魚骨や貝殻が多数を占めることから、先史社会の主な食材は動物質食料であったかの如く見えるが、これまでの研究の成果では植物食がはるかに大きな割合を占めていたことが解明されている（渡辺誠 1975）。縄文時代の社会と文化を支える基本的な生業は森林資源の高度な利用技術にあり、世界的な新石器時代の基準の一つとされる農耕にかわる重要な要素として位置づけられているのである（今村啓爾 1999）。

沖縄の先史社会においても石皿・台石類、磨石・敲石類が製作・使用されていたことは周知のとおりである。多くの遺跡からこれらの石器が出土し、調査報告書では自明のこととして食材粉砕用の機能をもつ石器として扱われている。沖縄先史社会の食生活においても、これらの石器が食生活上重要な役割を担っていたのである。また近年の調査では、これらの石器使用の対象物である堅果類も低湿地遺跡を中心に発見例が増えつつある（渡辺誠 1991、盛本勲 2001）。

そこで、沖縄諸島先史時代における定住社会の食生活を技術面で支えてきた石皿・台石類、磨石・敲石類に焦点をあて、これらの時期、地域、遺構などにおける出土状況、利用石材の石質などを分析することで、植物質食料を中心とする経済生活の工夫・対策と実行手段を捉えたい。

沖縄諸島出土の脱殻・粉砕用の石器は自然石を簡単に加工・成形したものが多く、日本縄文社会によく見られる定形的石器と比べると簡素である。したがって、石器としての認定は形態よりも使用痕の観察による場合が多い。石器製作技術による型式の把握は容易ではないが、これらの石器群の全体的特徴やわずかに存在する定形石器を手掛かりにすることで、沖縄諸島先史時代における脱殻・粉砕用石器の特質を把握し、九州縄文社会の同類石器群との比較検討を進めたい。

さらに、石皿・台石類、磨石・敲石類及び石斧の遺構内外における出土状況は、定住集落における生活の仕組みを反映しているものとして検討する。なお、磨石・敲石類石は石皿・台石類とセット関係にあるが、主として自然円礫をそのまま使用しているので、その観察・分析には膨大な時間を要する。別の機会を得ることとして、本論では扱わないこととする。

第２節　先行研究

琉球列島先史時代における石皿・台石類、磨石・敲石類を論題の中心に据えた論考は少ないが、戦前から発掘調査報告書の当該項目のなかでその機能、用途についての考察がなされてきた。また、その使用対象となったとされる植物質材料についても、堅果類を中心に言及されてきた。

(1)　戦前期の研究

松村瞭は発掘調査報告書『琉球荻堂貝塚』（松村瞭 1920）のなかで槌石について比較的詳細に論じている。

「槌石と凹石」の項を設け、楕円形に凹みをもつものは槌凹石（Pitted hammer stone)と称すべきとし、茲では単に槌石と称すると述べる。そして凹部は使用によってできたものだけでなく、故意に凹みを造ったものもあるとし、凹みは使用時に指をかけて滑り止めの役割をもつものだと解釈した。使用痕はむしろ平滑面や粗面部にこそ見られるもので、機能は獣肉・魚肉・果実・樹根を潰し、搗き砕くことのほかに石器製作にも用いられたものと考えた。「カレコレ比較シテ其ノ用途ヲ分類スルガ如キハ概シテ困難ニテ（中略）便宜諸種ノ用途ニ當テタルベク」（松村 1920、ｐ19）という指摘は今日でも有効である。松村は国内外の類例を挙げて荻堂貝塚出土の石器を槌石とする根拠を例証している。

大山柏は発掘調査報告『琉球伊波貝塚』（大山柏 1922）のなかで出土した凹石５個について丁寧な観察記録をしている。概形、凹部数、各凹部の関係（上下左右)、凹部の状態（深さ)、打欠痕などを述べるとともに、「凹石必スシモ凹部利用ノミニ限ラサルヘク、（中略）全ク他ノ用途ニモ種々応用セラレシナラン・・」（大山柏 1922、ｐ34）としている。具体的な用途の想定は示していないものの、続けて「其利用ノ範囲ト種類トニ従ッテ凹部モ形態、石質ニモ相違ヲ生スルニ至ルニアラサルカ」と凹部の状態と形態、石質は機能によって相違がみられる可能性を指摘している。

さらに石杵として断面楕円形で棒状の石器を紹介し、頭部と底部の打痕の相違から両端の使用対象の相違を想定している。

なお、戦前期において初めて沖縄の考古学的調査をおこない、いくつかの論考を発表した鳥居龍蔵は、凹石の用途について発火器とする見解を示し、その後の凹石の解釈に影響を与えた。

(2)戦後の研究

1966 年に琉球政府文化財保護委員会によって実施された沖縄島北端の辺戸宇佐浜遺跡の発掘調査において、初めて定形の脚付石皿が発見された。

国分直一は『南島先史時代の研究』（国分直一 1972）にそれまでの南島考古学研究の論考をまとめた。

そのなかで石斧については多く論じているが、石皿・台石類、磨石・敲石類の石器や脱殻・粉砕技術についての論考はあまりみられない。

1976 年今帰仁村西長浜原遺跡において炭化したイタジイの実がまとまった状態で検出され、同遺跡から出土した石皿や磨石とあわせて植物食の調理を示すものとして注目された。その後いく

つかの遺跡からドングリの実が検出され、先史時代における食料資源と利用法が具体的に把握されてきている。

1977 年熊本大学の白木原和美らによるトカラ列島中之島タチバナ遺跡の発掘調査において、脚付石皿が出土した。北琉球としては沖縄島辺戸宇佐浜遺跡についで２例目である（白木原和美 1977）。

沖縄考古学会編集の『石器時代の沖縄』（1978）では石皿・磨石・凹石を図や写真で示し、食材のすり潰し用具として紹介されているが、それ以上の論及はない。

『沖縄歴史地図』（1983）のなかの「石器」の項では脱殻粉砕具は扱われていないが、「植物質食糧と炭化穀物」の項でシイの実、カシの実などの堅果類の遺跡出土例と石皿・磨石・凹石を関係石器として挙げている。

多和田真淳は先史時代の植物食研究の重要性を説き、具体的に可食植物を挙げて検討した。（多和田眞淳 1971・1980）。

白木原和美は「クガニイシ」（1978）のなかで、クガニイシと命名した石器の発見例を紹介し、両手で持って使う堅果類などの植物質食糧の粉砕用具であるとした。さらに「石皿が西日本に少ないとされるなかで南西諸島に異常に多い・・・」と指摘している。石皿の地域的出土状況の特徴について初めて言及したといえるが、具体的な分布状況は示されていなかった。その後クガニイシについては熊本大学の考古学実習に伴う伊江島ナガラ原東貝塚発掘報告書のなかで出土集成がなされた。

渡辺誠は沖縄先史遺跡出土の植物遺体の例を示し、ドングリ類の水さらしを要するオキナワウラジロガシ、要しないオキナワジイ・スダジイ（イタジイ）について解説している（渡辺誠 1991）。

牛ノ浜修は奄美諸島を含む鹿児島県内の石皿を集成し、丸形と多角形、凹面の有無と深浅による分類によって特質を明らかにした。（牛ノ浜 1999）

宜野座村の『前原遺跡』（1999）から多数のドングリ貯蔵穴が検出されている。同時に発見された水辺遺構で堅果オキナワウラジロガシが多数検出されたが、これらを処理あるいは貯蔵したものとされる。これらと同様に多数出土した石皿（報告書では台皿）との関係についての言及はない。水辺遺構からは虫殺しの水晒しをしたとみられるザルとウラジロガシが検出され、これらの堅果類が食料として利用されていたことを具体的に示した。

高宮広土は遺跡包含層の土壌をフローテーションによって植物遺存体を検出し、植物質食料や古環境の分析に継続的に取り組んでいる。石皿・台石類、磨石・敲石類の機能などの検討を側面的に支える研究でもあるといえる（高宮広土 2013）。

2003 年には奄美大島の宇宿小学校遺跡で底部に隆帯文のある石皿が数例発見され、儀礼用ではないかと注目された（中山清美 2003）。

『沖縄県史』（2003 年）の「石器」の項で嵩元政秀は敲石・凹石・魔石・石皿の小項を設け、敲石は石器造りや食材粉砕、石皿は食材粉砕の用途をもつと説明し、吹出原遺跡の石皿と磨石のセット出土例を示した。別項で植物質食材を扱い、堅果類を挙げている（嵩元政秀 2003）。

以上のように石皿・台石類、磨石・敲石類については、その用途を主に堅果類を磨り潰すものとし、台石については石器製作用とする解釈と、両方の用途をもつとする解釈がおこなわれてきた。

一方、現在においても発掘調査報告書のなかでの石皿・台石類、磨石・敲石類の取り扱いは石斧や石鏃の観察と比べてかなり詳細を欠いていて、必要な情報の把握を阻んでいる例が少なくな

い。石器の項目や植物遺存体の項目などで一般的な用途の説明・解釈を示すにとどまっている場合が多い。せめて資料そのものの図・写真や計測データを示してあれば利用が可能であるが、省略されることが少なくない。極端な例では「石皿の完形数十個が出土した。そのうち２例を示す」として他は切り捨てられていることもある。この場合石皿の出土は確認できるものの、その属性はまったく把握できない。

せっかく発掘調査によってていねいに取り上げられ、確保された資料が報告書作成者の関心の度合によって記録・報告されないこともあるのである。石皿・台石類、磨石・敲石類はその資料的価値に対して、まだ適切な扱いを受けていないのが現状である。それが看過されているのは、研究者間において当該石器類への関心が低く、研究上の「需要」が少ないことを反映しているという面も指摘できる。近年ではさきに触れた 2003 年の奄美大島旧笠利町宇宿小学校遺跡発掘における、脚付および底部隆帯文石皿は、きわめて重要な資料にもかかわらず、３個まとめて一枚に収められた写真が掲載されているだけで、その他の属性情報は全くないのである。

田里一寿はオキナワウラジロガシの出土状況を検討し、貝塚時代における自然分布地域の想定、その利用環境などについて詳しく分析し今後の研究進展への展望を開いた（田里一寿 2014）。

第３節　日本縄文時代出土石皿・台石類、磨石・敲石類の分類

(1)　上篠信彦による石皿・台石類の分類

日本縄文時代における脱殻・粉砕技術に関する研究は、すでに上篠信彦が集大成ともいうべき成果をまとめている（上篠信彦 2015）。そのなかで上篠が示した石皿・台石類、磨石・敲石類の分類は次のとおりである。

これによると、定形とされるものは凹部の整形を有し、隅丸長方形、楕円形、略円形などで、不定形には丸みをもつ略円形、角を複数もつ多角形がある。また、台石と石皿との違いは凹部の整形の有無を基本的な判断基準にしている。

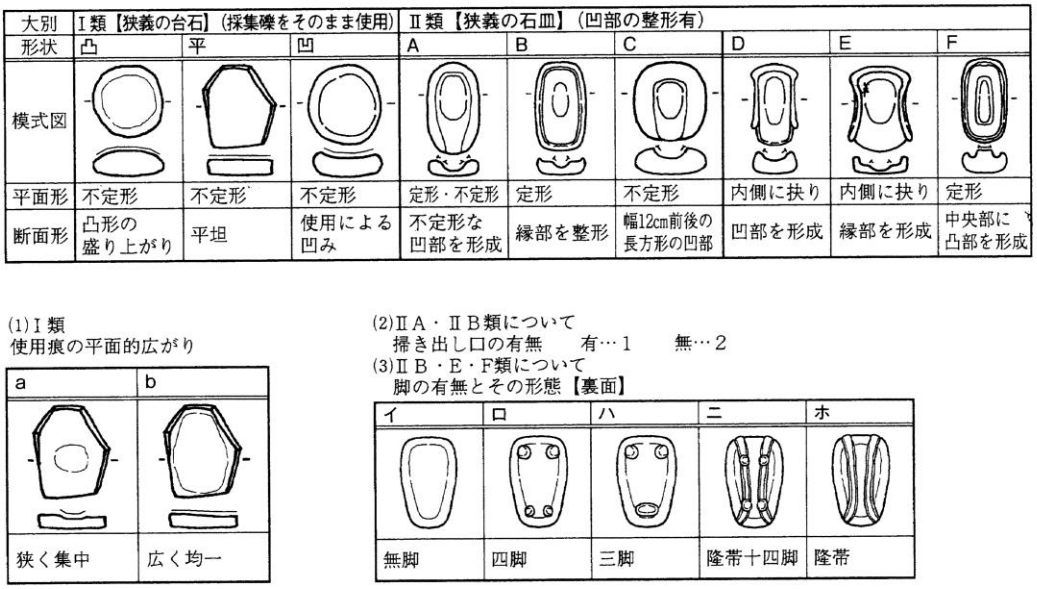


図１　石皿の分類　（上篠信彦 2015）

(2)　上篠分類と沖縄諸島出土石皿・台石類との照合

上篠分類を適用して沖縄諸島出土の石皿・台石類を集計した結果は表１のとおりである。

沖縄諸島発見の石皿・台石類は上篠分類のすべてを満たしてはいない。特にⅡ類（狭義の石皿）については適合しないものの方が多い。言い換えれば、沖縄諸島出土の石皿・台石類は典型的な定形が少ないうえに、その種類も少ない。上篠分類と照合してみると、沖縄諸島の石皿・台石類は概ね次のような特徴が指摘できる。

①Ⅰ類凸形状はかなり少なく、数点程度だけ存在する

②Ⅰ類平形状はよく出土している。上篠は採集礫をそのまま使用し、表面が凸形状と平形状、および凹みがあっても使用によって形成されたものは台石として分類している。沖縄諸島の発掘調査報告書のなかには平坦面でも敲打痕を有するものを台石、磨痕を有するものを石皿として扱っている例もあるので、上篠分類に組み込むための操作が必要な場合もある。

③Ⅰ類凹形状に属するとみられる台石は沖縄諸島でもよく出土しているが、調査報告書で使用によるものか、加工によるものかの観察記録は少ない。加工によるものであれば、Ⅱ類Ａの２として扱われることになる。破片の場合、浅い凹部をもつものは概ね台石としたが、自然礫をそのまま使用という定義があるので判断が困難である。明らかに石皿である宇佐浜遺跡出土の定形脚付石皿でも、明瞭な縁部をもった深い凹部を形成しているわけではない。

④Ⅱ類のＡ～Ｆ形状のうちほぼ適合する形状の石皿はⅡＡの２が多く、ⅡＢ２が推定を含めて数例ある。掃き出し口や明瞭な縁部を形成する石皿は沖縄諸島では得られていない。ただし、凹部以外の表面を縁と見做すのであれば、ゆるやかな縁部として扱える。

⑤脚を有する石皿は１例のみで、無脚が一般的である。有脚石皿は上篠分類ではⅡＢ・Ｅ・Ｆに限定されているが、沖縄出土の有脚石皿はⅡＢの２の外底部にみられるもので、ロに属する４脚型である。

上篠分類による沖縄諸島出土石皿・台石の組成は表１のとおりである。

表１　上条信彦分類にもとづく沖縄諸島出土石皿の集計

時期	Ⅰ類			Ⅱ類									合計
	狭義の台石			狭義の石皿・凹部の整形有									
				A		B			C	D	E	F	
				1	2	1	2						
				定形・掃出口有・不定形	定形・掃出口無・不定形	定形・掃出口有・有脚・無脚	定形・掃出口無		不定形・長方形の凹部	内側に抉り・凹部を形成	内側に抉り・縁部を形成	中央部に凸部を形成	
				イ	イ		イ	ロ					
	凸・盛り上がり	平・平坦	凹・使用による凹み	無脚	無脚		無脚	四脚					
縄文早期末・前・中期	0	4	5	0	10	0	1	0	0	0	0	0	20
縄文時代後期	0	6	4	0	7	0	1	0	0	0	0	0	18
縄文時代・晩期	1	17	6	0	11	0	2	0	0	0	0	0	37
縄文時代晩期	0	8	17	0	17	0	4	1	0	0	0	0	47
沖縄貝塚時代後期	1	16	9	0	3	0	3	0	0	0	0	0	32
合　計	2	51	41	0	48	0	11	1	0	0	0	0	154

第４節　沖縄諸島出土石皿・台石類の形状と特質

上篠分類によれば採集礫をそのまま使用し、表面に使用痕（凸面・平坦・使用による凹み）が残るものはすべて台石として分類している。しかし、石皿のなかにも採集礫をほぼそのまま使用しているものもあると考える。自然界からの石材選択段階で、ある程度形状の整った礫塊を採集して形状にはほとんど手を加えずに石皿として比較的深い凹面を形成しているとみられるものもある。事実、沖縄諸島の発掘調査報告書には自然礫塊で凹面をもつものを石皿として扱っている例もある。

そこで形状の大別と凹部整形、使用痕（磨面・敲打痕など）形成、厚さ、片面使用と両面使用などをもとに独自の分類をおこなう。

沖縄諸島出土の石皿・台石類は平面形が楕円形と円形、および長方形を基本とした多角形とに大別できる。基本的には狭義の均整のとれた定形以外は、自然に存在する石塊の周縁を敲打などによってある程度整形したものが多い。なかには自然礫塊のままなのか、周縁を整形してあるのかの判断が困難なものもある。しかし大まかに「長方形を基本とする角があるもの」と「丸みがあるもの」を自然界から選択していることは指摘できる。これらを定形と称することはできないが、材料選択段階の傾向としてのきまった形が存在していたといえる。一方、平面形だけでは石皿・台石類としての判断ができないものが多いので、磨痕・敲打痕・凹部の有無が基準となる。

狭義の定形は本格定形とも称すべきもので、隅が丸い長方形または楕円形でていねいに整形された対称形であるが、かなり少ない。多角形の多くは長方形とみられる。多角形も丸形も周縁は簡単な整形で処理しており、均整のとれた全体形へのこだわりは希薄であるといえる

凹面は日本縄文文化の石皿と比べると、浅いものが多い。上篠分類で定義される定形の「凹部の整形有」の条件は、満たされているとはいえない。縁部から凹部にかけてゆるやかな傾斜面となり、明瞭な境界を形成しないのが特徴である。日本縄文文化の石皿には、縁部に浮文を施す例があるほど縁部への意識が強いが、沖縄諸島の石皿は凹部が比較的浅いことも関係して縁部と凹部の境界はあいまいである。上篠分類のⅡＡ２「不定形な凹部」に該当するものが多い（表１参照)。凹面の説明には、「深い」「浅い」とだけ述べて具体的な計測値が示されていないことがしばしばみられるが、日本縄文文化の石皿と比べると全体的に浅いものが多いことは確かである。

沖縄諸島出土の石皿・台石類は、上篠分類による「採集礫をそのまま使用」を基本とするＩ類の台石の分類は判別が困難であるので、観察項目を増やして次のように分類してみた。

(1)　定形

平面形が均整のとれた隅丸の長方形あるいは楕円形、円形を基本とし、凹面を形成する。

(2)　多角形（長方形を基本とする）

定形ではないが、自然礫塊から簡単な打剥によって平面形が長方形を基本とした多角形を意識して成形したとみられる石皿・台石類である。広義にはその形状が製作者に意識・認知されていると考えられるので定形に近い。長方形とそれ以外の多角形を区別すべきだが、破片が多くいずれに属するかの判断が困難であり、両方を一括して扱わざるを得ない。表面の状態により次のように細分できる。

①　表面に凹部を形成するもの（上篠分類のⅡ類Ａか、Ⅰ類凹のいずれかに該当）

②　表面が平坦なもの　（採集礫のままなら上篠分類のⅠ類平に該当）

　　イ　表面に磨面をもつもの

　　ロ　表面に敲打痕をもつもの

ハ　表面に磨面と敲打面をもつもの

(3)　略円形

定形ではないが、自然礫塊から簡単な打剥によって、扱い易いように角の部分を取り払った結果として円状を呈しているもの。縄文文化にみられるような、ていねいな仕上げの定形の円形石皿はない。表面の状態により次のように細分できる。

①　表面に凹部を形成するもの（凹部が整形か使用によるものかで上篠Ⅱ類かⅠ類凹）

②　表面が平坦なもの

イ　表面に磨面をもつもの

ロ　表面に敲打痕をもつもの

ハ　表面に磨面と敲打面をもつもの

(4)　不定形

長方形や略円形を意図しているとはみなされないもの。表面の状態により次のように細分できる。

①　表面に凹部を形成するもの

②　表面が平坦なもの

イ　表面に磨面もつもの

ロ　表面に敲打痕をもつもの

ハ　表面に磨面と敲打痕をもつもの

(5)　形状不明

調査報告書に出土数量は記されているが、図も観察記録もなく、形状等が把握できないもの。

第５節　沖縄諸島の石皿・台石類の時期と形状による出土状況

(1)　時期

①　縄文早期末　　石皿・台石類の出土はみられない。

②　縄文前期　　２遺跡４点の出土で少量である。

③　縄文中期　　明確に中期に属する文化層からの出土はない。中期～後期の混在した層からの出土例は２遺跡にみられるが、時期は特定できない。石川古我地原貝塚は面縄前庭式土器を主体とし、ほかにもいわゆる奄美系土器を多く伴うが、縄文時代中期を中心として位置づけると数例の石皿が存在することになる。しかし縄文後期初頭に属する可能性もある。

④　縄文後期　　５遺跡 20 点の出土で少し増加の傾向がうかがえる。

⑤　縄文後期・晩期（混在層）　８遺跡 36 点の出土で、この時期から増加する傾向がある。この時期の石皿の出土はもっと多いが、報告書には属性や図が省略されている例がある。

⑤　縄文晩期　　10 遺跡 48 点の出土で、この時期にさらに増加している。

⑥　沖縄貝塚時代後期　　20 遺跡 80 点の出土で、さらに増加している。

(2)　形状

①　定形

定形は全時期を通しても 13 例と少ない。厚形７点・薄形６点で、両面使用が２点である。最も古いものは渡具知東原遺跡上層・縄文前期曽畑式土器文化層出土の石皿である。定形であるが、搬入の可能性もあると考える。

②多角形

表面が凹面のものと平坦なものとがあるが、凹面型が多くを占める。厚形・薄形、片面・両面使用があり、特定の形に偏る傾向はみられない。縄文後晩期および貝塚後期に出土し、縄文中期以前には見られない。中・後の混在層出土のものは後期に属する可能性が高く、明確に中期に属するものはない。出土量は次項の略円形と同じくらい多いが、不定形・形状不明のなかに多角形の可能性のものがあるので、それを含めると多角形が最も多い。

③略円形

厚形・薄形、片面・両面使用があり、とくに偏った傾向はない。表面が凹面のものと平坦なものとがあるが、凹面形がほとんどを占め、平坦形は少量である。多角形と同様に縄文後晩期および貝塚後期に盛行する。

③不定形・形状不明

不定形 49 点で凹面有が多くを占める。形状不明は報告書に数値がない。

表２　沖縄諸島の石皿・台石類　形状別出土状況

時　期	定　形 凹面有				多角形 凹面有				多角形・平坦面												略円形 凹面有				略円形・平坦面(凹なし)												合計
									磨面				敲打面				磨・敲打面								磨面				敲打面				磨・敲打面				
	薄形		厚形		薄形		厚形		薄形		厚形		薄形		厚形		薄形		厚形		薄形		厚形		薄形		厚形		薄形		厚形		薄形		厚形		
	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	
縄文早期末・前期・中期	2				5	1		2	1												1	1	1														14
縄文後期					4		5	2													2		2	1	2												18
縄文後・晩期	2		2		3				3												1		9	1			1										22
縄文晩期	1		3	2	6		3		4	1											7	2	8	3													40
貝塚時代後期	1				15	2	10	3	6						1		1	1			8	2	6		1		1		1		1						60
合　計	6		5	2	33	3	18	7	14	1					1		1	1			19	5	26	5	3		2		1		1						154

時　期	不　定　形																形状不明		合計
	凹面有				平坦・磨面				平坦・敲打				平坦・磨・敲打						
	薄形		厚形		薄形		厚形		薄形		厚形		薄形		厚形				
	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	片面	両面	
縄文早期末・前期・中期	1	1	3																5
縄文後期			1		1		1		1								1		5
縄文後・晩期			2	1	3		7										1		14
縄文晩期	3		6																9
沖縄貝塚時代後期	11		3		5				1										20
合　計	15	1	15	1	9		8		2								2		53

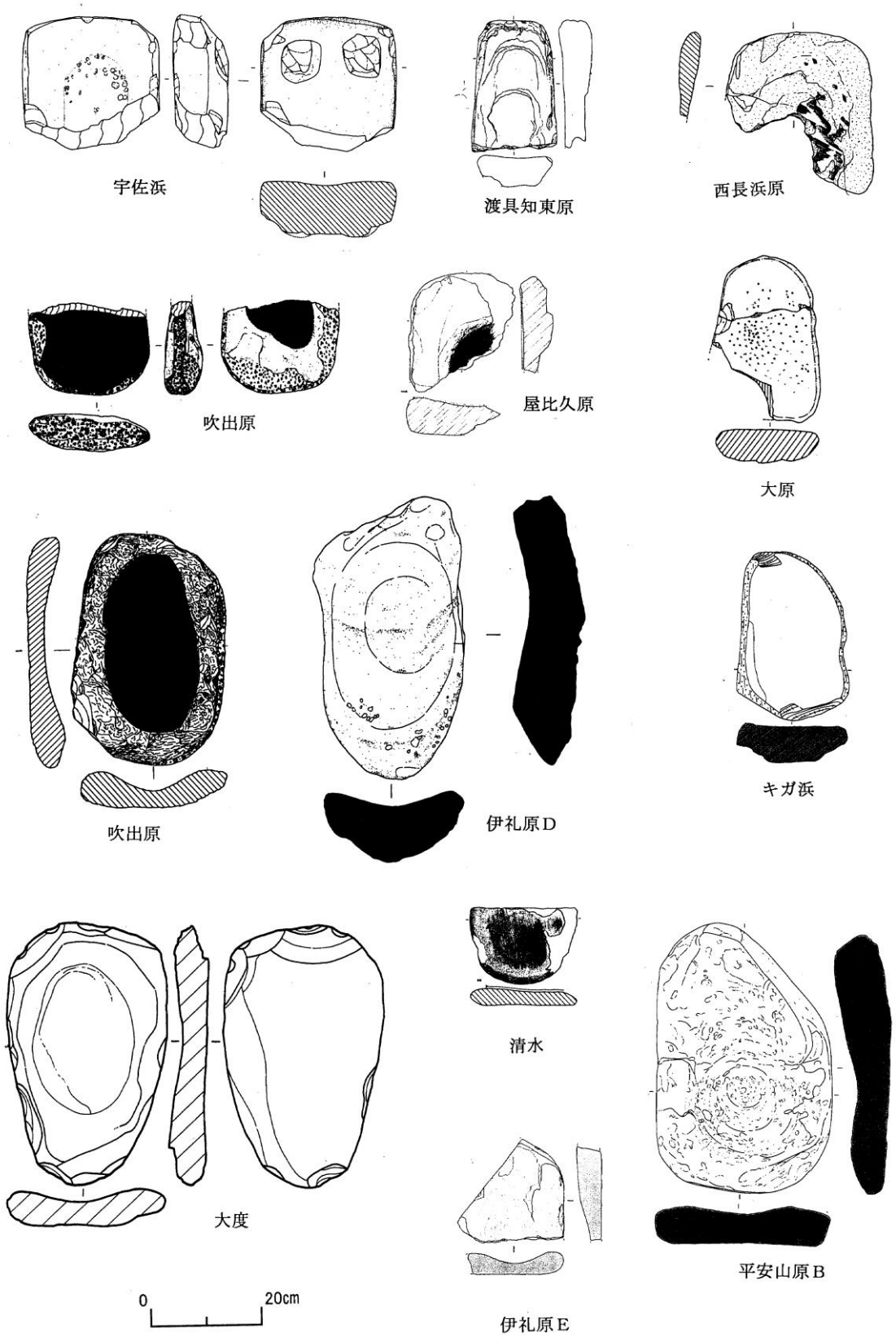


図２　沖縄諸島出土石皿図（定形と近似定形石皿）

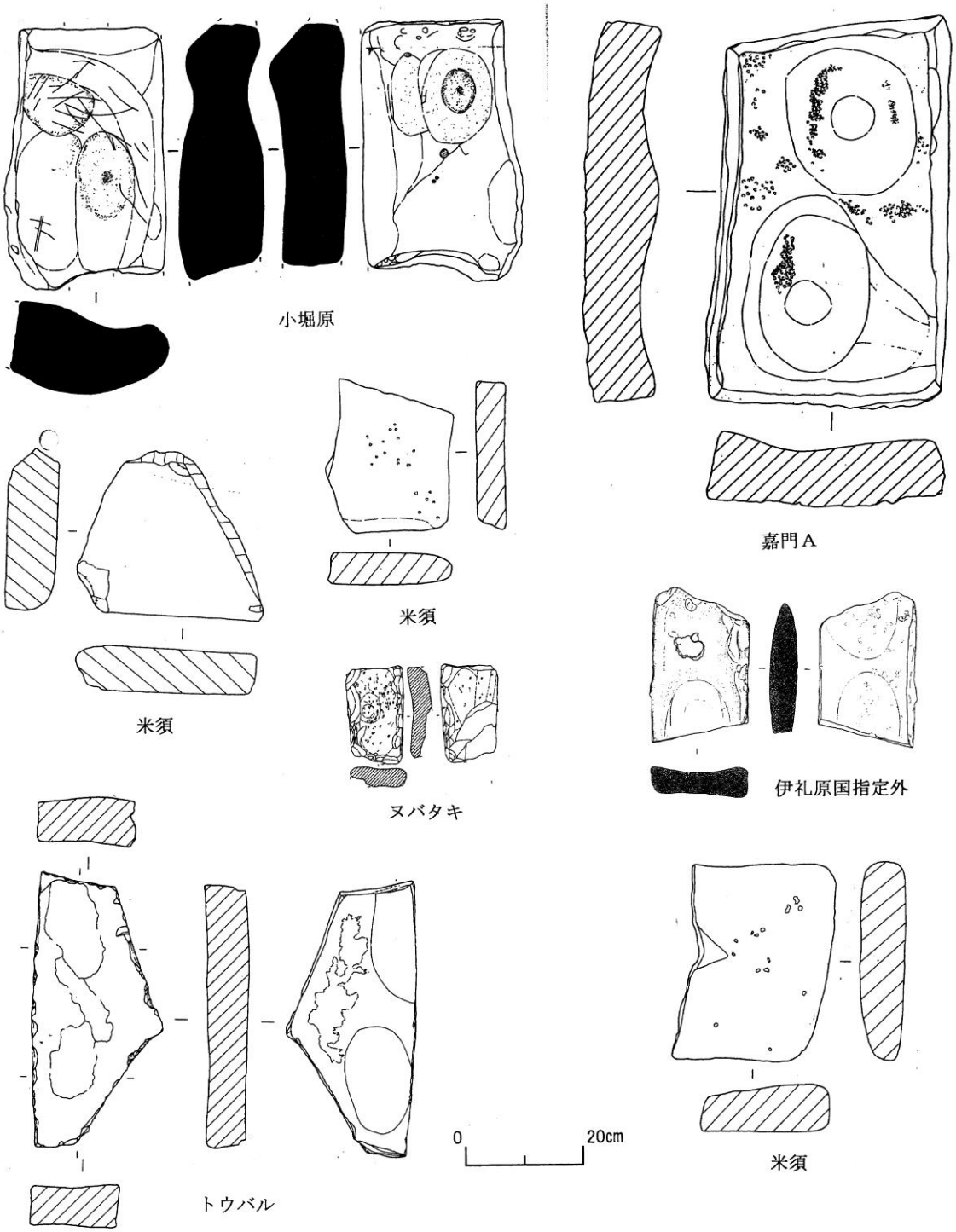


図３　沖縄諸島出土石皿図（四角形石皿）

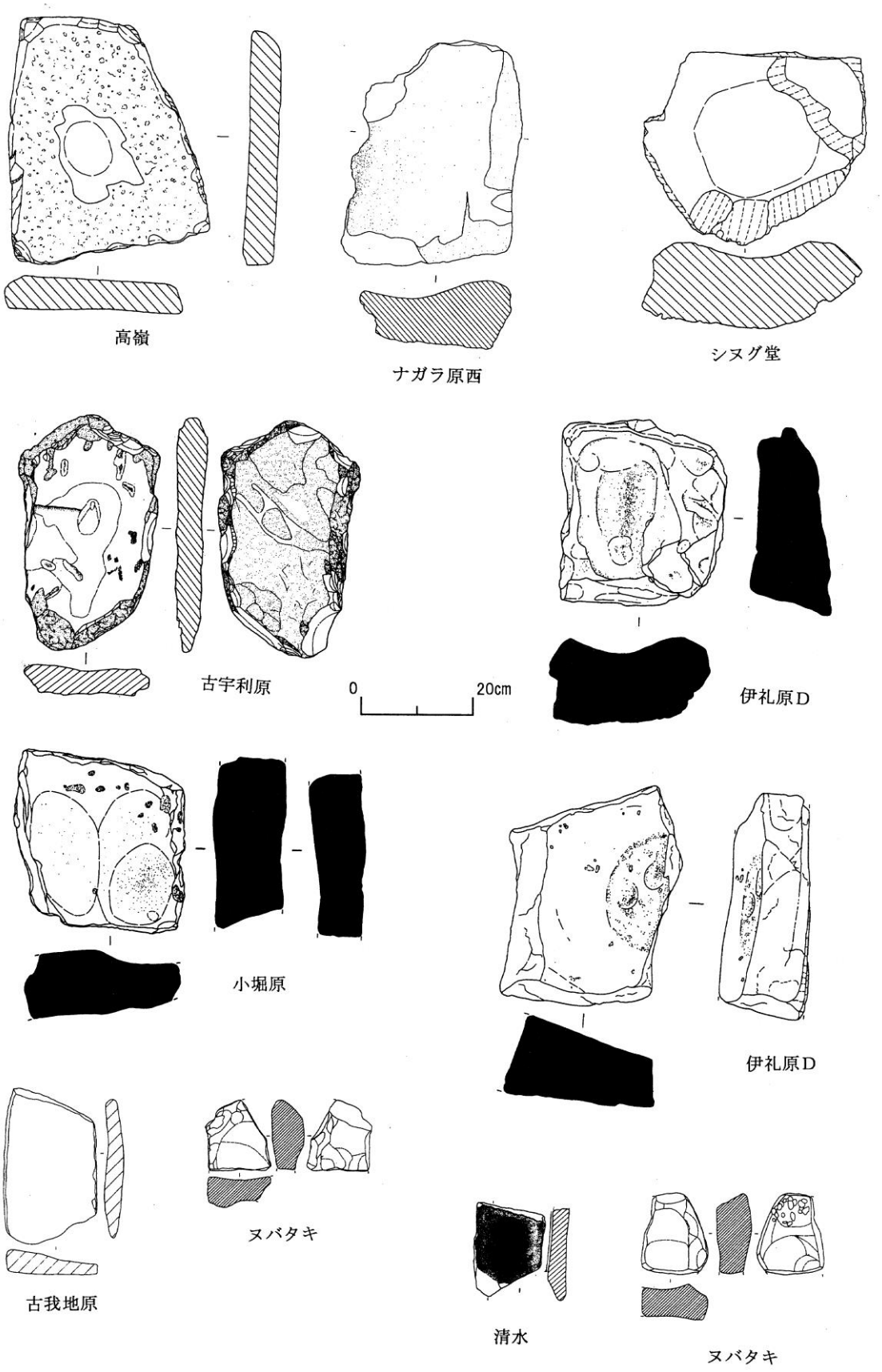


図４　沖縄諸島出土石皿図（多角形石皿）

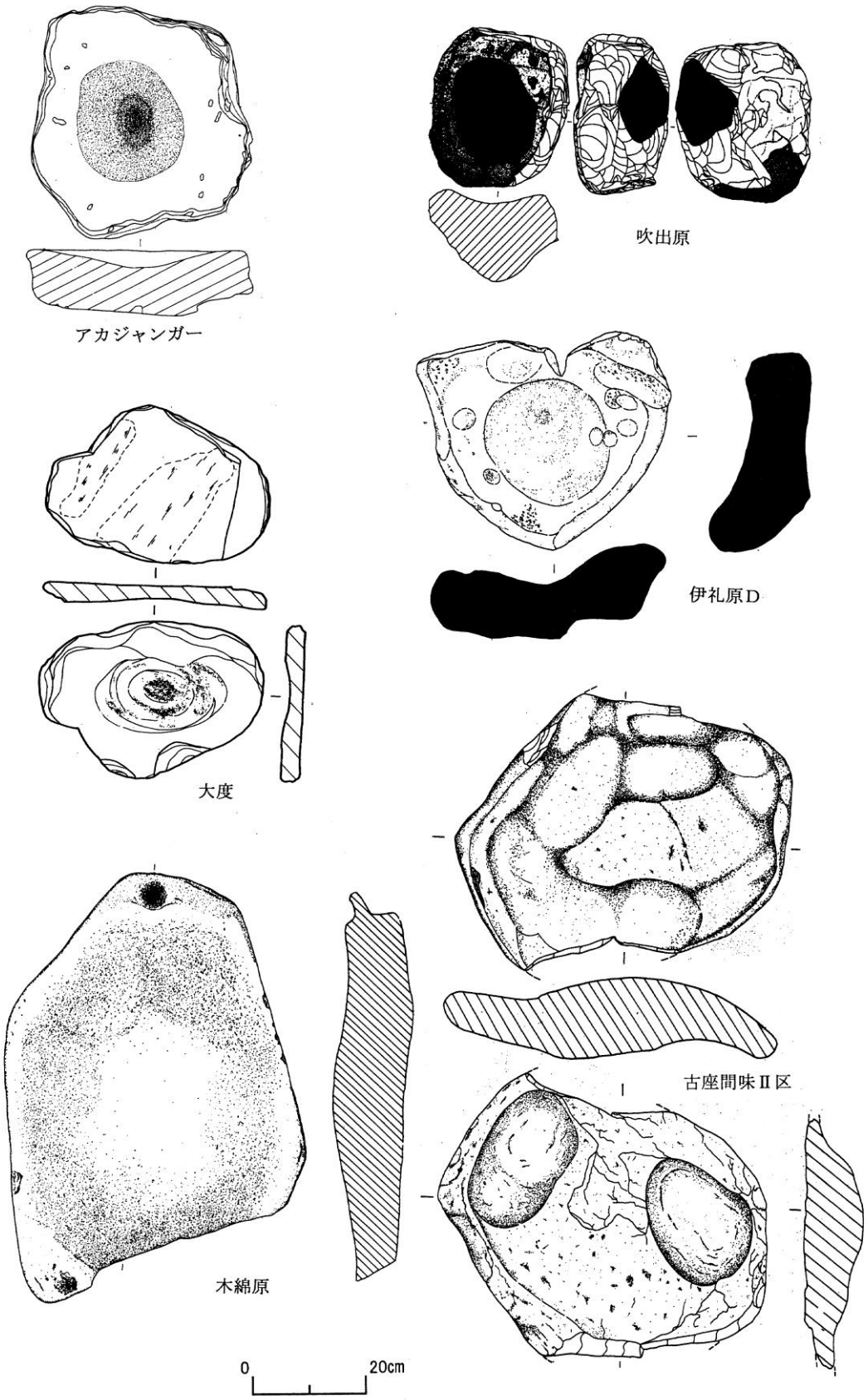


図５　沖縄諸島出土石皿図（略円形石皿）

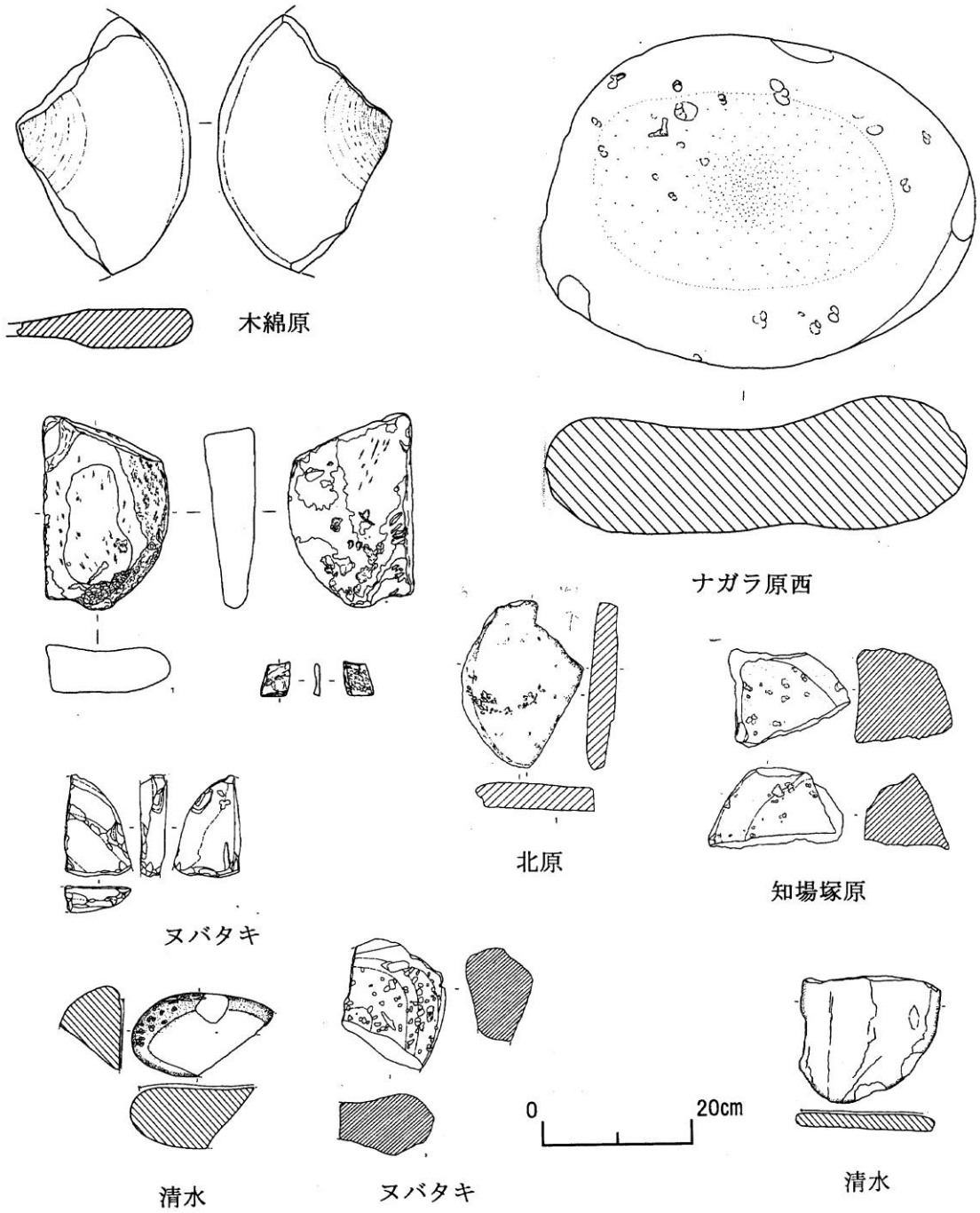


図６　沖縄諸島出土石皿図　（略円形石皿）

第６節　石皿・台石類の石材（石質）と産地

石皿・台石類、磨石・敲石類の石材石質については表３のとおりである。

砂岩と細粒砂岩が多くを占めるが、砂岩は沖縄本島北部の地層由来のものが多くを占める。細粒砂岩は沖縄島北部嘉陽層産と中南部産の小禄砂岩（通称ニービ）層に楕円形の塊（通称ニービヌフニ）があり、一般的にはニービがグスクの館礎石や石碑の石材などとしてよく知られる。先史時代においては他の種類の石器に利用されることはほとんどなく、石皿の材料としてのみよく

利用されている。

ほかには片状砂岩、石英斑岩、安山岩、凝灰岩があり、その他の石材の出土量はきわめて少量だが 15 種類ある。これらの自然分布（石材原産地）はほとんど沖縄本島北部と慶良間諸島および久米島である。産地が把握されていない（奄美諸島には分布する）輝緑岩を除けば、石皿・台石類の原産地は沖縄諸島圏内にとどまっているといえる。石皿は重量のある石器であり、定住生活のなかで使用されることから、近隣の石材を使用しているのは必然的な傾向である。これをよく表しているのが沖縄島中南部に分布するニービ細粒砂岩で、これを産しない北部地域や近隣小離島の遺跡では出土していない。注目されるのは宮城島シヌグ堂遺跡（縄文晩期）から３点のニービ細粒砂岩製石皿が出土していることである。自然産地より最も遠い例であるが、勝連半島から平安座島・宮城島と遠浅で繋がるこれらの地域が、すでに先史時代から沖縄島中部地域との通行圏を形成していたことを、ニービ細粒砂岩製石皿が示しているといえる。この関係は琉球王国時代に勝連間切に属していた（後に与那城間切に）時代を経て、現在まで継続しているといえる。

石英斑岩製については別項で論ずるように搬入品の可能性がある。辺戸宇座浜遺跡出土の定形四脚付石皿は石英斑岩製である。表３でみるとこの石材の石皿は縄文晩期に限定されている。地域は沖縄島本部半島の今帰仁村渡喜仁浜原遺跡、知場塚原遺跡、隣接する伊江島ナガラ原東貝塚である。辺戸宇佐浜遺跡も含めてこの４地点は相互に視認（望見）できる関係にあり、石英斑岩がこの４地点に限定されているのはこの範囲に恒常的通交関係が形成されていた可能性がある。石英斑岩自体は恩納村から名護にかけての西海岸に分布するが、この４地点の供給元は奄美群島まで含めて考慮する必要がる。なお、本部半島と伊江島は石斧に緑色片岩を多用することでも共通している。

表３　沖縄諸島出土石皿・台石類の石材

時　期	石皿・台石類の石材								
全時期の合計が３点以下の出土数の石質は「その他の石材」に合算した。	砂岩	細粒砂岩	片状砂岩	凝灰岩	安山岩	石英斑岩	その他の石材	石質記載なし	合計
縄文早期末・前期・中期	12	2	4	0	0	0	5	21	44
縄文後期	14	0	0	0	0	0	2	0	16
縄文後・晩期	25	3	1	0	8	0	0	7	44
縄文晩期	11	7	3	9	2	12	7	6	57
沖縄貝塚時代後期	14	19	1	0	4	0	4	64	106
合　計	76	31	9	9	14	12	18	98	267

※ 数量が表２の「形状別出土状況」と一致しないのは、調査報告書において形状の記載はないが石材の種類が記録されている例があることによる。

第７節　遺構と石皿・台石類　―　屋内で使用された石皿

石皿は基本的には住居跡内で使用されていたとされるが、沖縄諸島での住居遺構内出土例は次のとおりである。

(1)　シヌグ堂遺跡（宮城島）

15 号竪穴住居跡の床に着いた状態で検出された完形の石皿。長さ 38 ㎝、幅 35 ㎝の不定形、厚さ約 15 ㎝で厚手に属する。重量 29 ㎏で重い。凹部の最深部は 3.5 ㎝あり、比較的深い部類である。細粒砂岩製。ほかに８号竪穴住居跡埋土と遺構外から各１点出土している。縄文時代晩期。

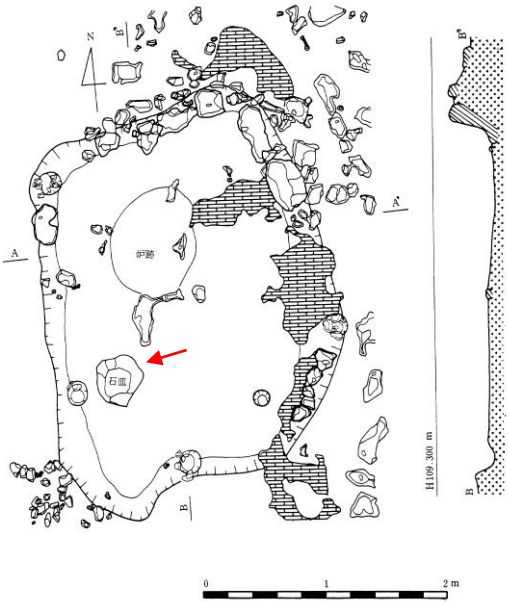


図７シヌグ堂遺跡住居跡出土の石皿

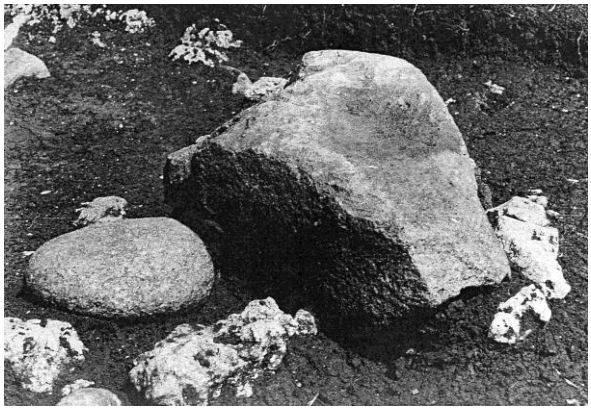


図８知場塚原遺跡出土の石皿と磨石

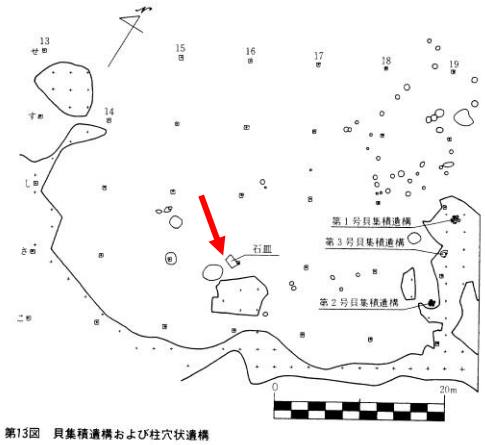


図９嘉門貝塚Ａ柱穴遺構出土の石皿

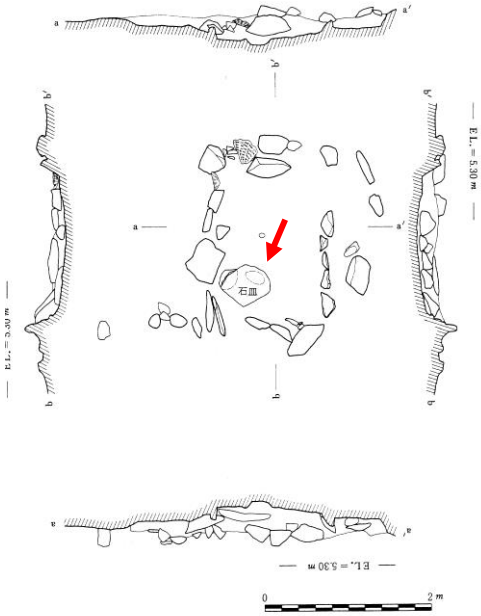


図 10 古座間味貝塚住居跡出土の石皿

（２）　平安山原Ｂ遺跡（北谷町）

焼土遺構から完形の石皿が出土している。石皿自体は焼けていない。かなり大型で長さ 48.5 ㎝、幅 31.6 ㎝、重さ 18.5 ㎏である。厚さは約 9 ㎝と全体的に薄く、凹部が広くやや深く形成されている。貝集中区から１点出土。Ⅲ層遺構では２点出土している。いずれも貝塚時代後期に属

する層である。

（３）　嘉門貝塚Ａ（浦添市）

プランが明瞭ではない柱穴が点在する遺構面からかなり大型の石皿が出土した。長さ約 70 ㎝、幅約 40 ㎝、厚さ約 13 ㎝、重さ 77.5 ㎏の長方形。一面に２か所の凹部がある珍しい例である。細粒砂岩。

(4)　屋比久原遺跡（本部町）

第７号竪穴住居跡の床面に据えた状態で石皿が出土した。石皿３個のうち１個は第２号竪穴住居跡から、１個は礫敷遺構から出土している。礫敷面は住居跡の可能性があるが明確ではない。

(5)　知場塚原遺跡（本部町）

５軒の竪穴住居のうち４軒から石皿が出土した。ただし５号住居跡は覆土を発掘していないため、出土していないということではなく、むしろ出土の可能性もあるといえる。

１号住居跡　２点出土、１点は石英斑岩製、浅い凹面、厚手、片面使用、1/4 程度残存、原形は大型か。もう１点は安山岩製、深い凹面、片面使用、厚手、1/4 程度残存、原形は大型か。

２号住居跡　１点出土、石英斑岩製、浅い凹面、片面使用、厚手、1/4 程度残存。磨石と共伴。

３号住居跡、１点出土、石英斑岩製、深い凹面、片面使用、厚手、1/4 強残存、火焼痕有。

４号住居跡、１点出土、石英斑岩製、片面使用、凹面なし、研磨面、厚手、形状不明

この遺跡において石皿はすべて竪穴住居内から出土している。一般的にいわれているように、石皿は家屋内における脱殻・粉砕作業のために使用されたもので、他の多くの遺跡で遺構外の包含層から出土するのは、その後の攪乱によるものである。また別項で触れるように、移動などにあたって石皿を意図的に破却する行為が行われた可能性があり、その場合に遺構外に散乱したものが含まれていることも考えられる。知場塚原遺跡は石皿が基本的には家屋内で使用されていたことを示す好例である。また、２号住居跡では石皿と磨石が隣接して出土したことも、セット関係にあることが確認された貴重な例である。

(6)　古座間味貝塚（慶良間諸島）　縄文後期後半

Ⅱ区第３号住居跡から石皿が出土。やや大きな板石が壁に沿って配置されている場所が出入り口と見られ、そこから中に向かってすぐ右側に石皿が据えられている。比較的明るい場所での作業を意識した配置とみられる。

第８節　奄美群島の石皿・台石類

奄美群島における石皿・台石類、磨石・敲石類皿の発見状況は次のとおりである。発掘調査報告書により石皿についての属性情報にかなりの差があり、集計表の作成が困難であるので、遺跡ごとに紹介する。ここにも石皿についての情報が不十分で不適切な扱いがみられる。

(1)　犬田布貝塚　（徳之島）

石皿が５点出土。１点は隅丸長方形で凹部はかなり深い。外側の底部は丸底になっている。多角形で平坦面、磨面を形成するもの１点、他の３点は形状不明で平坦面、磨面をもつ。石材記載なし。

(2)　城畠遺跡

石皿３点出土。多角形で平坦磨面１、略円形で厚形・片面に凹面あり１点、形状不明で薄形・平坦磨面１点。

(3)手広遺跡（縄文晩期層・第四文化層）（竜郷町）

1979 年報告書では２点の石皿が伏せた状態で出土。写真では略円形とみられる。　1986 年報告書では隅丸略三角形で長さが約 40 ㎝の大形の石皿が出土。石皿は 12 点出土とある。

(4)　面縄第３貝塚（兼久式土器期）（徳之島）

砂岩製で、隅丸の変形の長方形・凹面のある石皿１点出土。

(5)　宇宿貝塚（縄文晩期層の埋葬に伴う石皿・大島笠利地区）

1979 年報告書で母子の埋葬人骨の嬰児骨の上に置かれた破片の石皿が出土。ほかに笠利町歴史民俗資料館展示品に宇宿貝塚出土とされる石皿があり、長方形定形でひろい凹面をもつ。

(6)　宇宿小学校構内遺跡（大島笠利地区）

縄文時代前期～弥生時代までの遺跡であるが、時期を特定できない攪乱層から 12 個の石皿が発見された。そのなかで３個は定形の完形品で、外底面隅に突起の脚を計４脚有するもの、両端に隆帯の縁をもつもの、双弧状隆帯をもつものがある。また旧笠利町歴史民俗資料館には未報告の石皿が７個ほど保管されている。すべて長方形を基本とする定形で、外底面が四脚、下駄状隆帯、双弧隆帯などの加工が施されている。

(7)　ハンタ遺跡（喜界島）　多角形・凹面有１、　略円形・凹面有１、　不定形・凹面有２、

(8)　嘉徳遺跡（大島・瀬戸内町）　定形１・厚型・片面凹面、　略円形・平坦磨面１、

(9)　上城遺跡（与論島）　１点、略円形、凹面有、

(10)　朝仁天川遺跡（大島・奄美市）　１個は大型・厚手・両面に凹面有・長方形定形か？
２個は略円形・片凹面有、　１個は形状不明。凹面有、

(11)　下山田遺跡（大島・笠利地区）　多角形・薄型・片凹面・砂岩製１個、

(12)　提り遺跡（喜界島）　略円形・平坦・磨面有１個、

(13)　泉川遺跡（大島・笠利地区）　略円形・凹面有１個、

(14)　タチバナ遺跡（トカラ列島中之島）　角閃石安山岩製石皿が 10 点出土、うち２点は定形で隅丸長方形。いずれも凹面有、１点は外底部の隅に突起の脚が付く。半分ほどで破損しているので２脚だけが残るが、四脚であったことは確かである。

奄美群島における石皿は、沖縄諸島出土の石皿と概ね共通した形状である。しかし 2003 年に発見された宇宿小学校構内遺跡出土の定形石皿群は、外底面に脚や隆帯文をもつ石皿が一遺跡のみに集中している点がきわめて特殊な状況である。また、トカラ列島中之島のタチバナ遺跡出土の石皿も定形で脚をもつ点が特殊な例である。中之島タチバナ遺跡と奄美大島宇宿小学校構内遺跡の石皿群は東日本縄文文化の方に親縁性が強く、あたかも飛び地状の分布を示している。

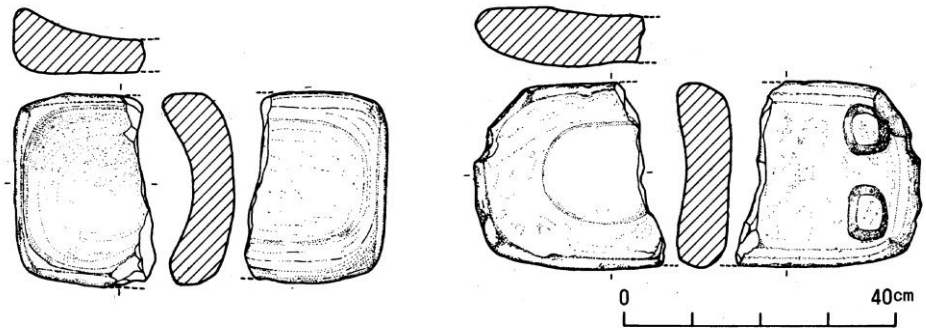


図 11　タチバナ遺跡（トカラ列島中之島）出土の脚付石皿

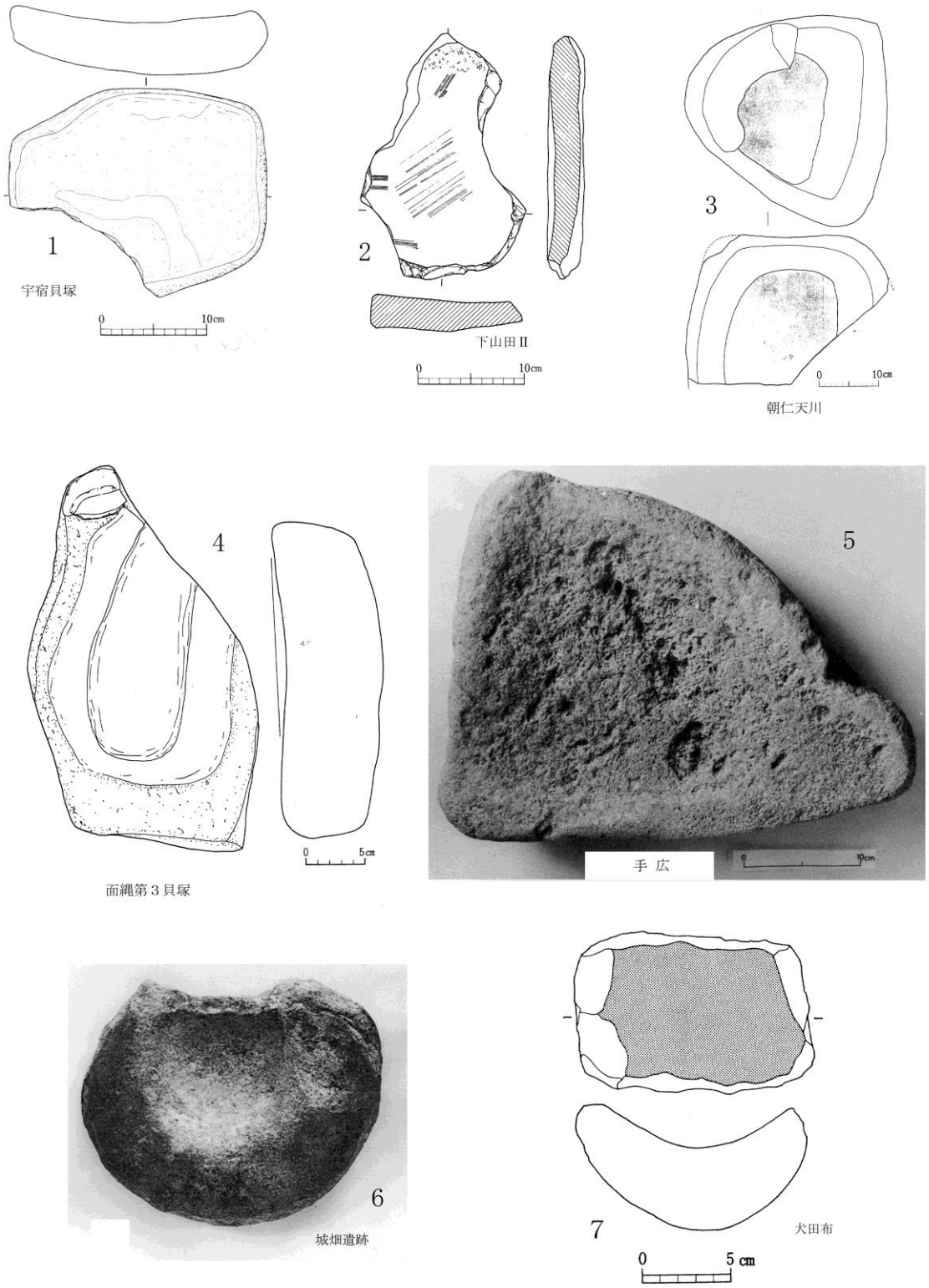
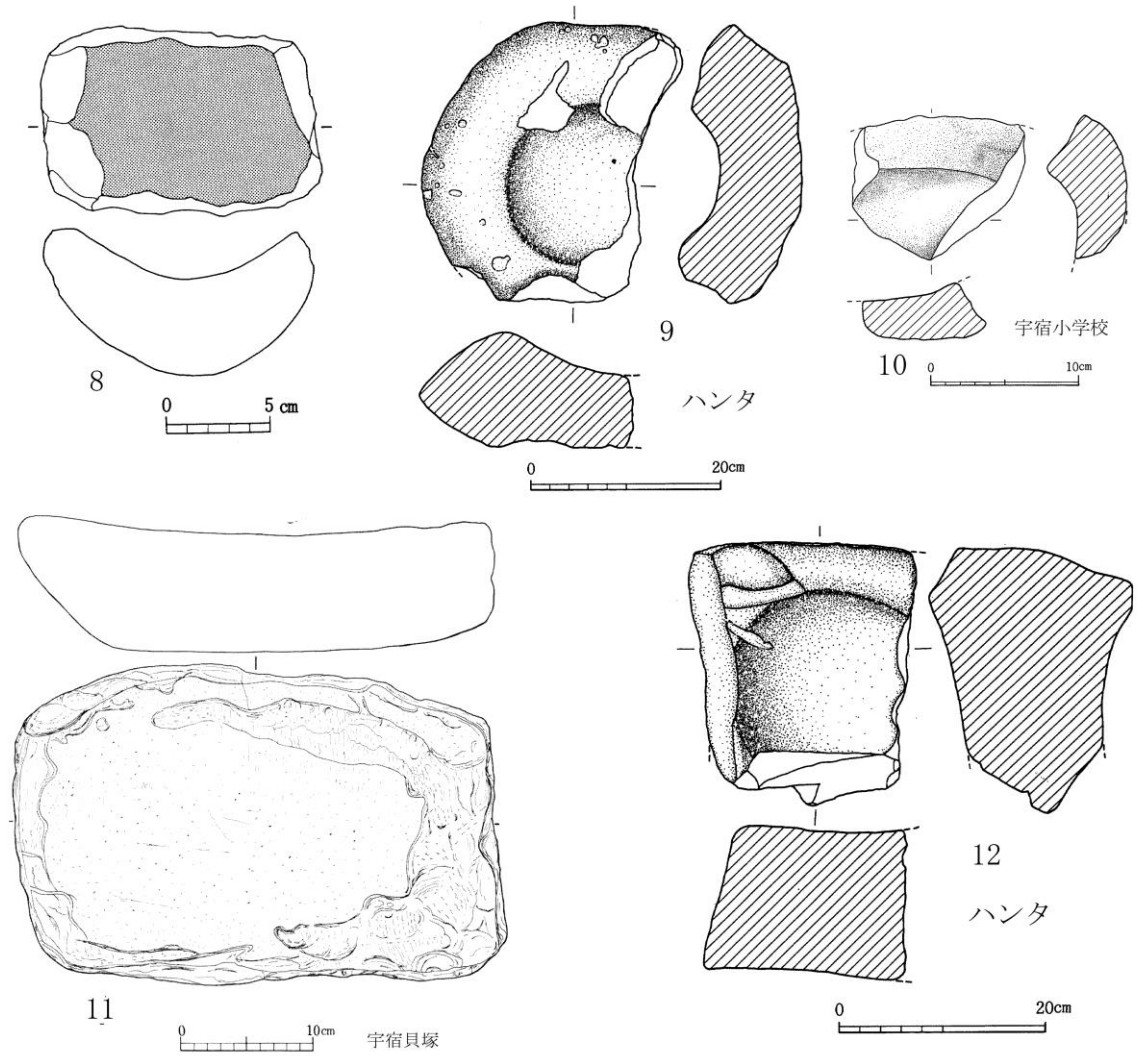
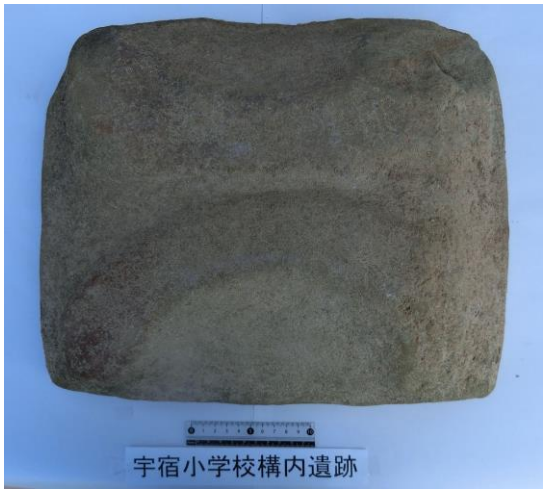


図 12　奄美群島出土の石皿　①



四脚付石皿



隆帯文（外底部）付石皿

図 13　奄美群島出土の石皿　②　宇宿小学校内遺跡石皿写真は奄美市教育委員会提供

第９節　南九州の石皿

南九州の石皿については研究史でふれたように牛之濱修が集成と分類をおこなっている（牛之濱修 1999)。牛之濱は作用面が平坦磨面のものをⅠ、浅い凹面を有するものをⅡ、深い凹面を有するものをⅢとし、さらに平面形を丸形と多角形に区別し、それぞれⅠ・Ⅱ・Ⅲと組み合わせて６つの類型に分類した。

Ⅰ　加工により磨り面がくぼまないもの

Ⅰa 川原などにある転石を利用したもので、円形や楕円形をしている

Ⅰb 板状の角礫を用い、多角形の平面形をしている。

Ⅱ　縁を残して、中央が断面で弓状に凹むもの。　Ⅱa、 円形・楕円形　　Ⅱb、 多角形

Ⅲ　凹みが深いもの　　Ⅲa、 円形・楕円形　Ⅲb　多角形

この分類による時期別出土状況は次のとおりである。

表４　南九州出土石皿の類型と時期別出土状況（牛之濱修 1999）

	Ⅰ類a	Ⅰ類 b	Ⅱ類a	Ⅱ類b	Ⅲ類a	Ⅲ類b
縄文草創期	1	1	4	0	0	0
縄 文 早 期	9	5	51	6	16	0
縄 文 前 期	0	0	4	3	0	0
縄 文 中 期	?	?	?	?	?	?
縄 文 後 期	8	9	37	1	12	1
縄 文 晩 期	1	13	15	8	1	1
弥 生 時 代	?	?	?	?	?	?
	19	28	111	18	29	2

全体的にみると円形または楕円形（隅丸長方形を含む）で浅い凹面をもつものが多く、多角形で平坦磨面のものと深い凹面のものがこれに次ぐ。定形は隅丸長方形、円形、円形で凹面を有するものが基本である。脚付は発見されていない。定形の隅丸長方形、楕円形、略円形はⅢa に含まれるが、Ⅲa はすべて定形ということではない。定形とみられる隅丸長方形、楕円形、円形の石皿は 135 個である。

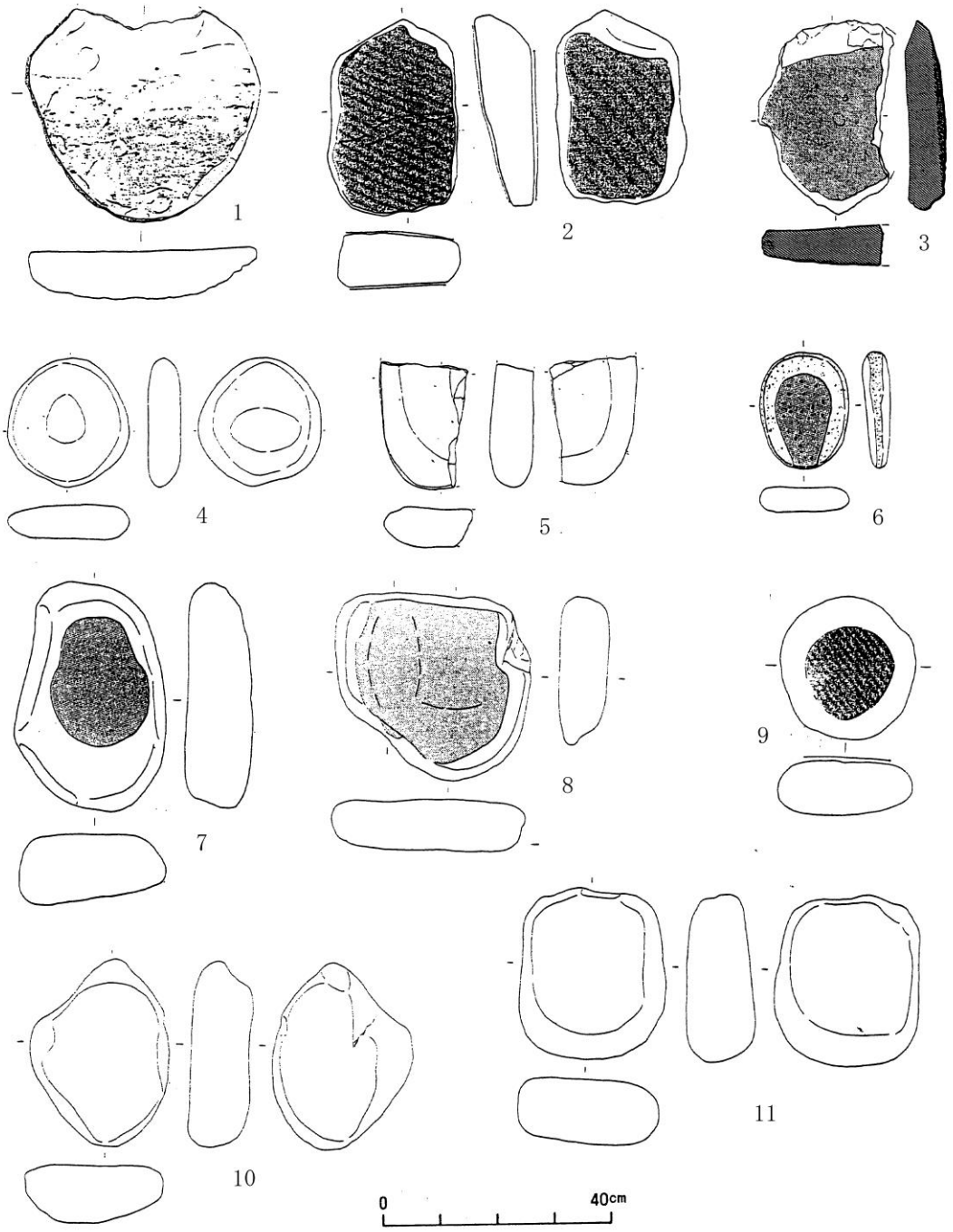
側面に凹文の装飾を有する石皿が草野貝塚、麦之浦貝塚、出水貝塚、御岳貝塚の４例発見されているが、西日本では南九州の本例だけで、多くは東日本に分布する。その総数は 97 遺跡、143 点とされる。かなり特殊な石皿である。また縄文後期の中原遺跡（志布志市）出土の石皿の外底面に２本の帯状凹部が断面図で観察される。意図的な加工と思われるが詳細は不明である。

南九州における石皿はほとんどの地域に分布しており、縄文時代の一般的な脱殻粉砕石器であったことがわかる。すでに草創期の栫ノ原遺跡、掃除山遺跡、種子島の奥ノ仁田遺跡、三角山遺跡などから石皿の出土がみられ、しかもこれらの遺跡は全国的にみても大規模遺跡である。南九州縄文時代社会は早い時期から植物質食料の調理・加工用とされる石皿を多用し、全国に先駆けて定住生活へと向かっていたことを示している。牛ノ濱によれば早期に石皿が増加し、自然石塊を利用した丸形が多く、後晩期には板状の多角形が多くなる。

石皿の形状はさきにみてきた沖縄諸島の石皿とほとんど類似している。まず丸型と多角形（四角形を含む)に２大別されるところが共通する。さらに定形には隅丸長方形が多い点も類似する。

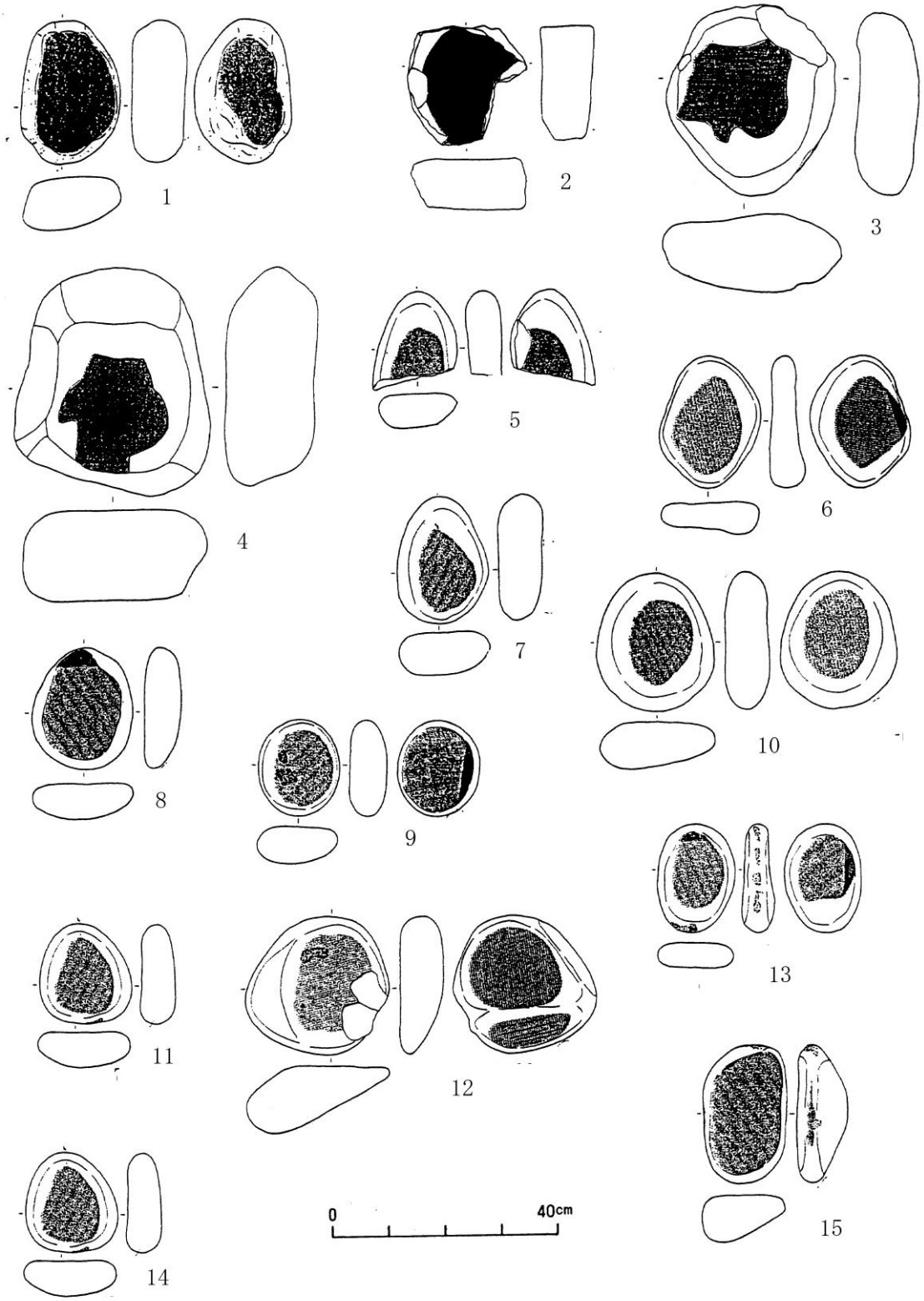
一部異なるのは側面に沈線や帯状文を施す例（草野貝塚、麦之浦貝塚）や掃き出し口を有する例があることである。しかしこれらは例外的で、ほとんどは共通している。むしろ奄美大島宇宿小学校構内遺跡から出土した多量の装飾石皿、有脚石皿がきわめて特異な状況を示している。鹿児島本土にもみられないもので、東日本特有の形状である。

牛之濱が集成した鹿児島県下の石皿の一部を６つの類型別に再編して以下に示す。



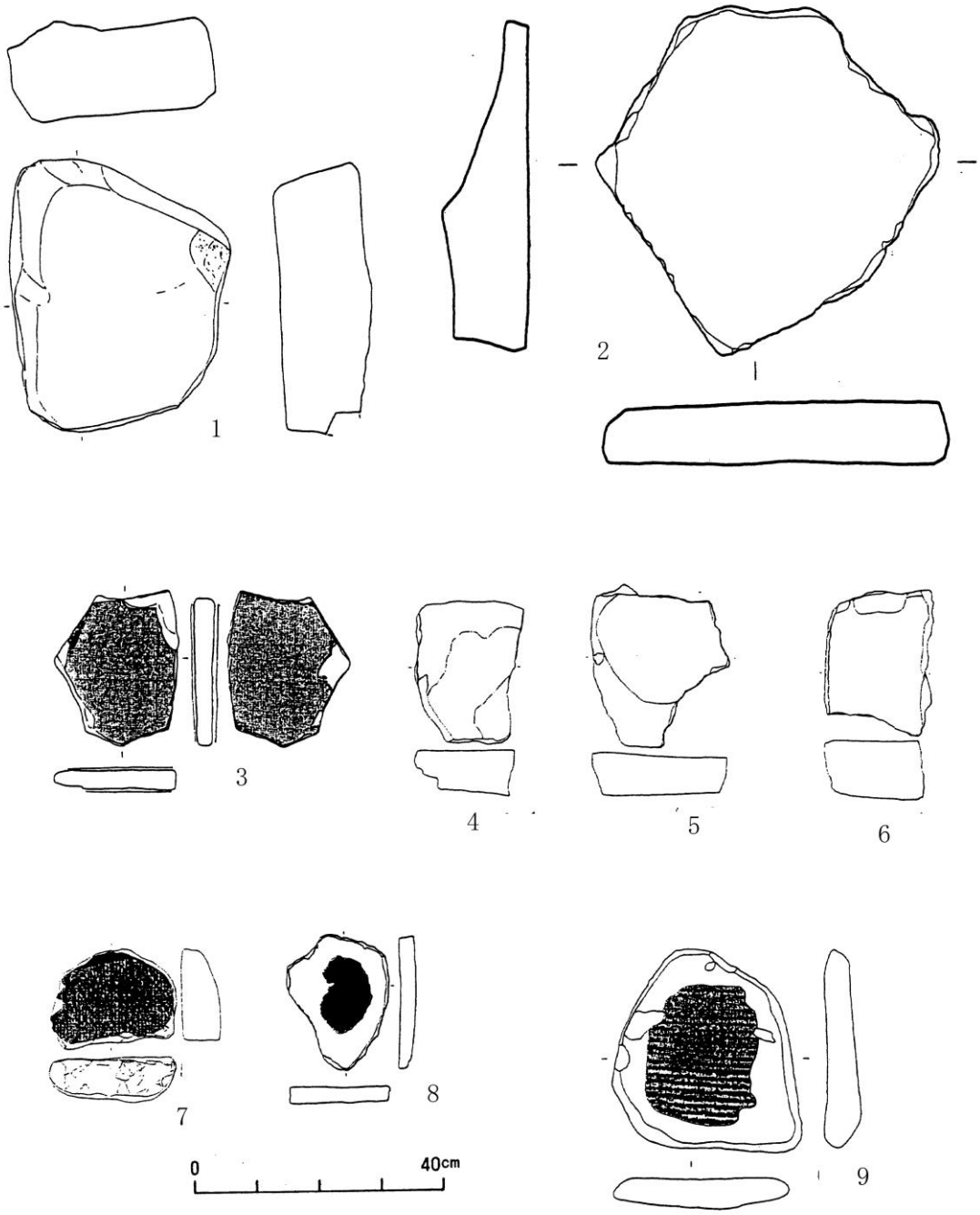
1掃除山　２辻町　３木場A　４・５榎木原　6・7・8・10・11榎崎A　9　榎崎B

図 14　南九州の石皿①　丸型で凹面なし　Ｉａ類　（牛之濱修　1999）



1前畑　2・3・4飯盛ケ岡　5・6・7・9・11・12・13・14・15火ノ上山　8・10加栗山

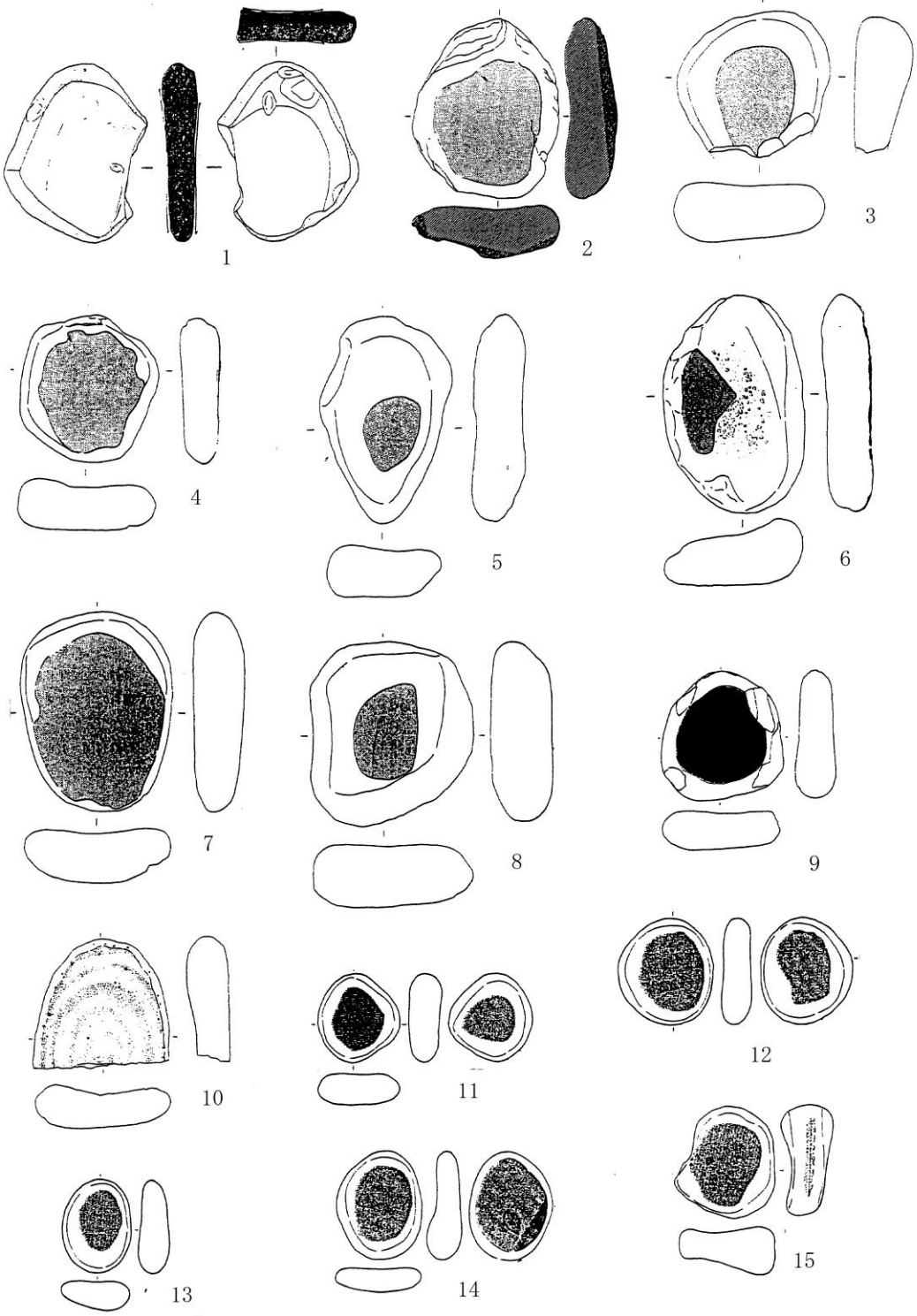
図 15　南九州の石皿②　丸型で凹面なし　1ａ類　（牛之濱修　1999）



1草野　2？　3辻町　4・5・6中尾田　　7前床　8・9飯盛ケ岡

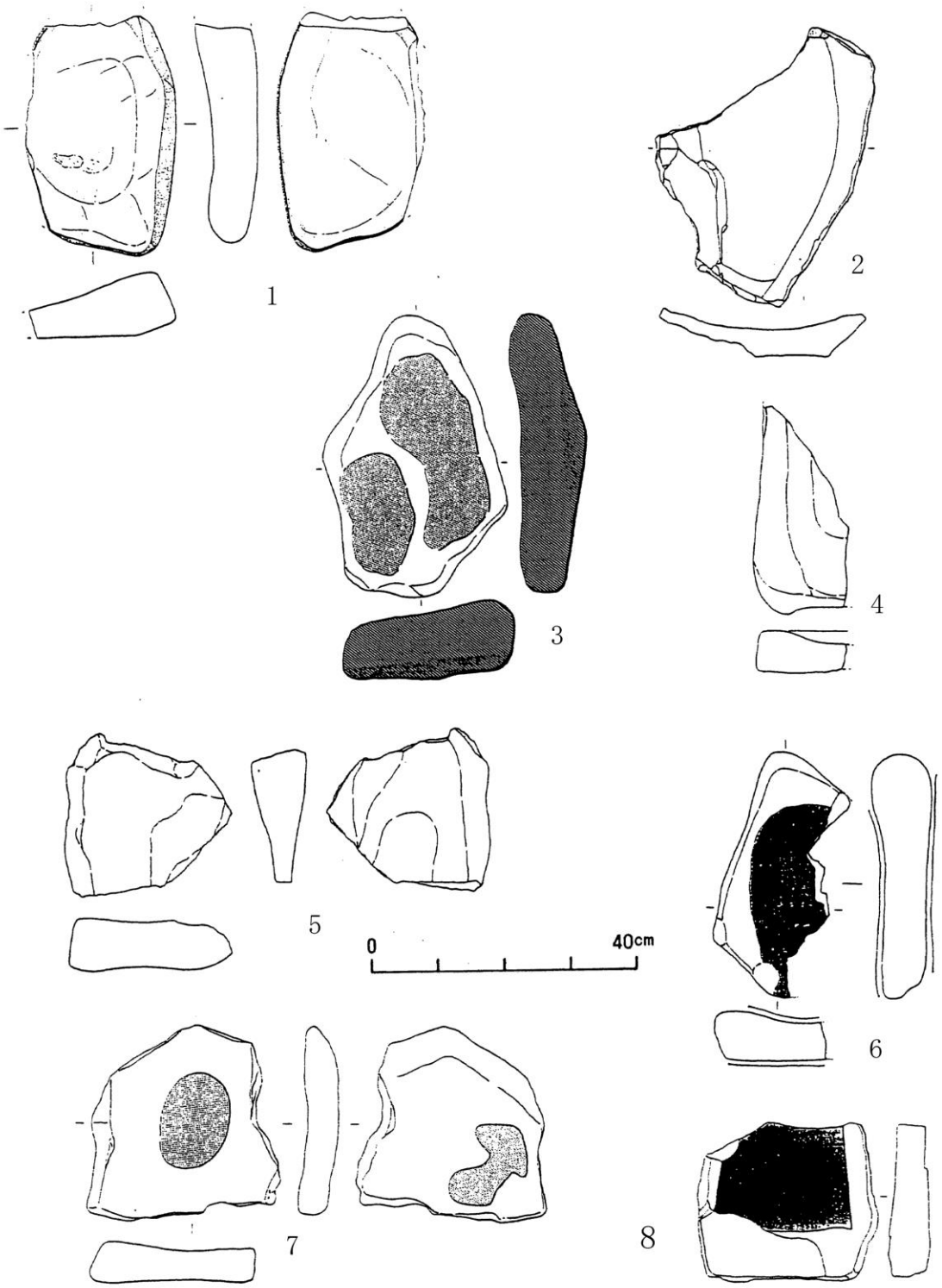
図 16　南九州の石皿③　多角形で凹面なし　Ｉｂ類　（牛之濱修　1999）

図 17　南九州の石皿　④　丸型で浅い凹面あり　Ⅱa 類　（牛之濱修　1999）



1榎木原　2西丸尾　3・4・5・6・7・8榎崎A
9飯盛ケ岡　10轟木ケ迫　11-12・13・14・15日火ノ上山

図 18　南九州の石皿⑤　丸型で浅い凹面あり　Ⅱa 類　（牛之濱修　1999）

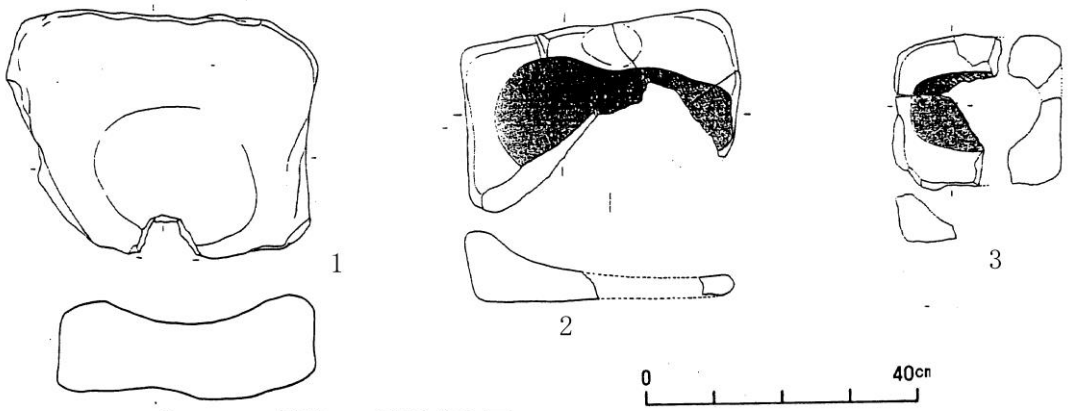


1 掃除山　2永野　3木場A　4宮之迫　5中ノ丸
6榎崎B　7榎崎A　8荒田原

図 19　南九州の石皿⑥　多角形で浅い凹面あり　Ⅱb 類　（牛之濱修　1999）

1 大龍　2・4 草野　3永野　5)柳井谷　6加栗山　7上野原　8小山
9・10中原　11西丸尾　12 麦之浦　13榎木原　14中ノ原　15榎崎B
16ハンタ（奄美）

図 20　丸型で深い凹面あり　Ⅲa 類　（牛之濱修　1999）



1草野　２榎崎B　③飯盛ケ岡

図 21　多角形で深い凹面あり　Ⅲb 類　（牛之濱修　1999）

第 10 節　沖縄諸島における植物質食料利用の様相

日本列島先史時代（縄文時代）における生業は、貝塚出土の獣骨、魚骨などの印象からいかにも動物性食料の獲得＝狩猟を主としたものであったかのように見えるが、実際には森林性文化とも称されるように、東アジアのなかでも高度な野生植物利用を主とするものであったといわれる（渡辺 1975）、今村 1999）。

そして、野生植物食料の中心は堅果類で、脱殻・粉砕作業過程を経てはじめて可食植物となり得るものである。遺跡（集落）にはこれらの脱殻・粉砕作業をおこなった石皿・台石類、磨石・敲石類が残されていることは、これまで沖縄諸島、奄美諸島、南九州における状況をみてきたとおりである。

一方、その対象となった野生植物食料は森林から採取され、集落に持ち込まれた。脱殻・粉砕された堅果や根茎の痕跡データの検出は特別の知識技術と装置を伴うので確認例は少ないが、作業前の保存された堅果はいくつかの遺跡において確認されている。

沖縄諸島では堅果のドングリ類が今帰仁村西長浜原遺跡、宜野座村前原遺跡、うるま市苦増原遺跡、北谷町伊礼原Ｃ遺跡、宜野湾市喜友名ヌバタキ遺跡などで検出されている。水晒しを要するカシ類、不要なイタジイ類のいずれも利用されている。とくに前原遺跡では水場遺構と共にザルに入ったオキナワウラジロガシが多数出土し、水晒しをして食料にしていたことが実証された。さらに水場の周辺には貯蔵穴も検出されている。植物質食料は遺跡においては腐敗しやすく、長期にわたり残存するのはきわめて稀であると考えられる。したがって検出された例は少数ではあるが、ドングリ類が日常生活でかなりの割合を示す重要な食材であったものとみられる。それは脱殻・粉砕具である磨石・敲石類および石皿・台石類がほとんどの遺跡に伴うことからも推定できる。

堅果類を採取し、虫殺し・脱殻・粉砕、アク抜き・乾燥などの処理をおこない、長期の食糧として保管する過程を要する生業は定住を前提とする。先史人たちは植生や水源などの環境に恵まれた地に居住して、植物質食料の利用を基盤とする生活をしていた。

第 11 節　検討

(1)　石皿・台石の分類と型式

沖縄諸島において出土した石皿・台石は、すべて上篠分類の範疇に含まれることは先に指摘したとおりである。石皿・台石の定形型式は上篠分類に従えば石皿にのみ存在することとなる。台石は自然採取の石塊をそのままの状態の面に対して下石としての作業を受け、結果として使用痕が磨面、敲打痕、凹面などを形成するものである。

しかし、沖縄諸島における発掘調査報告書においては分類基準が上篠分類に沿っていないものも比較的多く、上篠分類の台石に使用痕としての凹面がみられるものも石皿として扱っているものが少なくない。そこで上篠分類だけでは石皿の形状を十分には把握できないので、表２に示したような独自の類型によって特徴を明らかにすることを試みた。採集石塊をそのまま使用し、凹部を整形していないものはすべて台石で不定形とする上篠分類を基準とせず、全体的形状によって定形、多角形、略円形、形状不明に大別した。自然石塊をそのまま使用という概念は自然円礫以外には把握が困難であり、多角形は自然作用による採集段階からの形状なのか、周縁を扱いやすいように適当に打剥した結果なのかの区別は難しい。そして、多角形は基本的には長方形を基本としていること、略円形は自然礫塊以外にもある程度加工によって略円形に仕上げられたものがあることから、二種類の形状を意識的に求めていることが把握できる。この形状は型式とはいえないが、傾向として指摘できる特徴である。

そして長方形を基本とする石皿は作業者側から水平方向の前後反復運動による「磨り潰し」を主とする作業であり、略円形を基本とする石皿は垂直方向の上下反復運動による「敲打・押圧」を主とする作業であると考える。敲打押圧には潰し作業も含まれるが、堅果の脱殻作業のように殻からの脱離のために殻を割る作業もあるので、すべてが潰し作業ではない。外形による形状の分類はこのような違いがあると考える。

観察の結果は長方形を基本とする多角形で平坦面をもつ石皿は磨面を形成するものが多い。しかし略円形は敲打痕を主とする使用痕ではなく、磨面もある。敲く行為は下石の面を敲くのではなく、対象物たる堅果を敲くのであるから、必ずしも敲打痕が明瞭に形成されなくてもよいと考える。

いずれにしても、石皿の石材はすでに長方形、略円形を呈する形状の自然礫塊が選択され、さらにある程度の適度な加工が施されているのである。採集自然礫塊をそのまま使用しているのは少数である。

(2)　定形石皿と石材選択段階の「定形」

上篠分類において定形の石皿とは、整形された凹面をもち、隅丸長方形、楕円形、円形である。自然礫塊をそのまま使用して使用痕としての浅い凹面や磨面を形成しているのは台石で、どんなに均整のとれた円形であっても不定形である。上篠分類の基準は作用面（作業面）が加工により凹面を形成しているものが石皿で、自然石の作用面（作業面）に使用痕としての磨面や浅い凹面が見られるものが台石である。

上篠分類による定形に合致する石皿がある。その典型例は沖縄島辺戸宇佐浜遺跡出土の定形・脚付石皿である。半分を欠いているが、外底面に突起の脚が両隅にあり、明らかに完形の形状は隅丸長方形であり、４つの脚が付いていたとみなすことができる。

脚はないが同様の隅丸長方形とみられる石皿は渡具知東原遺跡曽畑層、屋比久原遺跡、西長浜原遺跡、吹出原遺跡から出土している。また類似の石皿が伊礼原Ｄ遺跡、伊礼原Ｅ遺跡、平安山

原遺跡、大度遺跡、大原貝塚、キガ浜貝塚、清水貝塚などから得られている。時期は縄文時代前期から沖縄貝塚時代後期まで長期にわたる。

縄文時代の定形石皿には縁部が明瞭に整形されているものがあるが、沖縄諸島の定形石皿は凹部と縁部との境界が明瞭ではない。また、掃き出し口をもつものも発見されていない。このように沖縄諸島では縄文時代文化の本格的な定形石皿に乏しい。一方では奄美群島においてより縄文時代文化的な石皿が比較的多数得られている。宇宿小学校構内遺跡発見の定形石皿群と、トカラ列島中之島タチバナ遺跡出土の定形石皿である。タチバナ遺跡出土の石皿は沖縄島辺戸宇佐浜遺跡出土の定形石皿と同型式で、四脚をもつ隅丸長方形である。宇宿小学校構内遺跡のそれは四脚付のほかに、外底面に脚機能というより装飾性を意図したとみられる隆帯が彫られたもの、四脚付、下駄状脚などが複数ある。

一方、定形ではないが自然石材を選択する段階で、円形・楕円形、あるいは長方形に近似する「決まった形」を求めているともいえる。これは加工を伴う定形ではないが、自然石材の採取にあたって一定の基準のもとに選択されているのである。石皿・台石類は下石であり、必要な重量と安定した据え付け面・作業面をもっていれば機能が果たせるので、選択段階で「決まった形」が得られれば簡単な加工による整形に留めたものと考えられる。遺跡から発見される石皿に定形がかなり少ないのは、日常的な脱殻・粉砕作業にはあまり定形石皿は使用しなかったからではないだろうか。

(3)　石皿への特別の観念

沖縄・奄美諸島において定形石皿は 13 個、非定形は 200 余個である。定形石皿を製作するには非定形よりも投下される労働量がかなり多いことは十分に推測できる。しかもそれは本来の機能とはほとんど関係がなく、特にそのような造作をおこなわなくても脱殻・粉砕作業には影響はな

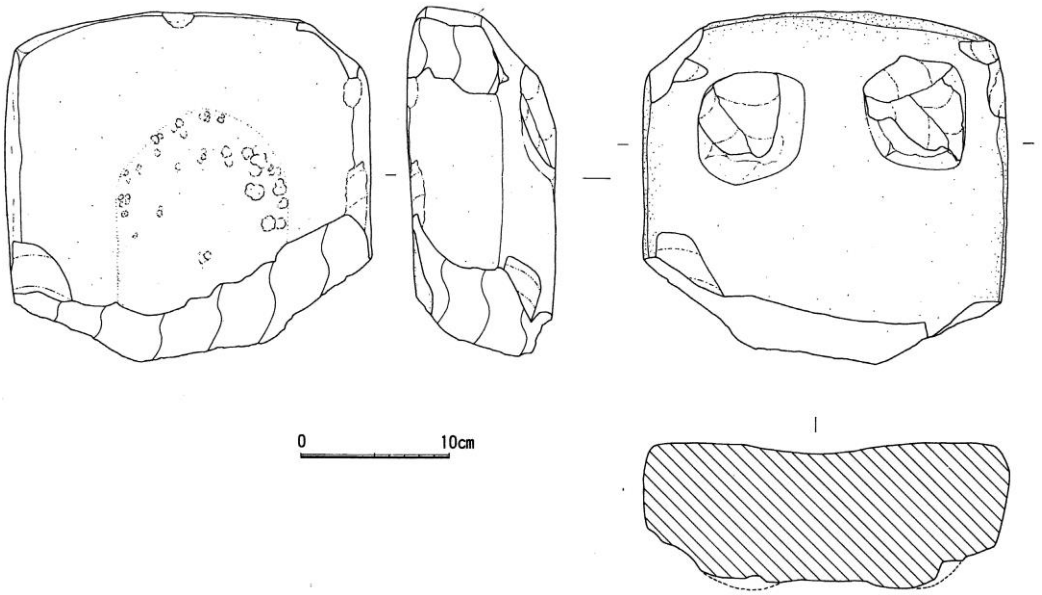


図 22　辺戸宇佐浜遺跡出土の四脚付定形石皿

い。このような非実用部分へのていねいな加工作業に多くのエネルギーを投下するのは、その石皿に日常生活の単なる植物質食料の加工作業とは別の役割が付与されていたのではないか。

すなわち、この定形石皿は脱殻・粉砕作業には用いるけれども、それをおこなう「場」は日常の場ではないと考えられる。石皿・台石類、磨石・敲石類は森林性植物質食料の加工・調理具であることから、森林の恵みを象徴する道具ともいえる。特に石皿は加工すべき食材が盛られる道具であり、その象徴性は他の石器よりも高い。森林の豊かな恵みに感謝し、その継続を願う共同体の儀式が先史社会の習俗として存在していたのではないか。定形石皿はそのような儀式の場における実演または模擬演技に用いられる特別の道具としての役割を付与されていたものと考えられる。あるいは実演ではなく、供献される食物を加工する特別の道具としての役割も考えられる。

奄美大島の宇宿小学校遺跡出土の石皿群に浮文の隆帯を有するものがあるが、脚としての機能よりも装飾性の強さが感じられる。南九州における凹文を施す石皿は明らかに装飾である。これらの石皿も日用品ではなく、祭祀の場で用いる道具であろう。

石皿の機能が可食植物の範囲を大きく広げる役割を果たし、日常の食生活を支える中心的な道具としての位置を占めていたことから、石皿への特別の観念が醸成されていたのではないだろうか。石皿は重量物で硬いことから、土器造りにおける成形や施文のように比較的容易におこなえるものではない。脚付や装飾付の定形石皿の製作にはかなりのエネルギーが投下されることになる。そこで日常生活では容易に造ることのできる簡単な整形や不定形の石皿で間に合わせ、祭祀における祭具としての石皿には森の恵みへの感謝や願望をこめて脚付や隆帯を施し、全体的形状も均整のとれた隅丸長方形などにしたのではないか。縄文の有脚石皿のなかには外底部中央部が両端の脚よりも低い（地面に付く）例があることから、脚は必ずしも安定の機能だけでなく装飾としての面があり、この点からも石皿への特別の観念の存在を思わせるのである。

東日本に多い装飾石皿には凹部の縁まわりに浮文を施すものもあるが、底部に帯状の隆帯を施すものが比較的多い。そもそも底部は通常は使用時であれ保管時であれ、あまり見えない部分である。見えない部分に、しかもかなりの量の製作エネルギーを投下して製作されている。また一見実用の目的で付与されたかに見える脚も、機能的には特に無くても石皿を下石として床面に安定的に据えることはできる。脚よりも外底部中央部が突出していて脚の用をなさないものが存在するのも、脚でさえも実は装飾が目的であることを示している。

通常は見えないはずの外底部に装飾を施すのは「見せる」ためであった。それはムラの祭祀の場において敢えて見えるように配置し、より呪性を高める効果を目的としたからではないかと考える。

このように見てくると、遺跡における定形有脚石皿の出土状況にも先史人のもう一つの観念が働いているのではないかと思われる。下石としての大型の石皿は堅果類の脱殻・粉砕作業の繰り返しによる疲労や劣化だけでは簡単には割れないはずである。しかし、多くの大型石皿は完形が少なく破損したものが多い。沖縄島辺戸宇佐浜遺跡とトカラ列島中之島タチバナ遺跡出土の有脚定形石皿は、ほぼ半分が欠損している。これは自然に半壊したのではなく、人為的にていねいに分割したものではないか。いずれの遺跡の石皿もほぼ半分の形に分割されている。

そしてもう一つの観念が働いたのでないか。例えばその石皿の主な使用者が死去した場合、あるいは長年生活をした集落を離れる際に、これまで身近にあった器物を破却する習俗があったのではないか。重量物でしかも日常生活の道具として主要な位置を占めていて、特別の観念をもっている器物を携行できない場合、そのまま放置するのではなく意識的に破却してその器物との観

念上の関係を断ち切るという疑似行為の結果、遺跡に破却された定形石皿が残されたのではないかと考える。また、とくに定形石皿でなくても、遺跡における出土状況は破却されたものの方が多い。数十キロもある重量物が割れているのが多いのは、「割った」からではないか。祭祀具でなくてもムラの放棄にあたって慣れ親しんだ道具を破却する習俗が存在していたと思われる。

宇佐浜遺跡の有脚石皿は石組住居の一部として再利用されていると解釈されてきたが、実際の石組遺構の検出状況からみると整然としたプランを維持していない。この石皿はもともと石組遺構（住居跡）の床面に据えられていて、移動にあたって人為的に破却されたものが、その後に攪乱を受けたものであろう。石皿は石組列に整然と並列しているわけではなく、いかにも石組列の一部になっているように見えるだけである。

(4)　沖縄諸島先史時代の石皿・台石類の系譜

先にも述べたように、沖縄諸島の先史文化は土器文化を中心に多くの物質文化が九州縄文時代文化とつながっていて、人と文化の起源が九州を中心とする日本列島にあり、ほとんどの時期を通じて濃淡はあっても情報圏、交流圏としての関係を維持してきたことは周知のとおりである。したがって、第３章において扱った石鏃文化と同様に、石皿・台石文化もまた九州にその系譜をもっていることが想定されるのである。

石皿・台石は土器のような細やかな造形や装飾がないので、地域性の把握は比較的困難であるが、いくらかの特性は捉えることができる。沖縄諸島先史時代の石皿は縄文時代前期から沖縄貝塚時代後期にかけて出土している。その形状は上篠分類による縄文時代石皿の類型にすべて含まれる。まず台石は自然礫塊を作業台にしているのでそれ自体に加工された型式は確認できないが、きまった形状の自然礫塊を選択するということが縄文時代文化の台石と共通する傾向として認められる。自然礫塊の選択には２つの傾向がある。ひとつは厚手で略円形、もうひとつは板状の薄手・多角形である。板状石材の場合の凹面は浅い。

定形石皿の多くはさきに述べたように隅丸長方形であるが、これは縄文時代文化の石皿に共通する特徴のひとつである。さらに四脚が外底面に付く「上篠分類のⅡ類Ｂロ」は有脚石皿のなかで最も多く、全国で 192 遺跡、417 点が確認されている（上篠信彦 2015）。沖縄諸島の石皿で定形の多くは隅丸長方形であり、さらにその中の辺戸宇佐浜遺跡出土の四脚付石皿は上記の上篠分類Ⅱ類Ｂロ型につながる。この型はトカラ列島中之島タチバナ遺跡出土石皿２点および奄美大島旧笠利町宇宿小学校構内遺跡出土の四脚石皿とも類似している。四脚付定形石皿は明らかに日本列島先史時代文化との関わりのなかでもたらされたものである。辺戸宇佐浜遺跡の四脚付石皿もおそらく日本列島新石器文化を担っていた集団が、沖縄への拡散に伴って搬入したものであろう。在地製ではないと考える。

宇宿小学校構内遺跡出土の定形石皿の外底面隆帯は、縄文時代石皿文化特有の形状である。この型は東日本を中心に分布するもので、飛び地状に奄美大島に、しかも一地域の遺跡において出土するのはきわめて特殊な現象である。調査報告者も述べているように、儀礼的な役割を付与された石皿とみられる。なお、沖縄・奄美群島においては東日本に分布する石皿の縁辺部に装飾（主に浮文）を施すものは未だ発見されていない。

このような特殊な例外を別にすれば沖縄諸島と奄美群島、南九州の石皿の形状・類型はほぼ共通しており、いずれも縄文文化の枠組みで展開された森林性植物質食料を主な生業とする社会で形成された石器文化である。

(5)　沖縄諸島先史時代における植物質食料の位置

沖縄諸島において、石皿・台石類、磨石・敲石類が主に縄文時代後期晩期および貝塚時代後期にかけて出土していることは、先史時代を通しての主要な食料は植物質食料であったことを示している。これは森林性新石器時代文化とも称される縄文時代の特質とも共通する。

北琉球諸島は島嶼性であることから深い森林は存在しないが、ドングリ類などの堅果や根茎類はほとんどの島々に分布し、先史人の人口を支える主要な食材の一部を担っていた。渋みをもつ種類のドングリについては、虫殺しやアク抜きをおこなう高度な技術をもっていたことが前原遺跡の調査で確認されている。このような食生活と食材処理技術は、北琉球諸島への移動・拡散にあたって主に九州縄文時代人が携行して定着・継承されてきた基本的な生活様式である。この点からも沖縄諸島先史時代文化は縄文時代文化（日本列島新石器時代文化）の枠組みとともに動いてきた地域であることは明白である。

四海を裾礁に囲まれた島嶼環境にあって、魚介類が植物質食料を超えていたかに見える。しかし間接的な証拠ではあるが、森林から採集した堅果や根茎を加工・調理した道具である石皿・台石類、磨石・敲石類が豊富に長期にわたって出土していることが、植物質食料の割合の大きさを物語っているといえる。北琉球先史人は確かに海洋資源を巧みに利用し、食料だけでなく貝器文化まで発達させたが、それが頂点に達した貝塚時代後期においてさえ石皿・台石類、磨石・敲石類が多量に出土している。森林性植物質食料を基盤とする縄文時代以来の伝統的生業の体系は継続していたのである。

(6)　集落における石皿の配置

石皿・台石は下石として地面に据えられて使用されるものであるが、多くは包含層からの出土なので原位置が不明なものが多い。住居跡内から出土しているものは５遺跡である。そのなかでも本部町知場塚原遺跡では５個すべてが住居跡出土であるが、これが本来の位置すなわち石皿は屋内使用を原則としていることを示している。

住居遺構内の石皿は虫殺しと乾燥を経てから脱殻・粉砕作業をおこなう初期の工程の道具である。ただし、アク（渋み）抜きを必要としないシイの実などは調理のための脱殻・粉砕作業で最終段階に近い。アク（渋み）有りの場合は食材の下処理作業である。いすれの作業も十分に乾燥させた食材であることを前提とするので、屋内作業でおこなうことが最も適切な方法である。石皿は屋内で使用することが原則であった。

(7)　定住と石皿・台石類、磨石・敲石類による堅果類処理

南九州では全日本列島に先駆けて縄文時代の草創期から石皿が出土していることから、そのほかの状況ともあわせて定住生活に入っていたものと理解されている。石皿・台石類、磨石・敲石類の出土は堅果類を主な食料としていたことを示す指標である。主な堅果類は縄文時代全般を通じてドングリ類であったことが確認されているが、沖縄諸島先史時代においても同様であった。

沖縄島北部の今帰仁村西長浜原遺跡ではアク抜きの不要なスダジイ（オキナワジイ・イタジイ）の実を中心に出土している。縄文時代晩期を中心とし、竪穴住居跡が十数軒検出されている集落遺跡である。同じ北部で主な時期が縄文時代後期に属する宜野座村の低湿地前原遺跡では、アク抜きの必要なオキナワウラジロガシの実が大量に出土し、貯蔵穴群も伴った。常に湧水に浸された湿地で長期の保存が可能な環境である。中部西海岸伊礼原遺跡の縄文前期に属する低湿地区ではマテバシイとオキナワウラジロガシの実や花粉が大量に検出された。ザルに入れられた状態の多量の実も出土した。マテバシイの実は渋みが少なくアク抜き工程を経なくても食べられる。

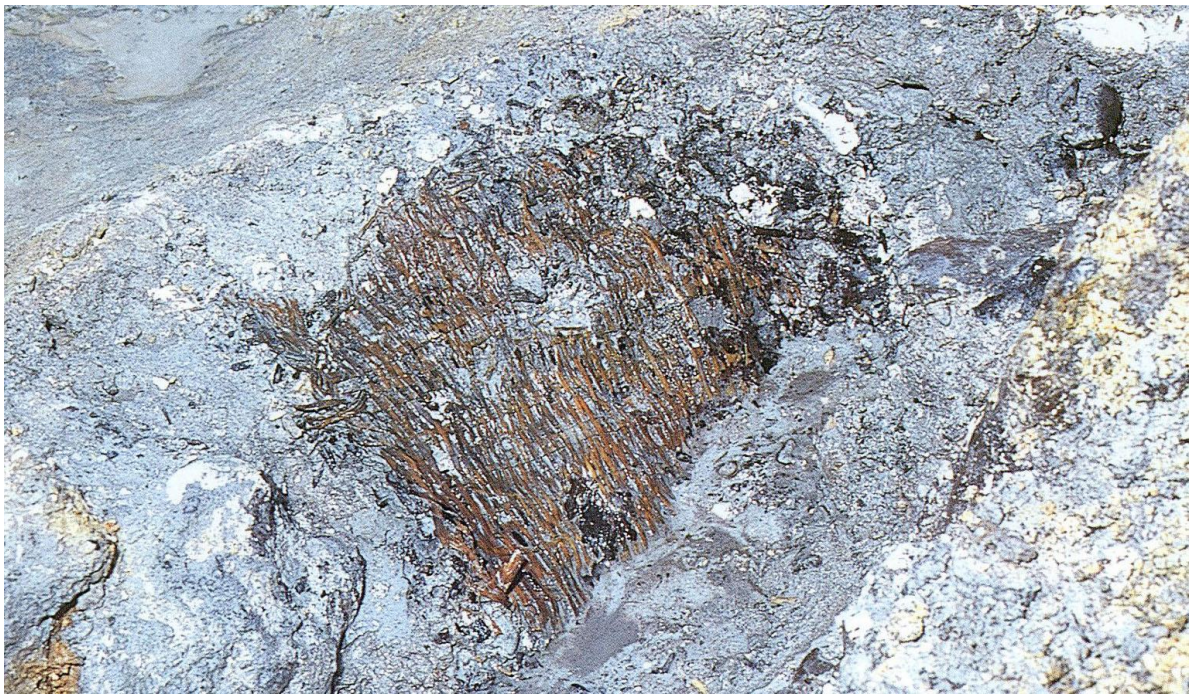


図 23　前原遺跡（宜野座村）のドングリ処理用ザル（笊）

図 24　前原遺跡のドングリ（オキナワウラジロガシ）貯蔵遺構（宜野座村立博物館写真提供）

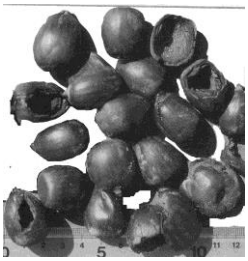


図 25　伊礼原遺跡出土のシイの実

図 26　ヌバタキ遺跡出土のシイの実

ドングリは食品となるまでに比較的長期にわたって処理作業の必要な食材であり、定住生活を前提として成立する生業である。ドングリ類は山林からの採取後すぐに 10 日以上水に浸して虫殺しをしないと、内部にいる虫に蝕まれて中身が減少するということが実験考古学の成果によって確認されている。試みに宜野座村漢那ヨリアゲの森に群生するアマミアラカシの実を採取して保管してみたが、やはり数日後には虫が中から這出てきた。ゾウムシの仲間である。したがって、すべての実について虫殺し作業をおこなう必要がある（増田孝彦・黒坪一樹 2010）。虫殺しは土器を用いて煮沸によるのが早いが、上記の前原遺跡の場合だと低湿地における水晒し法である。虫殺しの後は十分に乾燥させてから石皿・台石類、磨石・敲石類を用いて脱殻・粉砕し、再び水に浸してアク抜きをする。これを再び十分に乾燥させると食品となり、長期保存も可能になる。一般に 10 月後半に採取したドングリは、処理工程を経て食べられるまでには早くても年末、一般的には年明けといわれる。この処理工程のなかで石皿・台石類、磨石・敲石類皿が中心的な役割を担っている。

増田孝彦・黒坪一樹（2010）によるアク抜き実験のアラカシ類についての工程を示す

ドングリの採集　→ 下処理（虫殺し）最低 10 日以上水に浸す　→ 乾燥 →

→ 殻割り・荒割り → 水さらし（アク抜き）→ 乾燥 → 製粉 → 調理・食べる

↓　　↑

保存（長期）→　→

※水さらしは殻付きの実のままだと数か月経てもアクは抜けない。荒割りが必要

前原遺跡の場合、貯蔵穴とされる地点はすべて低湿地である。ザルに入ったオキナワウラジロガシの実が大量に出土しているが、水晒しによるアク抜き作業の場であるとされている。しかし完形の実は実験考古学の成果によれば長期間水晒しをしてもアクは抜けず、不可能に近いという。前原遺跡の貯蔵穴のドングリの実は完形（殻付き）が多いので、採取後の初期の段階すなわち虫殺しのための水晒しの場である。これは遺跡が活動を停止した時に偶々この時期であっただけであり、その後この穴は脱殻・粉砕作業を経たドングリをアク抜きのために水晒しをする場となったであろう。

このように、ドングリの実の採取から食べる段階までにはいくつかの処理工程があり、かなりの期間を要する。前原遺跡の貯蔵穴とされる穴は虫殺しに引き続き、脱殻・粉砕作業を経てのアク抜きをすぐにはおこなわず、そのまま水に浸して長期保存をしている状態と考えることもできる。伊礼原遺跡低湿地区出土のオキナワウラジロガシはザルにいれられているが、ほとんどの実は完形なのでアク抜きではなく虫殺しに保存のために湧水に浸した状態にしたのであろう。

処理作業をおこなう石皿はかなり重く、遊動する集団には不向きである。このことだけでも定住生活を前提とすることが了解できるが、ドングリの実を食べられる段階まで処理するには、常にその食材を処理、管理しなければならない。また、ドングリは 10～11 月の間だけしか収穫できないことから、この期間に次の収穫期までの消費分を確保しなければならない。そして乾燥やアク抜きなどの処理作業に数か月を要する。単に石皿などの処理加工石器の重量の問題だけでなく、それを用いた処理作業が一定の場所における作業、すなわち定住生活を求めているのである。遊動的な社会においては、このような作業は不可能である。このような事情から、定住生活においてはじめて、そのままでは食べられない堅果類を可食植物へと転化させることが可能になるのである。定住生活と石皿・台石類、磨石・敲石類は不可分の関係にある。

一方、沖縄諸島先史時代で早期（縄文早期末～前期初）に属する嘉手納町野国貝塚Ｂ地点では石皿や磨石は出土していない。台石に似たものに細粒砂岩製の砥石が 17 点出土しているが、石斧の刃部を研ぎ出す砥石である。この時期はまだ長期的な定住社会にはなっていなかったのではないか。南九州では縄文時代早期にすでに石皿・台石類が増加する傾向がみられることから、野国貝塚Ｂ地点から石皿・台石類が出土しても整合性をもつものであるが、さきに見たように沖縄諸島において石皿・台石類が多く出土するのは縄文時代後期・晩期から沖縄貝塚時代にかけての時期である。当然この時期の社会は定住生活であったといえる。

第 12 節　「石皿・台石類」の結び

沖縄諸島における新石器時代の人と文化は、大部分が九州を起源地とする日本列島先史人集団によって開始されたものであった。かれらが北琉球諸島へ拡散するにあたって、既に身に着けていた縄文時代の主要な生業のひとつである森林資源高度利用の知識と技術も同時に携行し、拡散・定着していったのである。この場合、森林という環境までは携行できないので、当然到達地の島々にほぼ類似する植生が存在していることが望ましい。奄美・沖縄諸島は島嶼でありながらも森林が形成され、スダジイ・マテバシイなどのアク抜きを要しない堅果、アマミアラカシ・オキナワウラジロガシなどのアク抜きを要する堅果を実らせる樹木が森林に自生していた。すでにこれら堅果類の処理・加工技術と経験を有していた九州に系譜をもつ先史人が、北琉球における生業と生活に適応することは比較的容易なことであったに違いない。また、小・低島ながらも無数の沢が発達し、沢をあまり形成しない石灰岩地帯にあっては小崖下に湧水が広く分布していた。このような水場は堅果類のアク抜き作業場としても適地であり、かれらは起源地における経験と技術を十分に適用できる条件下にあった。

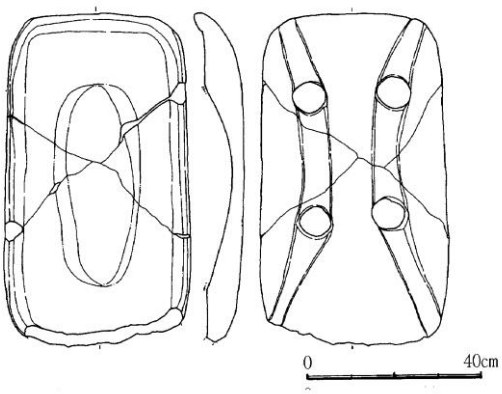
このようなことから、堅果類処理の道具である石皿・台石類、磨石・敲石類が日本列島と北琉球諸島でよく類似しているのは当然の現象であるといえる。一面では沖縄諸島の石皿は基本的形状・類型は縄文文化に類似するものの、凹面は全体的に浅く、定形石皿の仕上げも大雑把である。これは石皿だけでなく、石斧や石鏃にも言えることである。道具の機能がある程度発揮できれば了とし、細やかな整形には関心を示していない。

石皿は家屋内で使用されるのが原則であった。遺跡において破却された石皿がみられるのは、植物質食料を可食化する道具である石皿への特別の観念があり、集落の移動・廃棄にあたってこれを意図的に破却し、観念上の関係を断ち切る習俗の存在が想定される。

さらに島々はサンゴ礁湖（ラグーン）に囲まれている。起源地における海洋資源獲得活動の場よりも条件のよい遠浅の礁湖は、かれらにもう一つの生業環境を与えた。これらの石皿・台石類、磨石・敲石類は海洋性食糧資源の処理にも応用された可能性がある。ただし貝を割るなどの用途ではなく、干潮時におけるササ（毒草）漁で樹液を抽出する道具としての応用である。層位的出土ではないので考古学的な時期の証明はほぼ不可能であるが、干潮時に礁原で敲石類が採集された事例がある（知名定順 1979）。毒草の抽出は漁労の現場でおこない、すぐに投下しないと効力が発揮できないことから、このようにササ（毒草）漁に伴う遺物が礁原に遺されている可能性もある。こうして森林性と海洋性の両面の生業形態を有しながら、しだいに適応・定着し、沖縄諸島全域へと拡散していった。

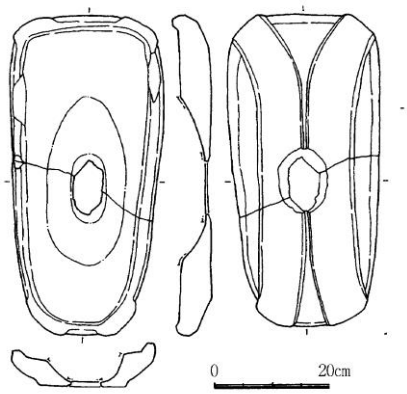
一方、北琉球諸島先史人として形成されていったかれらは、伝統的に起源地・故地（九州）との関係を維持し、接触を続けていた。それを可能にしたのは、北琉球の島々が九州本土から次々に島を視認･望見しながら渡航できる距離関係にあったからである。海洋は時には障壁となるが、航海によって繋がれた道でもあった。奄美大島の宇宿貝塚および宇宿小学校遺跡から多数の装飾付定形石皿が発見されているが、在地の石皿にはない豪華な形である。これらは九州本土または日本列島のいずれかから搬入されたものであろう。奄美群島・沖縄諸島には日本列島先史文化の要素が、時に携行型でまるで貫入のごとく搬入されることがある。この装飾石皿はその例のひとつである。

このような装飾付石皿は南九州では４例しかなく、宇宿小学校遺跡例と比べるとかなり簡素な凹文である。宇宿小学校遺跡の石皿は浮文でしかも底部に隆帯となって彫刻されている。類例は東日本に多く、奄美出土はきわめて珍しい例である。おそらく宇宿小学校遺跡はこの一帯の拠点集落で、いくつかのムラで構成される村落共同体が共同で祭祀を執り行う際の祭具として、これらの装飾付石皿が使用されたのではないか。



上篠信彦分類　Ⅱ類Ｂニ

東北地方（樺山遺跡）



上篠信彦分類　Ⅱ類Ｂホ

東北地方（臥牛遺跡）

図 27　外底部に浮き彫りによる弧状帯文様を造り出す石皿の例（上篠信彦 2015、ｐ42・43）

同様に沖縄島の辺戸宇佐浜遺跡出土の定形四脚付石皿も祭祀用具であったと思われる。森林性生業を一つの基盤とする社会にあっては、その恵みを調理する石皿はそのままでは食べられない自然の植物を、可食植物に変化させる石皿に、なんらかの特別の観念をもっていたのであろう。半分から割れているのは集落を放棄するにあたって、この特別の観念を物理的にも断ち切るために破却したものと考えられる。

図 28　宇宿小学校出土石皿（中山清美 2003）

石皿・台石類、磨石・敲石類は沖縄貝塚時代後期になっても使用されている。堅果類が引き続き重要な食糧としての位置を占めていたことを示している。海浜に集落を移したこの時期は海洋資源中心の生活のごとくみえるが、貝塚からはイノシシの骨が大量に伴う例もある。森林と関わる生業は従来通り継続していたのである。森林と海洋（礁湖）、この二つの生業地の環境が、沖縄諸島先史社会に稲作を導入する道を長期にわたって阻んだものと考える。沖縄貝塚時代後期に至っても土器の器種に祭祀器などの多様性が乏しく、従来どおりの深鉢形の枠を大きく超えることはなかった。自然災害リスクの多い主要作物栽培農耕社会に、必然的に表れる祭祀用の祭具が貝塚時代後期にはみられない。このことは沖縄諸島では縄文時代以来の伝統的生業や食文化の基本が継続していたことを示している。従来の生業システムの継承が、石皿・台石類、磨石・敲石類の継続的使用を支えたのである。

石皿の自然石材は砂岩が主な石質であるが、そのなかにニービ細粒砂岩が多用されている。先史社会にあって沖縄島中南部に分布するこの石材は石斧などには不向きであるが、石皿・台石類としては使用できる。沖縄島東海岸側に分布する嘉陽層由来の川原石が石皿・台石類として好まれたが、重量物であることから近在の細粒砂岩も選択されたのであろう。石材の流通ルートには砂岩の沖縄島北部東海岸ルート、片岩（おそらく輝緑岩も）の西海岸ルートの二つがあったようである。重量物である石材は沿岸航行による海運ルートが主たる交通・運搬手段だったと考えられる。石皿・台石類も石材流通を通して沖縄諸島先史社会の共通の情報圏、通交圏形成に関与・寄与し、沖縄諸島先史文化圏の形成に大きな役割を果たした。

なお、これまで石皿・台石類をすべて堅果類の処理を中心とする食材処理用具として述べてきたが、台石類については石器製作の土台、獣の解体処理の土台、植物質繊維の敲き台など多目的な利用がなされた可能性がある。石皿と砥石は円い凹面か溝状の窪みかで判断しているが、砂岩は砥石に適しているので両用もあり得る。本論では植物質食料の処理具という観点だけから論述した。

第５章　結論

第１節　石斧・石鏃・石皿・台石類の出現

沖縄諸島先史時代における石斧の出現は縄文時代早期末～前期初に属するとみられる爪形文土器文化期である。沖縄島北部屋我地島の大堂原遺跡下層、中部西海岸読谷村渡具知東原遺跡下層、同嘉手納町野国貝塚Ｂ地点下層、同北谷町伊礼原遺跡低湿地区下層、同東海岸藪地島ヤブチ洞穴遺跡など未だ数か所に点在しているに過ぎない。この時期の石斧は半磨製、局部磨製が多くを占めるのが特徴である。

また野国貝塚Ｂ地点下層、屋我地島の大堂原遺跡下層からは爪形文に先立つ無紋土器の存在が以前から知られ、さらにヤブチ洞穴遺跡では年代測定でもっと遡る型式不明の土器が検出されていることから、爪形文土器文化に先行する石斧を伴う可能性が出てきた。

次に縄文時代前期の曽畑式土器文化が、数はまだ少ないが沖縄島の広い範囲に展開している。この土器文化は九州の曽畑式土器と形状・文様などに大きな相違がみられないことから、短期間に沖縄島に到達したと考えられている。石斧は打製、半磨製、局部磨製が半数近くを占めるが、磨製石斧が爪形文土器期よりも多くなっている。

縄文時代早期末～前期の時代は九州などからの渡来活動が展開された時期であり、起源地の石斧文化があまり変容することなく、沖縄諸島で再現されたものとみられる。土器だけでなく石斧にも表現されているのである。以後、縄文時代後期に磨製石斧が増加し始め、晩期には盛行する。

打製石鏃は読谷村渡具知東原遺跡の曽畑式土器層、同大久保原遺跡、北谷町伊礼原遺跡低湿地区曾畑式土器層出土の計３点が最古の例で縄文時代前期に属する。さらに厳密に共伴かどうかは断定できないが、その可能性のある搬入土器、縄文時代中期の船元系土器付近で輝緑岩製の大型石鏃が出土している。これらのうち大久保原遺跡と伊礼原遺跡低湿地区の石鏃はほかの沖縄諸島出土石鏃とは異質であり、搬入石器とみられる。とくに伊礼原遺跡出土石鏃は大型で、しかもこの１例だけの輝緑岩製であることから、実際の狩猟用ではなく擬似弓射行為をする祭祀用の「第二の道具」の可能性がある。

その後打製石鏃は一時消え、縄文時代後期末に伊是名島ウフジカ遺跡からの出土で第二の出現期を迎える。しかも九州産黒曜石を伴う新しい要素の加わった動きが始まった。そして縄文時代晩期に、絶対量としては南九州の１遺跡分にも満たないものの相対的に多数の打製石鏃がみられるようになる。沖縄諸島における石鏃の流通は縄文時代前期・中期の第１期、縄文時代後期末～晩期の第２期の２回存在するということである。

石皿・台石類は爪形文土器期には出土していない。海洋資源への適応はみられるものの、森林資源の高度利用の様子は明確ではない。定住社会には至っていないことによるものとみられる。台石は出土しているが、発掘調査者は石器製作用として認識している。

縄文時代前期にはまだ少量ながら、石皿・台石類や磨石・敲石類石を伴う。定住社会に入っていることを覗わせるが住居跡などが不明である。石皿・台石類、磨石・敲石類は縄文後期から増加し、晩期に盛行する。そして沖縄貝塚時代後期にも継続していく。

第２節　石材（石質）をめぐって

石斧の場合、輝緑岩と緑色片岩が二大石材である。いずれも沖縄島北部西海岸に自然分布があるとされるが、輝緑岩の露頭は不明である。しかし、遠方との取引による入手にしては出土量が

多く、しかも輝緑岩か緑色片岩のどちらかが遺跡（集団）によって偏在するという特徴がある。やはり北部のどこかに分布しているのが理解しやすい。

いずれにしても、沖縄諸島先史集団によって使用石材に偏りがあるのは事実である。ほかの石材も含めて石器石材は沖縄島北部・近隣小島および慶良間諸島に産し、沖縄島中南部には分布しない。中南部の集団にとっては遠隔地である産地からの入手方法が大きな課題であったと考えられる。ところで土器文化の状況をみると、沖縄諸島のほぼ全域で同じ時期には同じ土器型式が展開している。これは沖縄諸島地域が恒常的通交関係をもち、情報が比較的短期間に伝達・浸透していて、結果として土器型式の変化にも画期ごとに反映したことを示しているといえる。

それをもたらしたのは、石器石材の入手行動・取引活動のために沖縄島北部や慶良間諸島地域の集団との円滑な、安定的な交流関係の維持・継承が伝統的なシステムとして存在していたからであろう。そして少なくとも４つの石材供給ルートもしくは供給集団の存在があった。石斧材料の輝緑岩ルート、緑色片岩ルート、石鏃材料のチャートルート、そして石皿・台石類、磨石・敲石類の砂岩ルートがあった。砂岩は主に嘉陽層に由来するものが使用され、東海岸ルートである。ただし国頭村のかなり北の西海岸にも砂岩の豊富な露頭がある。

チャートは北部の西側本部半島と伊江島・伊是名島・伊平屋島に産するが、本部半島産は良質な石材であり、ここが主な供給元であったと考えられる。伊江島・伊是名・伊平屋３島はチャート石材産地から除外してもよいだろう。チャートについては石鏃以外の用途もあった。石鏃を出土しない遺跡からもチャートの剥片が出土しており、また剥片石器も確認されている。

一方、細粒砂岩は沖縄島北部の嘉陽層由来のものと中南部産のニービ細粒砂岩があるが、石皿と砥石に限ってニービ細粒砂岩が利用されている。いずれも重量物であることから、近隣産のものを利用したのであろう。

第３節　石器・石材の分布の特徴と沖縄諸島先史文化圏の形成

石器石材の需要をめぐる先史集団の活動こそは、共通の情報圏、通交圏をつくりあげ、より共通性の高い文化を形成していく重要な役割を果たした媒介行動であった。石斧、石鏃、石皿・台石類、磨石・敲石類は沖縄島北部の石材原産地からしだいに遠くへ流通しながら逓減していくという傾斜分布ではなく、ほとんどの地域に大きな差のない均等分布を示しているのである。沖縄諸島先史社会がいかに発達した円滑な交流・交易システムを作り上げ、展開していたかが伺われる。これが推進力となって土器や貝器や自然観や習俗がかなり共通性の高い沖縄諸島先史社会を形成していったのであろう。北の伊平屋・伊是名島と南の糸満、あるいは西の慶良間諸島、久米島の土器が区別がつかないほど形状も文様も類似しているのは、石材流通システムによって空間的距離関係を解消したことによってもたらされた物質文化の均等分布効果のひとつが表現されたものといえる。

第４節　定住社会と石器

渡来期とみなされる爪形文土器期はまだ遊動的な生活を続ける集団であったとみられる。曾畑式土器文化の縄文前期の時期に至っても定住の指標となる石皿・台石類の出土は少ないので、安定した定住社会を形成していたかは不明である。縄文時代後期からは石皿・台石類、磨石・敲石類が増加する。森林性植物質食料の高度利用技術が定着していたとみられる。明らかに安定した定住社会としての様相を見せるのは縄文晩期の集落遺跡である。竪穴住居や石組列住居遺構を配

し、数軒からなるムラを構成している。定住生活にしか馴染まない重量物の石皿・台石類を家屋内に据え、森林から採集した堅果類を処理・加工して主要な食糧とした。これは縄文時代の安定的社会を支えた森林資源の高度利用の知識と技術に基づくもので、起源地から携えてきた文化であった。堅果類のアク抜きのために石皿・台石類を下石として、磨石・敲石類を上石として家屋内で脱殻粉砕し、水場で水晒しをおこない、乾燥の後再び家屋で保存し、必要に応じて食材とする生活スタイルは、沖縄諸島においても再現されたのである。日本列島の森林資源に類似する森林が奄美・沖縄諸島にも分布し、北部の山林ではオキナワウラジロガシとアク抜きを必要としないスダジイ（イタジイ）が、石灰岩地帯が卓越する中南部にはアマミアラカシが分布していた。都市開発で植生が変貌してしまったが、中南部にもドングリの木が戦後まで少しだけ残っていたことは、高齢者の記憶するところである。

石皿・台石類、磨石・敲石類は主に堅果類処理の道具とされるが、実際に遺跡から堅果類の出土例がある。しかも笊（ザル）に入れられて水場にあったり、貯蔵穴に保管されていたり、まとまった出土状況を示している。堅果類の収穫時期は限られ、さらにその処理は数か月の期間を要する。このような生業は定住生活を前提として成り立つものである。

集落遺跡の住居遺構を見ると、1 棟だけ規模の大きい住居遺構があり、しかもそこにだけ多量の石斧が残されている。これはこの大規模家屋が一般的な住居ではなく、公共的な機能をもった集会施設であることを示しているのではないか。規模が大きければ遺物の出土量も比例するという関係ではなく、ムラの主な構成員が共同体の運営をめぐって協議調整を行う場、あるいは共同作業の場としての役割をもっていた遺構なのではないだろうか。それは、石斧は（おそらく男性が）常時携帯する道具であり、集会に参加する際にも帯同していた。それが何かの事情（不時廃棄など）で石斧が集会場に遺されたのではないか。

一方、普通サイズの住居遺構を本部半島の知場塚原遺跡でみると、石皿はすべて住居遺構の中から出土している。縄文時代の石皿による脱殻粉砕作業は屋内作業であったというのが通説であるが、まさにそれを証する好例である。

また、石皿の多くは重量物で厚いものが多いにもかかわらず、割れている場合がよく見られる。これは道具を廃棄するにあたっての破却習俗が当時の社会に存在していたことを示しているのではないか。森林資源を高度利用し、食生活の基礎に位置づけていた社会にあって、果実以外は生食が困難な野生植物が石皿を用いた処理・加工によって可食食料となることから、その媒介機能をもつ器具を崇め一体化した心情をもっていた可能性がある。移住などに伴う廃棄、あるいは専用していた人物の死去などに際して、その器物との離別を表現する象徴的行為としての破却習俗にともなう「割った石皿」の出土だと考える。

第５節　石斧の役割

石斧の役割は多岐にわたると考えられ、「想定外」の使用法があるかも知れない。それほどに石斧はさまざまな作業を可能にする万能の器具である。石斧がもっていた役割は現代までの時代を経て材質を変え、形を変え、組み合わせを変え、さらに動力も加えて多様な用具となり、現代の暮らしにも重要な位置を占めている。

石斧はサイズによっても役割が異なり、大型は樹木の伐採や住居の柱の加工、中・小型は細部の加工に使い分けられたと想定されている。沖縄諸島において爪形文土器期の古い時期に半磨製・局部磨製が主であるのは、この地において石斧の役割に合致するように製造されたのではな

く、起源地における文化的伝統として再現した型式なのであろう。

しかし、縄文時代後・晩期の石斧は半磨製もあるが全面磨製もあり、バチ形や短冊形、断面が厚く丸いもの、薄く平たいもの、側面が平面をもつもの（定角式）、実用にはみえない玩具のようなミニチュア石斧など、多様な展開をみせている。当時はすでに定住生活をしており、集落を造成するための山林の開地作業、家屋建築木材の伐採、加工、そして竪穴住居のための凹地掘りや柱穴掘り作業、繁茂する住居周辺の雑木処理作業など、石斧を必要とする場面が生活空間に多く存在した。その反映として縄文後期に石斧が多用され始め、晩期には盛行する。文化的伝統もあるが、生活方法の進化のなかで石斧のあり方に工夫が加えられてこれが流行し、新たな型式となったのではないか。多和田眞淳が定角式や片刃石斧は農耕用とした見解は、土を掘るという機能に適した形状に着目した発想で、これを竪穴住居の凹地掘り、柱穴掘りに置き換えると成り立つ解釈である。ただし、定角式石斧が沖縄諸島で開発されたのではなく、それ自体が縄文石器の影響下にあることを示す形式でもあろう。

ところで縄文時代に打製石斧は土掘り用とするのが広く流布された解釈である。しかし打製石斧のなかでも断面の厚い、または丸い石斧は穴掘りには効率が悪い。単に土を突くだけならよいが、竪穴や柱穴を成形しながら掘る必要があるので断面は平たい形状が効率的である。根菜掘りも原理は同様であろう。事実、沖縄諸島の竪穴住居が検出されている遺跡からは、打製石斧の出土例は皆無かあるいは少ないのである。打製石斧がないと土掘りはできないということではない。沖縄諸島出土の打製石斧は完成形なのか、製作途中のものなのかを再検討する必要がある。

第６節　石斧の再生と転用

石斧の材料は巨大な岩石から割りとるのではなく、手頃なサイズの円礫を川原や海岸から採取する。遺跡出土の石材をみると円礫破片が多いことがそれを示している。原産地からもたらされた石材は集落において石斧として道具に変えられる。石材の破片を伴う遺跡（集落）はそこで石器が作られたことがわかる。石材の種類によってはそれが石斧か、磨石かなどの判断ができる場合もある。大きな石材は別の敲石や堅い木などで粗割がおこなわれるが、すでに石斧の形状に近い円礫は剥離作業によって形が整えられていく。これに敲石などで連続敲打を加えて表面を整形しながら均していく。この段階でかなり目的とする石斧の形が出来上がる。最後に研磨によって表裏面、側面を円滑にし、さらに刃面を砥ぎ出す。各面の素材段階のくぼみ、剥離作業や敲打作業によるくぼみを研磨によって抹消できない場合、そのまま残されることもある。刃部は完全に研磨によって仕上げられる。

使用によって刃縁が欠損あるいは損耗すると、研ぎ直しをおこなう。これが繰り返されると、タテ斧の場合は刃部の一方の縁辺が減少してせり上がり、平面形が斜めの刃になる。斜刃石斧はかなり使いこなされたことを表している。タテ方向に剥離すると今度は剥離面を研磨して扁平の小型石斧として再生することもある。また、潰れた刃を砥ぎなおさずに敲石として転用することもある。敲石への転用は沖縄貝塚時代後期によくみられる。沖縄諸島先史社会では道具が破損や損耗を受けると、再生や転用によって可能な限り石材の活用を追求していたのである。

第７節　石斧の減少―沖縄貝塚時代後期後半

沖縄貝塚時代後期後半に石斧が減少する。また存在しても刃部は潰れて刃物というより敲石を思わせる使用痕がみられるものもある。砂丘に生活の拠点を構えたこの時期は、山野の中の丘の

縁辺に集落を造成した縄文晩期と立地が大きく異なる。砂丘における開地作業は極めて軽微なもので、石斧による伐採作業をそれほど必要としなかったであろう。このことが石斧減少の一因にはなり得る。しかし主要因ではなかった。同じ砂丘に立地する貝塚時代後期の前半に属する遺跡では、縄文期とほぼ同様に石斧が使用されている。刃物としての石斧のもつ万能の器具的機能は時代を超えて必需品である。

やはりよく指摘されるように、九州との貝交易などの取引を通して鉄器が流通し、石斧にとって代わったことが石斧減少の最も大きな要因とみられる。前半期には鉄器はまだ十分には分配・普及していなかったのであろう。開地作業が軽微になったとはいえ、貝塚時代後期前半は鉄器が十分には普及しなかったことから、伝統的石斧も併用し、やがて後半に普及すると石斧は激減していったという筋道を通ったのであろう。

貝塚時代後期後半からグスク時代初期にかけて刃部が潰れた石斧が見られるのは、伝世品を手で握って用いる敲石として転用したものであろう。この時期に敢えて石斧を造り、「柄付敲石」的に使用したとは考えられない。転用石斧には敲き痕以外に磨滅痕をもつものもある。磨石にも光沢をもつものがあり、これらを皮なめし用石器と推定する見解もあるが、沖縄諸島には皮の採れる動物は少ない。本稿ではこれらは繊維造りのための道具として理解したい。民俗例が参考になる。現在でも毎年旧暦 12 月に月桃（サンニン）でカサ餅を作るが、くるんだ葉を結わえるのは月桃の幹から採った繊維であった。また、山野で薪などを束ねるのも月桃の繊維であった。その時に幹を潰し、なめすのが円礫である。

第 8 節　打製石鏃の下限と磨製石鏃

沖縄諸島における打製石鏃の出土は縄文時代遺跡、沖縄貝塚時代後期後半の遺跡、およびグスク期遺跡にみられる。発掘調査報告書のなかには出土遺跡の時期をそのまま打製石鏃の時期として扱い、貝塚時代後期後半やグスク期に属するものとして位置づけている例もある。しかし、打製石鏃は九州では弥生時代の半ば頃には消滅し、その後磨製石鏃へ、さらに鉄鏃へと戦闘用に変化していく。したがって沖縄貝塚時代後期後半以降の遺跡から出土する打製石鏃はこの時期まで続いた文化ではなく、以前の時期の打製石鏃が混在したものである。貝塚時代後期後半の時期に並行する時期の九州ではすでに打製石鏃文化は消滅しているのである。そうすると、縄文時代晩期に盛行し貝塚時代前半には消滅している打製石鏃文化が後半に沖縄諸島で独自に発生したことになる。しかし、それはあり得ないことである。

一方で弥生時代に盛行した磨製石鏃文化は、少量ながら奄美群島、沖縄諸島においても分布しており、北琉球は濃淡の差はあっても恒常的に九州との関わりが継続していたことを示している。並行期の物質文化が伝わる関係のなかで打製石鏃の存在は大きな違和感があり、以前の縄文時代の打製石鏃の混在とみるのが妥当性をもっている。

第 9 節　局部磨製石鏃

局部磨製石鏃が沖縄島中部の沖縄市室川貝塚から出土している（沖縄市教育委員会 1993）。これは唯一の例であるが、南九州では少量ながら草創期・早期から存在し、その後の縄文時代を通して確認されている（宮田栄二 2003）。このような類似例も北琉球の石鏃文化が縄文時代石鏃文化の系譜に属することを示しているといえよう。

第 10 節　石器の象徴化―第二の道具への変化

縄文時代の後期末から晩期にかけて、肥厚口縁土器様式集団の文化が奄美群島から沖縄諸島にまで拡散していった。その勢いに乗じて、新たに九州から石鏃が流通してきた。その頃南九州では在地産の黒曜石があるにもかかわらず、西北部佐賀県腰岳産黒曜石が上質であるとして、これを重宝する価値観が支配していた。したがってかれらは南の島々に展開するにあたって、実用にしろ、儀礼用にしろ、価値の高い腰岳産黒曜石を携行した。しかし沖縄諸島で弓射の生業が定着しなかったので、沖縄諸島側から上質黒曜石を選択的に求める取引品としての位置にまでは発展しなかった。

しかし、沖縄諸島において石鏃の流布した地域では別の展開が見られた。石鏃は北部本部半島からチャートを入手し、在地製も製造するほどの一定の定着をみせてはいた。生業としては多用しないが、弓射のもつ貫徹力を象徴化し、その威力でもって邪気に反撃・排除する効果を期待する模擬行為に用いられるように変化していったのではないか。弓射の威力は観念のみに求め、実際の石鏃製作にあたっては形状だけ類似していればよく、ていねいな剥離・押圧技法は用いないし、上質な石材にも拘泥しない。したがって、沖縄諸島出土の石鏃は九州の石鏃と比べて簡素な造りが多く、丁寧な造作は少ない。

一方、石皿の場合は定形石皿に象徴化された道具が出現する。沖縄諸島ではもっとも形の整った定形石皿は辺戸宇佐浜遺跡出土の石英斑岩製石皿であるが、外底部に四脚を付してある。同じ型式の石皿はトカラ列島中之島タチバナ遺跡からも２個出土している。これはおそらく搬入品だとみられるが、脚は機能もするが無くても石皿は床面に安定的に据えられる。自然礫塊の周縁を簡単に加工して造る多くの石皿と異なり、投下される製作エネルギーはかなりの量になるはずである。これは特別の道具であるからであろう。それをさらに具体的に示すのが、奄美大島宇宿貝塚および宇宿小学校遺跡発見の装飾石皿群であろう。もはや安定的据え付けとは関係なく、外底面に浮き文による隆帯を施しているのである。そもそも、石皿の外底面は使用時も保管時も見えない位置にある。あえてそこに装飾を施すのはなぜだろうか？　これは、ある特定の「場」ではこの装飾部が反転されて衆目に見えるのであろうか？　あるいはその石皿を緊縛した状態に見立てて模式的に表現し、特別な器具としての呪術性を付与したとも解釈できる。いずれにしても日用品ではなく祭祀などの場における「第二の道具」であろうと考える。奄美大島出土の装飾石皿、脚付石皿は東日本縄文時代に盛行するものであり、列島縄文文化の物質文化をその呪術的用途も含めて導入したものであろう。

第 11 節　石皿の破却習俗

石皿は遺跡において割れた状態で出土することも比較的多い。細片は少なく、２～３分の１程度の粗割状態が一般的である。石皿はそのままでは食物にならない植物質食料を可食化するなど、日常生活に密着した道具である。あわせて長期の使用に耐えられるので、使用者にとっては特別の観念を抱きやすい愛着のある道具である。移住などによって石皿を廃棄しなければならない時に、そのような観念や関わりを断ち切るためにこれを意識的に破却したのではないか。割れた石皿のなかには破却習俗によるものもあると考える。

縄文時代における破却習俗の存在は土偶の出土状況から確認されている。縄文時代の代表的遺物のひとつである土偶はほとんど女性像で、女性原理に関係する繁栄（生殖）祈願の器物とされている。完全な形で出土することはほとんどなく、一部が欠けている。これは破却習俗を示すも

ので、怪我や病気の人間の身代わりとする解釈もある。西日本では少ないが、南九州では縄文後期後半から再び作られるようになっており、破却習俗の伝統も継承されている。

第 12 節　石器の系譜と貫入現象

本論で見てきたように、沖縄諸島先史時代の石器が渡来期に起源地の石器文化を携行してきたことに始まり、その後も島々を視認（望見）しながら往来できる相互の位置関係を活用して、共通の通交圏、情報圏を維持してきたことから、石器もその都度の画期の影響も受けながら九州との関係性を継続してきた。しかも森林性植物質食料の利用を主な生業とする伝統は継続していた。したがって類似する石器が多いのは当然であるが、一方では「出九州」にあたって持ち出さなかった（正確には沖縄諸島で再現しなかった）石器文化もあった。それは例えば石棒である。

森林資源の高度利用がより深く浸透した日本列島からサンゴ礁湖に囲まれた新たな生業環境が加わった地域では、自然観・世界観にも影響を与え、祭祀の考え方、あり方にも変化をもたらしたことであろう。石棒や土偶が沖縄諸島で見られないのは、自然観やそれにもとづく習俗に変化が起こったからではないかと考える。九州との関係性が強弱の差はあっても途切れることなく継承され、大きな動きには連動してきたが、一方では独自の地域的特質をもった文化も形成していった。

沖縄諸島の遺跡で、突然出現したような唐突感のある縄文時代の土器や石器そのものに遭遇することがある。古くは市来式土器であり、最近は船元系土器やそれに伴う大型石鏃、石匙であり東北由来の大洞式土器であるが、石器としては伊江島型石斧の名称が与えられた抉り入り石斧や、北谷町伊礼原遺跡出土の石匙も搬入品であろう。しかし、このような異物の貫入の如き現象は、沖縄諸島も広く日本列島新石器時代文化の枠組みのなかの動きとみれば、頻繁ではなくても起こって当然の現象といえる。

第 13 節　沖縄貝塚時代後期まで継続した森林資源の高度利用

沖縄貝塚時代後期の前半には九州弥生社会との貝交易を中心とした交流があり、米をはじめとする「新世界」の文物の情報に接する機会があったことであろう。それにもかかわらず稲作を導入した証拠は未だに明確に把握できていない。貝殻交易は先史琉球人の側からみると「受け身型交易」であり、生業を転換させるほどの影響を受けることはなかった。一方、石器をみると、石皿・台石類、磨石・敲石類は継続して出土しており、森林資源の高度利用という生業と食生活のスタイルは引き続き社会の基盤となっているのである。

これに加えて貝塚時代後期はサンゴ礁湖における生業が、先史時代としては最も発達した時期でもあった。植物質食料と同様に魚介類も土器による煮炊きによって可食食料となるのであるが、その量がさらに増加した九州弥生時代並行期は比較的安定した時期を迎えていた。一遺跡（集落）にひとつの海浜と礁湖、そして後背地の山林という生活圏（縄張り）を広域の村落共同体が保証する社会的合意が形成されていたのではないか。

貝塚時代後期においても植物質食料や魚介類の調理機能と結びついた深鉢形土器が主流であることは、縄文時代以来の森林資源の高度利用が継続していた傍証ともなり得る。そして深鉢形土器に付与される文様は上半部に限られるという点も、縄文時代後期以来の伝統である。

コメなどの単一作物に大きく依存する生業の場合は、主食の大量生産、大量備蓄の可能性を広げ、人口増加の推進力となり得るが、自然災害を受けると壊滅的な食糧不足に陥るリスクを抱え

ている。沖縄貝塚時代後期集団は稲作を受け入れず、森林と海洋の多様な生業を維持することで、このリスクを回避したとも考えられるが、農耕社会への参加が遅れたことで階層分化・階級分化の進行が遅れ、小国家の誕生も遅れることとなったという面もある。

第 14 節　北琉球先史時代石器文化の特質（独自性）

これまで北琉球の先史時代石器文化は列島縄文時代文化の系譜に属し、その枠組みのなかで展開してきたことを指摘してきた。しかし一方では島嶼性、亜熱帯のサンゴ礁湖という環境のなかで独自の特質を形成していた。

まずひとつは、石器石材の獲得、供給をめぐる交流・交易活動は、共通文化圏の形成を媒介した重要な動きのひとつであった。これによって奄美群島・沖縄諸島の広大な島嶼群が概ね共通の土器文化、石器文化、貝器文化でくくられるようになった。空間的にもかなりの範囲にわたって人々の交流・交易・移動ネットワークが機能したことにより、系譜を同じくする土器や石器や貝器が島々に広がり、共通のデザイン、価値観、世界観が共有されていった。そのなかで。海洋は島嶼間をつなぐ「海の回廊」であり、山や谷や川によって生活圏の境界が区切られた空間よりも、島嶼世界の方がより広い空間の通交圏を形成していたといえる。

次に系譜関係にあっても縄文時代の石器文化をすべて再現したのではなく、取捨選択した石器文化もある。そのひとつは石棒である。石棒は男性器を土偶は女性を表現したものであるが、奄美大島宇宿貝塚に石棒の出土例があるだけで、北琉球には定着していない。土偶は存在しない。

このことは縄文時代の伝統的な生殖器崇拝による繁栄祈願習俗から離脱し、それとは別の自然観、世界観を北琉球先史時代人がもつようになっていたことを示している。

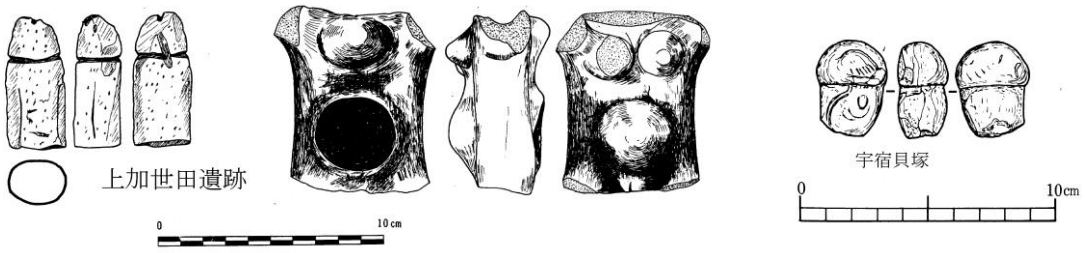


図１　石棒と土偶

また、材質転換によって独自の道具を工夫して環境への適応あるいは利用を工夫したものもある。図２は石匙で、モノを引き切る道具であるが沖縄では１点だけの出土である。石匙は列島縄文文化では刃物として一般的な石器であるが、沖縄では定着していない。

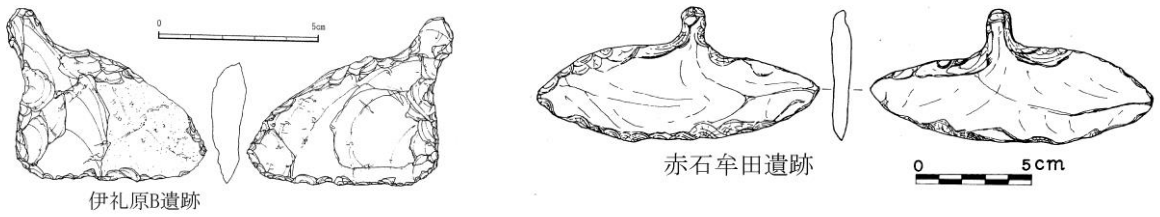


図２　石匙　（左；沖縄・伊礼原 B 遺跡　右；鹿児島・赤石牟田遺跡）

一方、沖縄には二枚貝の縁を剥離して鋸歯状の刃を作出した貝刃が出土する（図４）。貝殻に材質を転換して石匙の機能を貝刃に移動したものとみられる。そのほかにも北琉球先史時代人は主に貝殻を活用して利器や容器など独自の物質文化を創造し、特色ある島嶼性文化を形成した。

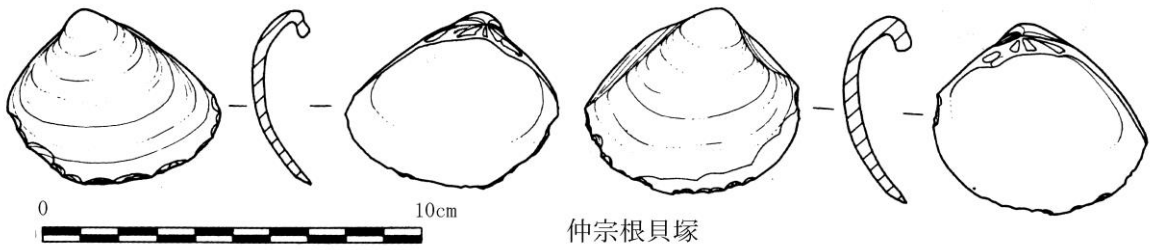


図３　貝刃　　二枚貝の縁を鋸歯状に剥離加工した貝器

また、敲石の機能をヤコウガイに材質転換した螺蓋敲打器も創造している。この貝蓋利用敲打器は「螺貝斧」と称されたこともあった。しかし一見刃部を作出したように見えるのは、自然のままの螺貝蓋を敲打器として使用した結果形成されたものであることが明らかとなった。

図４　ヤコウガイの蓋を利用した螺貝敲打器

さらに木製容器の製作に石器を使って多大なエネルギーを投下していたが、天然の大型二枚貝の縁を調整し、容器として利用することで、石器使用による労働負担を軽減した。

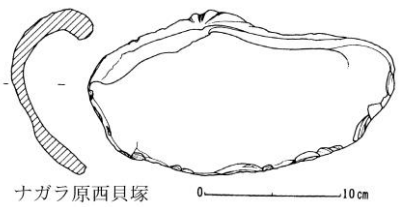


図５　左；木製容器（『伊礼原遺跡図録集』　右：シャコガイ製容器（『ナガラ原西貝塚』）

沖縄諸島先史時代人は、石器文化の一部を材質転換によって貝器文化も発達させ、サンゴ礁環境の条件をよく活用し、適応していったのである。

沖縄諸島先史時代石器文化の研究　引用・参考文献

石器・石斧関係引用・参考文献

(1) 論考・著書

安里嗣淳　1992「先史沖縄諸島人の交通」『史料編集室紀要』第 17 号　p.17-27 沖縄県立図書館
1996　共著「東京大学総合研究資料館所蔵沖縄発見石斧一覧」『史料編集室紀要』沖縄県教育委員会
2011　安里嗣淳著　『先史時代の沖縄』第一書房　p.53-64 に再録
伊藤慎二　2012　「琉球貝塚文化における社会的・宗教的象徴性」『祭祀儀礼と景観の考古学』、p 275-287、國學院大學伝統文化リサーチセンター
小畑弘己・盛本勲・角縁進　2004　「琉球列島出土の黒曜石製石器の科学分析による産地推定とその意義」『Stone Sources』No.4　石器原産地研究会
大堀皓平　2006　「先史沖縄人の在地性―縄文時代晩期から弥生時代中期併行段階における石器石材―」『南島考古』No.25 p.1-10　沖縄考古学会
2008　「先史沖縄諸島の磨製石斧製作―「粗造の感」の石斧について」『國學院大學大學院紀要―文学研究科』第 39 輯　p.265-278　國學院大學大學院
2010 a「石材分析に基づく沖縄先史研究」(博士学位論文)
b「先史沖縄における磨製石斧製作―戦略束とその選択」『南島考古』No.29 p.21-31 沖縄考古学会
2012　「沖縄諸島出土打製石鏃の基礎的研究」『南島考古』No.31 p.31-40　沖縄考古学会
2013　「先史時代沖縄の石器石材」『第６回鹿児島県考古学会・沖縄考古学会合同学会研究発表会資料集―鹿児島・沖縄考古学の最新動向』
2014　「琉球列島の石器・石材」、新里貴之・高宮広土編『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究　研究論文集』第１集　琉球列島の土器・石器・貝製品・骨角器文化』p 263-276
大山柏　1922　『琉球伊波貝塚発掘報告』
沖縄考古学会編　1978　『石器時代の沖縄』p.52-54　沖縄考古学会　新星図書
小田静夫　2000　『黒潮圏の考古学』p.179-217　第一書房
加藤三吾　1901　「沖縄考古土俗雑話」『東京人類学会雑誌』17 巻 188 号、東京人類学会
1996　『沖縄県史料　考古関係資料１』p.87-88 に再録
神田孝平　1884　“NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS、 &.、 OF JAPAN”
1886　『日本大古石器考』(上記文献の図説明文の縦書き日本語版、図はなし)
1983　『日本大古石器考』上記英文・日文復刻版。斉藤忠解説　第一書房
上村俊雄　1998　「南西諸島出土の石鏃と黒曜石―その集成と意義」『人類史研究』第 10 号　p.200-213
木崎甲子郎 1985『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社

岸本義彦　1984　「(3)石器」『野国―野国貝塚Ｂ地点発掘調査報告』pp.73-124　沖縄県教育委員会

2004「沖縄諸島の石器・石製品」『考古資料大観　12　貝塚後期文化』p. 264-266 小学館
1984　『野国―野国貝塚 B 地点発掘調査報告』 p 73-124　沖縄県教育委員会
1986　「第Ⅴ章第２節３　石器」『具志堅貝塚発掘調査報告』pp. 63-84　本部町教委
2013　神谷厚昭と共著「石器等から見た伊江島ナガラ原東貝塚の様相―石器・石材の供給地推定―」『ナガラ原東貝塚の研究』　p 269-277　熊本大学文学部
木下尚子　1986　「弥生併行期の農耕―南島」『季刊考古学』第 14 号 p. 57-63
国分直一　1972　『南島先史時代の研究』p. 293-346　慶友社
小牧實繁　1927　「那覇市外城嶽貝塚発掘報告」『人類学雑誌』42 巻８号、東京人類学会
1996　『沖縄県史料　考古関係資料１』1996 年 p. 209-225 に再録
笹森儀助　1895　「琉球群島に於ける人類学上の事実」『10 巻 110～114 号、東京人類学会
1996　『沖縄県史料　考古関係資料１』p. 24-62. に再録　p60. に当該記事
佐原　真　1977　「石斧論―横斧から縦斧へ―」『考古論集』松崎寿和先生退官記念事業会、 p 45-86
1982　「石斧再論」『古文化論集』上巻、森貞次郎博士古希記念論集刊行会、 p 161-186
1994　『斧の文化史』東京大学出版会
島田貞彦　1932　「琉球崎樋川貝塚」『歴史と地理』30 巻５号
1996　『沖縄県史料　考古関係資料１』p. 272-281 に再録
白木原和美　1980　「南西諸島中部圏石斧概観」『文学部論叢』１　熊本大学文学会
大工原豊　2008　『縄文石器研究序論』六一書房
高宮廣衞　1965　「沖縄」『日本の考古学Ⅳ』p. 529-537　河出書房新社
嵩元政秀　1972　「沖縄における原始社会の終末期」『南島史論』p. 347-364　琉球大学史学会
2003　「第２章　縄文時代 第五節　石器文化の様相」『沖縄県史各論編２　考古』 p. 170-175　沖縄県教育委員会
知名定順　1979「沖縄本島糸満市名城海岸リーフ採取の石器について」『花綵』創刊号、沖縄国際大学考古学研究会 O.B.会
多和田真淳　1956　「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会
1980『多和田真淳選集』p. 18-53　に再録
1964　「琉球列島の起源」『守礼の光』２・３月号
1980『多和田真淳選集』p. 1-9　に再録
1967　「沖縄の先史時代」『考古学ジャーナル』15 号　p. 2-6
1980『多和田真淳選集』p. 10-17　に再録
1971　「琉球古代の鉄の輸入（その二)」『考古学ジャーナル』59 号　p 15
（この論考の（その一）は同書 14 号にあるが、それは城間茂松編 1968『鐵と琉球』からの転載であった）（その二）はこれに新たに追加執筆されたもの。
知念勇　1983　「南西諸島の石器」『沖縄歴史地図（考古)』 p 90

津村宏臣　2003　「５　石器」『沖縄県茅打バンタ遺跡』p. 20-47
鳥居龍蔵　1894　「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」『東京人類学会雑誌』９巻 94 号、東京人類学会
1996　『沖縄県史料　考古関係資料１』p. 9-11 に再録
1905　「沖縄諸島に住居せし先住人民に就て」『太陽』11 巻１号
1905　「沖縄諸島に住居せし先住人民に就て」『東京人類学会雑誌』20 巻 227 号
1905　「沖縄諸島の先住人民に就て」『考古界』
1996　上記３文献を『沖縄県史料　考古関係資料１　沖縄県教育委員会に再録
『太陽』→　p. 97-105　　『東京人類学会雑誌『→　p. 106～114
『考古界』→　p. 115-124
仲宗根求　2008　「伊江島型石斧の提唱」『
2009　「熱田原型石器の提唱」『廣友会誌』第５号 p. 1-18
2016　「奄美・沖縄の狭刃型石斧」『廣友会誌』第９号、ｐ8-18、廣友会
中山清美　2004「奄美諸島の石器・石製品」『考古資料大観　12　貝塚後期文化』p. 260-263 小学館
新田重清　2000　「沖縄縄文時代主要遺跡から出土する石器の様相について」『琉球・東アジアの人と文化』　（上巻）p. 1-30　高宮廣衛先生古希記念論集刊行会
2003　「第３章　第３節　五　生活用具」『沖縄県史各論編２　考古』p. 218-221 沖縄県教育委員会
藤本強　1988　『もう二つの日本文化』東京大学出版会
松村瞭　1920　『東京帝國大學理學部　人類學教室研究報告　第三編　琉球荻堂貝塚』
水之江和同　2005　「南島の縄文石斧」『南島考古』No. 24 p. 5-18　沖縄考古学会
2012　『九州縄文文化の研究』、ｐ21、24、26、30、32、35.　雄山閣
宮城朝光　1977　「第６章　苦増原遺跡の石器」『苦増原遺跡』p. 64-76、具志川市教育委員会
三宅宗悦　1935①　「南島の石器時代に就て」『ドルメン』４巻６号
1996　『沖縄県史料　考古関係資料１』p. 305-317 に再録
1935②　「南島の石器聚成-沖縄篇」『考古学』６巻５号
1975　上記文献の実測図版が京都大学で発見され、『南島考古』第４号に三島格によって実測図拡大版を再録し解説を付す
1996　『沖縄県史料　考古関係資料１』p. 318-324　に再録
1940　「南島の先史時代」『人類学・先史學講座』16 巻
1996　『沖縄県史料　考古関係資料１』沖縄県教育委員会　p. 369-406 再録
盛本勲　1989　『沖縄県久米島具志川村　清水貝塚発掘調査報告書』具志川村教育委員会
八幡一郎　1950　「琉球先史学に関する覚書―考古学上より見たる琉球」『民族学研究』31p.
1996　『沖縄県史料　考古関係資料１』1996 年　p. 490-506 に再録
山崎五十磨　1924　「石器時代より見たる内地と琉球との関係」『沖縄教育』143 号
1996　『沖縄県史料　考古関係資料１』1996 年 p. 169-177　に再録

米田善治　1977　「第５章　渡喜仁浜原貝塚の石器・石製品」『渡喜仁浜原貝塚　調査報告書〔Ⅰ〕p.99-124、今帰仁村教育委員会。
若林勝邦　1892　「種子島及ビ大島ノ石斧」『東京人類学会雑誌』７巻 71 号　東京人類学会　　1996　『沖縄県史料　考古関係資料１』p.5-8　に再録

(2) 石斧資料掲載文献（主に発掘調査報告書）

渡具知東原遺跡　　読谷村教育委員会 1977『渡具知東原-第１～２次発掘調査報告』
野国貝塚 B 地点　　沖縄県教育委員会 1984『野国－野国貝塚群 B 地点発掘調査報告』
伊礼原遺跡　北谷町教育委員会 2007『伊礼原遺跡』
伊礼原 E 遺跡　北谷町教育委員会 2010『伊礼原 E 遺跡』
伊礼原 B 遺跡　北谷町教育委員会 2008『伊礼原 B 遺跡　伊礼原 E 遺跡』
久里原貝塚　伊平屋村教育委員会 1981『久里原貝塚－範囲確認調査報告書』
古我地原貝塚　沖縄県教育委員会 1987『石川市　古我地原貝塚』
伊是名ウフジカ遺跡　伊是名村教育委員会 1980『伊是名ウフジカ遺跡発掘調査報告書』
伊是名貝塚　伊是名村教育委員会　1979『伊是名貝塚-緊急発掘調査報告書』
伊是名貝塚　伊是名貝塚学術調査団編 2001『伊是名貝塚』勉誠出版
浜崎貝塚　伊江村教育委員会 1976『浜崎貝塚』
浜崎貝塚　伊江村教育委員会 1980『浜崎貝塚』
前原遺跡　宜野座村教育委員会 1999『前原遺跡』
大堂原貝塚　名護市教育委員会 2005『大堂原貝塚』
キガ浜貝塚　沖縄県教育委員会 1978『津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書』
平敷屋トウバル遺跡　沖縄県教育委員会 1996『平敷屋トウバル遺跡』
イーエーシー・うるま市教育委員会 2008『平敷屋トウバル遺跡』
渡名喜島東貝塚　渡名喜村教育委員会 1979『渡名喜島の遺跡Ⅰ』
地荒原貝塚　具志川市教育委員会 1986『地荒原貝塚－個人住宅建築工事に係る発掘調査報告』
地荒原遺跡　沖縄県教育委員会 1986『地荒原遺跡－県道 10 号改良工事に伴う発掘調査報告』
知花遺跡群　沖縄県教育委員会 1978『知花遺跡群』
知花遺跡　　沖縄県教育委員会 1986『知花遺跡－沖縄自動車道建設工事に伴う緊急発掘調査報告書（1）－』
宇佐浜遺跡　沖縄県教育委員会 1989『宇佐浜遺跡発掘調査報告』
茅打バンタ遺跡　春成秀爾・新田重清編 2003『沖縄県茅打バンタ遺跡』
古宇利原遺跡　今帰仁村教育委員会 1983『古宇利原遺跡』
渡喜仁浜原遺跡　今帰仁村教育委員会 1977『渡喜仁浜原遺跡』
知場塚原遺跡　本部町教育委員会 1988『知場塚原遺跡』
屋比久原遺跡　本部町教育委員会 1990『屋比久原遺跡発掘調査報告書』
仲原遺跡　沖縄県教育委員会 1981『伊計島の遺跡』
シヌグ堂遺跡　沖縄県教育委員会 1985『シヌグ堂遺跡－第 1・2・3 次発掘調査報告』
苦増原遺跡　具志川市教育委員会 1977『苦増原遺跡』
馬上原遺跡　沖縄市教育委員会 2000『馬上原遺跡―室川貝塚崖上地区―』
宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚　具志川市教育委員会 1980『宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚』

西長浜原遺跡　沖縄県教育委員会 2006『西長浜原遺跡』
吹出原遺跡　読谷村教育委員会 1990　『吹出原遺跡』
ヌバタキ遺跡　宜野湾市教育委員会 1991『ヌバタキ』
ガジャンビラ丘陵遺跡　那覇市教育委員会 1997『ガジャンビラ丘陵遺跡』
伊平屋島東原貝塚　伊平屋村教育委員会 1986『伊平屋島東原貝塚ほか発掘調査報告』
伊平屋島東貝塚　伊平屋村教育委員会 1990『伊平屋島東貝塚発掘調査報告書』
ナガラ原西貝塚　伊江村教育委員会 1979『伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘調査報告書』
ナガラ原東貝塚　木下尚子編 2013『ナガラ原東貝塚の研究』
阿良貝塚　伊江村教育委員会 1983『伊江島阿良貝塚発掘調査報告』
瀬底島・アンチの上貝塚　本部町教育委員会 2005『瀬底島・アンチの上貝塚』
同　上　　2009『瀬底島アンチの上貝塚』
具志堅貝塚　本部町教育委員会 1986『具志堅貝塚』
部瀬名貝塚　　名護市教育委員会 1996『部瀬名貝塚緊急発掘調査報告』
久志貝塚　名護市教育委員会 1980『久志貝塚緊急発掘調査概報』
恩納村熱田貝塚　　沖縄県教育委員会 1978『恩納村熱田貝塚発掘調査ニュース』
久良波貝塚　沖縄県教育委員会 1992『久良波貝塚』（導水管工事に伴う）
久良波貝塚　沖縄県教育委員会 1994『久良波貝塚』（県道工事に伴う）
木綿原遺跡　読谷村教育委員会 1978『木綿原』
小堀原遺跡　北谷町教育委員会 2012『小堀原遺跡』
城間遺跡　浦添市教育委員会 1992『城間遺跡』
牧港貝塚・真久原遺跡　沖縄県教育委員会 1985『牧港貝塚・真久原遺跡』
嘉門貝塚 A　浦添市教育委員会 1991『嘉門貝塚 A』
嘉門貝塚 B　浦添市教育委員会 1993『嘉門貝塚 B』
那崎原遺跡　那覇市教育委員会 1996『那崎原遺跡』
米須貝塚　糸満市教育委員会 1985『米須貝塚』
阿波連浦貝塚　高宮廣衛ほか「渡嘉敷村阿波連浦貝塚発掘調査報告」『沖国大考古』第 12 号
具志原貝塚　沖縄県教育委員会 1997『伊江島具志原貝塚発掘調査報告』
兼久原貝塚　本部町教育委員会 1977『兼久原貝塚発掘調査報告』
備瀬貝塚　　本部町教育委員会 1986『備瀬貝塚緊急発掘調査報告書』
喜如嘉貝塚　大宜味村教育委員会 1979『喜如嘉貝塚』
沖縄県教育委員会　1994『喜如嘉貝塚』
伊武部貝塚　沖縄県教育委員会 1983『伊武部貝塚発掘調査報告書』
砂辺サーク原遺跡　沖縄県教育委員会 1987『砂辺サーク原遺跡』
仲宗根貝塚　沖縄県教育委員会 1980『仲宗根貝塚－第一・二次発掘調査概報』
与那城貝塚　西原町教育委員会 1980『与那城貝塚』
高嶺遺跡　沖縄県教育委員会 1989『宮城島遺跡分布調査報告　２高嶺遺跡』
熱田第二貝塚　沖縄県教育委員会 1979『恩納村熱田第二貝塚発掘調査報告書』
真栄里貝塚　糸満市教育委員会 1996『真栄里貝塚ほか発掘調査報告』
同　上　　1999『真栄里貝塚発掘調査報告書』
清水貝塚　具志川村教育委員会 1989『清水貝塚発掘調査報告書』

溝原貝塚　名護市教育委員会 1989『溝原貝塚』
大原貝塚・大原第二貝塚　沖縄県教育委員会 1980『大原－久米島大原貝塚群発掘調査報告書』
北原貝塚　沖縄県教育委員会 1995『北原貝塚発掘調査報告書』
古座間味貝塚　沖縄県教育委員会 1982『古座間味貝塚範囲確認調査報告書』
与那城貝塚　西原町教育委員会 1980『与那城貝塚』
熱田原貝塚　知念村教育委員会 2002『熱田原貝塚発掘調査報告書』
高宮廣衛 1958「知念村熱田原貝塚発掘概況」『文化財要覧』1958 年版、琉球政府文化財保護委員会
荻堂貝塚　松村瞭 1920 『東京帝國大學理學部　人類學教室研究報告　第三編　琉球荻堂貝塚』
伊波貝塚　大山柏 1922 『琉球伊波貝塚発掘報告』
部瀬名南遺跡　名護市教育委員会 2002　『部瀬名南遺跡』

石鏃関係引用・参考文献

（1）論考・著書

大堀晧平 2012「沖縄諸島出土打製石鏃の基礎的研究」『南島考古』29、 p 31-40 沖縄考古学会
2013「先史時代沖縄の石器石材」『鹿児島・沖縄考古学の最新動向』第 6 回鹿児島県考古学会・沖縄考古学会合同学会研究発表会資料』 p 29-36
2014「琉球列島の石器・石器石材」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』p 263-276　六一書房
小田静夫　2001「伊是名貝塚の石器」『伊是名貝塚』勉誠出版 p 206-221
小畑弘己ほか　2004「琉球列島出土の黒曜石製石器の化学分析による産地推定とその意義」『石器原産地研究会会誌 Stone Sources』No 4 、 p 101-136
上村俊雄　1998「南西諸島出土の石鏃と黒曜石―その集成と意義―」『人類史研究』10 p 200-213
川添和暁　2005「縄文時代後晩期の石鏃について―部分磨製石鏃を中心に―」『研究紀要第 6 号』 p 18-33、㈶愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
木下尚子　1996「第 3 章　貝と葬送習俗―沖縄県真志喜安座間原第一遺跡の報告から―」『南島貝文化の研究―貝の道の考古学―』 p 450、法政大学出版局
国分直一　1965 「ヤブチ式土器―琉球と奄美大島における文化交流の一証跡」『水産大学校研究報告』人文科学編、第 10 号
1972「3　弓射の技術」『南島先史時代の研究』 p 323-341
佐原　真　1975「かつて戦争があった―石鏃の変質」『古代学研究』第 78 号、古代学研究会、　2005『佐原真の仕事 4　戦争の考古学』に上記論文再録、 p 36-46
新里貴之・上村俊雄 1998「南西諸島に分布するサメ歯製品及びその模造品について」『南島考古』No.17、沖縄考古学会
大工原豊　2008『縄文石器研究序論』六一書房
高宮廣衛　1958　「知念村熱田原貝塚発掘概報」『文化財要覧』1958 年版、琉球政府文化財保護委員会　（C.W. Meighan と共著）
1987「城嶽と明刀銭」『岡崎敬先生退官記念論集　東アジアの考古と歴史』同朋

社。同論考は高宮廣衛 1991『先史古代の沖縄』に再録ｐ187-214
知念勇　1983「南西諸島の石器」『沖縄歴史地図　考古編』ｐ90、柏書房
使河原彰 1998『縄文文化』新日本新書　新日本出版社
宮田栄二　2003　「縄文時代早期の磨製石鏃について」『研究紀要　縄文の森から』創刊号、ｐ29-36　鹿児島県立埋蔵文化財センター
盛本勲　　1998「琉球列島出土の貝鏃様製品小考」『列島の考古学』ｐ745-764　渡辺誠先生還暦記念論集刊行会
渡邉　康行　2005　「石鏃研磨考－西北九州縄文早期における毒矢の可能性―」『西海考古』第６号、ｐ47-84

（2）石鏃資料掲載文献（主に発掘調査の報告書）

（2)－１　沖縄諸島発見の打製石鏃

安座間原第一・第二・第三・第四遺跡　宜野湾市教育委員会 1989『土に埋もれた宜野湾』.
アンチの上貝塚　本部町教育委員会 2009『瀬底島・アンチの上貝塚』
安謝前原遺跡　　那覇市教育委員会 1996『安謝前原遺跡』
安謝前原北遺跡　那覇市教育委員会 2004『安謝前原北遺跡』
阿波連浦貝塚　　高宮廣衛ほか 1999「渡嘉敷村阿波連浦貝塚発掘調査報告」『沖国大考古』第 12 号
新城下原第二遺跡　沖縄県立埋蔵文化財センター2006『新城下原第二遺跡』
伊佐前原第一遺跡　沖縄県立埋蔵文化財センター2001『伊佐前原第一遺跡』
大堂原貝塚（屋我地島）名護市教育委員会 2005『大堂原貝塚』
大謝名軍花原第二遺跡　沖縄県立埋蔵文化財センター2006　『普天間飛行場内所在遺跡試掘・範囲確認調査報告―大謝名軍花原第一・第二遺跡―　』
糸満方面　　三宅宗悦 1935　南島の石器聚成-沖縄篇」『考古学』６巻５号
1975　上記文献の実測図版が京都大学で発見され、『南島考古』第４号に三島格によって実測図拡大版を再録し解説を付す
1996　『沖縄県史　考古関係資料１』pp.318-324　に再録
伊原遺跡　沖縄県教育委員会 1986『伊原遺跡』
伊良波東遺跡豊見城村教育委 1987『伊良波東遺跡』
伊礼原遺跡　北谷町教育委員会 007『伊礼原遺跡―伊礼原 B 遺跡ほか発掘調査』
伊礼原Ｅ遺跡　北谷町教育委員会 2008『伊礼原Ｂ遺跡・伊礼原Ｅ遺跡』2010『伊礼原 E 遺跡』
石蔵川貝塚　伊平屋村教育委員会 1986『東原貝塚ほか発掘調査報告』
伊是名ウフジカ遺跡　伊是名村教育委員会 1980『伊是名ウフジカ遺跡発掘調査報告書』
伊是名貝塚　上原靜 1980「伊是名貝塚採集の石鏃」『南島考古だより』第 23 号
大山掘割遺跡　多和田真淳 1956「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『琉球政府文化財要覧』
親富祖遺跡　浦添市教育委員会 1983　『親富祖遺跡』（市道）
大久保原遺跡　　読谷村教育委員会 1989「読谷村大久保原遺跡発掘調査概要」
沖縄県教育委員会 2000 年『沖縄県史　資料編 10　遺跡総覧（先史時代）　考古Ｉ』
読谷村歴史民俗資料館 2015『掘り出された読谷の歴史』（A3 版中折）写真
鏡水箕隅原Ａ遺跡　沖縄県立埋蔵文化財センター2011『鏡水箕隅原Ａ遺跡』

兼城上原第二遺跡　知念勇 1983「南西諸島の石器」『沖縄歴史地図　考古編』柏書房
漢那遺跡　（宜野座村）宜野座村教育委員会 1984『漢那遺跡』1981
喜友名貝塚・グスク　（宜野湾市）宜野湾市教育委員会 1999『喜友名貝塚・喜友名グスク』
喜友名東原ヌバタキ遺跡　宜野湾市教育委員会 1991『ヌバタキ』
喜友名山川原第六遺跡　　宜野湾市教育委員会 1989 年『土に埋もれた宜野湾』
城嶽貝塚
①松村瞭 1920　『東京帝國大學理學部人類學教室研究報告　第三編琉球荻堂貝塚』
②小牧實繁 1927「那覇市外城嶽貝塚発掘報告」『人類学雑誌』42 巻８号、東京人類学会
1996　『沖縄県史料　考古関係資料１』1996 年 p.209-225 に再録
③金関丈夫 1929「沖縄県那覇市外城嶽貝塚より発見せる人類大腿骨に就いて」『人類學雑誌』44 巻６号　東京人類學会
1996　『沖縄県史料　考古関係資料１』pp.231-242 に再録
④三宅宗悦 1935　「南島の石器時代に就て」『ドルメン』４巻６号
1996　『沖縄県史料　考古関係資料１』p.305-317 に再録
⑤三宅宗悦 1935「南島の石器聚成−沖縄篇」『考古学』６巻５号
1975　上記文献の実測図版が京都大学で発見され、『南島考古』第４号に三島格によって実測図拡大版を再録し解説を付す
1996　『沖縄県史料　考古関係資料１』p.318-324　に再録
⑥三宅宗悦 1940「南島の先史時代」『人類学・先史學講座』16 巻
1996『沖縄県史料　考古関係資料１』沖縄県教育委員会 p.369-406 に再録
シヌグ堂遺跡　沖縄県教育委員会 1985『シヌグ堂遺跡』
文中に 1972 年の発掘（金武・考古学連合）崖下貝塚からチャート石鏃１点採集記事。
1996 年３月 17 日に林徹が北側の道路近くでチャート製鏃１点表面採集
林徹 2015「沖縄県与那城村宮城島シヌグ堂遺跡表際の石鏃」『南島考古だより』第 99 号
隅原遺跡　高宮廣衛ほか 1976「具志川市隅原遺跡発掘調査概報」『沖国大考古』　　創刊号
高嶺遺跡　沖縄県教育委員会 1989『宮城島遺跡分布調査報告　２高嶺遺跡』
地荒原遺跡　（うるま市）沖縄県教育委員会 1986　大城慧ほか『地荒原遺跡』（県道）
當真嗣一 1976「地荒原貝塚発掘調査報告」『広報社会教育』No.36　p 738
知花遺跡（沖縄市）沖縄県教育委員会 1978　高宮廣衛『知花遺跡群』
二重兼久原貝塚　読谷村立歴史民俗資料館提供図 2015　『掘り出された読谷の歴史』
渡喜仁浜原貝塚（今帰仁村）今帰仁村教育委員会 1977『渡喜仁浜原貝塚』
渡具知東原遺跡（読谷村）　高宮廣衛 1992「渡具知東原遺跡曽畑層出土の石器」『沖縄国際大学文学部紀要　社会学科篇　第 18 巻第２号
中川原遺跡（読谷村）沖縄県教育委員会 2000『沖縄県史　資料編 10　遺跡総覧（先史時代）考古Ｉ』　p 238
仲宗根求 1992「沖縄県中頭郡読谷村字渡慶次中川原貝塚」『日本考古学年報』1990 年度版
仲宗根遺跡（沖縄市）沖縄市教育委員会 2011　『仲宗根遺跡』
ナガラ原東貝塚　（伊江村）　　熊本大学文学部考古学研究室
1998　『考古学研究室報告１　ナガラ原東貝塚 1』
2000　『考古学研究室報告１　ナガラ原東貝塚２』

2010　『考古学研究室報告１　ナガラ原東貝塚 6』
2011　『考古学研究室報告１　ナガラ原東貝塚 7』
2012　『考古学研究室報告１　ナガラ原東貝塚 8』
2013　『ナガラ原東貝塚の研究』　総括
野嵩ウガンヌカタ遺跡　（宜野湾市）宜野湾市教育委員会 1996 年『野嵩ウガンヌカタ遺跡』
東恩納美川原遺跡　（うるま市）うるま市教育委員会 2009『東恩納美川原遺跡・平敷屋古島遺跡・桃原貝塚』
ヒヤジョー毛遺跡（那覇市）那覇市教育委員会 1994『ヒヤジョー毛遺跡』
飛留喜田原 B 遺跡（金武町）上原静ほか 2011　「金武町池原遺跡発掘調査概報」『沖国大考古』第 15 号
金武町教育委員会 2010「億首川周辺」第５節　飛留喜田原 B 遺跡　『町内埋蔵文化財予備調査報告書』のなかで、遺跡名を変更
フェンサ城貝塚　高宮広土・新里貴之ほか『沖縄 フェンサ城貝塚の研究―2009～2011 年度発掘調査』鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
平安座（平安名？）第二遺跡　上村俊雄 1998「南西諸島出土の石鏃と黒曜石―その集成と意義―」『人類史研究』10　呉屋義勝教示として記述。
前頂原遺跡（うるま市）　具志川市教育委員会 1987『前頂原遺跡』
真志喜大川原第一遺跡（宜野湾市）宜野湾市教育委員会 1989『土に埋もれた宜野湾』
真喜志大川原第二遺跡　宜野湾市教育委員会 1989『土に埋もれた宜野湾』
真喜志大川原第三遺跡　宜野湾市教育委員会 1989『土に埋もれた宜野湾』
真喜志大川原第四遺跡　宜野湾市教育委員会 1989『土に埋もれた宜野湾』
真手川原遺跡　（南城市）大里村教育委員会 2005　『真手川遺跡』
室川貝塚　高宮廣衛 1981「室川貝塚第３～５次発掘調査概報」『沖国大考古』　第５号
沖縄市教育委員会 1993　『室川貝塚―総合庁舎建設に伴う範囲確認調査及び東地区発掘調査の報告書』・局部磨製石鏃１点報告。
森川原第二遺跡　（宜野湾市）宜野湾市教育委員会 1997『個人住宅建設に伴う森川原第二遺跡緊急発掘調査概要図録集』
屋比久原遺跡（本部町）　本部町教育委員会 1990『屋比久原遺跡発掘調査報告書』
山城古島遺跡（糸満市）　糸満市教育委員会 1994『佐慶グスク・山城古島遺跡』
連道原貝塚（読谷村）　沖縄県教育委員会 2000『沖縄県史　資料編 10　遺跡総覧（先史時代）考古Ｉ』　p 244
読谷村歴史民俗資料館 2015『掘り出された読谷の歴史』（A3 版中折）写真（カラー）
仲宗根求 1993「砂丘は語る」『資料館だより』No.27　1993

(2)－２　奄美群島発見の打製石鏃
土浜ヤーヤ遺跡（大島・笠利）鹿児島県教育委員会 1988『土浜ヤーヤ遺跡』
宇宿小学校遺跡（大島・笠利）　熊本大学文学部考古学研究室 1992『宇宿小学校遺跡』
ケジＩ遺跡（大島・笠利町）　鹿児島県教育委員会 1986『ケジＩ・Ⅲ遺跡』
ウフタ遺跡（大島・龍郷町）熊本大学考古学研究室 1982 白木原和美・吉武学『ウフタ遺跡』
手広遺跡（大島・龍郷町）竜郷町教育委員会・奄美考古学会 1984『手広遺跡』

熊本大学考古学研究室 1986『手広遺跡（概報）』
安脚場遺跡（大島・瀬戸内町）　中山清美による教示と記す
神田２遺跡（徳之島・徳之島町）　昭和 62 年度分布調査で石鏃発見
山田遺跡（徳之島・徳之島町）鹿児島県教育委員会
中村ほか 1989　徳之島町手々山田　チャート石鏃
千間遺跡（徳之島・天城町）
中村ほか 1989　天城町大津川千間　石鏃１　（材質不明）
塔原遺跡（徳之島・天城町）
中村ほか 1989　向井一雄採集の黒曜石製石鏃１点　縄文晩期
上村俊雄 1984「徳之島の先史時代」『南日本文化 17』
小手野遺跡（沖永良部島・和泊町）中村ほか 1989　和泊町　永嶺字小手野　玉髄製打製石鏃
サモト遺跡（大島・住用村）
熊本大学文学部考古学研究室 1983　『サモト遺跡（１）』
宇宿港遺跡（大島・笠利）熊本大学文学部考古学研究室 1981『宇宿港遺跡』
住吉貝塚（沖永良部島）知名町教育委員会 2006『住吉貝塚』
中里遺跡（徳之島）天城町教育委員会 2010『中里遺跡』
半川遺跡（奄美大島・竜郷町）竜郷町教育委員会 2005『半川遺跡』
宇宿貝塚（奄美大島）河口貞徳ほか 1979　「宇宿貝塚」『鹿児島考古』第 13 号、鹿児島県考古学会
笠利町教育委員会 1979『宇宿貝塚』
宇宿小学校遺跡（奄美大島）　熊本大学文学部考古学研究室 1992『宇宿小学校遺跡』
前畑遺跡（喜界島）喜界町教育委員会 2011『城久遺跡群―前原遺跡・小ハネ遺跡群』ｐ159

(2)－３　沖縄諸島発見の磨製石鏃
ウフジカ遺跡（伊是名島）伊是名村教育委員会伊是名村教育委員会 1980『伊是名ウフジカ遺跡発掘調査報告書』
大堂原貝塚（屋我地島）名護市教育委員会 2005『大堂原貝塚』
具志堅貝塚（本部町）本部町教育委員会 1986『具志堅貝塚　発掘調査報告』
平敷屋トウバル遺跡（うるま市）沖縄県教育委員会 1996『平敷屋トウバル遺跡』
牧港貝塚　（浦添市）沖縄県教育委員会 1985　大城慧・金城亀信『牧港貝塚・真久原遺跡』
野国貝塚Ｂ地点（嘉手納町）沖縄県教育委員会 1984『野国―野国貝塚Ｂ地点発掘調査報告』

(2)－４　奄美群島発見の磨製石鏃
手広遺跡（奄美大島）　竜郷町教育委員会・奄美考古学会 1984『手広遺跡』
熊本大学考古学研究室 1986『手広遺跡（概報）』
宇宿港遺跡（奄美大島）熊本大学文学部考古学研究室 1981『宇宿港遺跡』
サウチ遺跡（奄美大島）河口貞徳 1978「サウチ遺跡」『鹿児島考古』第 12 号、
サモト遺跡（奄美大島）　熊本大学文学部考古学研究室 1983　『サモト遺跡（１）』
住吉貝塚（沖永良部島）　知名町教育委員会 2006『住吉貝塚』

（2)－５　南九州発見の打製石鏃（例示 10 遺跡）

霜月田遺跡（薩摩川内市）鹿児島県立埋蔵文化財センター2008　『霜月田遺跡・都原遺跡』、
大坪遺跡（出水市）鹿児島県立埋蔵文化財センター2005　『大坪遺跡　上巻』、
桐木耳取遺跡Ⅲ（曾於市）鹿児島県立埋蔵文化財センター2005　『桐木耳取遺跡Ⅲ』
仁田尾遺跡（鹿児島市）鹿児島県立埋蔵文化財センター2008　『仁田尾遺跡』第３分冊、
.諏訪牟田遺跡（南薩摩市）鹿児島県立埋蔵文化財センター2007　「諏訪牟田遺跡」『農業開発総合センター遺跡群Ⅳ』
上加世田遺跡（加世田市）加世田市教育委員会 1996　『上加世田遺跡』
上野原遺跡 2-7 地点（国分市）鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『上野原遺跡』第５分冊
中柚木遺跡（霧島市）霧島市教育委員会 2010　『中柚木遺跡』、
天神段遺跡（大崎市）（財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財センター2016『天神段遺跡２』
飯盛ケ岡遺跡（鹿屋市）鹿児島県立埋蔵文化財センター1993　『飯盛ケ岡遺跡』

（2)－６　南九州縄文時代の磨製石鏃

荒田原遺跡　田代町教育委員会　1995 『荒田原遺跡』
石ノ峯遺跡　南種子町教育委員会 1996 『石ノ峯遺跡』
牛之原遺跡　鹿児島県立埋蔵文化財センター1996 『牛之原遺跡』
榎崎 B 遺跡　鹿児島県立埋蔵文化財センター1993 『榎崎 B 遺跡』
奥ノ仁田遺跡　西之表市教育委員会 1995 『奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡』
小牧３A 遺跡・岩本遺跡　鹿児島県立埋蔵文化財センター1996『小牧３A 遺跡・岩本遺跡』
志風頭遺跡　加世田市教育委員会 1999 『志風頭遺跡・奥名野遺跡』
西丸尾遺跡　鹿児島県教育委員会 1992 『西丸尾遺跡』
ホケノ頭遺跡　田代町教育委員会 2001 『ホケノ頭遺跡』
宮田栄二 1994「縄文早期の磨製石鏃」『南九州縄文通信』No.８、ｐ13-20.南九州縄文研究会 2003「縄文時代早期の磨製石鏃について」『縄文の森から』創刊号、ｐ29-36

（2)－７　南九州弥生時代の磨製石鏃

谷添遺跡　根占町教育委員会 2000 年『谷添遺跡・出口遺跡』
下伊倉遺跡　鹿児島県教育委員会 1989『下伊倉城跡　下伊倉遺跡』
王子遺跡　鹿児島県教育委員会 1985『王子遺跡』
稲荷迫遺跡　鹿児島県立埋蔵文化財センター2011『稲荷迫遺跡』
吹上小中原遺跡　鹿児島県立埋蔵文化財センター2005『吹上小中原遺跡・馬廻遺跡・三反牟田』

（2)－８　貝鏃

伊江村教育委員会 1980『浜崎貝塚』
沖縄県教育委員会 1980『仲宗根貝塚－第一・二次発掘調査概報』
具志川市教育委員会 1986『地荒原貝塚－個人住宅建築工事に係る発掘調査報告』
高宮廣衛ほか 1980「室川貝塚第２～４次発掘調査概報」『沖国大考古』第４号
渡名喜村教育委員会 1979「東貝塚発掘調査報告」『渡名喜島の遺跡Ⅰ』

南種子町教育委員会 2011『一陣長崎鼻遺跡』
盛本勲 1998「琉球列島出土の貝鏃様製品小考」『列島の考古学』渡辺誠先生還暦記念論集刊行会
(2)－９局部磨製石鏃
沖縄市教育委員会
1993 『室川貝塚－総合庁舎建設に伴う範囲確認調査及び東地区発掘調査の報告書』
鹿児島県立埋蔵文化財センター
2005『桐木耳取遺跡Ⅲ』
2006『山ノ中遺跡』
2008「諏訪脇遺跡」『農業開発総合センター遺跡群Ⅴ』
2008「西原遺跡」『一般県道飯野松山都城線改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅱ）』
2011『石縊遺跡・十三塚遺跡』
南種子町教育委員会　2011『一陣長崎鼻遺跡』　　2002『藤平小田遺跡』第１分

石皿・台石類関係引用・参考文献

（1）論考・著書

今村啓爾　1999『縄文の実像を求めて』吉川弘文館
牛ノ濱修　1999「石皿について」『黎明館調査研究報告』第 12 集、ｐ13-42、鹿児島県歴史資料センター　黎明館
大山柏　1922『琉球伊波貝塚發掘報告』ｐ33-34、
沖縄考古学会編　1978『石器時代の沖縄』ｐ59・60
上篠信彦　2015『縄文時代における脱殻・粉砕技術の研究』六一書房
工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館編 2014『ここまでわかった縄文人の植物利用』新泉社
小林達雄編　2007『考古学ハンドブック』新書館
白木原和美　1978「クガニイシ」『法文論叢』41 号、熊本大学法文学会
1999『南西諸島の先史時代』ｐ121-139　龍田考古学会、に再録
高宮広土　2013「南島中部圏先史時代遺跡出土の植物遺体」、木下尚子編『ナガラ原東貝塚の研究―５世紀から７世紀前半の沖縄伊江島』ｐ317-325、熊本大学文学部木下研究室
嵩元政秀　2003「２石器　敲石・凹石・磨石・石皿」『沖縄県史　各論編　考古』ｐ141-142、沖縄県教育委員会
田里一寿　2014「貝塚時代におけるオキナワウラジロガシ果実の利用について」、高宮広土・新里貫之編『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷』ｐ111-125、六一書房
多和田眞淳 1971「沖縄考古学の諸問題」『南島考古学だより』第７号、ｐ2　沖縄考古学会
1980『古希記念　多和田真淳選集』ｐ140-141　同書刊行会
知名定順　1979　「沖縄本島糸満市名城海岸リーフ採取の石器について」『花綵（はなづな）』創刊号、ｐ3-19.
中山清美 2003「南島の縄文文化　二頭の犬を埋葬した跡も」文化庁編『2003 発掘された日本列島』ｐ24、朝日新聞社
増田孝彦・黒坪一樹 2010「ドングリのアク抜き方法に関する一考察」『京都府埋蔵文化財論集第６集』ｐ1-18、京都府埋蔵文化財調査研究センター
松村　瞭　1920『人類學教室研究報告　第三編　琉球荻堂貝塚』ｐ17-24、東京帝国大學

宮城長信　1983　「植物質食料と炭化穀物」『沖縄歴史地図　考古』ｐ92・95　柏書房
盛本勲　2001「沖縄前期の植物相と植物質食料の採集活動について（予察）」『文化課紀要』第 17 号、ｐ45-52、沖縄県教育庁文化課
吉富秀敏・水之江和同 2003「文様を有する石皿について」『縄文時代』14、ｐ167-172、縄文時代文化研究会
渡辺誠　1975『縄文時代の植物食』雄山閣考古学選書 13
1991「喜友名東原ヌバタキ遺跡出土の植物遺体」『ヌバタキ』ｐ114-121、

（2）石皿・台石類資料掲載文献

(2)－１　沖縄諸島

阿良貝塚　沖縄県教育委員会 1983『伊江島阿良貝塚発掘調査報告』
アンチの上遺跡　①　本部町教育委員会 2005『瀬底島・アンチの上貝塚発掘調査報告書』
②　本部町教育委員会 2009『瀬底島・アンチの上貝塚』
伊是名ウフジカ遺跡　伊是名村教育委員会 1980『伊是名ウフジカ遺跡発掘調査報告書』
伊是名貝塚　①　伊是名村教育委員会 1979『伊是名貝塚』
②　伊是名貝塚学術調査団 2001『伊是名貝塚』　　調査は 1991・1992 年
伊礼原遺跡（国指定外）　北谷町教育委員会 2014『伊礼原遺跡・伊礼原Ａ遺跡』
伊礼原Ｄ遺跡　北谷町教育委員会 2013『伊礼原Ｄ遺跡』
伊礼原Ｂ遺跡　北谷町教育委員会 2007『伊礼原遺跡―伊礼原Ｂ遺跡ほか発掘調査』
宇佐浜遺跡　　沖縄県教育委員会 1989『宇佐浜遺跡』
宇佐浜Ｂ貝塚　沖縄県教育委員会 1989『宇佐浜遺跡』
宇佐浜遺跡範囲確認調査　　沖縄県教育委員会 1989『宇佐浜遺跡』
馬上原遺跡　沖縄市教育委員会 2000『馬上原遺跡―室川貝塚崖上地区』
ガジャンビラ丘陵遺跡　那覇市教育委員会 1997『ガジャンビラ丘陵遺跡』
嘉門貝塚Ａ　浦添市教育委員会 1991『嘉門貝塚 A』
嘉門貝塚Ｂ　浦添市教育委員会 1993『嘉門貝塚Ｂ』
カヤウチバンタ遺跡　春成秀爾・新田重清編 2003『沖縄県茅打バンタ遺跡』
喜如嘉貝塚　沖縄県教育委員会 1994　『喜如嘉貝塚』―国道 58 号工事―
久里原貝塚　伊平屋村教育委員会 1981『久里原貝塚―範囲確認調査報告書』
具志川島遺跡　①　伊是名村教育委員会 1977『具志川島遺跡群―第一次発掘調査報告書』
②　伊是名村教育委員会 1978『具志川島遺跡群―第二次発掘調査報告書』
③　伊是名村教育委員会 1979『具志川島遺跡群―第三次発掘調査報告書』
④　伊是名村教育委員会 1981『具志川島遺跡群―第四次発掘調査報告書』
⑤　伊是名村教育委員会 1993『具志川島遺跡群』
具志堅貝塚　本部町教育委員会 1986『具志堅貝塚発掘調査報告』
古宇利原遺跡　沖縄県今帰仁村教育委員会 1983『古宇利原遺跡発掘調査報告書』
古我地原貝塚　沖縄県教育委員会 1987『石川市古我地原貝塚―沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書（6）―』
国分直一　1975『南島先史時代の研究』慶友社
清水貝塚　具志川村教育委員会 1989『清水貝塚発掘調査報告書』

シヌグ堂遺跡　沖縄県教育委員会 1985『シヌグ堂遺跡―第１・２・３次発掘調査報告―』
高嶺遺跡　沖縄県教育委員会 1989『宮城島遺跡分布調査報告―２　高嶺遺跡』
地荒原遺跡　沖縄県教育委員会 1986『地荒原遺跡―県道 10 号改良工事に伴う発掘調査報告』
地荒原貝塚　具志川市教育委員会 1986『地荒原貝塚―個人住宅建築工事に係る発掘調査報告』
知場塚原遺跡　本部町教育委員会 1988『知場塚原遺跡発掘調査報告』
知花遺跡　①　沖縄県教育委員会 1978『知花遺跡群』（1962 年発掘実施）
②　沖縄県教育委員会 1986『知花遺跡』―自動車道工事―
津堅島キガ浜貝塚　沖縄県教育委員会 1978『津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書』
渡喜仁浜原貝塚　沖縄県今帰仁村教育委員会 1977『渡喜仁浜原貝塚調査報告書(1)』
渡具知東原遺跡　読谷村教育委員会 1977『渡具知東原―第１～２次発掘調査報告』
渡名喜島東貝塚　沖縄県渡名喜村教育委員会 1979『渡名喜島の遺跡』
仲宗根貝塚　沖縄県教育委員会 1980『仲宗根貝塚―第一・二次発掘調査概報』
仲原遺跡　沖縄兼教育委員会 1981『伊計島の遺跡―神山遺跡・仲原遺跡確認調査概報』
ナガラ原西貝塚　伊江村教育委員会 1979『伊江島ナガラ原西貝塚』
ナガラ原東貝塚　熊本大学考古学研究室 2013『ナガラ原東貝塚』
苦増原遺跡　具志川市教育委員会 1977『苦増原遺跡』
西長浜原遺跡　沖縄県立埋蔵文化財センター2006『西長浜原遺跡』
ヌバタキ遺跡　宜野湾市教育委員会 1991『ヌバタキ』
野国貝塚Ｂ地点　沖縄県教育委員会 1984『野国―野国貝塚Ｂ地点発掘調査報告』
備瀬貝塚　本部町教育委員会 1986『備瀬貝塚』
吹出原遺跡　読谷村教育委員会 1990『吹出原遺跡』
部瀬名貝塚　名護市教育委員会 1996『部瀬名貝塚』
古座間味貝塚　沖縄県教育委員会 1982『古座間味貝塚』
平安山原Ｂ遺跡　北谷町教育委員会 2015『平安山原Ｂ遺跡』
平敷屋トウバル遺跡　沖縄県教育委員会 1996『平敷屋トウバル遺跡』
前原遺跡　宜野座村教育委員会 1999『前原遺跡―県道漢那松田線道路整備工事に伴う発掘調査報告書』
牧港貝塚（Ｉ地区）　1985『牧港貝塚・真久原遺跡―県道 153 号線バイパス工事に伴う発掘調査報告書』
室川貝塚　①　沖縄国際大学　第１次～３次　1978『沖国大考古』第２号
②　沖縄国際大学　第３～４次　1979『沖国大考古』第３号
③　沖縄国際大学　第２～４次　1980『沖国大考古』第４号
④　沖縄国際大学　第４次　1982『沖国大考古』第６号
⑤　沖縄市教育委員会　1993『室川貝塚―総合庁舎建設に伴う範囲確認調査及び東地区発掘調査の報告書』
⑥　沖縄市教育委員会　1997『室川貝塚―総合庁舎建設に伴う崖下地区記録保存発掘調査の報告書』
木綿原遺跡　読谷村教育委員会・読谷村歴史民俗資料館 1978『木綿原―沖縄県読谷村渡具知木綿原遺跡発掘調査報告書』
屋比久原遺跡　本部町教育員会 1990『屋比久原遺跡発掘調査報告書』

(2)－２奄美群島・トカラ列島

朝仁天川遺跡　1984『朝仁天川遺跡』名瀬市教育委員会

泉川遺跡　1986『泉川遺跡：新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財報告書』鹿児島県教育委員会

上城遺跡　1990『上城跡・上城遺跡』与論町教育委員会

嘉徳遺跡　河口貞徳ほか 1974「嘉徳遺跡―大島郡瀬戸内町嘉徳砂丘遺跡の調査―」『鹿児島考古』第 10 号、鹿児島県考古学会

提り遺跡　1996『提り遺跡・後田遺跡・水口遺跡・竿ク遺跡』大島郡喜界町教育委員会

白木原和美　1979『タチバナ遺跡』熊本大学文学部考古学研究室

中山清美ほか　2003「宇宿小学校遺跡構内遺跡発掘調査報告」『奄美考古学』第５号、

ハンタ遺跡　1986『ハンタ遺跡　付喜界島遺跡分布調査』、熊本大学文学部考古学研究室

城畑遺跡　1990　『城畑遺跡』徳之島町教育委員会

(2)－３南九州の石皿

牛之濱修 1999 の論考 p 16-21 に記載されている「石皿出土遺跡一覧」を参照のこと

第５章　結論

第 14 節　北琉球先史時代石器文化の特質（独自性）

赤石牟田遺跡　旭慶男 1985「熊毛郡南種子町の遺跡について」『鹿児島考古』第 19 号、鹿児島県考古学会　p 40 に赤石牟田遺跡出土石匙の図

伊礼原遺跡　石匙　北谷町教育委員会 2007『伊礼原遺跡―伊礼原 B 遺跡ほか発掘調査―』p 120

伊礼原遺跡　木製容器　北谷町教育委員会　2006『伊礼原遺跡―図録集―』

上加世田遺跡　河口貞徳 1973「上加世田遺跡」『鹿児島考古』第７号、鹿児島県考古学会 p 36

宇宿貝塚　河口貞徳ほか 1979「宇宿貝塚」『鹿児島考古』第 13 号、鹿児島県考古学会　p 165

具志堅貝塚　本部町教育委員会 1986『具志堅貝塚』

仲宗根貝塚　沖縄県教育委員会 1980『仲宗根貝塚』

ナガラ原西貝塚　伊江村教育委員会　1979『伊江島ナガラ原西貝塚』